

東 本 庄

—本庄総合公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—

2 0 0 4

本 庄 市 教 育 委 員 会

東 本 庄

—本庄総合公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—

2 0 0 4

本 庄 市 教 育 委 員 会

序

本庄市は、埼玉県の北の玄関とも呼ばれ、県北の中心都市としての躍進が期待されています。また、本庄市のある児玉地域は、関東地方の北と南をつなぐ交通、文化の接点として古代より栄えてきた地域でもあります。本庄市内だけでも、現在遺跡の数は187箇所を数え、埋蔵文化財のとりわけ多い地域であることが、それを何よりも雄弁に物語っています。

今回報告する東本庄遺跡の周辺は、中世以来の名刹である宍勝寺や栗崎館跡、北堀本田館跡、あるいは五十子陣にかかわる諸遺跡があり、中世児玉地域の中心をなした一帯です。

第59回国民体育大会に向けた屋内競技場シルク・ドームの周辺整備に伴い本庄総合公園建設事業が行なわれることとなり、発掘調査は、事業に先立ち行ないました。

本報告書は、その調査結果をまとめたものです。本書の内容が示すように、東本庄遺跡では、古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落跡や中世の館などに関連すると思われる溝や井戸、土坑を調査し、古代や中世についての歴史を考えるうえで重要な様々な資料を得ることができました。住居跡から出土した白磁や緑釉陶器、井戸などから出土した青磁などの陶磁器類は、平安時代から中世にかけての文物の流通や交流を考えるために、大変貴重な資料です。また、調査した溝が、中世の館にかかわる堀であるとすれば、中世児玉の地域史にとり大きな問題を投ずる資料であろうかと思えます。

この報告書が広く一般の方々にも活用され、埋蔵文化財に対する理解や郷土の歴史についての関心が一段と深められるよう願ってやみません。

最後になりますが、発掘調査、報告書の作成にあたって、多大なる御協力を賜った関係諸機関、各位に対し、心から御礼申し上げます。

平成16年3月

本庄市教育委員会

教育長 福 島 巖

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市大字北堀字東本庄107・108、113-1、115、116-1・3、117に所在する東本庄遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、第59回国民体育大会会場である屋内競技場（シルクドーム）の建設に関連する、本庄総合公園の拡張に伴う進入道路の敷設に先立ち、本庄市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査を実施した期間は、I次調査が、平成13年4月4日から同年7月4日まで、II次調査が、平成15年3月24日から同年6月3日までである。
4. 調査対象面積は、I次調査が1,080㎡、II次調査が630㎡である。
5. 発掘調査および報告書の編集・刊行にかかる本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

教 育 長 福 島 巖

〈本庄市教育委員会事務局〉

事 務 局 長 倉 林 進 （平成13年度）

揖 斐 龍 一 （平成14・15年度）

社会教育課長 阿 部 均 （平成13年度）

田 中 靖 夫 （平成14年度）

吉 田 敬 一 （平成15年度）

同 課 長 補 佐 福 島 保 雄 （人権教育係長兼務、平成13・14年度）

桜 場 幸 男 （人権教育係長兼務、平成15年度）

文化財保護係

係 長 増 田 一 裕 （平成13・14年度）

吉 田 稔 （平成15年度）

主 査 太 田 博 之

主 査 我 妻 浩 子

臨 時 職 員 松 本 完

臨 時 職 員 吉 野 讓 二 （平成13年4月1日より同9月30日まで）

臨 時 職 員 町 田 奈 緒 子 （平成13年12月1日より）

臨 時 職 員 井 上 富 美 子 （事務、平成14年12月16日より平成15年10月17日まで）

6. 発掘調査に関しては、I次調査を増田・太田・松本・吉野が、II次調査を太田・松本・町田が担当した。
7. 発掘調査に必要な基準点測量および水準測量に関しては、昭和株式会社に委託した。基準点測量に用いた座標系は、第IX系座標系である。
8. 本書の執筆は、「IV. 遺構と遺物」の古墳～奈良・平安時代のI次調査（I区）の遺構出土遺物の項、および中世以降の遺構と遺物を町田が執筆し、同章の埴輪および瓦の項を太田が、その他の執筆および編集を松本が行なった。
なお、I次調査（I区）の経過、事実記載に関しては、現地作業を主に担当した吉野の所見にもとづき、記載、編集した。
9. 挿図中の図1は、1/2,500地形図（1989年、パスコ測量）、図2は、1/25,000地形図『本庄』（1995年、国土地理院発行）にもとづき加除筆したものである。
10. 土層および遺物についての色調表現は、『新編標準土色帳』によった。

11. I次調査の出土遺物の実測・浄書、および遺物観察表の作成は、前橋文化財研究所、アーク・ヴィジョンに委託し、II次調査の出土遺物の実測・浄書、および遺物観察表の作成、遺物写真の撮影は、毛野考古学研究所に委託し、その成果に基づき、挿図・挿表・写真図版を作成した。
12. I次調査の遺物写真の撮影は、町田が行なった。
13. 写真図版の中の個々の遺物に付した番号は、挿図中の番号に一致し、遺物の大きさは、原則として実測図のそれとほぼ同大である。
14. 発掘調査および出土資料の整理、報告書作成にあたって、ご協力頂いた調査補助員の方々は、下記のとおりである。ここに記して感謝の意を表す次第である（敬称略、五十音順）。

相田千代子、赤祖父瑞香、明戸広美、飯島嘉蔵、池田一彦、伊藤好雄、上田ニラモル、岡野 敬、奥野節子、小野 喬、門倉澄子、金井一郎、金井梧郎、金本みどり、河田倫子、神戸勝治、木島 寛、木島麻子、木村タツ、久保田かづ子、小暮悠樹、古指 茂、小林智恵子、近藤美雪、斉藤真理子、塩原忠治、塩原晴幸、関根典子、高田和正、高橋辰馬、滝沢美知子、土屋牧子、名畑浩美、福島清治、八木道良、柳川恵美子、山崎和子、吉田真由美、吉野ナミ
15. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、下記の方々および諸機関にご教示、ご協力を賜わった。末筆ながら記し、感謝の意を表す次第である（敬称略、五十音順）。

荒川正夫、石川安司、江原昌俊、大熊季広、岡安光彦、柿沼幹夫、金子彰男、恋河内昭彦、昆 彭生、坂井 隆、坂本和俊、佐々木幹雄、鈴木徳雄、外尾常人、田中 信、田村 誠、徳山寿樹、鳥羽政之、長井正欣、長瀧歳康、中村正芳、松澤浩一、丸山 修、矢内 勲、アーク・ヴィジョン、毛野考古学研究所、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、前橋文化財研究所、早稲田大学本庄考古資料館

目 次

序	i
例 言	iii
目 次	v
挿図目次	vi
挿表目次	viii
図版目次	ix
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	2
1 遺跡の立地	2
2 周辺の遺跡と歴史的環境	3
III 調査の方法と経過	5
1 調査の方法	5
2 基本層序	8
3 調査の経過	8
IV 遺構と遺物	10
1 古墳～奈良・平安時代の遺構と遺物	10
(1) 住居跡	10
(2) 焼土跡	60
(3) 土坑	61
2 中世の遺構と遺物	63
(1) 竪穴状遺構	63
(2) 溝	65
(3) 井戸	74
(4) 土坑	78
(5) ピット群	95
3 遺構外出土遺物	96
(1) 縄文時代の遺物	96
(2) 古墳時代～中世の遺物	100
V ま と め	107
引用・参考文献	108
図 版	

挿図目次

図 1	遺跡位置図	2
図 2	周辺の主要遺跡分布図	3
図 3	グリッド配置図	6
図 4	遺構全体図	7
図 5	1号住居跡・カマド平面図および断面図	11
図 6	1号住居跡出土遺物実測図	12
図 7	2号住居跡・カマド平面図および断面図	15
図 8	2号住居跡出土遺物実測図	16
図 9	3号住居跡平面図および断面図	17
図10	3号住居跡カマド平面図および断面図	18
図11	3号住居跡出土遺物実測図	19
図12	4号住居跡カマド平面図および断面図	20
図13	5号住居跡平面図および断面図	21
図14	5号住居跡カマド平面図および断面図	21
図15	5号住居跡出土遺物実測図	22
図16	6号住居跡平面図および断面図	23
図17	6号住居跡カマド平面図および断面図	24
図18	6号住居跡出土遺物実測図	25
図19	7～9号住居跡平面図および断面図	26
図20	7号住居跡カマド平面図および断面図	27
図21	7号住居跡出土遺物実測図	27
図22	8号住居跡カマド平面図および断面図	28
図23	8号住居跡出土遺物実測図	29
図24	9号住居跡カマド平面図および断面図	29
図25	10～13号住居跡平面図	30
図26	10～13号住居跡断面図	31
図27	10号住居跡出土遺物実測図	32
図28	11号住居跡貯蔵穴平面図および断面図	33
図29	11号住居跡出土遺物実測図(1)	33
図30	11号住居跡出土遺物実測図(2)	34
図31	12号住居跡カマド平面図および断面図	36
図32	12号住居跡出土遺物実測図	36
図33	13号住居跡カマド平面図および断面図	37
図34	13号住居跡出土遺物実測図	38
図35	14号住居跡平面図および断面図	39
図36	14号住居跡カマド平面図および断面図	40
図37	14号住居跡出土遺物実測図	40
図38	15号住居跡平面図および断面図	41
図39	15号住居跡カマド平面図および断面図	42

図40	15号住居跡出土遺物実測図(1)	43
図41	15号住居跡出土遺物実測図(2)	44
図42	15号住居跡出土遺物実測図(3)	45
図43	15号住居跡出土遺物実測図(4)	46
図44	16～18号住居跡平面図および断面図	51
図45	16号住居跡出土遺物実測図	51
図46	16・17号住居跡カマド平面図および断面図	52
図47	18号住居跡カマド平面図および断面図	53
図48	18号住居跡出土遺物実測図	54
図49	19号住居跡平面図および断面図	55
図50	19号住居跡カマド平面図および断面図	55
図51	19号住居跡出土遺物実測図	56
図52	20号住居跡・カマド平面図および断面図	57
図53	20号住居跡出土遺物実測図	58
図54	21号住居跡カマド平面図および断面図	60
図55	1号焼土跡平面図および断面図	60
図56	1号焼土跡出土遺物実測図	60
図57	2号焼土跡平面図および断面図	61
図58	1～3号土坑平面図および断面図	62
図59	1・3号土坑出土遺物実測図	62
図60	1～3号竪穴状遺構平面図および断面図	63
図61	1号竪穴状遺構出土遺物実測図	64
図62	3号竪穴状遺構出土遺物実測図	64
図63	1号溝平面図および断面図	65
図64	1号溝出土遺物実測図	66
図65	2号溝平面図および断面図	69
図66	3～5号溝平面図および断面図	69
図67	3・4号溝出土遺物実測図	70
図68	6号溝平面図および断面図	71
図69	6号溝出土遺物実測図	72
図70	1・2号井戸平面図および断面図	74
図71	1号井戸出土遺物実測図	74
図72	2号井戸出土遺物実測図	75
図73	3～5号井戸平面図および断面図	77
図74	4号井戸出土遺物実測図	78
図75	4～7号土坑平面図および断面図	79
図76	8～11号土坑平面図および断面図	80
図77	12～14号土坑平面図および断面図	81
図78	15～19号土坑平面図および断面図	82
図79	12・17号土坑出土遺物実測図	83
図80	20～22号土坑平面図および断面図	84

図81	23号土坑平面図および断面図	85
図82	23号土坑遺物出土状況	85
図83	23号土坑出土遺物実測図(1)	86
図84	23号土坑出土遺物実測図(2)	89
図85	23号土坑出土遺物実測図(3)	90
図86	24号土坑平面図および断面図	94
図87	25号土坑平面図および断面図	94
図88	遺構外出土縄文土器拓影図・縄文石製品実測図	97
図89	遺構外出土土器・陶磁器・土製品実測図	97
図90	遺構外出土土器実測図	99
図91	遺構外出土埴輪実測図・拓影図(1)	102
図92	遺構外出土埴輪実測図・拓影図(2)	103
図93	遺構外出土埴輪実測図・拓影図(3)	104
図94	遺構外出土瓦拓影図	106

挿表目次

表 1	1号住居跡出土遺物観察表(1)	11
表 2	1号住居跡出土遺物観察表(2)	13
表 3	1号住居跡出土遺物観察表(3)	14
表 4	2号住居跡出土遺物観察表	16
表 5	3号住居跡出土遺物観察表(1)	18
表 6	3号住居跡出土遺物観察表(2)	19
表 7	3号住居跡出土遺物観察表(3)	20
表 8	5号住居跡出土遺物観察表	22
表 9	6号住居跡出土遺物観察表	25
表10	7号住居跡出土遺物観察表	27
表11	8号住居跡出土遺物観察表	29
表12	10号住居跡出土遺物観察表	32
表13	11号住居跡出土遺物観察表	35
表14	12号住居跡出土遺物観察表	36
表15	13号住居跡出土遺物観察表	38
表16	14号住居跡出土遺物観察表	40
表17	15号住居跡出土遺物観察表(1)	47
表18	15号住居跡出土遺物観察表(2)	48
表19	15号住居跡出土遺物観察表(3)	49
表20	15号住居跡出土遺物観察表(4)	50
表21	16号住居跡出土遺物観察表	51
表22	18号住居跡出土遺物観察表	54
表23	19号住居跡出土遺物観察表	56
表24	20号住居跡出土遺物観察表	59

表25	1号焼土跡出土遺物観察表	60
表26	1・3号土坑出土遺物観察表	62
表27	1号竪穴状遺構出土遺物観察表	64
表28	3号竪穴状遺構出土遺物観察表	64
表29	1号溝出土遺物観察表(1)	66
表30	1号溝出土遺物観察表(2)	67
表31	3・4号溝出土遺物観察表	70
表32	6号溝出土遺物観察表(1)	71
表33	6号溝出土遺物観察表(2)	72
表34	6号溝出土遺物観察表(3)	73
表35	1号井戸出土遺物観察表	74
表36	2号井戸出土遺物観察表(1)	75
表37	2号井戸出土遺物観察表(2)	76
表38	4号井戸出土遺物観察表	78
表39	12・17号土坑出土遺物観察表	83
表40	23号土坑出土遺物観察表(1)	84
表41	23号土坑出土遺物観察表(2)	86
表42	23号土坑出土遺物観察表(3)	87
表43	23号土坑出土遺物観察表(4)	88
表44	23号土坑出土遺物観察表(5)	89
表45	23号土坑出土遺物観察表(6)	90
表46	23号土坑出土遺物観察表(7)	91
表47	23号土坑出土遺物観察表(8)	92
表48	23号土坑出土遺物観察表(9)	93
表49	遺構外出土かわらけ・陶磁器・土製品観察表	98
表50	遺構外出土土器観察表	99

図版目次

図版 1	I次調査区全景、II次調査区全景
図版 2	1号住居跡全景、同カマド完掘状況、同遺物出土状態、2号住居跡全景
図版 3	3号住居跡全景、同カマド2遺物出土状態、同カマド1完掘状況、同カマド3遺物出土状態
図版 4	5号住居跡全景、同カマド完掘状況、6号住居跡全景、同カマド完掘状況、7号住居跡全景、同カマド完掘状況
図版 5	8号住居跡全景、同カマド遺物出土状態、同カマド完掘状況
図版 6	10号住居跡全景、11号住居跡全景、同貯蔵穴完掘状況、12号住居跡カマド完掘状況、13号住居跡カマド完掘状況
図版 7	14号住居跡全景、同カマド完掘状況、15号住居跡全景、同カマド完掘状況、同遺物出土状態(1)、同遺物出土状態(2)
図版 8	15・16・17・19号住居跡近景、16号住居跡全景、同カマド完掘状況、17号住居跡全景、同カマド完掘状況

- 図版 9 18号住居跡全景、19号住居跡全景、同カマド完掘状況、同貯蔵穴遺物出土状態、
20号住居跡全景、21号住居跡カマド完掘状況
- 図版10 1号土坑完掘状況、2号土坑完掘状況、3号土坑遺物出土状態、1号竪穴状遺構全景、
2号竪穴状遺構全景、1号溝土層断面
- 図版11 2号井戸完掘状況、3号井戸完掘状況、4号井戸完掘状況
- 図版12 5号井戸完掘状況、23号土坑遺物出土状態(1)、23号土坑遺物出土状態(2)、
24号土坑完掘状況、25号土坑完掘状況
- 図版13 1号住居跡出土遺物、2号住居跡出土遺物、3号住居跡出土遺物、5号住居跡出土遺物、
6号住居跡出土遺物
- 図版14 7号住居跡出土遺物、8号住居跡出土遺物、10号住居跡出土遺物
- 図版15 11号住居跡出土遺物(1)
- 図版16 11号住居跡出土遺物(2)、12号住居跡出土遺物、13号住居跡出土遺物、14号住居跡出土遺物
- 図版17 15号住居跡出土遺物(1)
- 図版18 15号住居跡出土遺物(2)
- 図版19 15号住居跡出土遺物(3)
- 図版20 15号住居跡出土遺物(4)、16号住居跡出土遺物、18号住居跡出土遺物
- 図版21 19号住居跡出土遺物、20号住居跡出土遺物(1)
- 図版22 20号住居跡出土遺物(2)、1号焼土跡出土遺物、1・3号土坑出土遺物
- 図版23 23号土坑出土遺物
- 図版24 1号溝出土遺物、3号溝出土遺物、4号溝出土遺物、6号溝出土遺物、遺構外出土遺物
- 図版25 中世土器、瓦
- 図版26 中世陶磁器

I 調査に至る経過

平成9年6月5日付け本都発第71号で、本庄市都市整備部都市計画課長から、本庄総合公園に隣接する本庄市大字北堀字東本庄333-1番地ほか約55,000㎡の土地に、本庄総合公園を拡張し進入道路ならびに駐車場を整備する計画があり、これにかかる『埋蔵文化財の所在及び取扱いについて』の照会が本庄市教育委員会に提出された。本庄市教育委員会で埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに同地の埋蔵文化財包蔵地の有無を調査したところ、当該計画予定地には、周知の埋蔵文化財包蔵地54号遺跡(53-054)、55号遺跡(53-055)並びに東本庄遺跡(53-056)の所在することが判明した。

本庄市教育委員会では、以上のような状況をふまえ、事業予定地約55,531㎡のうち土地買収の完了した範囲について、埋蔵文化財の範囲確認調査を実施することとし、第1次調査を平成10年6月24日から平成10年7月13日まで、第2次調査を平成12年7月14日から平成12年7月17日までの間に行った。その結果、当該埋蔵文化財包蔵地の所在する範囲において、古墳・奈良・平安時代の集落跡、溝、井戸、土坑を主体とする中世の遺構群の存在を確認した。遺物は土師器・須恵器片、緑釉陶器、灰釉陶器、朝顔形埴輪、形象埴輪を含む埴輪片、縄文土器片のほか、青磁、白磁、瓦片、火鉢、かわらけなど中世の資料を多数検出した。このうち、中世の資料の年代は、13世紀から15世紀後半までの長期間にわたり、古代の集落跡とともに、断続的に形成された中世の遺構群が広範囲に所在していることが予測された。

本庄市教育委員会では、第1次範囲確認調査の結果を平成10年7月13日付けで、第2次範囲確認調査の結果を平成12年7月18日付けで、それぞれ本庄市都市整備部都市計画課長あてに『埋蔵文化財の所在および取扱いについて』の回答として送付し、

1. 協議のあった土地については東本庄遺跡(53-056)ほかの埋蔵文化財包蔵地が所在することから現状保存が望ましいこと
 2. やむを得ず現状変更を実施する場合は、文化財保護法第57条3の規定に基づき埼玉県教育委員会あて埋蔵文化財発掘の通知を提出すること
 3. 埋蔵文化財発掘の通知を提出の後は埼玉県教育委員会の指示に従って、当該埋蔵文化財の保護に万全を期すこと
 4. 本回答後は関係機関との協議を徹底すること
- の旨を伝達した。

その後の協議の結果、本庄総合公園拡張計画のうち駐車場用地については十分な盛土をおこなったうえで現状保存することとし、東本庄遺跡の一部にかかる進入道路建設部分については、やむをえず発掘調査を実施し記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査は用地買収の終了した箇所から順次実施することとし、平成13年度にI次調査として1,080㎡を、平成15年度にII次調査として630㎡を対象に実施した。発掘調査は本庄市教育委員会が調査主体となりI次調査を平成13年4月4日から平成13年7月4日まで、II次調査を平成15年3月24日から平成15年6月3日までの期間に実施した。

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

東本庄遺跡は、本庄市のほぼ中央南縁に近い位置にある（図1・2）。本庄市は、東西に長い埼玉県の北西端、利根川をはさんで群馬県伊勢崎市と境を接し、その地理的位置ゆえに、古代あるいはそれ以前より群馬県域一帯と共通した様々な要素を文物に見ることができ、また現在なお地理的環境、気候、風土の点で、群馬県域との強い結び付きがみとめられる。

本庄市の地形は、利根川右岸の低地と市街地化の中心をなす台地および市域南端の丘陵の3つに分けられる。低地は、利根川や烏川の氾濫原で、下流に広がる妻沼低地、加須低地へと連なる。台地は、いわゆる北武蔵台地の最北の本庄台地で、主に神流川扇状地と身馴川扇状地からなる複合扇状地性の



図1 遺跡位置図

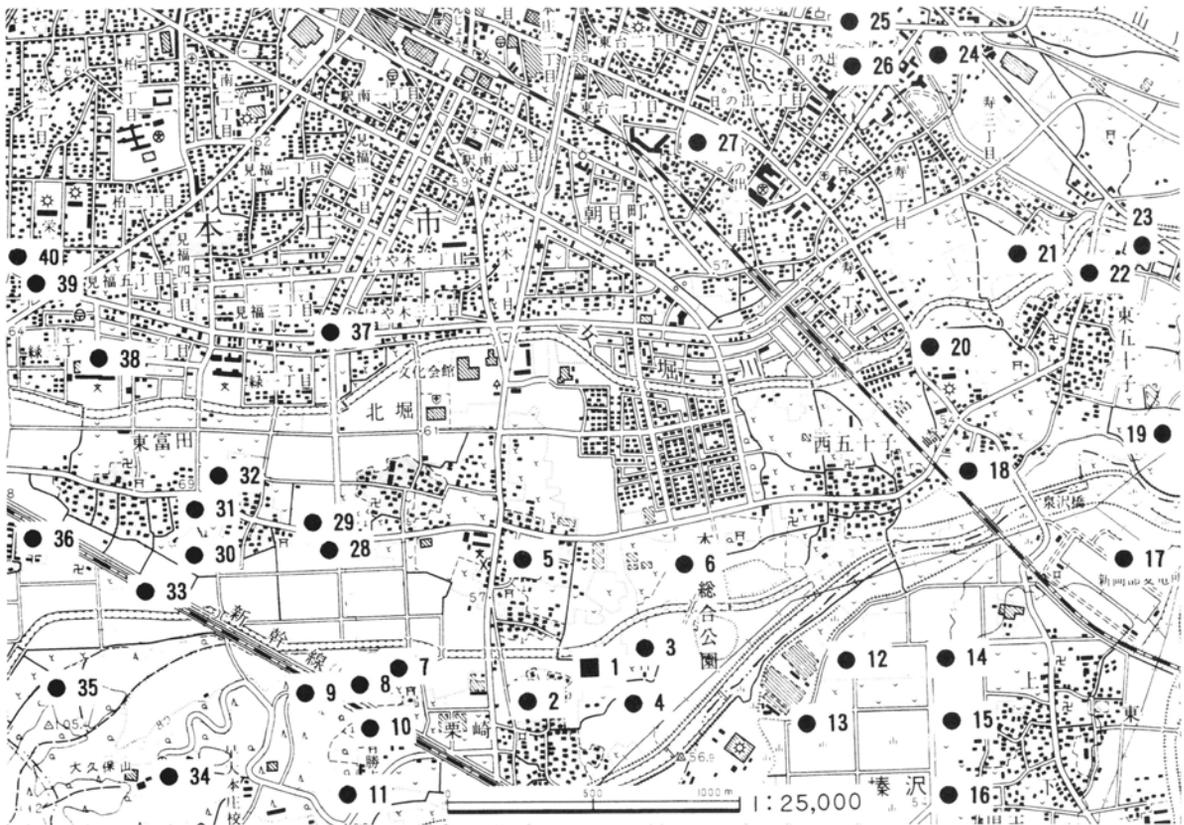
台地である。神流川扇状地は、群馬県鬼石町浄法寺付近を扇の要とし、扇の端は本庄段丘崖を形づくっている。身馴川扇状地は、北西側を児玉丘陵に、南東側を松久丘陵、櫛引台地によりはさまれた一帯である。市域唯一の丘陵地形が、大久保山である。

大久保山の北側を流れる男堀川は、小山川に合流し、さらに東へと流れる。東本庄遺跡は、大久保山の東側にのびた丘陵裾部に連なる、男堀川と小山川に挟まれた微高地上に立地する。

2 周辺の遺跡と歴史的環境

本庄台地の南東半、とくに東本庄遺跡周辺の古墳時代～中世の主要な遺跡に限って、極く簡単にふれることにする(図2)註(1)。

縄文時代以降の遺跡について、まず本庄台地では、本庄段丘崖の周辺、すなわち扇状地性の本庄台地扇端一帯には、縄文～弥生時代の遺跡が極めて少なく、遺構も現状では皆無に近い。縄文～弥生時



1. 東本庄遺跡
2. 栗崎館跡
3. 本庄54号遺跡(東本庄館跡推定地)
4. 本庄55号遺跡
5. 北堀本田館跡
6. 西五十子古墳群
7. 有勝寺裏埴輪窯跡
8. 有勝寺北裏遺跡
9. 北堀前山1・2号墳
10. 東谷遺跡
11. 大久保山寺院跡
12. 大寄A遺跡
13. 大寄B遺跡
14. 稻荷前遺跡
15. 西浦北遺跡
16. 宮西遺跡
17. 六反田遺跡
18. 西五十子台遺跡
19. 東五十子遺跡
20. 西五十子大塚遺跡
21. 赤坂埴輪窯跡
22. 東五十子赤坂遺跡
23. 鶴森古墳群
24. 諏訪新田遺跡
25. 御堂坂遺跡
26. 御堂坂古墳群
27. 塚合古墳群
28. 久下前遺跡
29. 久下東遺跡
30. 七色塚遺跡
31. 元富遺跡
32. 公卿塚古墳
33. 下田遺跡
34. 大久保山遺跡
35. 山根遺跡
36. 観音塚遺跡
37. 笠ヶ谷戸遺跡
38. 雌濠遺跡
39. 南大通り線内遺跡
40. 薬師元屋舗遺跡

図2 周辺の主要遺跡分布図

代の遺跡、とくに集落跡を見出すためには、さらに台地の内奥部へ、あるいは丘陵部へと入ってゆかなければならない。ただし、本庄台地の先端に近い一帯でも、極少数ではあるが、縄文～弥生時代の資料が見られることからすれば、そうした時代においても、段丘崖に近い一帯が全く無人の地であったとばかりは言い切れない。東本庄遺跡でも、縄文時代中期後半を中心とする土器片を検出しており、その間の経緯をわずかではあるが物語るようである。

東本庄遺跡の一帯で、散漫ながらも集落が営まれはじめるのは、古墳時代前期以降である。

古墳時代前期の集落跡としては、西五十子古墳群(6)、東五十子遺跡(19)をあげることができる。以降、中期段階には、多量の鉄製品が出土したことで知られる東五十子城跡遺跡をはじめとし、とくに男堀川中流域において、久下前遺跡(28)、久下東遺跡(29)、七色塚遺跡(30)、笠ヶ谷戸遺跡(37)、雌濠遺跡(38)など、遺跡数が急増する傾向が見られるようである。中には、前期段階から継続する可能性のある遺跡もあるが、なお中期のある時点以降の著しい増加の大勢は大きく変わらないようである。他に古墳～平安時代の集落跡としては、本庄台地の段丘崖に沿った一帯の諏訪新田遺跡(24)、御堂坂遺跡(25)、東本庄遺跡の南、小山川と志度川に挟まれた低地あるいは微高地には、岡部町大寄A・B遺跡(12・13)、稲荷前遺跡(14)、西浦北遺跡(15)、六反田遺跡(17)などの諸遺跡をあげることができる。

周辺古墳としては、男堀川の近隣対岸に西五十子古墳群(6)、小山川をやや下った位置には、東五十子遺跡(東五十子古墳群)(19)があり、また、男堀川をやや溯った中流域一帯には、北堀前山1・2号墳、公卿塚古墳とその周囲の古墳群があり、かなり短い間隔で古墳群が点在する一帯である。

中世以降の遺跡に関しては、近年発掘調査による成果が蓄積されつつあるが、未だに点的であり、細かな時期などの情報を欠くことは否めない。

東本庄遺跡の周辺にも、栗崎館跡(2)、北堀本田館跡(5)と現在なお土塁などの痕跡をとどめる遺跡があるが、遺構の時期についての情報はほとんどない。また、本庄54号遺跡(3)は、移転前の神社の位置などから、東本庄館跡と推定されているが、確かな遺構が検出されているわけではない。

周辺の中世遺跡としては、岡部町六反田遺跡(17)、本庄市西五十子台遺跡(18)、東五十子遺跡(19)、西五十子大塚遺跡(20)、東五十子赤坂遺跡(22)と多数あり、いずれも五十子陣に関連する15世紀代の遺構、遺物が見られることが指摘されている。また、西方ほど遠からぬ位置には、中世以来の古刹とされる宥勝寺、あるいは大久保山寺院跡(11)を擁するなど、本庄54号遺跡にまつわる伝承の当否は別にしても、東本庄遺跡のある一帯は、近隣の館跡と関連する何らかの施設がある可能性の高い場所であることは間違いない。

以上瞥見したように、東本庄遺跡は、対岸、男堀川左岸には、古墳群や古墳時代～中世の遺跡が見られ、また南側、小山川右岸にも、古墳～平安時代、中世の遺跡が集中する、そうした古墳時代～中世の遺跡密集域に挟まれた、低位段丘あるいは微高地の遺跡であるとしてよいであろう。

註

- (1) 以下、個別に明記しないが、遺跡の内容については、それぞれの報告書、『本庄市史』(本庄市史編集室編 1976・1986)によった。

III 調査の方法と経過

1 調査の方法

東本庄遺跡のⅠ・Ⅱ次調査で検出した遺構は、竪穴住居跡、竪穴状遺構、溝、井戸、土坑、ピットである。以下の記載にあたっては、Ⅰ次調査時の調査地点を「Ⅰ区」、Ⅱ次調査時の調査地点を「Ⅱ区」と呼称し、遺構の調査方法の概略を記すことにしたい（図3・4）。なお、Ⅰ次調査とⅡ次調査では、グリッド・システムなど多少調査方法に変更を加えた部分があり、それについては、適宜触れることにしたい

試掘調査の結果から、Ⅰ・Ⅱ次調査の範囲内全域に住居跡や溝、土坑が展開することが予想された。発掘調査に際しては、業者に委託・実施した座標計算された基準杭に基づき、グリッドを設定した（図3）。Ⅰ次調査では、10m×10mを1グリッドとするメッシュを調査範囲全体にかけ、北から南へ各行にA、B、C、……、G、西から東へ各列に1、2、3、……、5のそれぞれの呼称を与え、縦横の呼称を合わせて、ひとつひとつのグリッドを、A1、B1、G3などと呼び分けた。Ⅱ次調査では、より細かなメッシュをかける必要があると判断し、同一の座標系を用いて、20m×20mの中グリッドを設け、その中を2m×2mの小グリッドに分けた。中グリッドは、西から東へA1、B1、C1……と呼称し、小グリッドは、西から東へ00、10、20……、北から南へ00、01、02、03とし、合わせて「A1-41」、「B1-55」と呼ぶ呼称法を用いた。

確認した遺構は、竪穴住居跡を例にとれば、原則として予想された長軸、短軸あるいは調査区界の壁面に沿って、まずサブトレンチを開掘し、床面の状態を確かめ、しかる後覆土全体を掘り下げ精査する方針を取った。住居跡に限らず、全体に遺構の輪郭がとらえにくかったこともあり、断面図の設定に不備が生じた場合もあった。カマドは、原則として十字状、あるいはキの字状にセクションベルトを設け、逐次覆土を取り除く形で精査した。

住居跡、井戸の実測図は、1/10、1/20の縮尺を適宜用い作成した。溝、ピット群などの平面図に関しては、1/100の縮尺を用いた。Ⅰ次調査の竪穴状遺構、土坑、ピットあるいは溝の一部の区別に関しては、整理作業の段階で図面類を再検討し確定したこともあり、土層断面図を除いて、個別に図面を取っていないものが含まれる。

遺物に関しては、全形の判る遺物や大型破片、特殊な遺物のみ測点記録し、取り上げた。Ⅰ・Ⅱ次調査を通じて調査範囲内は、表土層そのものにも多量の遺物を含み、また通常の台地上のローム層とは異なる再堆積のくすんだ色調のロームが地山であったため、遺構の輪郭が確定しにくい場合も少なからずあった。遺構を覆って遺物包含層があったことも確かであるが、調査を通じて、遺構覆土に包含される遺物の一部を、包含層出土の遺物として取り上げた場合もあった。

なお、遺構がおおむね掘り上がった時点で、Ⅰ区に関しては、ヘリコプターにより上空から遺跡全形の写真撮影を行なっている。

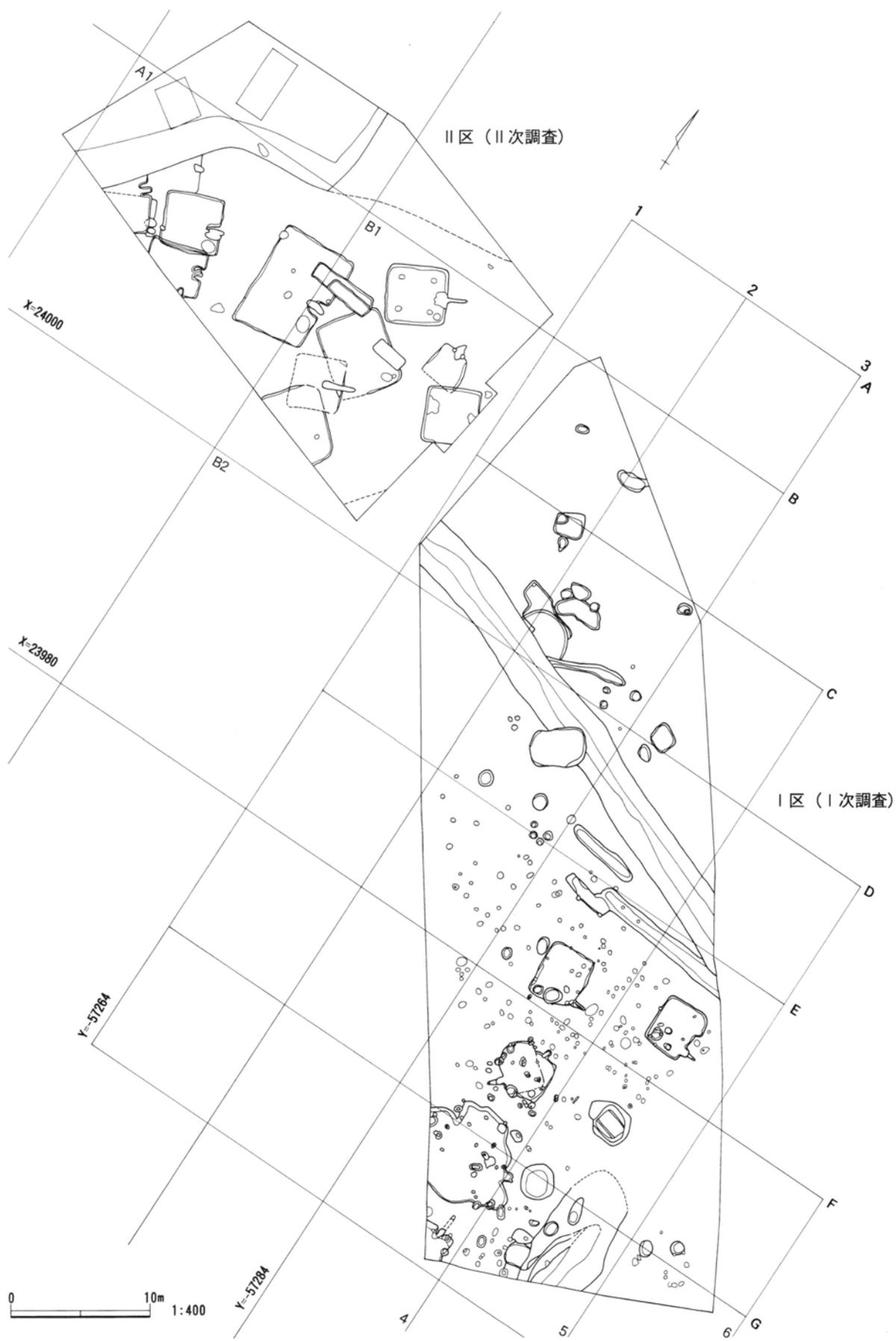


図3 グリッド配置図

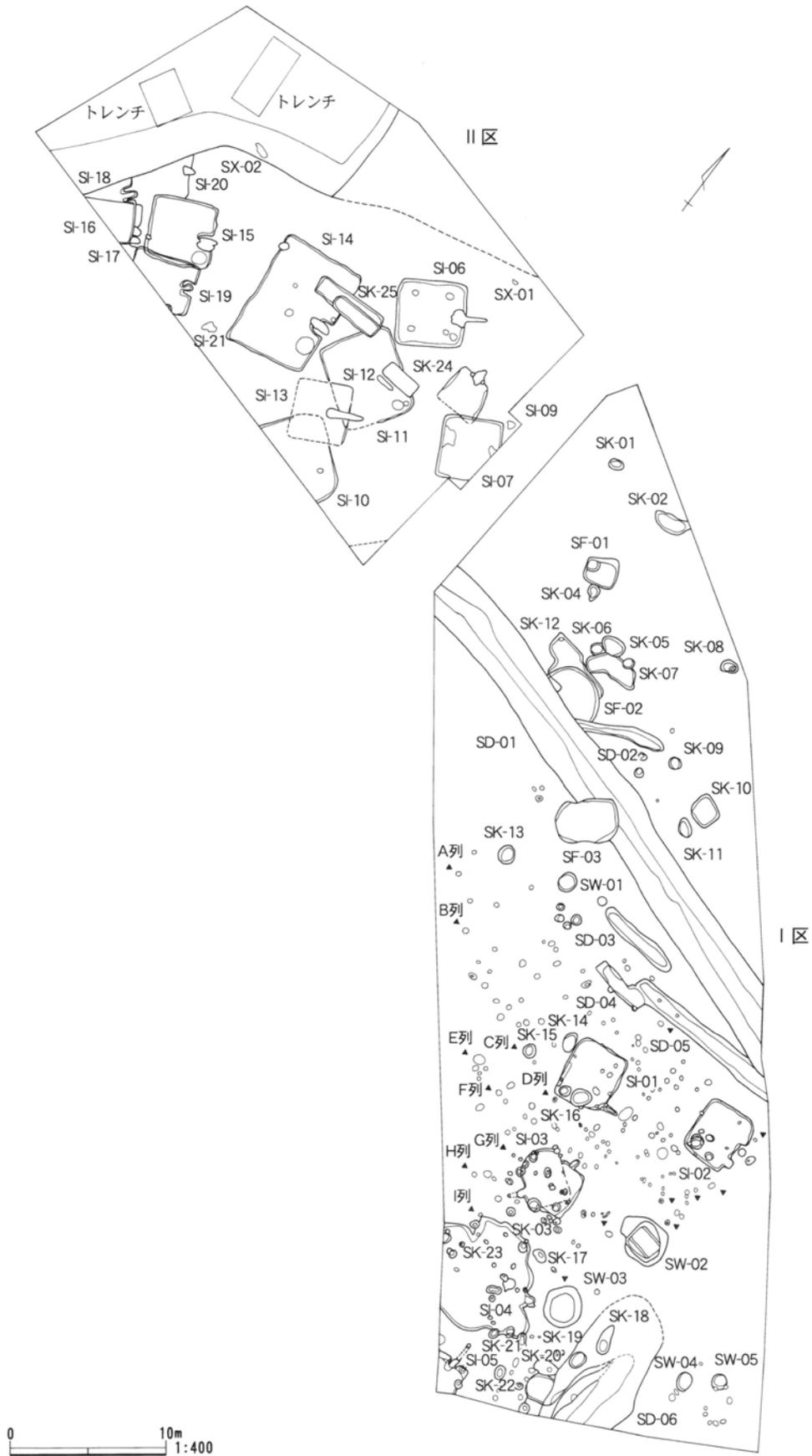


図4 遺構全体図

2 基本層序

調査範囲内の遺構は、おおむねやくすんだ色調のローム層上面で確認したが、調査区界壁面の土層観察によれば、ローム層上に暗褐色土の1層が所々あり、その暗褐色土の残りがよいところでは、住居跡はその層中に実際の掘り込み面があることが見てとれた。基本層序は、表土層のⅠ層、古墳～奈良・平安時代の遺構覆土を主とする暗褐色土のⅡ層、ローム層のⅢ層に大別できるが、一応Ⅱ層に関しては、上記した遺構掘り込み面の所見を加味し、古墳～奈良・平安時代の純然たる遺構覆土を、Ⅱb層とし、Ⅱ層上部、古墳～奈良・平安時代の遺構を覆う部分をⅡa層として区分しておきたい。Ⅱa層に関しては、今回明確な所見を得ていないが、一部は中世遺構の覆土に対応する可能性があるものと考えている。

ここでは、主にⅡ次調査の所見に基づき、基本層序を略述しておきたい。

Ⅰ 層：暗褐色土～灰黄褐色土。台地上に通有の表土層であり、畑耕作土である。

Ⅱ a 層：暗褐色土。Ⅱ次調査時、調査区界にかかり表土層以下通して土層断面が観察できた住居跡では、いずれもこの層が観察されている。そして、どの例でも古墳時代の遺構の掘り込み面がこの層中にあることが確認できた。土層注記をまとめてみると、暗褐色土を主に、細かなローム粒を含み、場所により焼土粒、炭化物、土器片など遺物をかなり含むようである。粘性はないが、かなりしまっているとの所見もある。Ⅱb層との違いとしては、Ⅱb層の方がいくらか黒みが強く、また焼土、炭化物なども多く混入することが、ひとつあげられる。

Ⅱ b 層：暗褐色土。古墳～奈良・平安時代の遺構覆土に見られる暗褐色土。この種の暗褐色土が純層をなすことはなく、通常種々のロームを含む。

Ⅲ 層：黄褐色土。黄褐色のローム層である。本遺跡の場合、水の影響によるものかやや白みを帯びたり、逆にマンガンかと思われる鉱物粒が含まれ黒みが強く、くすんだ色調を帯びたりしている。掘り方や柱穴壁などでは、下部にゆくほどシルト化する模様であり、通常台地上に見られる風成ロームとは異なる。

3 調査の経過

Ⅰ区（Ⅰ次調査）

平成13年4月3日、調査員、作業員が現地に集まり、器材の搬入、調査範囲の確認、調査区界の標示の設定などから作業を始め、同年4月4日より重機による表土剥ぎに着手した。後述する1号溝を境に地山の土がやや異なり確認面に不均一が生じたこと、乾燥すると著しく硬化する土質への対処が遅れたことなど、表土剥ぎの段階にも問題がないわけではなかったが、4月9日には表土剥ぎを終えた。表土剥ぎと平行して調査範囲北側から竪穴状遺構、土坑、ピットなどの調査に入ったが、調査時点では、ピットの多くを掘立柱建物の柱穴と考えたため、土坑、ピットの文字通りの精査に思わぬ時間を要した。

4月下旬以降は、委託した業者による基準杭の設定がなされ、実測作業を漸次進めるとともに、住

居跡や溝の精査に入り、ピットの調査を継続した。1・2号住居跡は、ほぼ5月中には精査を終え、3・5号住居跡、とくに5号住居跡は検出が遅れたこともあり、調査の最終日ようやく精査を終えた遺構であった。1号溝とした大溝は、4月23日までにサブ・トレンチによる土層の確認作業を終え、東半の一部を掘り上げていたが、思いの外深く、溝壁が広がることもあり、5月10日からは小型重機による開掘作業に切り換えた。小型重機を利用したこともあり、5月末にはほぼ掘り上げることができたが、降雨の度に雨水が溝に溜まるという問題が生じた。こうした作業と併行して井戸の調査を行なったが、やはり排水作業をしなければ、すぐに水が溜まる状態であった。調査が梅雨時に重なったこともあり、大雨により遺構が浸水する事態は数次に及び、水中ポンプによる排水作業が度々必要であった。

住居跡の調査を続けるとともに、6月11日以降は、かわらけ廃棄遺構と称してもよい23号土坑の精査に入った。覆土全体に多量のかかわらけを包含すること、周辺は、土坑、ピットが入り乱れて展開していたことなど、遺構の輪郭をとらえること自体容易ではなかった。23号土坑の精査および、併行して行なった井戸の精査を終えたのは、6月19日である。以降は、主に3号住居跡のカマドや残余の井戸の精査、ピットの配列の再検討、6号溝の開掘を行なった。6月27日にヘリコプターによる遺跡上空からの写真撮影を終え、以後は作業員若干名を残し、5号住居跡の精査を行なった。時ならぬ猛暑の中、調査を最終的に終えたのは、7月4日であった。

なお、安全面から、人力による完掘が困難であった2・3号井戸、6号溝に関しては、工事に先立つ8月6日、改めて大型重機を用い井戸底、溝底をさらい、下底部を記録する作業を行なった。

II区（II次調査）

平成15年3月24日、防護策の設置など調査のための準備作業をはじめるとともに、表土剥ぎに着手することからII次調査を開始した。3月27日までに表土剥ぎを終えたが、別の遺跡の調査が入り、実際に遺構の精査をはじめたのは、4月8日からであった。

調査当初、まず問題になったのは、調査範囲全体にカマド跡と思われる焼土が点在し、また遺物が集中する箇所が散在することから、かなりの数の住居跡があることが予想されたが、実際表土を剥ぎきって見ても、住居跡の輪郭が一向に見えてこないことであった。以降、サブ・トレンチを執拗に開け検出作業を繰り返したが、結局その状況は変わらず、地山と見分けがつきにくい覆土と軟弱な床面に最後まで悩まされ続けることとなった。

6号住居跡から精査を開始し、以下順次南側、西側の住居跡へと精査を進めていった。5月中旬までには、東半の住居跡の調査をあらかじめ終え、調査範囲の南西縁に沿った一帯の住居跡の調査へと進んだ。住居廃絶後に遺棄、もしくは廃棄された土器が多量に出土した15号住居跡の調査は、5月15日から開始した。以降並行して、16～20号住居跡と、最も重複の著しい住居跡の調査に取りかかった。この一帯の住居跡は密集度が高いとともに、やはり床面が軟弱であり、重複関係の決定に苦慮することとなった。すべての調査を終了したのは、6月3日である。

実働日数は、36日である。

IV 遺構と遺物

1 古墳～奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

I次調査で5軒、II次調査で16軒の合計21軒の竪穴住居跡を調査した。2つの調査地点は、同一段丘上で接する位置にあるにもかかわらず、住居跡の密度、時期など大きく異なり、I次調査で調査した遺構が総じて新しい。以下、時期的に前後することになるが、I次調査(I区)で検出した5軒の住居跡、1～5号住居跡から順に記載を行なう。なお、6号住居跡以下が、II次調査(II区)で調査した住居跡である。

1号住居跡

遺構(図5、図版2) I区の中央やや南寄り、E-3グリッド南半で検出した遺構で、確認面は、表土層直下の標準土層のIII層、シルト化したローム層上面である。南壁の一部を14号土坑に切られ、床面は部分的に時期の新しいピットにより壊されている。平面形は、おおむね南北に長い隅丸長方形であるが、南壁は彎曲している。主軸長は3.54m、横幅は4.2m、主軸方位はN-87°-Eである。

床面はほぼ平坦であるが、硬化の度合いは弱い。壁は全体に垂直に近く立ち上がり、西壁に沿って壁溝かとも思われる深さ10cm前後の短い溝が確認できた。床面で検出したピットは、3個であるが、すべてが住居跡に伴うものか確定できない。P1は円形で径30cm、深さ17cm、P2は楕円形で長径50cm、深さ6cm、P3は東側が角張ったやや不定な形態で、最大長が70cm、深さは18cmである。

3～5層が覆土であるが、2層堆積時にも微妙なくぼみをなしていたらしく、遺構確認の時点では住居跡よりかなり大きな黒みの強い土の落ち込みとして輪郭がとらえられた。覆土は、ほぼ水平に堆積しており、3層以外は、住居跡覆土とは思えないほど硬くしまっている。赤色粒子を多く含む2・3層、混入物の少ない下層の4・5層に大きく分けられる。

カマドは南東隅にあり、全長124cm、幅58cmである。焚口側の大半を、時期の新しいピットにより壊されている。壁を90cm前後掘り込み、煙道を設けており、焚口としては、手前の不整なくぼみが用いられた模様である。煙道はやや先細りの形態で、15°～20°の傾斜で立上がる。また先端部の底面には楕円形の掘り込みがなされ、煙道口と思われる手前側には、段がみとめられる。左右ともに袖は見られない。

カマドの覆土は、3層に分けられる。1層は煙道天井部の痕跡である可能性もないではないが、確定できない。2層は分層の余地を多分にのこす黄褐色土、3層も赤色粒子を含む黄褐色土である。

遺物(図6、表1～3、図版13) 床面直上から緑釉陶器皿(5)、土師質土器高台埴(20)、覆土中から灰釉陶器皿、中国白磁碗、土師質土器杯、高台埴、羽釜、土師器甕などが出土している。土師器甕(10)は、破片が住居跡内で分散して出土しており、住居廃絶後、流入したのものと考えてよいであろう。

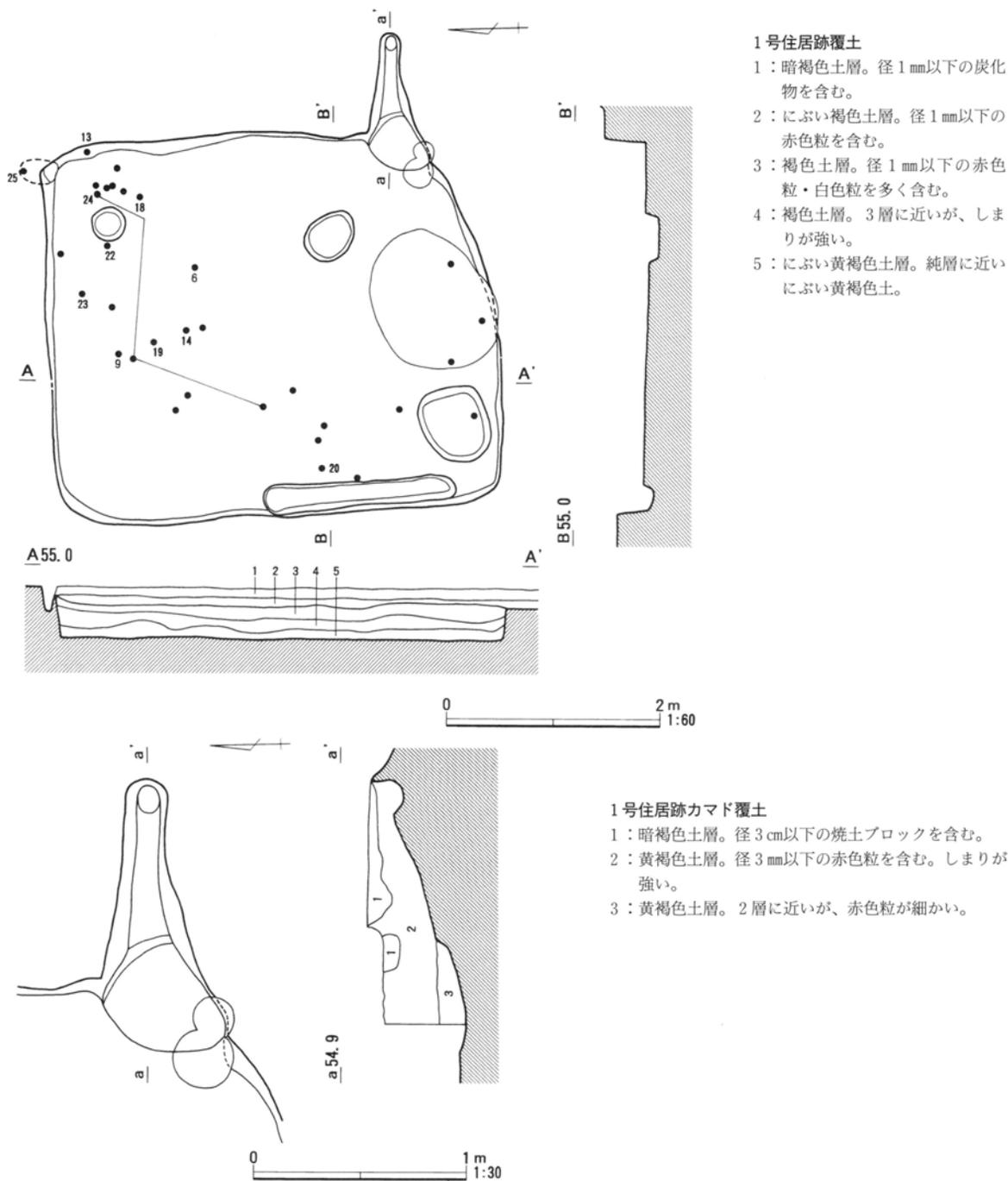


図5 1号住居跡・カマド平面図および断面図

表1 1号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	中国白磁碗	口径 — 底径 — 器高 (2.0)	体部の外面に花卉状の表現。	ナデ、白磁釉。	胎土は密で硬い。灰色の胎土に暗緑色の釉。	体部の一部。
2	緑釉陶器皿	口径 (15.8) 底径 — 器高 (2.4)	口縁部は外反する。	緑釉を施釉。	胎土は密で軟い。白色の胎土に暗緑色の釉。	口縁部の一部のみ残存。
3	緑釉陶器段皿	口径 (14.6) 底径 — 器高 3.6	体部は直線的に立ち上がり、外反する。高台は開く。	全面に緑釉を施釉(気泡が著しい)。	胎土は密でやや軟い。灰白色の胎土に緑色の釉	釉ほとんど摩滅。口縁部2/3欠損。

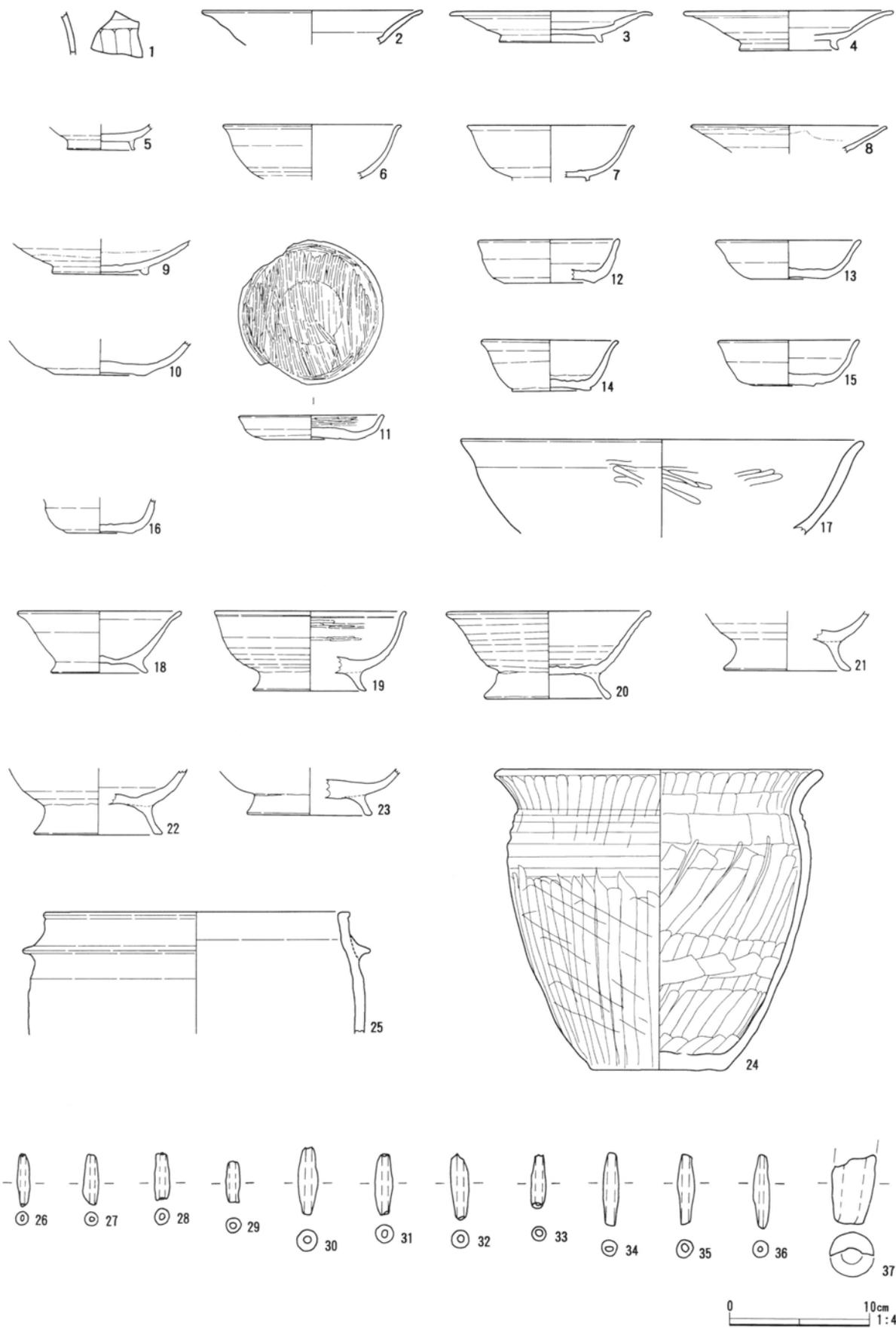


图6 1号住居跡出土遺物実測図

表2 1号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
4	緑釉陶器 段皿	口径 (15.2) 底径 — 器高 2.8	体部は直線的に立ち上がり、外反する。高台は開く。	全面に緑釉を施釉。	胎土は密で軟い。白色の胎土に緑色の釉。	1/4残存。
5	緑釉陶器 碗	口径 — 底径 — 器高 (4.0)	高台は開く。	緑釉を施釉。	胎土は密で硬い。灰色の胎土に暗緑色の釉。	高台部残存。
6	緑釉陶器 碗	口径 (12.8) 底径 — 器高 (3.8)	体部は内彎して立ち上がり、口縁部で外反する。	全面に緑釉を施釉。	胎土は密で硬い。灰白色の胎土に緑色～黄緑色の釉。	口縁部残存。内面下半部の釉剥落、使用痕か。
7	緑釉陶器 碗	口径 (12.0) 底径 — 器高 (4.0)	体部は内彎して立ち上がり、口縁部で外反する。	全面に緑釉を施釉。	胎土は密で硬い。灰色の胎土に暗緑色の釉。	高台端部欠損。 口縁部の一部残存。
8	灰釉陶器 皿	口径 (14.2) 底径 — 器高 (2.0)	体部は直線的に立ち上がる。	口縁部のみ施釉。	胎土は密で硬い。白色の胎土に透明～淡緑色の釉。	口縁部の一部残存。
9	灰釉陶器 皿	口径 — 底径 — 器高 (2.4)	体部はゆるやかに立ち上がり、高台は低い。	内・外面とも回転ナデ。灰釉を施釉。底部回転糸切り。	胎土は密で硬い。白色の胎土に白色の釉。	内・外底部露胎。
10	土師器 碗	口径 (2.5) 底径 (6.4) 器高 —	体部はゆるやかに立ち上がる。	摩滅により調整不明。	石英・角閃石・褐色粒。内面—黒色、外面—淡褐色。	底部の2/3残存。
11	土師質土器 皿	口径 10.1 底径 6.8 器高 1.8	口縁部はゆるやかに立ち上がり、口唇部はわずかに外反する。	内面と外側口縁部にヘラミガキと黒色処理。底部右回転糸切り。	内面—黒色。外面—黒～淡黄褐色。	ほぼ完形。
12	土師質土器 坏	口径 (9.8) 底径 (6.4) 器高 (3.1)	体部はやや彎曲して立ち上がり、口縁部は直線的に立ち上がる。	内・外面—回転ナデ。底部右回転糸切り。	白色粒・角閃石。淡黄褐色～淡橙色。	1/3残存。
13	土師質土器 坏	口径 (9.8) 底径 (6.4) 器高 (3.1)	体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	回転ナデ。底部右回転糸切り。	白色粒・角閃石。淡橙色～明灰褐色。	口縁部4/5欠損。
14	土師質土器 坏	口径 9.9 底径 5.7 器高 3.7	体部は彎曲ぎみに立ち上がり、口縁部は外反する。	内・外面—回転ナデ。底部右回転糸切り。	白色粒・褐色粒。淡黄褐色。	口縁部一部欠損。
15	土師質土器 坏	口径 9.9 底径 5.0 器高 3.3	体部は彎曲して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	内・外面—回転ナデ。底部右回転糸切り。	石英・角閃石。明橙～淡褐色。	口縁部一部欠損。
16	土師質土器 坏	口径 — 底径 (5.1) 器高 (2.4)	体部は強く彎曲して立ち上がる。	内・外面—回転ナデ。底部右回転糸切り。	石英・角閃石。明橙～淡褐灰色。	口縁部欠損。底部1/4残存。
17	土師質土器 碗	口径 (17.2) 底径 — 器高 (3.9)	体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	内面—ヘラミガキと黒色処理。外面—ヘラケズリのあと口縁部にナデ。	石英・角閃石・褐色粒。内面—黒灰～灰色、外面—淡褐色。	口縁部の一部のみ残存。
18	土師質土器 高台碗	口径 (9.8) 底径 (6.4) 器高 (3.1)	体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	回転ナデ。底部右回転糸切り。	白色粒・角閃石。淡橙色～明灰褐色。	口縁部4/5欠損。
19	土師質土器 高台碗	口径 13.5 底径 — 器高 5.6	体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。高台は外反気味に開く。	内面と外側口縁部にヘラミガキと黒色処理。	石英・褐色粒。内面—黒、外面—淡褐色。	1/4残存。
20	土師質土器 高台碗	口径 14.7 底径 — 器高 6.2	体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。高台は外反気味に開く。	回転ナデ。底部回転糸切り。	石英・黒色砂粒。橙～淡灰褐色。	ほぼ完形。
21	土師質土器 高台碗	口径 — 底径 — 器高 (4.2)	体部はゆるやかに立ち上がり、高台は外反して開く。	回転ナデ。	石英・角閃石・褐色粒。淡褐色。	高台部と体部の一部残存。

表3 1号住居跡出土遺物観察表(3)

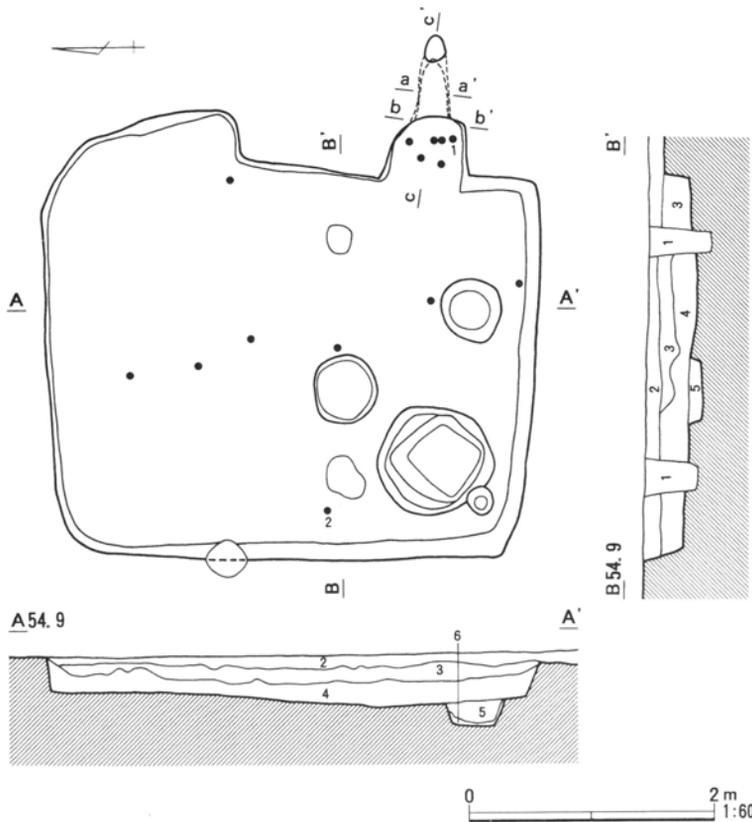
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考	
22	土師質土器 高台埴	口径 — 底径 — 器高 (4.6)	体部はゆるやかに立ち上がり、高台は外反してに開く。	回転ナデ。底部回転糸切り。	石英・黒色砂粒。 橙～淡灰褐色。	ほぼ完形。	
23	土師質土器 高台埴	口径 — 底径 — 器高 (3.3)	体部はゆるやかに立ち上がり、高台は外に開く。	内面へラミガキと黒色処理。 外面へラケズリのあと回転ナデ。	石英・角閃石・ 褐色粒。内面— 黒色、外面—橙 ～淡褐色。	高台部と体部の 一部残存。	
24	土師器 甕	口径 23.6 底径 9.4 器高 21.0 胴部径 21.5	粘土紐積み上げ成形。体部は緩やかに立ち上がる。口縁部頸部は「く」の字形に屈曲、口唇部は外反する。	内面—タテ方向へラケズリのち横方向へラケズリ。外面—タテ方向へラケズリのち胴部～頸部—横方向へラ削り。頸部から口唇部にかけて内面・外面ともヨコナデ。	石英・角閃石・ 褐色粒・礫。外 面—明橙色～暗 橙色、内面—橙 色。	胴部から口縁部 の一部を欠損。	
25	中世土器 釜	口径 (21.6) 底径 (8.6) 器高 —	肩部は緩やかに内彎し、口唇部は比較的直線的に立ち上がる。	へラケズリのあと回転ナデ。	石英・褐色粒、 暗褐色。	口縁部の1/5残 存。	
No.	種類	器種	法 量 (cm・g)				備考
26	土製品	土 錘	長さ：3.6	厚さ：0.9	孔径：0.4	にぶい橙色	完形。
27	土製品	土 錘	長さ：3.5	厚さ：1.0	孔径：0.3	褐灰色	一部欠損。
28	土製品	土 錘	長さ：3.2	厚さ：1.1	孔径：0.4	にぶい橙色	完形。
29	土製品	土 錘	長さ：2.9	厚さ：1.0	孔径：0.4	にぶい橙色	完形。
30	土製品	土 錘	長さ：4.7	厚さ：1.4	孔径：0.5	にぶい橙色	完形。
31	土製品	土 錘	長さ：4.2	厚さ：1.2	孔径：0.4	橙色	完形。
32	土製品	土 錘	長さ：4.6	厚さ：1.2	孔径：0.5	灰黄褐色	2/3残存。
33	土製品	土 錘	長さ：3.7	厚さ：1.0	孔径：0.5	灰褐色	一部欠損。
34	土製品	土 錘	長さ：5.0	厚さ：1.1	孔径：0.6	にぶい褐色	完形。
35	土製品	土 錘	長さ：4.8	厚さ：1.2	孔径：0.5	にぶい橙色	完形。
36	土製品	土 錘	長さ：5.1	厚さ：1.1	孔径：0.4	にぶい黄橙色	完形。
37	土製品	土 錘	長さ：(4.8)	厚さ：3.0	孔径：1.5	灰白色	1/4残存。

2号住居跡

遺構(図7、図版2) I区の南東半、東側壁寄りで検出した遺構で、E-4グリッドに位置する。確認面は、表土層直下のIII層上面である。西壁および床面の一部を時期の新しいピットにより壊されている。平面形は、東壁の一部が突き出た長方形あるいは隅丸長方形である。主軸長は3.54m、横幅は4.01m、主軸方位は真東である。

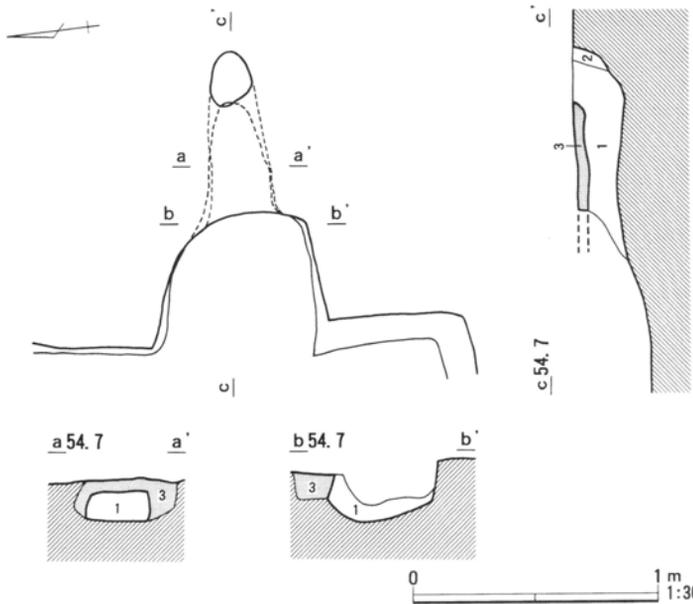
床面はほぼ平坦であるが、硬化は著しくない。壁の立ち上がりは垂直に近く、とくに北側、東側が傾斜が強い。本住居跡に伴う可能性があるのは、ピット3個と土坑1基である。P1は径48cm、深さ19cm、P2は径50cm、深さ10cm、P3は径22cm、深さ12cmで、いずれも円形に近い形態である。土坑は、住居跡南西隅の近くで検出した。上端での平面形は、やや角張った不整形であるが、底面は明瞭な方形をなす。上端での径は、84～90cm、深さは44cmである。P1とは溝状の掘り込みでつながっているかには見えたが、掘り込みの形状が不明瞭なため図化していない。調査時の所見では、覆土は床面の土より黒みの強い暗褐色土であった。

床面より上の覆土は、2～4層、5・6層は床面に掘られたピットの覆土、1層は覆土の上から掘りこまれたピットの覆土である。遺構確認時、実際の住居跡よりも広い範囲の黒褐色土の落ちこみと見え、調査時点では重複する住居跡と考えたが、1層の下面には床面らしきものは一切見られず、最



2号住居跡覆土

- 1：黒褐色土層。径3mm以下の赤色粒を多く含む。
- 2：褐灰色土層。径1mm以下のローム粒、径5mm以下の赤色粒を含む。
- 3：灰褐色土層。径3mm以下の赤色粒を含む。
- 4：黒褐色土層。径5mm以下のローム小ブロック・赤色粒を含む。
- 5：にぶい赤褐色土層。純層に近いにぶい赤褐色土。
- 6：黒褐色土層。径5mm以下のローム小ブロックを多く含む。



2号住居跡カマド覆土

- 1：暗褐色土層。煙道の覆土。
- 2：褐色土層。ロームを多く含む褐色土。
- 3：赤褐色土層。被熱により生じた天井部の焼土。

図7 2号住居跡・カマド平面図および断面図

最終的に1軒の住居跡と判断した。2層は住居跡外に広がるかに見えるが、ひとまずある時点で住居跡のくぼみに溜まった土と見ておきたい。覆土は全体に異様なほどしまっており、通常の住居跡覆土とはかなり異なる。

カマドは、東壁の南東隅に寄った位置にあり、煙道天井部の焼土が露出した状態で検出した。当初カマドの構造が見極められず、焚口側をかなり掘り広げた状態から精査した。全長122cm、幅71cmである。壁および床面をそのまま掘りくぼめ燃焼部を設け、その奥壁を掘り貫いて煙道をしつらえたカマ

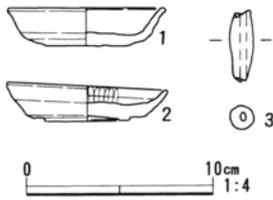


図8 2号住居跡出土遺物実測図

ドを構築している。煙道本体はほぼ水平に近く伸び、先端が上方に屈曲し開口している。煙道の現存長は、63cm、幅24cm前後である。焚口から手前燃焼部の底面はほぼ平坦で、単なる被熱によるとは思えないほど硬化していた。覆土は2層で、2層はほとんど混入物のない褐色土である。

遺物(図8、表4、図版13) カマド燃焼部上層からは土師質土器皿(1)が、住居西寄りの床面直上からも類似した形態の土師質土器皿(2)が出土している。

表4 2号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考	
1	土師質土器皿	口径 8.5 底径 4.5 器高 1.9	口縁部はゆるやかに立ち上がり、口唇部は外反する。	回転ナデ。底部回転糸切り。	赤橙色。	口縁部の一部欠損、4/5残存。	
2	土師質土器皿	口径 9.2 底径 4.6 器高 1.8 器高 1.8	口縁部はゆるやかに立ち上がる。	回転ナデ。底部回転糸切り。黒色処理。	石英・褐色粒。内面一黒色。外面一淡橙色、一部黒色。	完形。	
No	種類	器種	法 量 (cm・g)			備考	
3	土製品	土 錘	長さ:3.2	厚さ:1.2	孔径:0.3	にぶい橙色	ほぼ完形。

3号住居跡

遺構(図9・10、図版3) I区の南半、西寄りで検出した遺構で、F-3グリッドに位置する。確認面は、表土層直下である。最少3軒の住居跡の重複例と考えられる。調査当初、遺構の輪郭が正確にとらえきれなかったこともあり、重複関係の最終的な確定は、土層断面図などの事後の判断に委ねざるをえなかった。以下、3a、3b、3c号住居跡と呼び分け記載するが、3c号住居跡が最も新しい住居跡である以外は、新旧関係を確定することができない。

3a号住居跡は、3b号住居跡の北西側に張り出した丸みの強い壁および床面のみ検出した遺構である。続く3c号住居跡と一連の遺構であることから住居跡と考えたが、竪穴状遺構の類である可能性もないとは言えない。時期の新しいピットに壁上部の多くを壊されている。北東一南西方向での長さは2.67m、円形あるいは楕円形に近い平面形になると推定される。壁は垂直に近く立ち上がり、床面はほぼ平坦である。床面の硬化は著しくない。覆土は2層で、どちらもしまりが強い。

3b号住居跡は、3a号住居跡を切り、3c号住居跡と大きく重複し壊されている。平面形は、やや胴の脹る隅丸長方形である。主軸長は推定で2.44m、横幅は3.5m、主軸方位はほぼ真北および真南である。覆土は2層で、ともにしまりの強い暗褐色土、黄褐色土である。床面はほぼ平坦である。南東隅近くに径50cm、深さ46cmの円形のピットが掘り込まれている。

カマドは、北壁、南壁の西寄りの2箇所にある。北壁のカマドをカマド1、南壁のカマドをカマド2と呼称する。新旧関係を確定できないが、カマド1は造りがいたって粗略であり、あるいは二次的、副次的なカマドなのかもしれない。

カマド1は、全長66cm、幅34cm、壁および床面をやや角張った楕円形に掘りくぼめ燃焼部を設けている。煙道、袖も見られず、側壁の赤化も弱い。調査時の所見では、覆土は、焼土が不均質に混入し

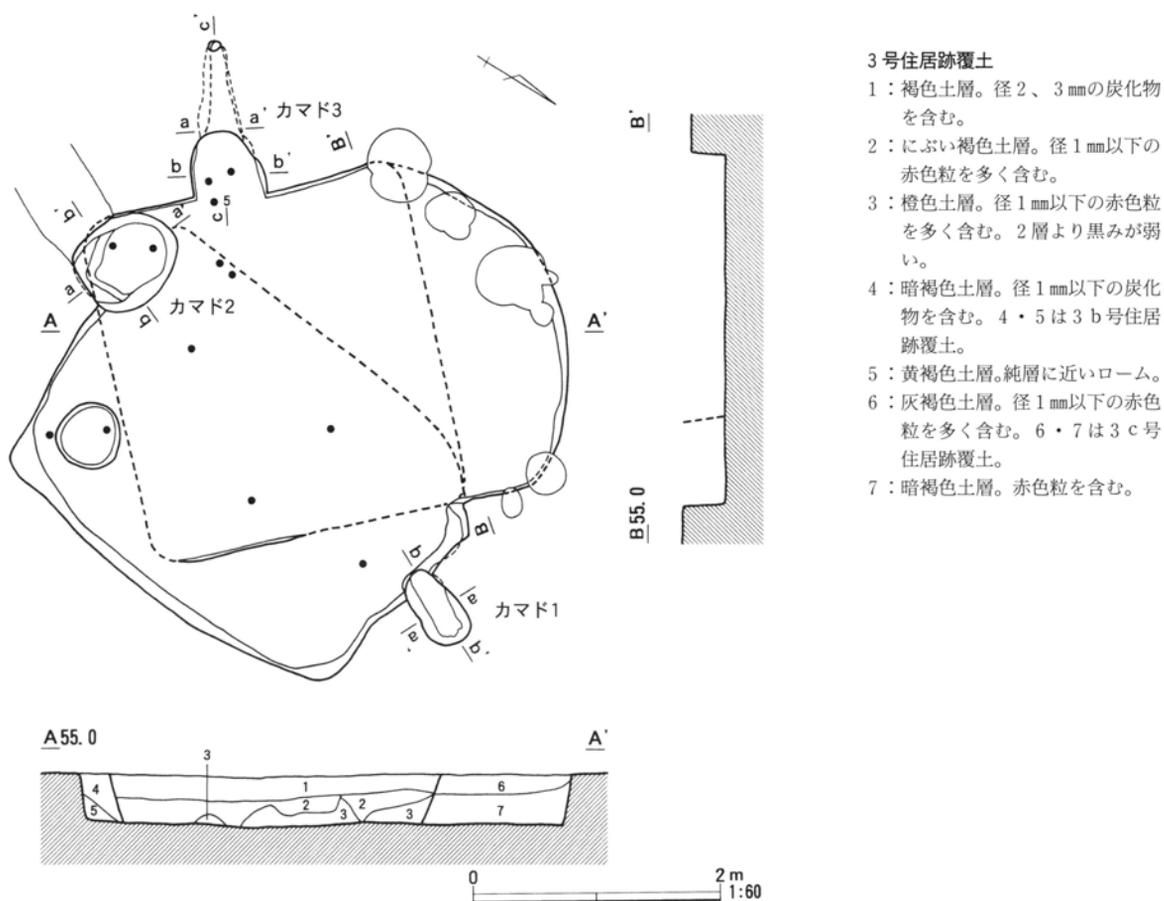


図9 3号住居跡平面図および断面図

たローム質の土であった。

カマド2は、3c号住居跡に大きく壊されている。壁および床面をそのまま掘りくぼめ燃烧部としており、掘り込みの平面形は、南北方向で82cm前後、東西で80cmのやや不整な楕円形である。煙道、袖は確認できなかった。燃烧部の中央から奥寄りで2个体分の甕が出土しており、1个体(図11:9)は土圧でつぶれたような状態で出土している。カマドの施設にかかわるものではないようである。

3c号住居跡は、重複する3軒の中で最も新しい住居跡である。土層断面の所見、3b号住居跡床面に残る本住居跡の北東辺の掘り込み、および北西隅での重複関係より判断して、平面形がほぼ方形の住居跡と判断した。床面の一部が時期の新しいピットに壊されている。主軸方向でのカマドをのぞいた長さは、2.8m、横幅は2.6mである。主軸方位は、S-40°-Wである。最も残りのよい南西壁は、垂直に近く立ちあがる。覆土は3層で、いずれも焼土あるいは炭化物を含むしまった土である。

カマド3は南西壁の中央にあり、全長125cm前後、幅58cmである。壁を掘りくぼめ燃烧部を設け、奥壁に現存長71cm、幅28~32cmの煙道を掘り貫いている。煙道はほぼ水平に掘られ、先端が上方に開口している。手前側の底面には弱い段がみとめられる。袖はないようである。煙道天井、側壁の赤化は著しいが、底面はあまり赤化していない。燃烧部では、胴部下半以下を欠いた土釜(図11:10)が押しつぶされたような状態で出土している。土釜の大型片が、煙道の口をふさいでいるかにも見える。覆土は7層に分けられる。燃烧部の覆土である1~5層と煙道覆土の6・7層ではかなり異なり、あるいは大甕を置いた時点で燃烧部に何かしら手を加えているのかもしれない。

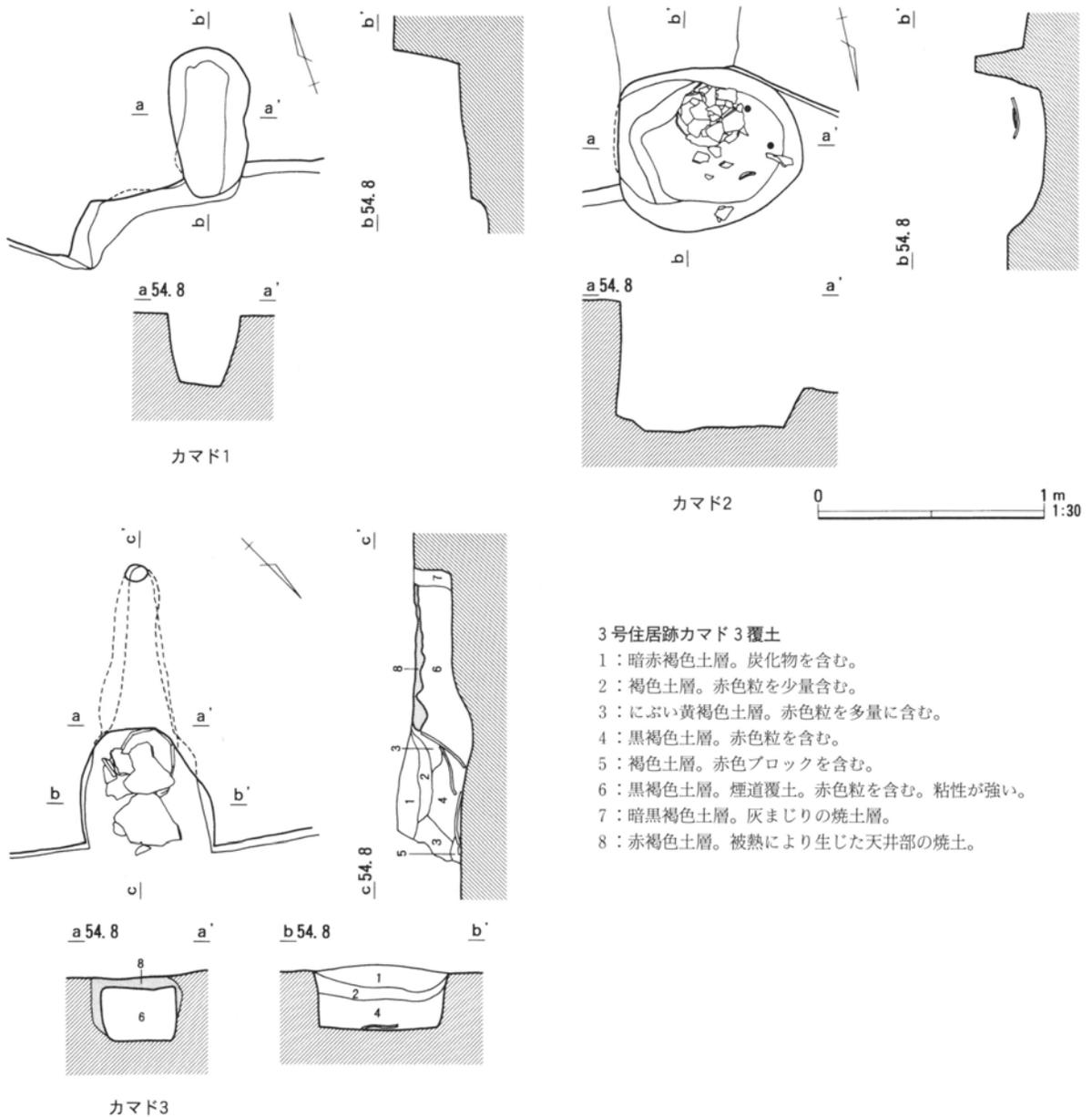


図10 3号住居跡カマド平面図および断面図

遺物(図11、表5～7、図版13) 住居跡覆土からは、土師器坏、須恵器碗、土師器高台皿、ミニチュア土器などが出土している。3 b号住居跡のカマド2の燃烧部から土師器甕が2点(8・9)と土師器坏(3)が、3 c号住居跡のカマド3の燃烧部から土釜(10)、土師質土器坏(5)が出土している。カマド内出土土器の上でも、8・9が9世紀後半、10が11世紀代とかなりの時期差がみとめられる。

表5 3号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器高台碗	口径 11.4 底径 — 器高 —	体部は緩やかに立ち上がり、高台はやや開く。	内・外面—ヘラミガキ・焼成底部糸切り痕。	胎土、表面ともに黒色。	低部の一部残存。
2	土師器坏	口径 12.3 底径 4.1 器高 5.4	体部は内彎し、口縁部は比較的直線的に立ち上がる。	内・外面—ヘラ削り。	石英・角閃石。明橙色。	全体の2/3が残存。
3	土師器坏	口径 12.6 底径 7.3 器高 4.3	体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	内・外面—ヘラ削り。	石英・褐色粒。鈍い橙色。	ほぼ完形。

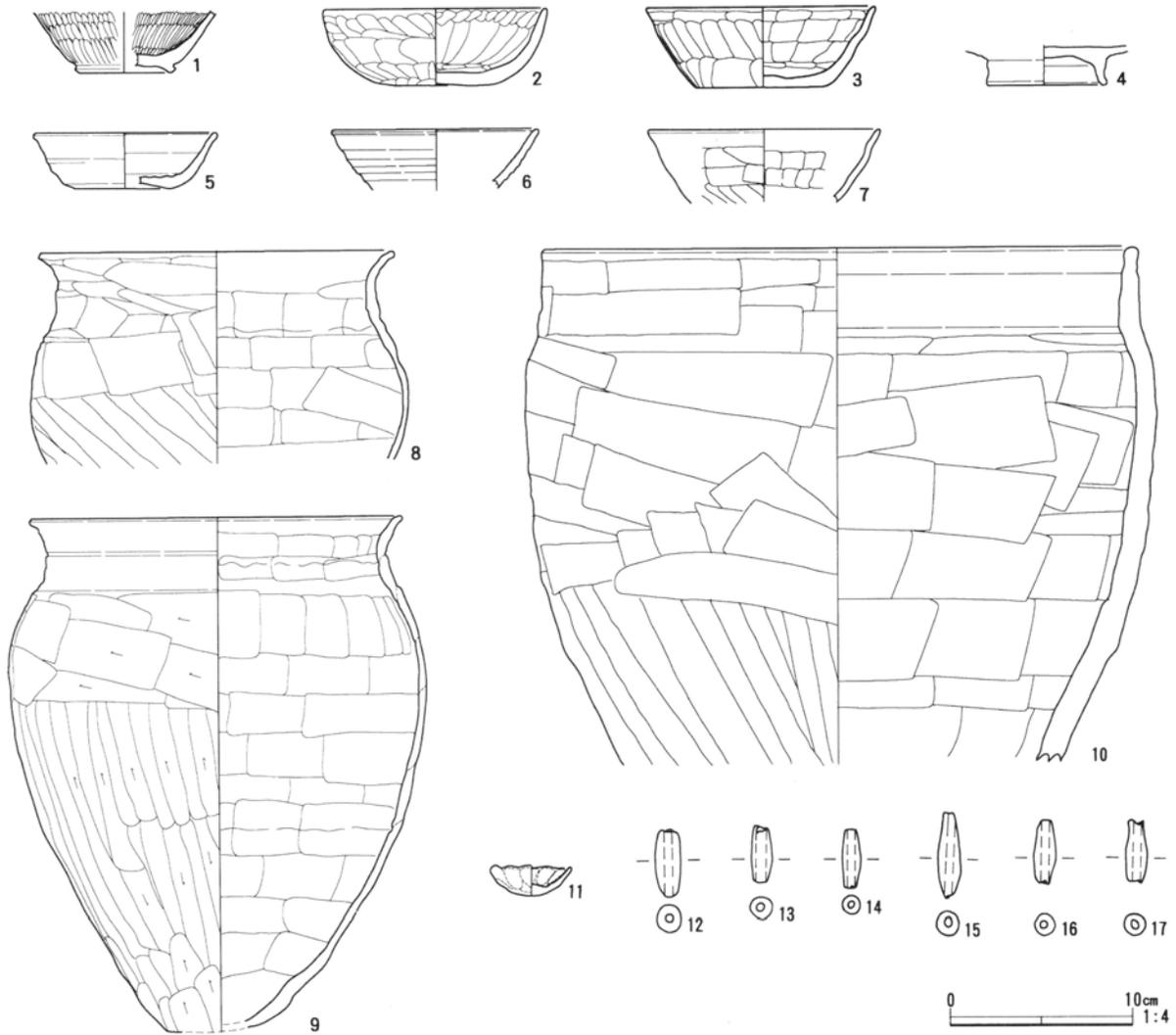


図11 3号住居跡出土遺物実測図

表6 3号住居跡出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
4	土師器 高台皿	口径 — 底径 (6.6) 器高 —	高台はわずかに外反する。	回転ナデ。	白色粒・褐色粒。	高台部の一部残存。
5	土師質土器 杯	口径 (10.0) 底径 4.9 器高 2.9	体部は緩やかに立ち上がり口縁部はわずかに外反する。	内・外面一回転ナデ。底部回転糸切り。	石英・褐色粒。 明橙色。	全体の1/3が残存。
6	土師質土器 杯	口径 (11.4) 底径 — 器高 —	体部は緩やかに立ち上がり口縁部はわずかに外反する。	内・外面一回転ナデ。口唇部ヨコナデ。	石英・褐色粒。 鈍い橙色。	口縁部の一部残存。
7	土師質土器 杯	口径 (13.0) 底径 — 器高 —	口縁部は一旦内彎してから直線的に立ち上がる。	内・外面一ヘラ削り。口唇部ヨコナデ。	石英・褐色粒。 鈍い橙色。	口縁部の一部残存。
8	土師器 甕	口径 (19.2) 底径 — 器高 — 胴部径(21.4)	粘土紐積み上げ成形。口縁部頸部はわずかに内傾、口唇部は外反する。	内・外面一ヘラケズリ。頸部から口唇部にかけて内・外面ともヨコナデ。	石英・褐色粒・礫。外面一暗橙色、内面一黄橙色。	胴部から口縁部の一部が残存。
9	土師器 甕	口径 20.4 底径 5.3 器高 27.6 胴部径 21.4	粘土紐積み上げ成形。胴部上位に膨らみをもち、口頸部は弱い「コ」字状を呈す。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部上位横位ヘラケズリ、中位斜縦位ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部斜縦位ヘラケズリのち横位ヘラナデ。	石英・褐色粒・礫。外面一暗橙色、内面一黄橙色。	ほぼ完形。口縁部等の一部を欠損。

表7 3号住居跡出土遺物観察表(3)

No	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考	
10	土師器 土釜	口径 32.1 底径 — 器高 (27.5) 胴部径 34.5	粘土紐積み上げ成形。口縁部頸部はわずかに内傾、口唇部はわずかに外反する。	内・外面一ヘラケズリ。頸部から口唇部にかけて内・外面ともヨコナデ。	石英・褐色粒・礫。外面一暗橙色、内面一黄橙色。	胴部から口縁部の一部が残存。	
11	ミニチュア 土器 坏	口径 4.5 底径 — 器高 1.6	低部は厚く体部はゆるやかに立ち上がり、口縁部はわずかに内彎する。	内・外面一指頭圧痕。	石英・褐色粒・礫。黄灰褐色。	完形。	
No	種類	器種	法 量 (cm・g)			備考	
12	土製品	土 錘	長さ：3.6	厚さ：1.4	孔径：0.5	灰黄褐色	ほぼ完形。
13	土製品	土 錘	長さ：3.0	厚さ：1.2	孔径：0.5	にぶい褐色	一部欠損。
14	土製品	土 錘	長さ：3.2	厚さ：1.0	孔径：0.4	褐灰色	完形。
15	土製品	土 錘	長さ：4.5	厚さ：1.2	孔径：0.4	にぶい褐色	一部欠損。
16	土製品	土 錘	長さ：3.4	厚さ：1.2	孔径：0.4	にぶい橙色	4/5残存。
17	土製品	土 錘	長さ：3.3	厚さ：1.2	孔径：0.5	にぶい橙色	一部欠損。

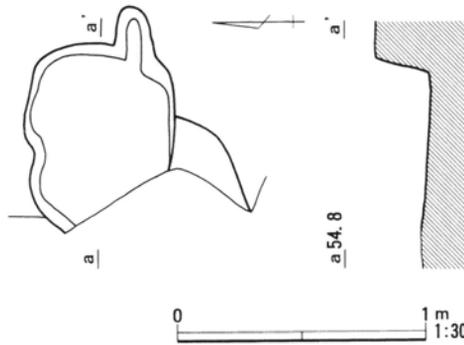


図12 4号住居跡カマド平面図および断面図

4号住居跡

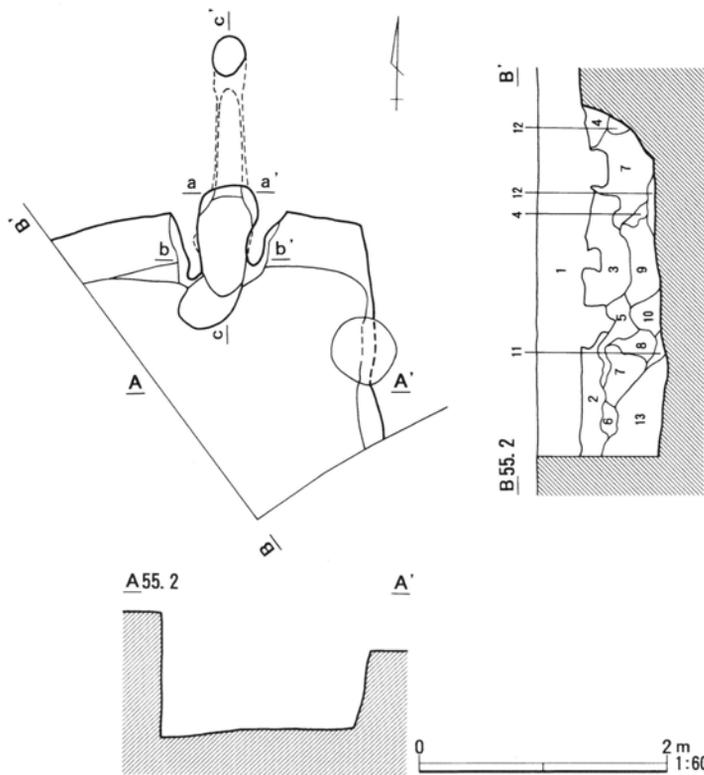
遺構(図12) I区の南半、南隅寄りで検出した遺構でG-3・4グリッドに位置する。23号土坑に切れ、ほぼカマドのみ遺存する遺構である。東壁側にカマドをもつ住居跡の残骸であろう。壁および床面を奥行き75cm、幅60cmの隅丸長方形に近い形に掘りくぼめ燃焼部が設けられたカマドである。煙道、袖は見られない。底面の赤化は顕著ではないが、側壁はよく焼けている。覆土には、焼土をかなり含む。遺物は一切出土していない。

5号住居跡

遺構(図13・14、図版4) I区の南端、G-3・H-3グリッドに位置し、カマドを含む北壁、東壁の一部のみ検出した遺構である。確認面は、表土層直下のIII層上面、あるいはII a層中である。北壁および東壁の一部を時期の新しいピットにより壊されている。規模から見て、平面形は南北方向に長い長方形あるいは隅丸長方形となろうか。弧を描くように膨らんだ北壁の長さは2.45m、東壁の現存長は1.7mである。主軸方位は、N-6°-Eである。北壁はややゆるやかに、東壁は急に立ちあがる。床面には凹凸がみとめられる。

覆土は12層に分けられる。調査区界の南西壁面の所見では、1層は耕作土を主とする表土、以下褐色土や黄褐色土などからなる覆土である。覆土は、住居跡両側から不規則に流入ないしは投げこまれたかのように堆積しており、総じて遺物を多く含みしまりが強い。

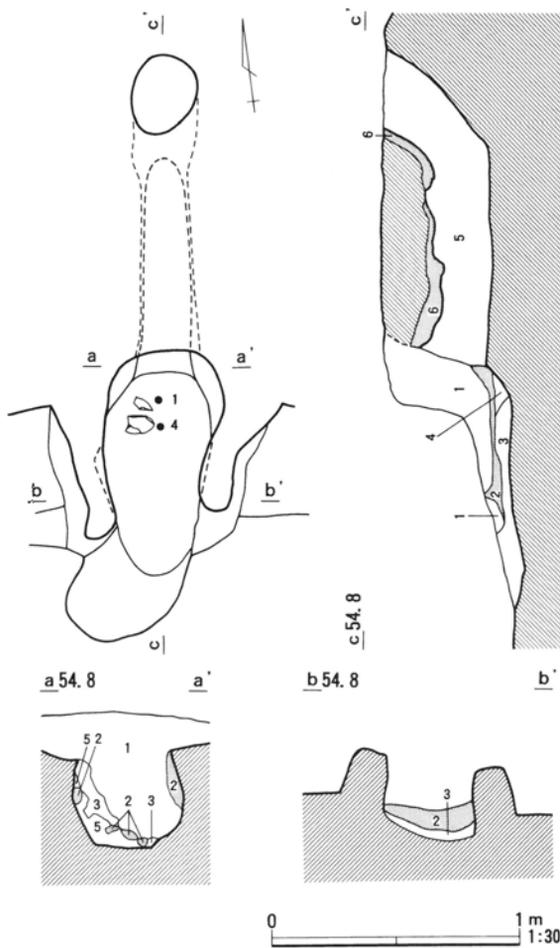
カマドは、検出した範囲の北壁のほぼ中央にある。全長231cm、袖の両端を含めた横幅95cm、燃焼部、煙道、袖いずれも残りがよい。床面を掘りくぼめ楕円形が2つ重なったような燃焼部を設け、その際両側の地山を細長く掘り残し、袖を作り出している。煙道は現存長117cm、幅19~24cmである。煙道は、燃焼部の奥壁、燃焼面より10cm前後高い位置に設けられた煙道口からほぼ水平に伸びた後、約40°の角



5号住居跡覆土

- 1：灰褐～褐色土層。表土層。
- 2：灰褐色土層。径3mm以下の赤色粒を含む。
- 3：灰褐色土層。径2mm以下の赤色粒、径1cm以下の炭化物を含む。
- 4：褐色土層。純層に近い褐色土。
- 5：灰褐色土層。径1mm以下の赤色粒、炭化物を含む。
- 6：褐色土層。径2mm以下の赤色粒を含む。
- 7：黄褐色土層。灰褐色土の大ブロックを含む。
- 8：灰暗褐色土層。径2mm以下の赤色粒を含む。
- 9：黄褐色土層。径1mm以下の赤色粒を含む。
- 10：黄褐色土層。径3mm以下の赤色粒を含む。
- 11：黄褐色土層。純層に近いローム。
- 12：黄褐色土層。径2mm以下の炭化物を多量に含む。
- 13：褐色土層。径1mm以下の赤色粒を含む。

図13 5号住居跡平面図および断面図



5号住居跡カマド覆土

- 1：黄灰褐色土層。天井部の地山が崩落した層。赤色粒をわずかに含む。
- 2：赤褐色土層。天井部の崩落した焼土。
- 3：暗褐色土層。純層に近い暗褐色土。
- 4：黄褐色土層。純層に近いローム。
- 5：灰褐色土層。煙道覆土。天井から落ちた焼土ブロックを含む。
- 6：赤褐色土層。被熱により生じた天井部の焼土。

図14 5号住居跡カマド平面図および断面図

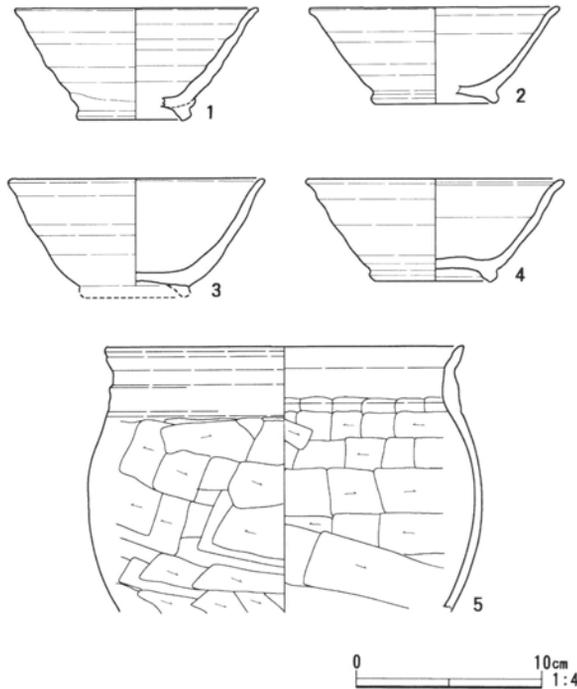


図15 5号住居跡出土遺物実測図

度で立ちあがり開口部へと至る。煙道天井は赤化が著しいが、下面はそれほど赤化していない。

カマドの覆土は、5層に分けられる。1～4層は、天井を含む燃焼部の覆土である。5層は煙道覆土である。被熱赤化し剝がれ落ちた天井崩落土のブロックを含むも、土自体はかなり均質である。煙道が一挙に埋まったかに見える堆積状態を示す。2層は、本来6層につらなる煙道から燃焼部にかけての天井の崩落土であろう。1層はさらに分層できるのかもしれない。

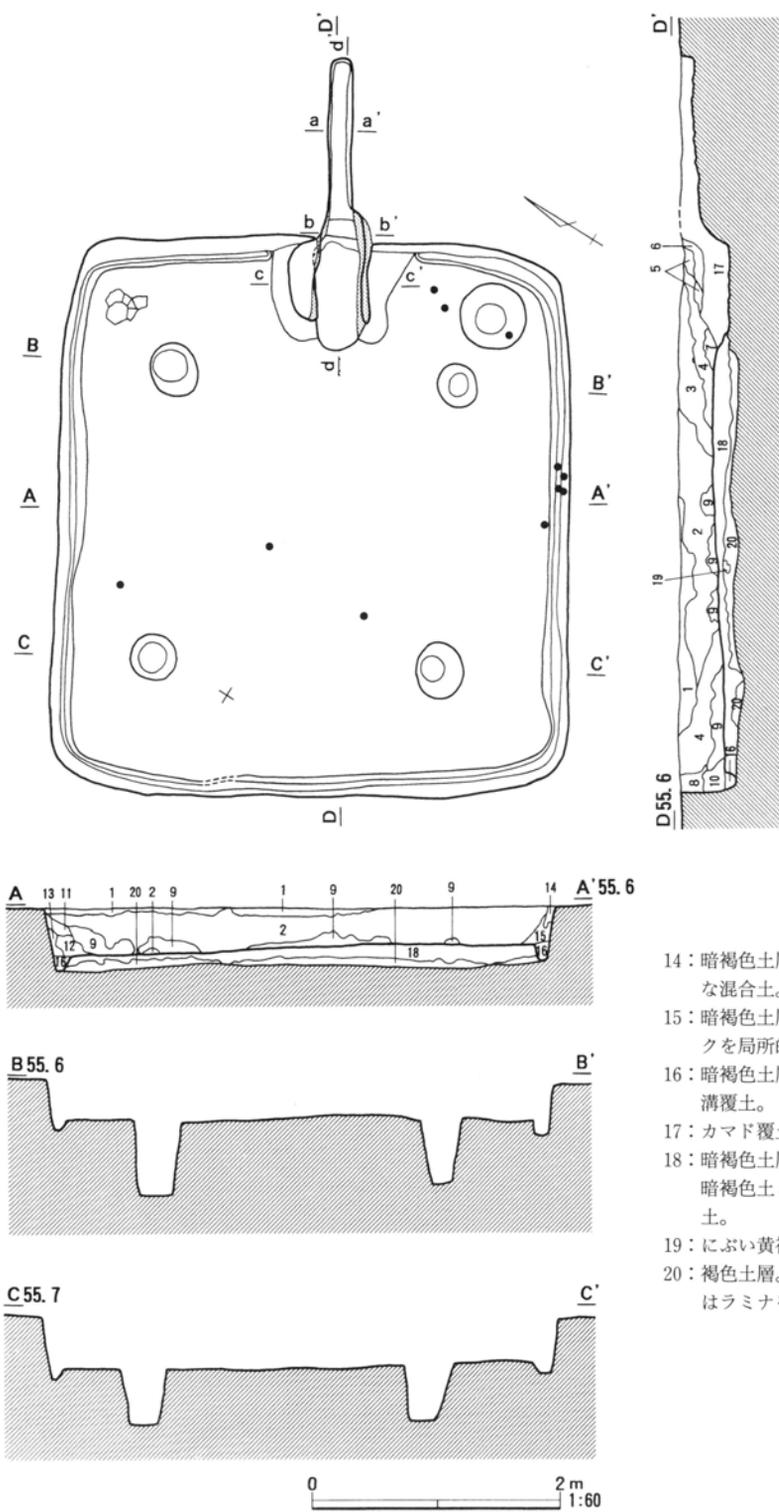
遺物(図15、表8、図版13) カマド燃焼部から酸化焰焼成の須恵器碗(1・4)、覆土中から土師器甕(5)が出土している。

表8 5号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器高台碗	口径 (13.6) 底径 7.2 器高 5.9	体部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。高台は外に開く。	回転ナデ。外面底部一ヘラ削り。	褐色粒・礫。赤橙色～黄灰色。	全体の1/6が残存。
2	須恵器高台碗	口径 (13.6) 底径 (7.8) 器高 4.8	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。高台は外に開く。	回転ナデ。外面底部一ヘラ削り。	白色粒・褐色粒・礫。にぶい黄褐色。	全体の1/6が残存。
3	須恵器高台碗	口径 (13.9) 底径 — 器高 —	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は外反する。高台は外に開く。	回転ナデ。外面底部一ヘラ削り。	白色粒・褐色粒・礫。赤褐色。黒斑。	全体の1/4が残存。
4	須恵器高台碗	口径 14.0 底径 5.5 器高 6.9	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。高台は外に開く。	回転ナデ。外面底部一ヘラ削り。	白色粒・褐色粒。にぶい黄褐色。	全体の1/2が残存。
5	土師器甕	口径 (19.2) 底径 7.2 器高 (14.0) 胴部径(21.4)	粘土紐積み上げ成形。口縁部頸部はわずかに内彎、口唇部は外反する。	内・外面一ヘラケズリ。頸部から口唇部にかけて内・外面ともヨコナデ。	石英・褐色粒・礫。外面一暗橙色、内面一黄褐色。	胴部から口縁部の一部が残存。

6号住居跡

遺構(図16・17、図版4) II区の東半、B1-22・32グリッドを中心に位置する遺構である。確認面は、表土層直下のややIII層上面である。壁およびカマドの一部を時期の新しいピットにより壊されている。平面形は東西方向がやや長い隅丸長方形である。カマドを除いた主軸長は、4.4m、横幅は4.1mである。主軸方位は、N-60°-Eである。四壁はややゆるやかに、東壁は急に立ちあがる。床面にはやや凹凸がみとめられる。

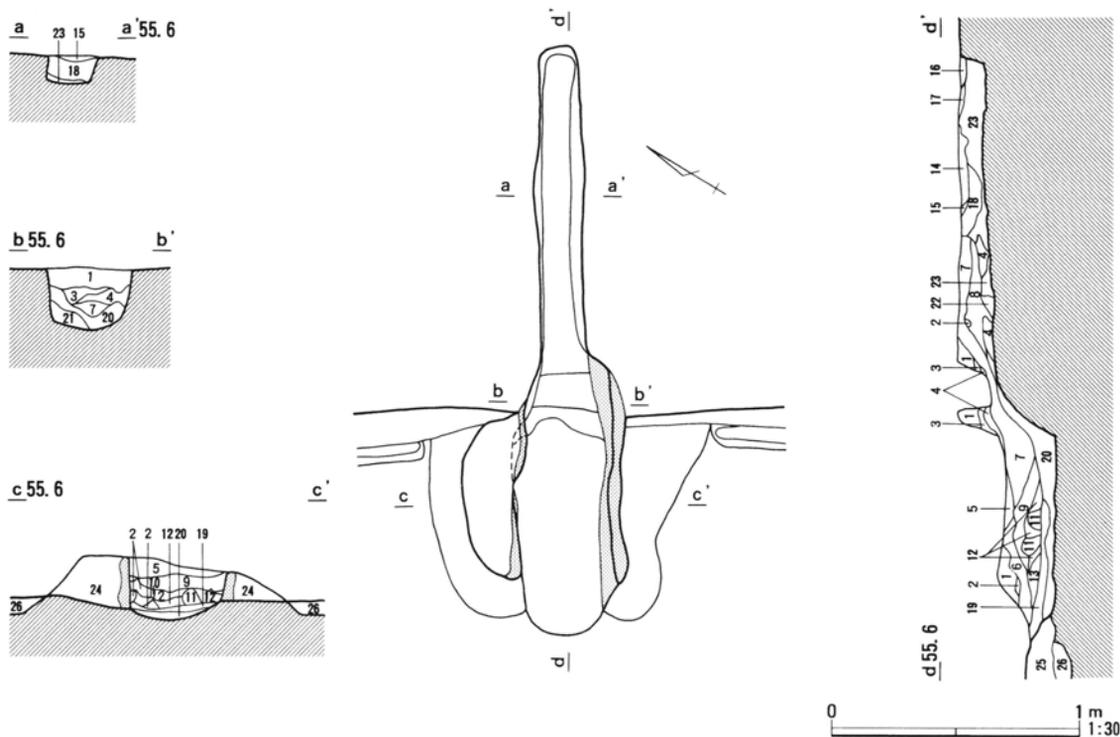


6号住居跡覆土

- 1：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。
- 2：暗褐色土層。やや黒みの強い暗褐色土を主に、径2～10cmの大小ロームブロックを斑状に含む。炭化物を含む。
- 3：暗褐色土層。2層に近いが、ロームブロックの輪郭が不明瞭。
- 4：暗褐色土層。3層に近いが、暗褐色土が多い。
- 5：暗褐色土層。3層に近いが、ロームが若干少ない。
- 6：暗褐色土層。5層に近いが、ロームがさらに少ない。
- 7：2層に近いが、径2～7cmのシルト化した白みの強いブロックを含む。
- 8：暗褐色土層。純層に近い暗褐色土を主に、炭化物、土器粒を含む。
- 9：暗褐色土層。8層に近いが、ローム小ブロックが均質に混じる。
- 10：暗褐色土層。暗褐色土を主に、やや黒みのあるローム小ブロックを含む。
- 11：暗褐色土層。9層に近いが、ロームを斑状に含む。
- 12：暗褐色土層。11層に近いが、ロームブロックが明瞭。
- 13：暗褐色土層。11層に近いが、ロームが少ない。
- 14：暗褐色土層。2層に近いが、暗褐色土とロームが均質な混合土。
- 15：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒、ロームブロックを局所的に含む。
- 16：暗褐色土層。暗褐色土とロームの不均質な混合土。壁溝覆土。
- 17：カマド覆土。
- 18：暗褐色土層。やや灰色みがかった暗褐色土を主に、所々暗褐色土とロームが互層をなす。18～20層は掘り方覆土。
- 19：にぶい黄褐色。ロームブロック。
- 20：褐色土層。ロームを主に、暗褐色土が斑状に、あるいはラミナをなし混入する。

図16 6号住居跡平面図および断面図

覆土は16層に分けられる。調査区界の南西壁面の所見では、1層は耕作土を主とする表土、以下褐色土や黄褐色土などからなる覆土である。1～4層とした、ロームブロックを不均質に含む大きな単位をなす堆積土によって住居跡の大半が埋まっており、埋め戻されたものと見てよいであろう。16層は、壁溝の埋め土、18～20層は、掘り方の埋め土である。



6号住居跡カマド覆土

- | | |
|--|--|
| <p>1：暗褐色土層。暗褐色土とロームの不均質な混合土。</p> <p>2：明赤褐色土層。焼土ブロック。</p> <p>3：暗褐色土層。1層に近いが、焼土が多い。</p> <p>4：明赤褐色土層。焼土を主に、暗褐色土を含む。</p> <p>5：褐色土層。褐色のローム質土と暗褐色土の混合土。焼土を含み、炭化物を多量に含む。</p> <p>6：暗褐色土層。3層に近いが、焼土がさらに多い。</p> <p>7：暗褐色土層。暗褐色土を主にローム粒、焼土を含む。</p> <p>8：暗褐色土層。暗褐色土を主に斑状にローム質土を含む。焼土を含む。</p> <p>9：褐色土層。褐色のローム質土と暗褐色土との混合土。炭化物を多量に含み、焼土を含む。</p> <p>10：褐色土層。9層に近いが、焼土が多い。</p> <p>11：明赤褐色土層。焼土ブロックを主に、暗褐色土を少量含む。</p> <p>12：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土、炭化物を多量に含む。</p> <p>13：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土粒、径1cm大の焼土ブロック、炭化物を含む。</p> <p>14：暗褐色土層。12層に近いが、焼土が若干多い。下部は被熱により焼土の薄層をなす。この層と15・17層は、煙道天井の残存部の可能性もあり。</p> | <p>15：暗褐色土層。14層に近いが、焼土が少ない。</p> <p>16：暗褐色土層。やや黒みの強い暗褐色土を主に、焼土を少量含む。</p> <p>17：暗褐色土層。15層に近いが、焼土の薄層は見られない。18：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土、炭化物を含む。</p> <p>19：褐色土層。黒褐色土、ローム、焼土の不均質な混合土。</p> <p>20：暗褐色土層。7層土を主に、焼土粒、焼土ブロックを多量に含む。</p> <p>21：暗褐色土層。7層土を主に、径2～5cm大の焼土ブロックを多量に含む。</p> <p>22：暗褐色土層。暗褐色土と褐色土の混合土。上部は被熱赤化している。天井壁崩落土。</p> <p>23：暗褐色土層。8層に近いが、焼土が少ない。</p> <p>24：にぶい黄褐色土。マンガンかと思われる黒色粒をかなり含むローム質土。袖構築土。</p> <p>25：暗褐色土層。やや灰色がかった暗褐色土を主に、所々暗褐色土とロームが互層をなす。26層とともに掘り方覆土。住居跡覆土18層。</p> <p>26：褐色土層。ロームを主に、暗褐色土が斑状に、所々ラミナをなし混入する。住居跡覆土20層。</p> |
|--|--|

図17 6号住居跡カマド平面図および断面図

カマドは、北東壁のほぼ中央にある。全長232cm、袖の両端を含めた横幅113cm、燃焼部、煙道、袖いずれも残りがよい。床面を掘りくぼめ楕円形が2つ重なったような燃焼部を設け、その際両側の地山を細長く掘り残し、袖を作り出している。煙道は現存長129cm、幅19～21cmである。煙道は、燃焼部の奥壁、燃焼面より24cm前後高い位置に設けられた煙道口からほぼ水平に伸びた後、垂直に近い角度で立ちあがり開口部へと至る。下面はそれほど赤化していない。

カマドの覆土は、23層に分けられる。燃焼部の覆土は、赤化し剝がれ落ちた天井崩落土のブロックなどかなり容易に識別できたが、煙道の覆土は天井、壁の崩落土の識別がはっきりしなかった。

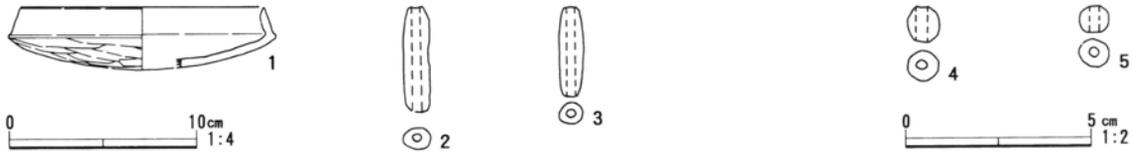


図18 6号住居跡出土遺物実測図

表9 6号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考		
1	土師器 坏	口径 (12.9) 底径 — 器高 —	体部と口縁部との境に稜を持ち、口縁部は内傾。底部は緩やかな丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	白色粒・角閃石 内一にふい褐色 外一にふい黄橙色	1/2。		
No	器種	法量 (cm・g)				備考		
2	土 錘	長さ：5.5	厚さ：1.5	孔径：0.6	重さ：8.9g	角閃石安山岩粒	にふい褐色	ほぼ完形。
3	土 錘	長さ：4.7	厚さ：1.4	孔径：0.6	重さ：5.7g	片岩・チャート	にふい橙色	ほぼ完形。
4	土 玉	長さ：1.9	厚さ：1.7	孔径：0.6	重さ：4.9g	片岩・微砂粒	にふい黄橙色	完形。
5	土 玉	長さ：1.4	厚さ：1.6	孔径：0.6	重さ：2.8g	片岩・微砂粒	にふい黄橙色	完形。

遺物(図18、表9、図版13) 床面直上より出土した遺物は、わずかであり、土錘(2・3)は、覆土中出土である。図化していないが、南西壁寄りややまとまって、編み物石と思われる礫が出土している。

7号住居跡

遺構(図19・20、図版4) II区の東縁、B1-64・65グリッドを中心に位置する遺構である。東側は、隣接私道撤去時に大きく削平され、カマドを含む住居跡の一部を壊されてしまった。確認面は、III層上面であるが、東側調査区界の断面観察では、実際の掘り込み面は、IIa層中であることを確認している。

8・9号住居跡と重複している。8号住居跡確認後さらに重複部分の確認面を下げた段階で本住居跡の輪郭が視認できたことからすれば、8号住居跡に先行する可能性があるようである。9号住居跡の床面がさらに上位にあったとすれば、9号住居跡は本住居跡より後出する遺構となる。

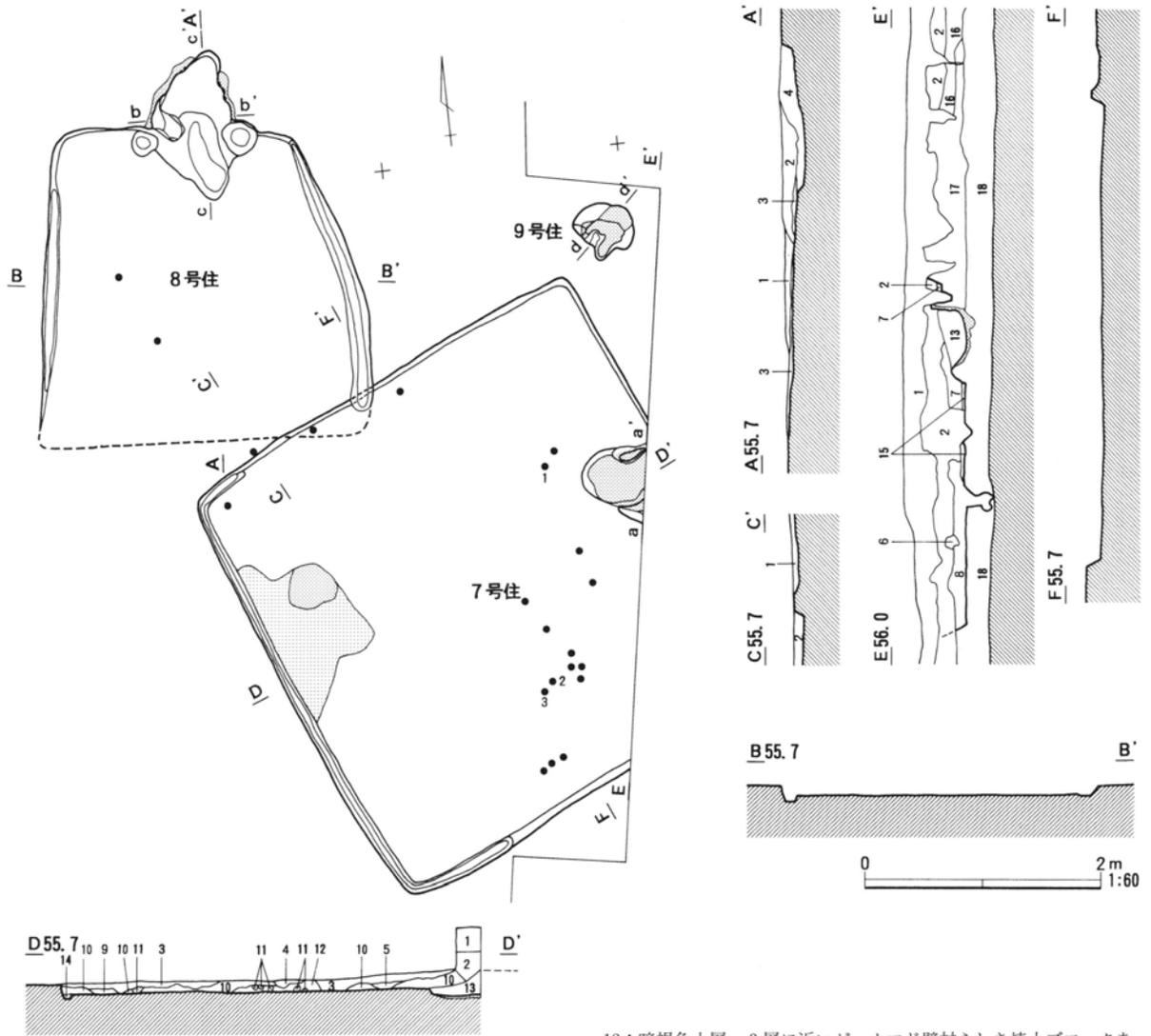
平面形は、南北方向に長い長方形あるいは隅丸長方形となろうか。微妙に膨らんだ北壁の長さは3.63m、東壁の現存長は3.7m、主軸方位は、N-65°-Eである。北壁はややゆるやかに、東壁は急に立ちあがる。床面には凹凸がみとめられるが、比較的良好に硬化している。北西壁、南東壁の極一部、および南西壁には、浅く細い壁溝が見られる。

覆土は、12層に分けられる。覆土には、全体に焼土が含まれ、南西壁寄り床面では、径30~40cmの炉跡と見紛うような焼土の濃集部分がみとめられ、また南西壁にかけて焼土が密に分布していた。

カマドは、検出した範囲の北東壁のほぼ中央にある。北東~東側が欠失しており、燃焼部と袖の一部のみ残存する。残存長は55cm、袖の残欠部分を含めた横幅は67cmである。床面を掘りくぼめ造作した燃焼部の壁、底面は、よく焼けている。底面よりやや浮いた状態で、甕(4)が出土している。

カマドの覆土は、1層で、焼土混じりの暗褐色土である。

遺物(図21、表10、図版14) 床面・覆土からは、土器片が散漫に出土している。カマド内より出土した4、床面出土の2・3以外の土器は、ほとんどが細片である。1・2は床面直上出土である。



7号住居跡覆土

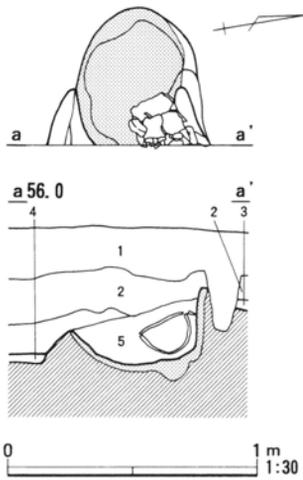
- 1：暗褐色土層。現耕作土。
- 2：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土粒、炭化物、土器破片をかなり含み、細かなローム粒を含む。粘性はないが、かなりしまっている。8号住居跡はこの層中より掘り込まれているが、掘り込み面は見えない。ただし、覆土の外では、遺物量が格段に減少する。
- 3：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含み、焼土粒、炭化物を少量含む。
- 4：暗褐色土層。3層に近いが、焼土粒、炭化物をほとんど含まない。
- 5：暗褐色土層。4層に近いが、焼土やや多い。
- 6：褐色土層。ロームブロック。
- 7：暗褐色土層。2層に近いが、黒みがやや強く、焼土、炭化物がかなり多い。
- 8：暗褐色土層。7層に近いが、焼土、炭化物が少ない。
- 9：暗褐色土層。3層に近いが、焼土、炭化物が多い。
- 10：暗褐色土層。3層に近いが、焼土、炭化物がかなり多い。径0.5～2cm大の焼土ブロックを多く含む。
- 11：明赤褐色土層。焼土ブロック。

- 12：暗褐色土層。3層に近いが、カマド壁材らしき焼土ブロックを多く含む。
- 13：カマド覆土。
- 14：暗褐色土層。暗褐色土とロームの混合土。壁溝覆土。
- 15：褐色土層。白みがかかったローム質土を主とする貼床層。部分的にしか確認できない。
- 16：暗褐色土層。2層に近いが、黒みやや強い。北側に行くほど厚くなる。
- 17：暗褐色土層。2層に近いが、焼土、炭化物が少ない。
- 18：褐色土層。マンガンと思われる黒色粒を含む黒褐色土とくすんだ色調のロームの混合土。

8号住居跡覆土

- 1：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。しまっている。
 - 2：暗褐色土層。黒みややある暗褐色土を主に、ローム粒を含む。焼土、炭化物をかなり含む。
 - 3：褐色土層。1層土とロームの混合土。
 - 4：カマド覆土。
- #### 7・8号住居跡覆土 (C-C'地点)
- 1：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。焼土、炭化物を微量含む。8号住居跡覆土1層。
 - 2：暗褐色土層。1層に近いが、やや黒み強く、焼土、炭化物が多い。7号住居跡覆土。

図19 7～9号住居跡平面図および断面図



7号住居跡カマド覆土

- 1：暗褐色土層。現耕作土。
- 2：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土粒、炭化物、土器破片をかなり含み、細かなローム粒を含む。3層とともに住居跡覆土。
- 3：暗褐色土層。2層に近いが、やや黒みが強く、さらに土器破片が集中する。焼土、炭化物も多い。
- 4：褐色土層。白みがかかったローム質土を主とする貼床層。部分的にしか確認できない。
- 5：暗褐色土層。3層に近いが、焼土、炭化物が多い。

図20 7号住居跡カマド平面図および断面図

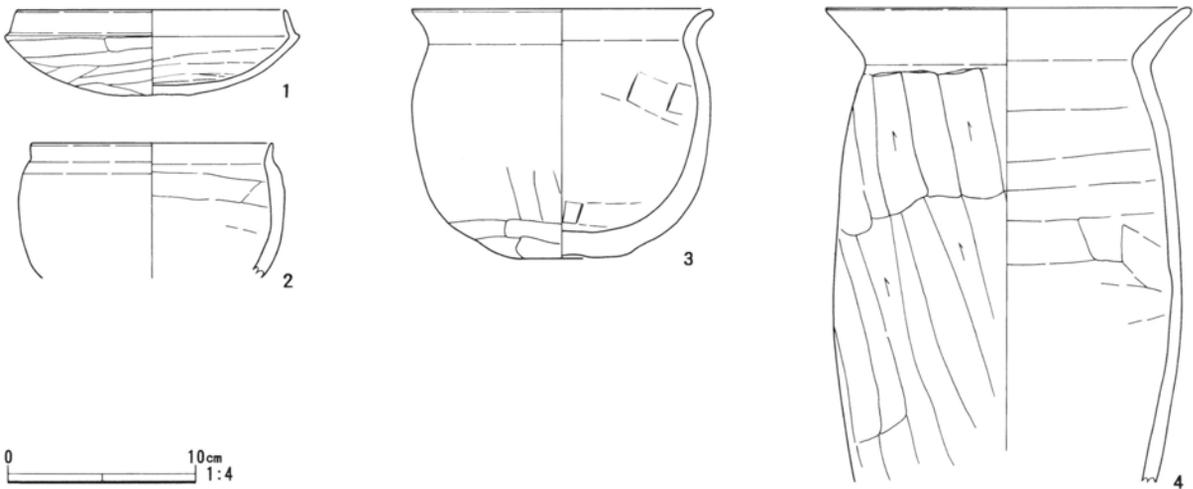
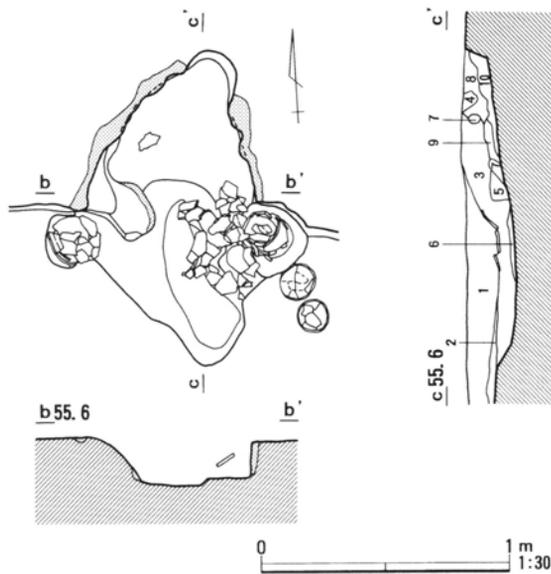


図21 7号住居跡出土遺物実測図

表10 7号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 14.4 底径 — 器高 4.0	体部と口縁部との境に稜を持ち、口縁部は内傾する。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外—褐色	完形。
2	土師器 (碗)	口径 (12.8) 底径 — 器高 —	体部膨らみを持ち、口縁部は短く直立気味に立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、体部器面荒れており不明瞭。内面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。	片岩・粗砂粒 内—ぶい褐色 外—赤褐色	1/4。
3	土師器 小型甕	口径 (16.4) 底径 7.0 器高 13.1	胴部膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。	外面—器面荒れており不鮮明だが胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	片岩・砂礫 内—灰黄褐色 外—橙色	1/2。
4	土師器 甕	口径 (19.7) 底径 — 器高 —	胴部は膨らみの弱い長胴。口縁部は外反気味に開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	片岩・粗砂粒 内—ぶい橙色 外—ぶい黄橙色	1/2。



8号住居跡カマド覆土

- 1：暗褐色土層。黒みのややある暗褐色土を主に、ローム粒を含む。焼土、炭化物をかなり含む。
- 2：褐色土層。1層土とロームの混合土。
- 3：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土、炭化物を微量含む。
- 4：暗褐色土層。3層に近いが、焼土が多い。
- 5：暗褐色土層。4層に近いが、径1～2cm大の焼土ブロック、炭化物を含む。
- 6：黒褐色土層。3層に近いが、炭化物が多く、黒みが強い。
- 7：明赤褐色土層。焼土ブロック。
- 8：暗褐色土層。上部は4層に近いがやや焼土多く、下部は焼土層。天井崩落土。
- 9：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土、炭化物を多量に含む。
- 10：黒褐色土層。6層に近いが、焼土が多い。

図22 8号住居跡カマド平面図および断面図

8号住居跡

遺構 (図1922、図版5) II区の東縁付近、B1—53グリッドを中心に位置する。確認面は、III層上面である。大きく削平されており、とくに入口側は、壁がほとんど残っていない。確認状況、出土遺物から見て、7号住居跡に後出する住居跡と考えられる。

平面形は、入口側が広がる歪な台形で、カマドを除いた主軸長は推定で2.7m前後、横幅は2.8m、主軸方位はN-2°-Eである。入口側では壁の立ち上がりを確認できず、主軸長は多少長くなるのかもしれない。床面の硬化は顕著ではない。東西壁には壁溝が見られる。

覆土は4層である。全体に水の影響を受けているらしく、やや白みがかっている。カマドの近辺の3層は、貼床層の可能性もあるが、入口側では覆土と分離できない。

カマドは、奥壁のほぼ中央で検出した。燃焼部と煙道口の部分のみ残存する。現存長は123cm、袖の残欠部分を含めた横幅は105cmである。楕円形に近く掘りくぼめられた燃焼部の壁、底面は、よく焼けて赤化している。奥壁の不定形のくぼみは、煙道の痕跡である。左右の袖甕と思われる甕(図23：3・4)およびそれらが据え置かれた小ピットを確認しているが、袖本体を検出することができなかった。袖のあるあたりでは、多少シルトが混じるようであり、覆土と大きく異なる暗褐色土でゆるく盛り上げた袖が本来あった可能性も考えられる。また、右袖脇床面で完形の坏が出土している。

カマドの覆土は、9層に分けられる。5・7～9層は、一連の天井崩落土であるが、それより上の層は、混入物が一様ではなく、かなり乱されているようであった。

遺物 (図23、表11、図版14) カマドの袖で倒立状態の土師器甕2点(3・4)、右袖甕近くの床面で土師器坏2点(1・2)が出土している。他には細かな土器片が覆土中から出土しているのみである。

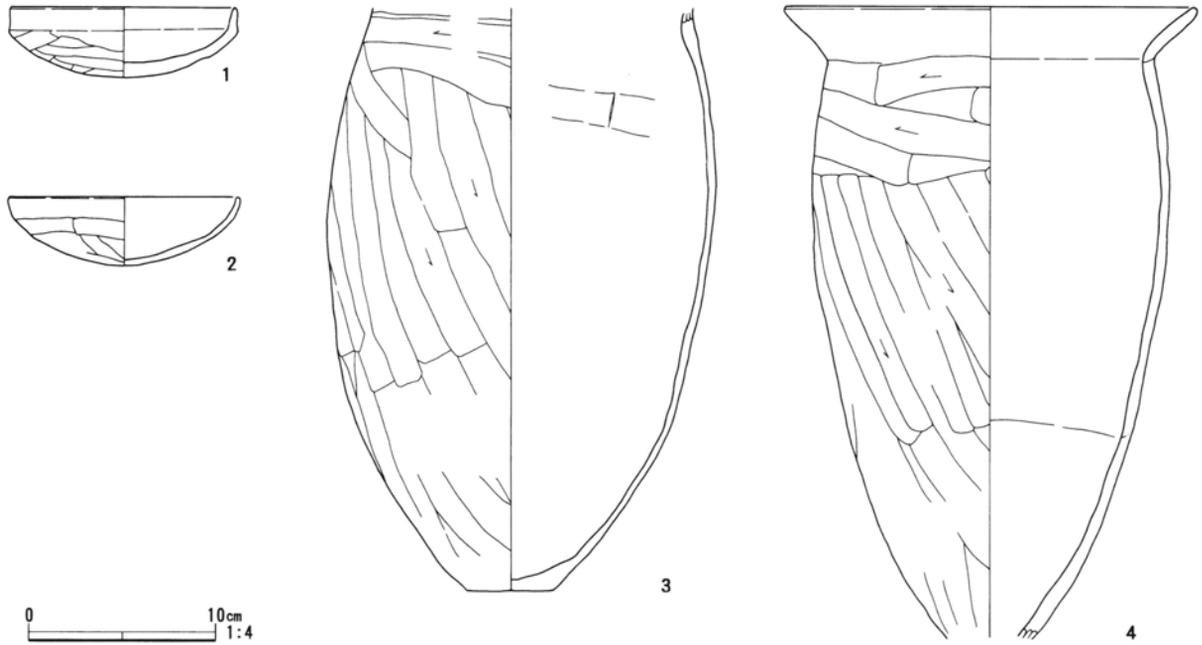


図23 8号住居跡出土遺物実測図

表11 8号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 12.1 底径 — 器高 3.3	体部と口縁部との境に弱い稜を持ち、口縁部は直立気味に立ち上がる。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	白色粒・角閃石 内外—橙色	ほぼ完形。
2	土師器 坏	口径 12.6 底径 — 器高 3.6	丸みを持った体部。口縁部は内彎気味に開く。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	白色粒・角閃石 内外—橙色	一部欠損。
3	土師器 甕	口径 — 底径 4.6 器高 —	胴部は弱い膨らみを持つ長胴。	外面—胴部・底部ヘラケズリ。内面—胴部～底部ヘラナデ。	石英・チャート 内外—橙色	口縁部欠損。
4	土師器 甕	口径 22.4 底径 — 器高 —	胴部は弱い膨らみを持つ長胴。口縁部は外反気味に開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	片岩・チャート 内—橙色 外—明褐色	底部欠損。

9号住居跡

遺構 (図19・24) 7号住居跡の北側、B1—63・73グリッドで検出した遺構である。確認面はIII層上面である。確認時シルト化したロームが燃焼面周辺でわずかながらも見られたため、住居跡のカマドの残骸と判断した。調査区界の土層断面でも覆土が確認できないことから見て、地山を掘りくぼめ作出したカマド燃焼面のみ遺存したものであろう。本来床面がより高いレベルにあったとすれば、位置的に7・8号住居跡と重複し、両者に後出する住居跡と考えられる。燃焼面は、よく焼けている。遺物はわずかな土器細片以外出土していないが、古墳時代後期の住居跡と見てよいであろう。

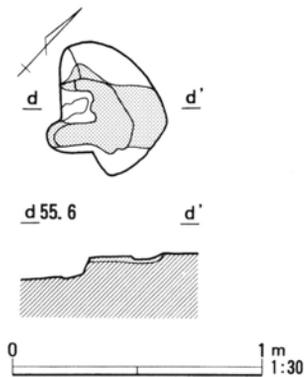


図24 9号住居跡カマド平面図および断面図

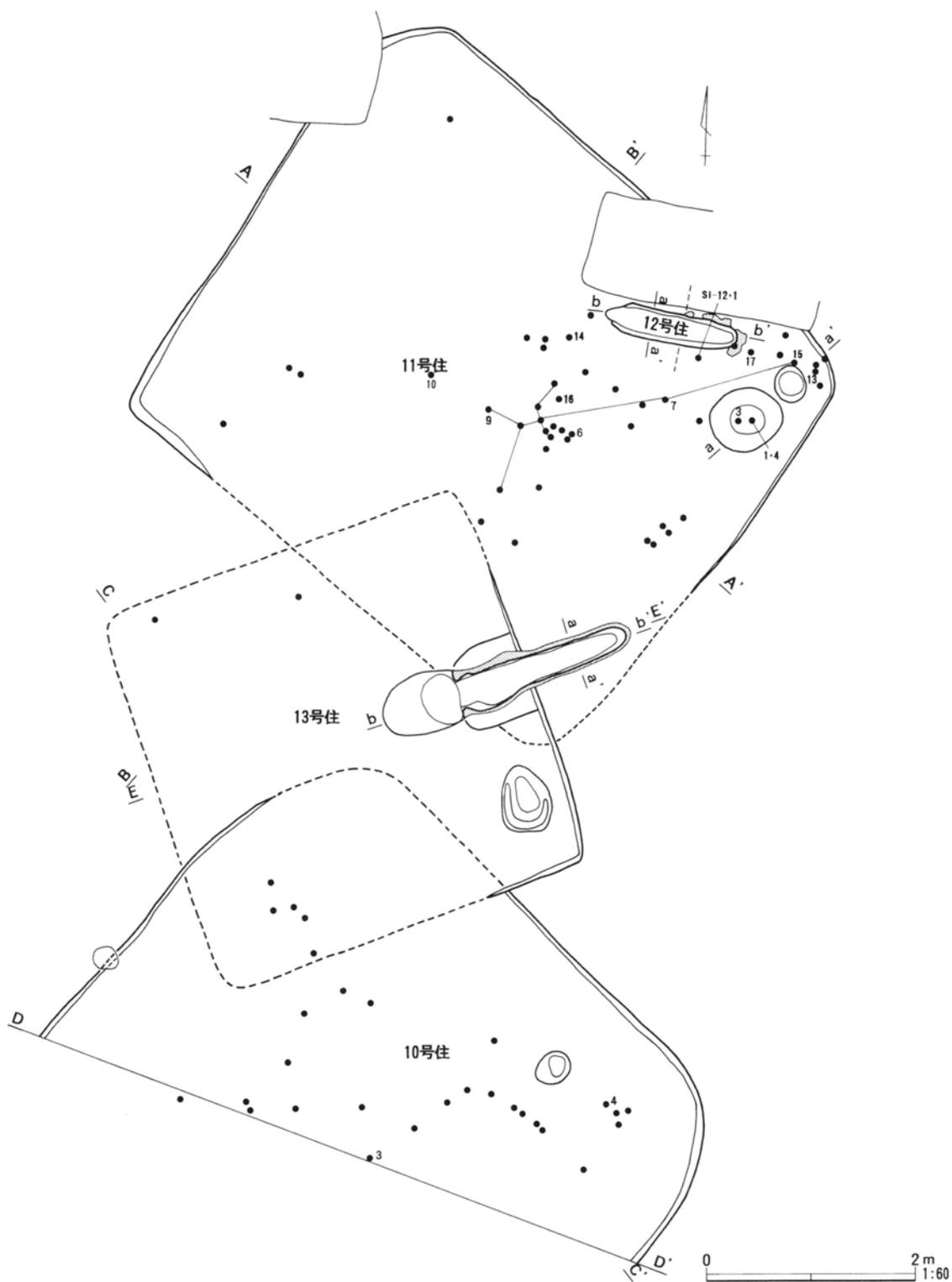
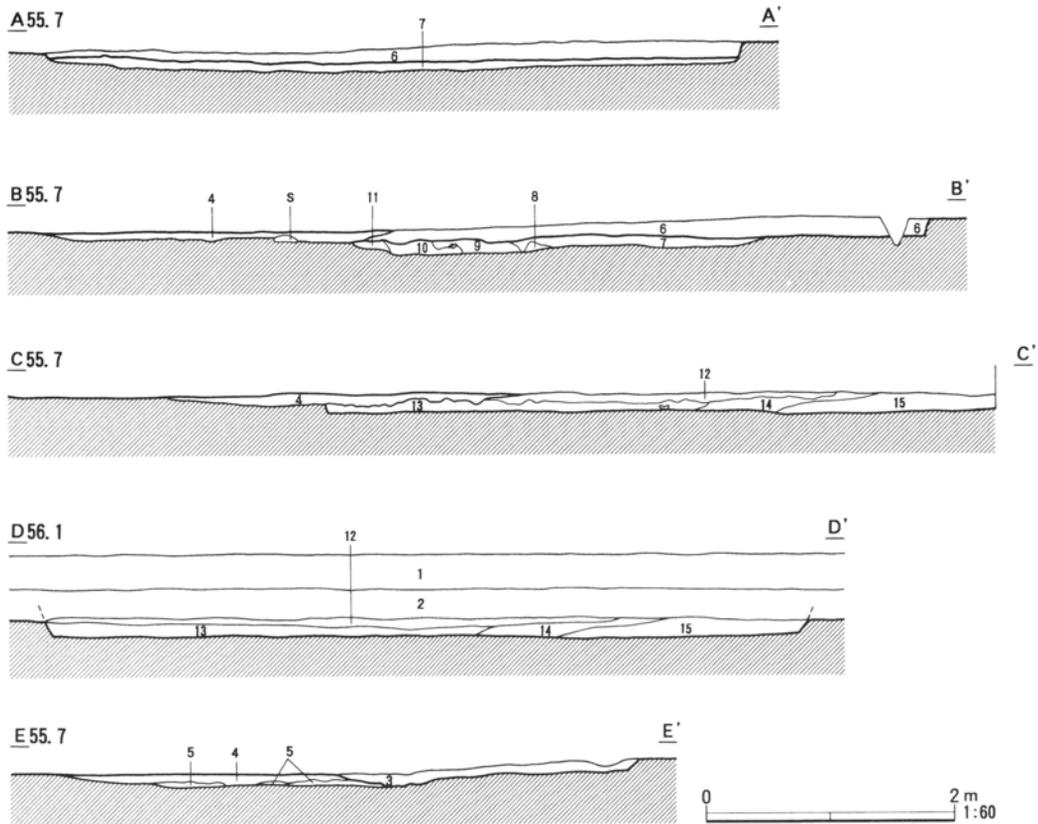


図25 10～13号住居跡平面図

10号住居跡

遺構 (図25・26、図版6) II区の東寄り南縁、B 1—28グリッドを中心に検出した遺構である。確認面は、III層上面、あるいはII a層中である。確認時、北東側の輪郭は、明瞭であったが、北西側では確認すること自体容易ではなかった。遺構の南半は、調査区外であり、また、北隅周辺は、13号



10～13号住居跡覆土

- | | |
|--|---|
| <p>1：暗褐色土層。現耕作土。</p> <p>2：暗褐色土層。暗褐色土を主に、細かなローム粒を含む。焼土粒をわずかに含む。粘性はないがかなりしまっている。10号住居跡はこの層中より掘り込まれているが、掘り込み面は見えない。</p> <p>3：13号住居跡カマド覆土。</p> <p>4：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。極々微量焼土を含む。4・5層は、13号住居跡掘り方覆土。</p> <p>5：褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を斑状に含む。</p> <p>6：暗褐色土層。4層に近いが、土器片を格段に多く含む。11号住居跡覆土。</p> <p>7：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒・ロームブロックを斑状に多く含む。7～11は、11号住居跡掘り方覆土。</p> | <p>8：暗褐色土層。7層に近いが、ロームが多い。</p> <p>9：暗褐色土層。8層に近いが、ロームがさらに多い。</p> <p>10：暗褐色土層。暗褐色土、ロームがほぼ同量斑状に混合。</p> <p>11：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。</p> <p>12：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒、焼土、土器粒を含む。12～15層は、13号住居跡覆土。</p> <p>13：暗褐色土層。12層に近いが、焼土、土器粒はるかに多い。</p> <p>14：暗褐色土層。13層に近いが、黒みが強い。焼土がより多く、炭化物を含む。</p> <p>15：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ロームを斑状に含む。焼土、土器粒はほとんど含まない。</p> |
|--|---|

図26 10～13号住居跡断面図

住居跡の掘り方により壊されている。

平面形は、やや胴の張る隅丸方形、あるいは隅丸長方形になろうか。やや特異ではあるが、北西—南東方向が主軸方向とすると、主軸方位はN-48°-W前後、主軸長は推定で5.7m前後となる。床面の硬化は顕著ではない。東隅に近い位置で、楕円形で深さ21cmのピットを1個検出した。主柱穴とも考えたが、対応するピットが見られない。カマドや炉跡は検出できなかった。

覆土は4層である。総じてロームを含む暗褐色土である。

遺物(図27、表12、図版14) 遺物は、覆土中より散漫に出土している。出土位置を図示した遺物も覆土中出土である。

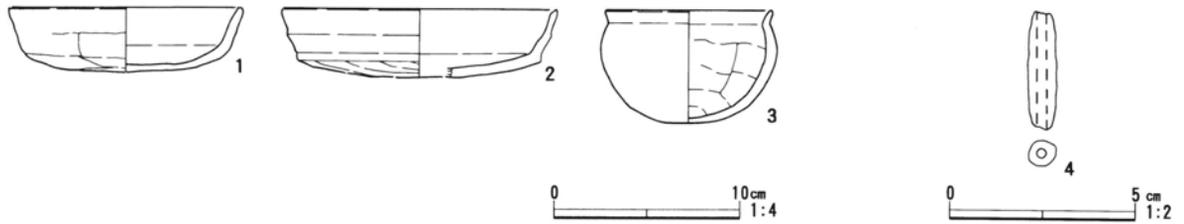


図27 10号住居跡出土遺物実測図

表12 10号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考	
1	土師器 坏	口径 12.4 底径 10.2 器高 3.4	緩やかに開く。体部から口縁部はわずかに外反。底部は丸底気味の平底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	赤褐色粒 内一明褐色 外一にぶい褐色	2/3。	
2	土師器 坏	口径 (14.8) 底径 — 器高 —	体部と口縁部の境に稜を持ち、口縁部は中位に稜線を持ち内湾気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	白色粒・角閃石 内一明赤褐色 外一橙色	1/3。	
3	土師器 塊	口径 8.9 底径 3.6 器高 6.0	小さめの平底。体部膨らみを持ち、口縁部は短く外傾する。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリあるが器面荒れており不鮮明。内面、口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外一橙色	ほぼ完形。	
No.	器種	法量 (cm・g)				備考	
4	土 錘	長さ：6.2	厚さ：1.6	孔径：0.5	重さ：11.2g	白色粒・角閃石 にぶい橙色	ほぼ完形。

11号住居跡

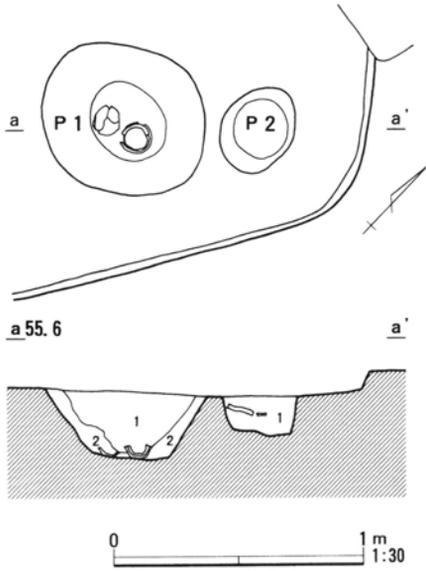
遺構 (図25・26・28、図版6) II区の東半ほぼ中央、B1—24・25グリッドを中心に検出した遺構である。確認面は、III層上面、あるいはII a層中である。確認時、北東壁から南東壁にかけての輪郭は、比較的明瞭であったが、北西側から南側にゆくにしがたがって、輪郭のはっきりせず、確認作業自体かなり困難であった。住居跡のほぼ中央で直交するサブ・トレンチを2本設定し、精査したが、断面観察でも床面の確認さえ困難をきわめた。北東側の一部を24号土坑に、北西側の一部を25号土坑に切られ、また、南隅一帯を13号住居跡により壊されている。

平面形は、微妙に歪な隅丸長方形と見てよいであろう。東隅寄りに偏し多少問題も残るが、一応カマドが24号土坑に壊されたものとして記載する。南東側では立ち上がりもはっきりしないが、覆土の広がりから見て主軸長は4.7m前後、横幅は5.68mとなる。主軸方位は、N—37°—Eである。床面はあまり硬化しておらず、凹凸が著しい。

P1は貯蔵穴であろう。上端の形態は楕円形に近く、挿鉢状に掘り込まれている。底面に密着して坏が3点出土しており(1・3・4)、内2点(1・4)は入れ子状に重ねられていた。P2も貯蔵穴の可能性はある。

覆土は分層できず、6層として一括した。6層はロームなどの混入土の多寡にむらがあり、一見分層可能と見えたが、分層するには単位が不分明であった。7～11層の5層は、掘り方覆土である。サブ・トレンチにより確認したのみであるが、掘り方下面は不規則な凹凸をなし、文字通り粗掘りした後、埋め戻し床を作出しているようであった。

遺物 (図29・30、表13、図版15・16) 東隅周辺から中央部にかけて、6・9・13～16など、半完形品を含むかなりの量の土器が出土している。残存率のよい土器をも含めて、遺物は全体に床面より高く、総じて高低差をもって出土している。1・3・4は上記したように貯蔵穴から出土している。



11号住居跡P 1 覆土

- 1：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒、炭化物を少量含む。
- 2：暗褐色土層。1層に近いが、ローム粒・ロームブロックを斑状に含む。

11号住居跡P 2 覆土

- 1：暗褐色土層。暗褐色土とローム粒、径10～20mm大のロームブロックの不均質な混合土。

図28 11号住居跡貯蔵穴平面図および断面図

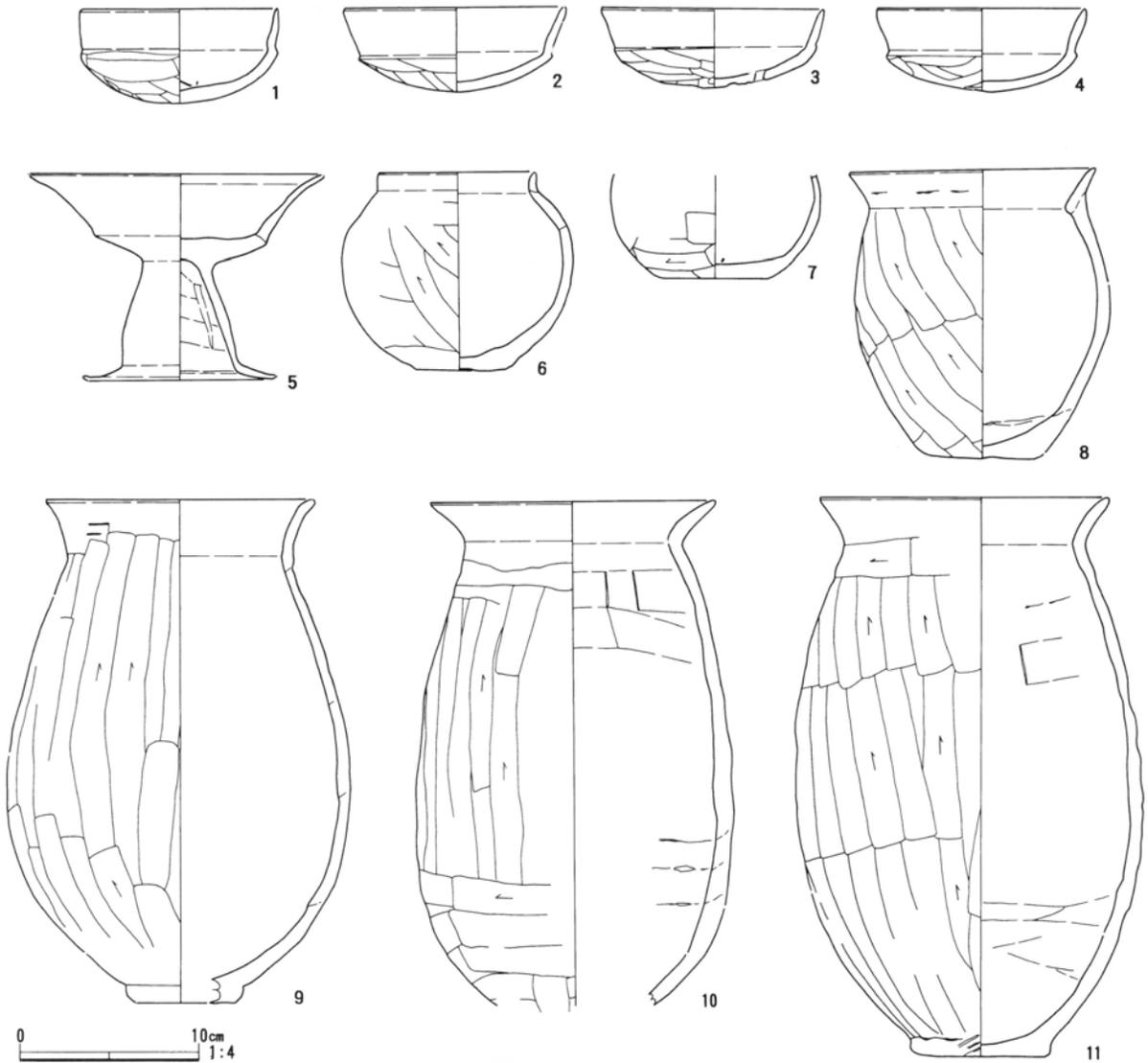


図29 11号住居跡出土遺物実測図(1)

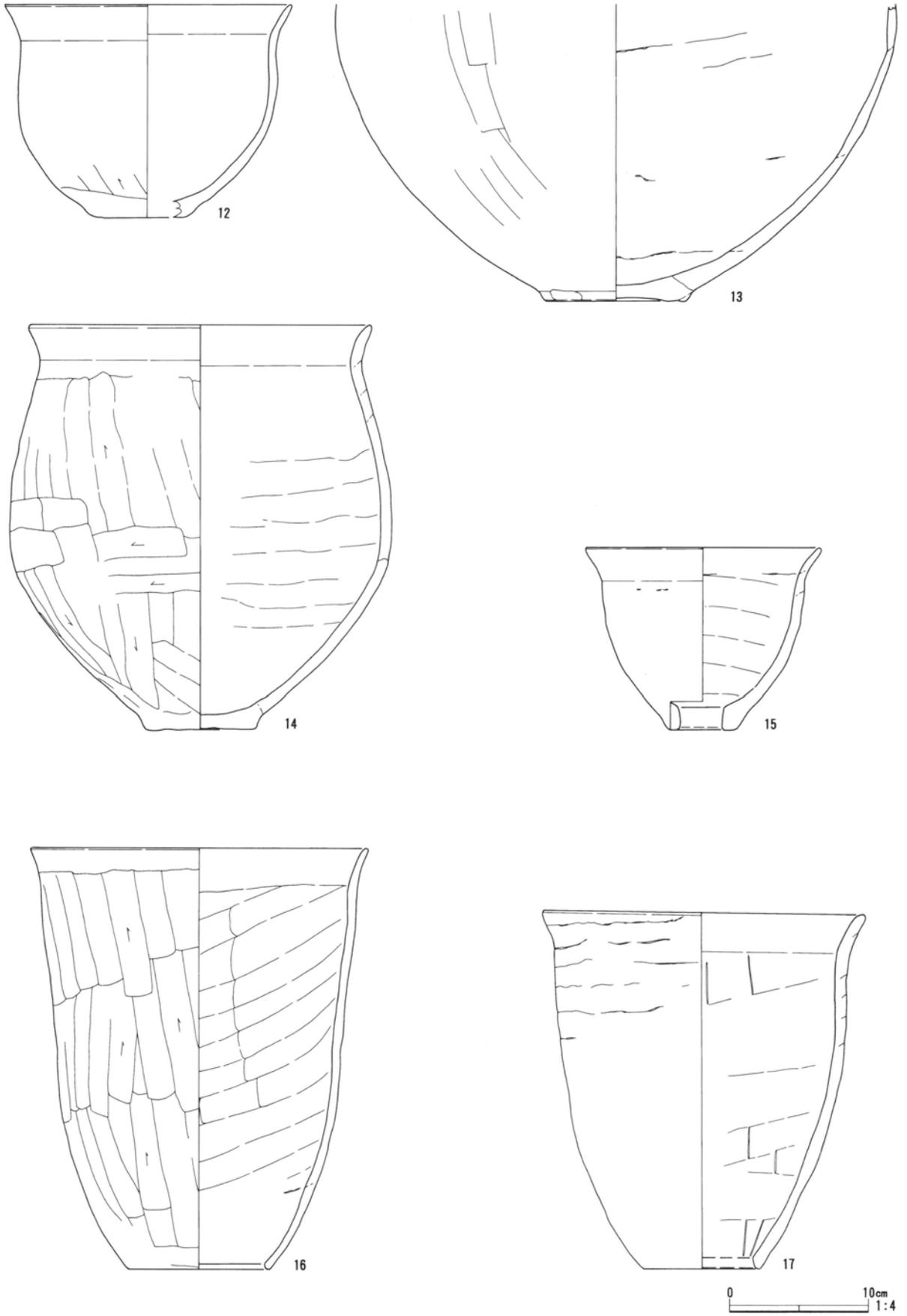
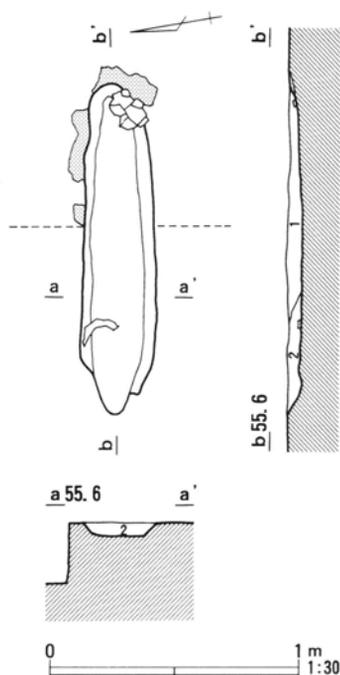


图30 11号住居跡出土遺物実測図(2)

表13 11号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 11.0 底径 — 器高 5.2	体部と口縁部との境に稜を持ち、口縁部は直立気味に立ち上がる。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外一にぶい赤褐色	完形。
2	土師器 坏	口径 (12.6) 底径 — 器高 4.7	体部と口縁部との境に稜を持ち、口縁部は直線的に外傾。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	片岩・チャート 内一にぶい赤褐色 外一明赤褐色	3/4。
3	土師器 坏	口径 12.4 底径 — 器高 4.4	体部と口縁部との境に弱い稜を持ち、口縁部は外反気味に立ち上がる。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	片岩・チャート 内外一明赤褐色	口縁部一部欠損。底部に凹凸・焼成後穿孔。
4	土師器 坏	口径 11.7 底径 — 器高 4.6	体部と口縁部との境に稜を持ち、口縁部は外反気味に立ち上がり、端部内彎。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	片岩・赤褐色粒 内外一橙色	ほぼ完形。
5	土師器 高坏	口径 16.5 底径 10.2 器高 11.5	坏部下位に稜を持ち、口縁部は外反して開く。脚部膨らみを持ち、裾部は外方に広がる。	外面一口縁部ヨコナデ、坏部下位～脚部ナデ、裾部ヨコナデ。 内面一口縁部ヨコナデ、坏体部ナデ、脚部ヘラナデ。	石英・赤褐色粒 内外一橙色	口縁部1/3欠損。
6	土師器 短頸壺	口径 (8.8) 底径 5.5 器高 11.0	膨らみを持つ胴部から口縁部短く直立気味に立ち上がる。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ナデ。	白色粒・角閃石 内外一橙色	一部欠損。
7	土師器 (小型甕)	口径 — 底径 6.0 器高 —	膨らみを持つ胴部。	外面一胴部・底部ヘラケズリ。 内面一胴部～底部ナデ。	片岩・チャート 内一にぶい橙色 外一にぶい黄褐色	胴部下位～底部残存。
8	土師器 小型甕	口径 13.8 底径 6.0 器高 16.1	膨らみを持つ胴部。口縁部は短く外反。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ナデ。	片岩・チャート 内一にぶい橙色 外一にぶい黄褐色	3/4。
9	土師器 甕	口径 15.0 底径 (5.6) 器高 27.7	胴部は下位に膨らみを持つ長胴。口縁部は外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部不明瞭だがヘラナデ。	片岩・赤褐色粒 内外一橙色	4/5。
10	土師器 甕	口径 16.2 底径 — 器高 —	粘土紐積み上げ成形。胴部は下位に膨らみを持つ長胴。口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外一橙色	3/4。底部欠損。
11	土師器 甕	口径 (16.3) 底径 7.7 器高 30.8	胴部はわずかに膨らみを持つ長胴。口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外一橙色	2/3。
12	土師器 鉢	口径 (16.3) 底径 7.7 器高 30.8	膨らみ持つ体部。口縁部はわずかに外反して開く。	外面一器面荒れており不明瞭だが胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	片岩・チャート 内外一明赤褐色	4/5。
13	土師器 甕	口径 — 底径 (10.0) 器高 —	大きく膨らみを持つ胴部。	外面一器面荒れており不明瞭だが胴部ヘラケズリ。内面一胴部ナデ。	白色粒・角閃石 内一橙色 外一にぶい黄褐色	胴部下位1/4。
14	土師器 甕	口径 (24.2) 底径 7.8 器高 28.5	胴部は中位下側に膨らみを持ち、口縁部は短く外反する。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後上位をナデ、底部ナデ。 内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内一橙色 外一にぶい黄褐色	2/3。
15	土師器 甕	口径 (17.0) 底径 4.8 器高 12.9	わずかに膨らむ胴部。口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部器面荒れており不明瞭。内面、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	白色粒・角閃石 内外一橙色	1/2。
16	土師器 甕	口径 24.4 底径 (10.2) 器高 29.6	膨らみの少ない胴部。口縁部はわずかに外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外一橙色	2/3。
17	土師器 甕	口径 23.3 底径 8.4 器高 25.3	粘土紐積み上げ成形。わずかに膨らむ胴部。口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部は器面荒れており不明瞭。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外一橙色	ほぼ完形



12号住居跡カマド覆土

- 1: 褐色土層。褐色土を主に、ローム粒、焼土を少量含む。
 2: 暗赤褐色土層。焼土を主に、褐色土・暗褐色土を含む。

図31 12号住居跡カマド平面図および断面図

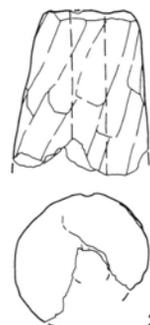
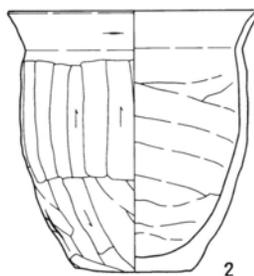
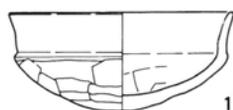


図32 12号住居跡出土遺物実測図

表14 12号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 12.0 底径 — 器高 5.2	体部と口縁部との境に稜を持ち、口縁部は外反して立ち上がる。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外—明赤褐色	ほぼ完形。
2	土師器 小型甕	口径 (13.2) 底径 5.8 器高 13.8	膨らみの弱い胴部。口縁部は外反気味に開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部・底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外—明赤褐色	2/3。
No.	器種	法量 (cm・g)			備考	
3	羽口	残長: 8.3	厚さ: 7.2	孔径: (1.9)	片岩・チャート 内—にぶい橙色 外—橙色	1/2。

13号住居跡

遺構 (図25・33、図版6) II区東半、B1—25・26グリッドで検出したカマドとその周辺のみ遺存する遺構である。確認面は、III層上面である。表土を除去した時点で、狭長な煙道の付帯したカマ

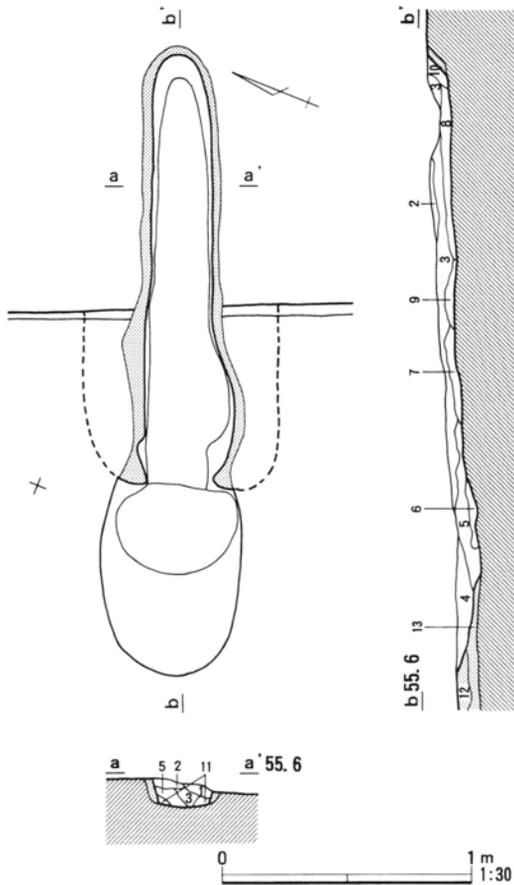
12号住居跡

遺構 (図25・31、図版6) 11号住居跡の覆土中で検出したカマドのみ遺存する住居跡である。つまり、11号住居跡より新しく、北側はカマド壁のぎりぎりまで24号土坑により切られている。確認面は、III層上面、あるいはII a層中である。カマドから推定される主軸方位は、S—81°—Eである。

カマドは、燃烧部・煙道の下半部分の一部のみ残存し、残存長130cm、横幅26.5cmである。一応燃烧部、煙道を推定してみたが、全体に底面が焼けておらず、燃烧部とはっきり特定できなかったわけではない。煙道と推定した部分の底面は、わずかながらも上向きの傾斜をもっている。明瞭に被熱赤化しているのは、奥壁から左壁にかけての部分のみである。

カマドの覆土は2層に分けられる。2層は焼土を主とする層であり、この層の堆積する範囲を燃烧部と考えることもできるかもしれない。

遺物 (図32、表14、図版16) カマド覆土からは、図示した土器以外、土器片がわずかに出土したのみである。カマド周辺には焼土が散っており、あるいは11号住居跡出土土器とした土器には、本住居跡に伴うものが多少含まれる可能性がある。



13号住居跡カマド覆土

- 1：にぶい赤褐色土層。焼土粒・焼土ブロックを主に、暗褐色土を含む。
- 2：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土粒を微量含む。
- 3：暗褐色土層。1層に近いが、焼土多い。
- 4：暗褐色土層。1層に近いが、焼土少ない。
- 5：暗褐色土層。4層に近いが、焼土小ブロックを含む。
- 6：黒褐色土層。暗褐色土を主とするが、炭化物を多く含み黒みが強い。焼土を含む。
- 7：暗赤褐色土層。暗褐色土を主に、径5～20mm大の焼土ブロックを含み、焼土粒も多量に含む。
- 8：暗褐色土層。3層に近いが、白みの強いシルト化したロームのブロック、焼土ブロックを含む。
- 9：暗褐色土層。7層に近いが、焼土の大きなブロックを含まない。
- 10：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム小ブロックを含む。
- 11：褐色土層。ロームと暗褐色土の混合土を主に、焼土を含む。
- 12：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。極々微量焼土を含む。12・13層は、掘り方覆土。
- 13：褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を斑状に含む。

図33 13号住居跡カマド平面図および断面図

ドが露出したが、他には東隅周辺の輪郭が辛うじて確認できたのみであった。断面観察によって、本遺構が10・11号住居跡に後出することが明らかであったが、結局カマド周辺の壁が部分的にとらえられたのみである。また、床面と思しき面も確認できなかったため、カマドの下部と掘り方が残存する住居跡と判断した。ともに推定値となるが、横幅は3.7m前後、主軸方位はN-69°-Eである。

4・5層は、掘り方覆土である。地山との境は明瞭ではなく、南西側に行くにつれ浅くなり、全体としてははっきりした形をなさぬまま途切れるようであった。

東隅寄りの壁近くで検出したピットは、貯蔵穴であろう。平面形は歪んだ卵形に近く、鍋底状に掘り込まれている。深さは38cmである。

カマドは、手前に楕円形の浅い掘り込みを有する燃焼部と煙道からなる。手前の掘り込みの端が焚口で、やや膨らんだ燃焼部から細長い煙道へとゆるやかに傾斜しつつ連なる形態と見られる。残存長は241cm、煙道の横幅は22～25cmである。燃焼部の両側には、周辺の覆土とは異なり、わずかではあるがシルト質の土が含まれ、あるいは袖の基部がいくらか残っていたのかもしれない。一応シルト質土の分布範囲を破線で示し、袖の推定範囲とした。燃焼部・煙道の側壁は、被熱赤化が著しいが、底面はほとんど焼けていない。

カマドの覆土は、11層に分けられる。明瞭な天井・壁の崩落土は、1・7層のみであり、他はカマドの崩落に先立ち煙道口などから流入した埋積土であろう。

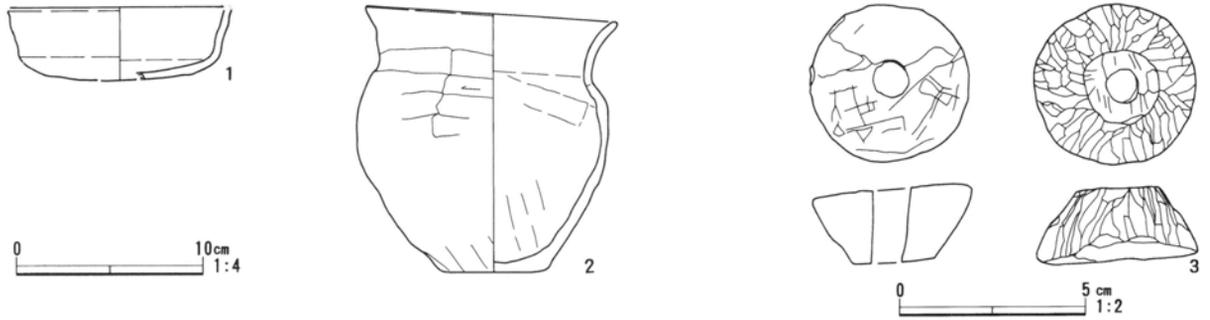


図34 13号住居跡出土遺物実測図

表15 13号住居跡出土遺物観察表

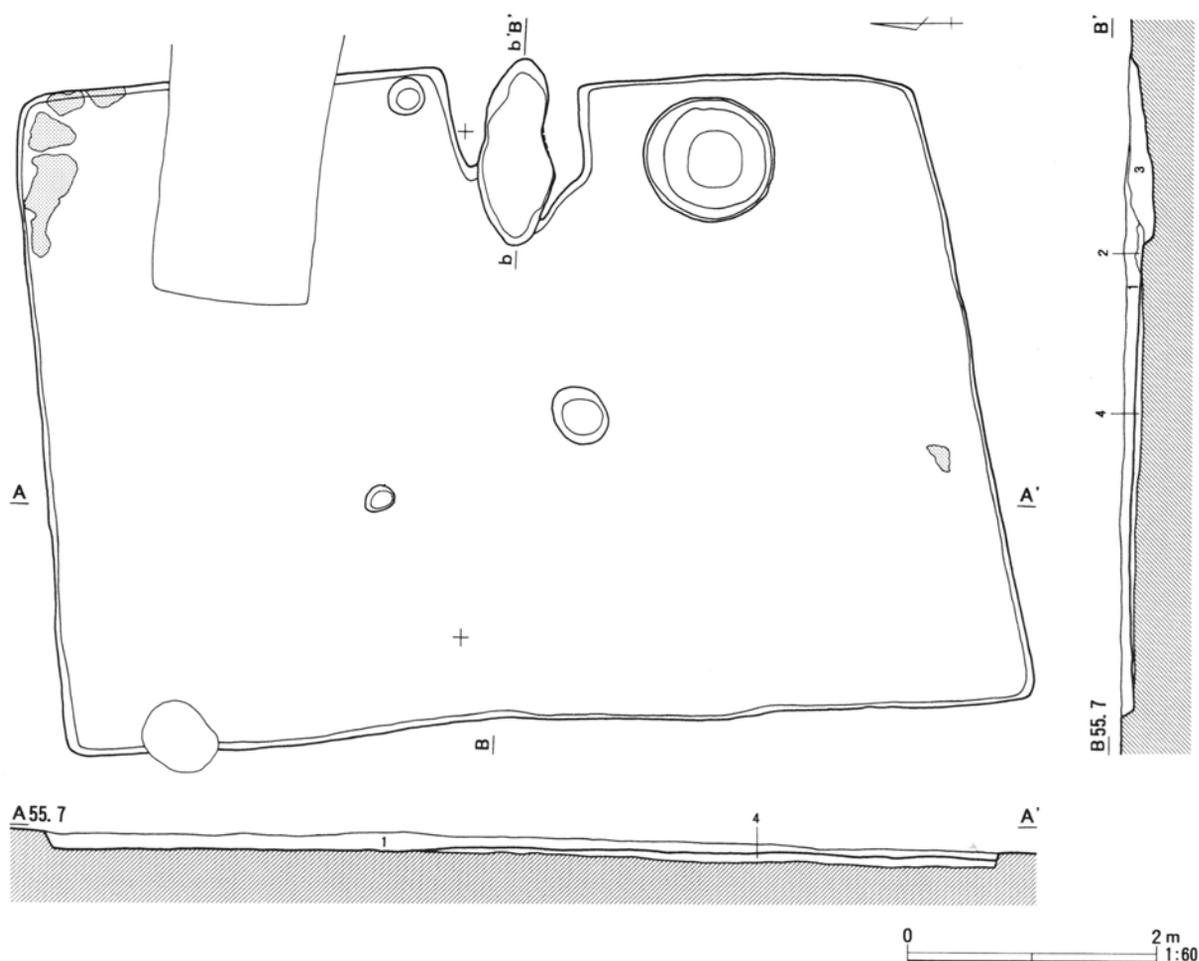
No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 (11.8) 底径 (10.1) 器高 (3.8)	体部緩やかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反。底部は丸底気味の平底。	外面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ後ナデ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部—ナデ。	白色粒・黒色粒 内—橙色 外—にぶい橙色	1/3。
2	土師器 小型甕	口径 (13.4) 底径 (5.6) 器高 14.1	胴部上位に膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部・底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内—黒褐色 外—橙色	1/2。
No.	種類	器種	法 量 (cm・g)			備考
3	石製品	紡錘車	直径：4.4 厚さ：1.9 孔径：0.8 重さ：45.4 灰色 蛇紋岩製			一部欠損。

遺物(図34、表15、図版16) 3の石製紡錘車は、表土剥ぎの際に出土した遺物であるが、位置的に見て、本住居跡に伴う可能性がある。他には、表土層直下、ないしはカマドや貯蔵穴から出土した1・2以外は、土器片が散漫に出土したのみである。

14号住居跡

遺構(図35・36、図版7) II区のほぼ中央、A1—84・94グリッドを中心に位置する遺構である。確認面は、III層上面、あるいはIIa層中である。表土を除去した時点で、カマドは明瞭に確認できたが、輪郭がはっきりしないため、少しずつ確認面を下げるとともに、サブ・トレンチを十字に入れ、精査を行なった。確認面をやや下げること東・南・北壁は何とか確認できたが、西壁は、断面観察を加えても、なお確認すること自体容易ではなかった。西壁に関しては、土層断面に見られる立ち上がりかと思われる土層界線と、部分的に残る床面が、中央部ではほぼ同じ部分で途切れることから判断したが、形態もかなり変則的であり、問題が残る。西壁側については、本来の住居の掘り込みは、さらに西側へと広がっていたが、地形の傾斜に沿って削平を受けたために確認し切れなかった可能性もあるものと考えている。ただし、以下の記載に関しては、図示した形状をもとに話しを進める。東壁北側を25号土坑に切られ、西壁の一部を新しい時期のピットにより壊されている。

平面形は南北方向がかなり長い長方形、ないしは台形である。カマドを含めた主軸長は、5.19m、横幅は7.53mである。主軸方位は、N—86°—Eである。いくらか硬化した床面あるいは貼床層が確認できたのは、カマド周辺から西壁にかけての住居跡中央、および南半の一部であり、それも斑状に残る状態であった。ただし、南半では、部分的ではあるが、床面に張り付くように焼土・炭化物の極薄い層が見られ、それが床面の目安となった。また、北東隅付近の床面上に焼土が分布していたが、全体としては、いわゆる焼失住居とする証左に乏しいようである。全体に床面には、凹凸がみとめられる。



14号住居跡覆土

- | | |
|--|--|
| <p>1：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。焼土を微量含む。本層下面で局所的に貼床が見られ、住居跡南半では、焼土、炭化物の薄層が不規則に広がる。</p> <p>2：暗褐色土層。1層に近いが、焼土が多い。</p> | <p>3：カマド覆土。</p> <p>4：暗褐色土層。1層に近いが、水の影響を受け部分的に暗褐色土が黒ずみ、あるいは粘性を増す。</p> |
|--|--|

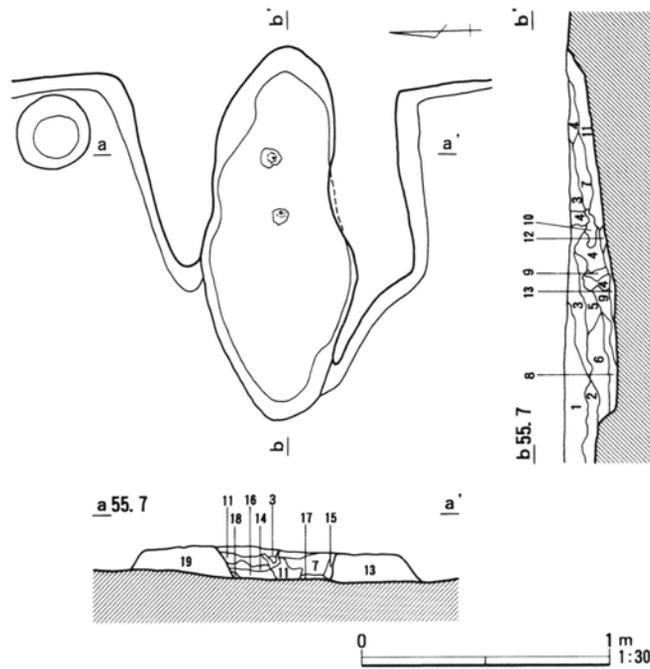
図35 14号住居跡平面図および断面図

1・2層が覆土、4層は掘り方の埋め土である。前述したように1層直下には、局所的に貼床層が見られ、2層は焼土が多く混入する層である。

カマドは、東壁のほぼ中央にあり、袖の下部、および燃焼部のみ遺存する。全長146cm、袖の両端を含めた真中あたりの横幅は112cmである。床面を掘りくぼめ歪な長楕円の燃焼部を設け、その両側にローム質の土を固めて袖を設けている。焚口から燃焼部の半ばまでほぼ平坦で、その先がゆるやかに傾斜して、ややすぼまった燃焼部奥壁より煙道に連なるのであろう。側壁・下面いずれも被熱の痕跡はそれほど著しくない。

カマドの覆土は、18層に分けられる。4・13・16層は、天井・壁の崩落土であり、ある程度カマド内に土が流入した時点で、天井・壁が少しずつ剥がれ落ちた模様である。19層は、カマド構築材のローム質土である。

遺物 (図37、表16、図版16) 床面直上より出土した遺物は、少数の土器破片のみである。図化していないが、カマド覆土中より高坏脚部片が2点出土している。出土土器には、かなり時間幅があるようである。



14号住居跡カマド覆土

- 1：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。焼土を微量含む。
- 2：暗褐色土層。1層に近いが、焼土がやや多い。
- 3：暗褐色土層。1層に近いが、焼土粒、径5mm大の焼土小ブロックをかなり含む。3～17層がカマド覆土。
- 4：赤褐色土層。焼土粒・大小焼土ブロックを主に、暗褐色土を含む。天井崩落土。一部天井遺存か。
- 5：暗褐色土層。3層に近いが、焼土小ブロックが少ない。
- 6：暗褐色土層。3層に近いが、焼土粒・焼土小ブロックが多く、焼土ブロックが大きい（径5～20mm大）。
- 7：暗褐色土層。3層に近いが、やや黒み強く、焼土粒が多い。径10mm大の焼土小ブロックが点在する。
- 8：暗褐色土層。6層に近いが、全体に白みがあり、焼土小ブロックが少ない。
- 9：暗褐色土層。3層に近いが、径5～20mm大の焼土ブロックが多く、ブロックの輪郭が鮮明。
- 10：暗褐色土層。3層に近いが、やや黒み強く、焼土粒が多い。
- 11：褐色土層。暗褐色土・ロームの混合土を主に、焼土が均一に混じる。径5～20mm大の焼土ブロックが点在する。
- 12：暗褐色土層。暗褐色土と炭化物の混合土。焼土粒、径5mm大の焼土小ブロックを含む。
- 13：赤褐色土層。焼土を主に、炭化物を多量に、暗褐色土を少量含む。
- 14：褐色土層。灰色がかったロームを主に、焼土粒を均一に含む。
- 15：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土粒、径5mm大の焼土小ブロックを含む。
- 16：赤褐色土層。14層に近いが、焼土の方が多い。
- 17：暗褐色土層。やや白みがかった暗褐色土を主に、焼土粒を少量含む。
- 18：暗褐色土層。14層に近いが、焼土が多い。
- 19：褐色土層。白みがかったロームを主に、暗褐色土を少量含む。カマド袖構築土。

図36 14号住居跡カマド平面図および断面図

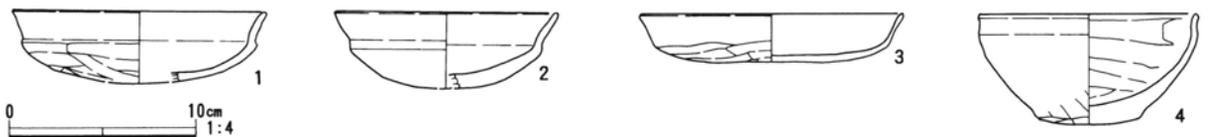
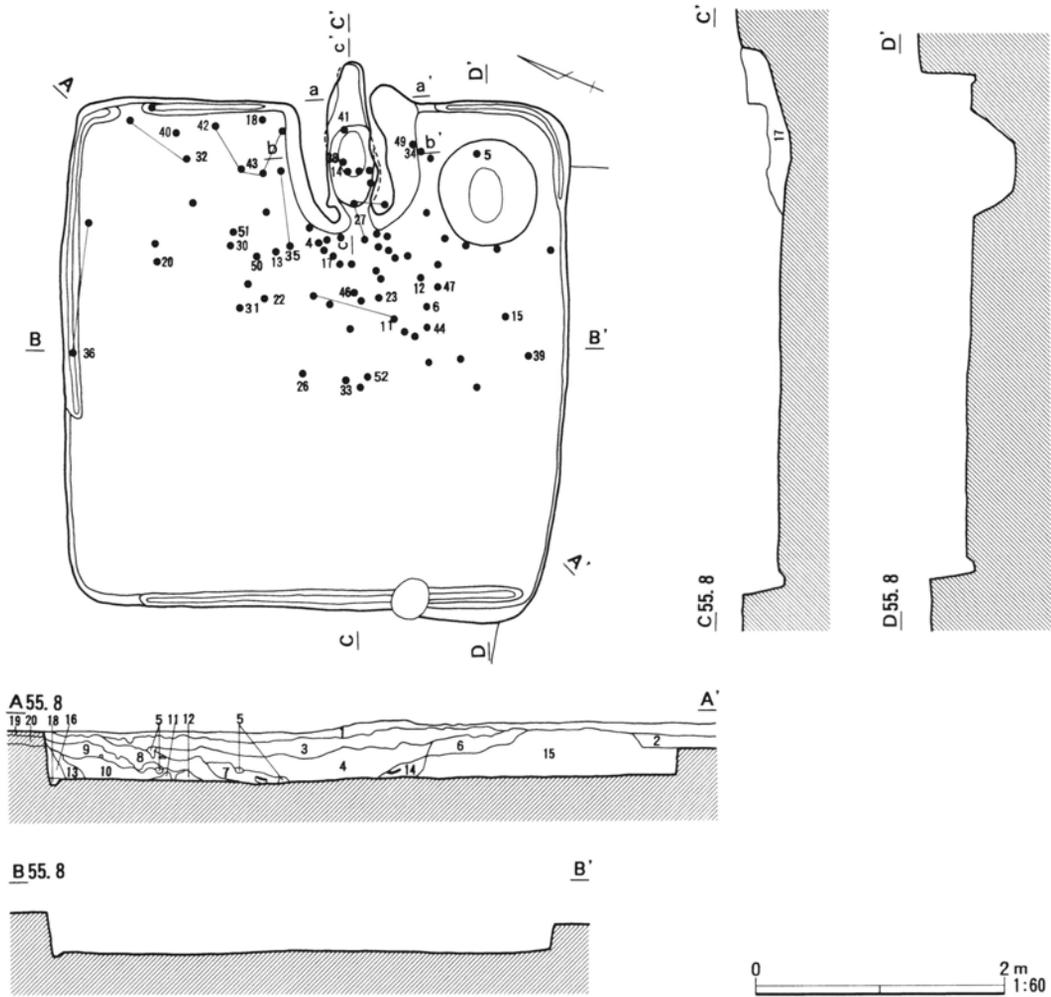


図37 14号住居跡出土遺物実測図

表16 14号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 (13.4) 底径 — 器高 —	体部と口縁部の境に稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・黒色粒 内外一橙色	1/3。
2	土師器 坏	口径 (11.8) 底径 — 器高 —	体部と口縁部の境にわずかな稜を持ち、口縁部は外反気味に開き端部やや内彎。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部器面荒れており不鮮明。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外一明褐色	1/3。
3	土師器 坏	口径 (13.9) 底径 (12.5) 器高 2.6	浅い体部。口縁部は外反気味に開く。底部は丸みのある平底。	外面一口縁部～体部ヨコナデ、底部ヘラケズリ。内面一口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	白色粒・角閃石 内外一明赤褐色	1/3。
4	土師器 埴	口径 (11.6) 底径 5.6 器高 5.8	体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は短く外反。底部は丸底気味。	外面一口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリあるが器面荒れており不鮮明、底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	微砂粒・白色粒 内一明赤褐色 外一橙色	1/3。



15号住居跡覆土

- 1：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ロームを含む。以下の層に比し、しまりが弱く、焼土、土器粒など混入物のはるかに少ない。表土。
- 2：暗褐色土層。暗褐色土。暗褐色土を主に、ローム粒を多く含む。焼土粒、炭化物、土器粒をかなり含む。19号住居跡覆土。
- 3：暗褐色土層。1層に近いが、しまっており、焼土、土器粒など混入物が急増する。
- 4：暗褐色土層。3層に近いが、マンガンかと思われる鉱物粒を多く含み黒みが強い。混入した土器片も大きい。
- 5：褐色土層。シルト化して白みがかったロームブロック。
- 6：暗褐色土層。4層に極々近いが、微妙に色調が明るい。
- 7：暗褐色土層。4層に近いが、シルト化が進み、ローム粒がくつきり見える。
- 8：暗褐色土層。4層に近いが、径5～20mm大の白みの強いロームブロックを多く含む。
- 9：暗褐色土層。8層に近いが、ローム小ブロックの輪郭がぼやけ不明瞭で、焼土が少ない。

- 10：暗褐色土層。9層に近いが、灰色みが増し、ローム小ブロックが少ない。
- 11：黒褐色土層。10層に近いが、炭化物、灰が濃集する。
- 12：黒褐色土層。炭化物、灰を主に、径5～20mm大の焼土ブロックが濃集する。
- 13：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒、ロームブロックを斑状に含む。
- 14：暗褐色土層。13層に近いが、焼土を微量含む。
- 15：褐色土層。くすんだ色調のロームを主に、暗褐色土を含む。他の覆土に比し、混入物が少なく、かなりしまっている。一括投棄され流入した土か。
- 16：褐色土層。くすんだ色調のロームを主に、暗褐色土を微量含む。
- 17：カマド覆土。
- 18：暗褐色土層。暗褐色土とロームの不均一な混合土。
- 19：暗褐色土層。3層に酷似しているが、多少しまっている。19・20層は地山。
- 20：褐色土層。くすんだ色調の再堆積ローム。暗褐色土が少量不規則に混じる。この層以下は、シルト化がさらに進む。

図38 15号住居跡平面図および断面図

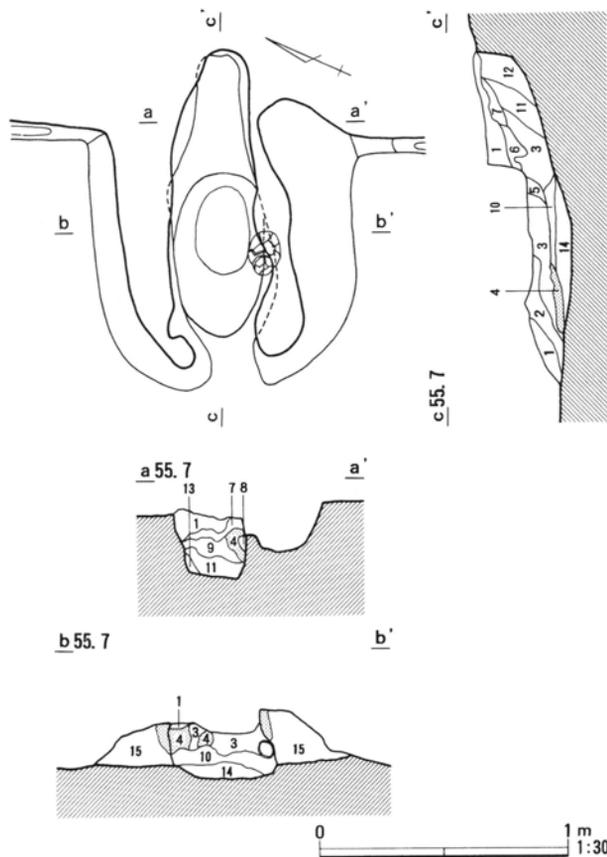


図39 15号住居跡カマド平面図および断面図

15号住居跡カマド覆土

- 1：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ロームを含み、焼土を少量含む。
- 2：暗褐色土層。1層土を主に、上部には焼土ブロックを多く含む、下部には径5mm大の焼土粒を含む。
- 3：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土ブロック、径5～8mm大の焼土粒を多く含む。焼土粒は分散している。
- 4：赤褐色土層。焼土ブロック。天井あるいは壁崩落土。
- 5：暗褐色土層。3層に近いが、大きめの焼土ブロックのみ点在する。
- 6：暗褐色土層。1層に近いが、径5mm大の焼土粒がわずかながら点在する。
- 7：赤褐色土層。暗褐色土を主に、径5～10mm大の焼土小ブロックを含む。
- 8：褐色土層。白みがあったロームブロック。地山の崩落土。
- 9：暗褐色土層。3層に近いが、焼土粒若干多い。
- 10：暗褐色土層。暗褐色土とロームの混合土。焼土粒を多く含む。
- 11：暗褐色土層。暗褐色土を主に、白みの強いロームブロックを含む。
- 12：褐色土層。黒みの強いややシルト化したロームを主に、暗褐色土を微量含む。
- 13：褐色土層。白みがあったローム。
- 14：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土や炭化物、灰を多く含む。
- 15：褐色土層。白みの強いロームを主に、暗褐色土を含む。部分的に、白色・黄褐色のシルト化したロームの薄層が覆っていた。カマド袖構築土。

15号住居跡

遺構（図38・39、図版7） II区西半の南西縁寄り、A 1—44・54グリッドを中心に位置する遺構である。確認面は、III層上面、あるいはII a層中である。表土剥ぎの時点では、遺構の輪郭のみならずカマドも一切見えず、ただ一帯に土器片が集中する箇所が複数あることしか判らなかった。それら土器集中部を精査すべく北東—南西方向のサブ・トレンチを入れ開掘してはじめて、完形に近い土器を多数包含する遺構があること、かなり確認面を下げないと遺構の輪郭をとらえることが困難であることが判明した。確認面をかなり下げた時点で、ようやくカマドの所在が確認できたこともあり、当初土坑の一種として調査を行なった。南壁側で19号住居跡に切られており、断面観察では判然としなかったが、20号住居跡を切って構築された可能性がある。

平面形は東西方向がやや長い隅丸長方形である。カマドを除いた主軸長は、3.91m、横幅は4.04mである。主軸方位は、N-67°-Eである。四壁は垂直に近く立ち上がり、北東・北西・南西壁沿いには、部分的に壁溝が設けられている。床面はほぼ平坦で、他の住居跡に比べれば、よく硬化している。

覆土は17層に分けられる。19・20層は地山であるが、19層は、3層とした覆土としまり具合など多少異なる以外に大きな違いはなく、また土器片など遺物をかなり含む。1層は表土であり、攪拌されているものか覆土中にも所々食い込んでいる。

2～14層は、住居跡東半を埋めており、不規則にロームブロックを含み、しかも完形に近い土器を

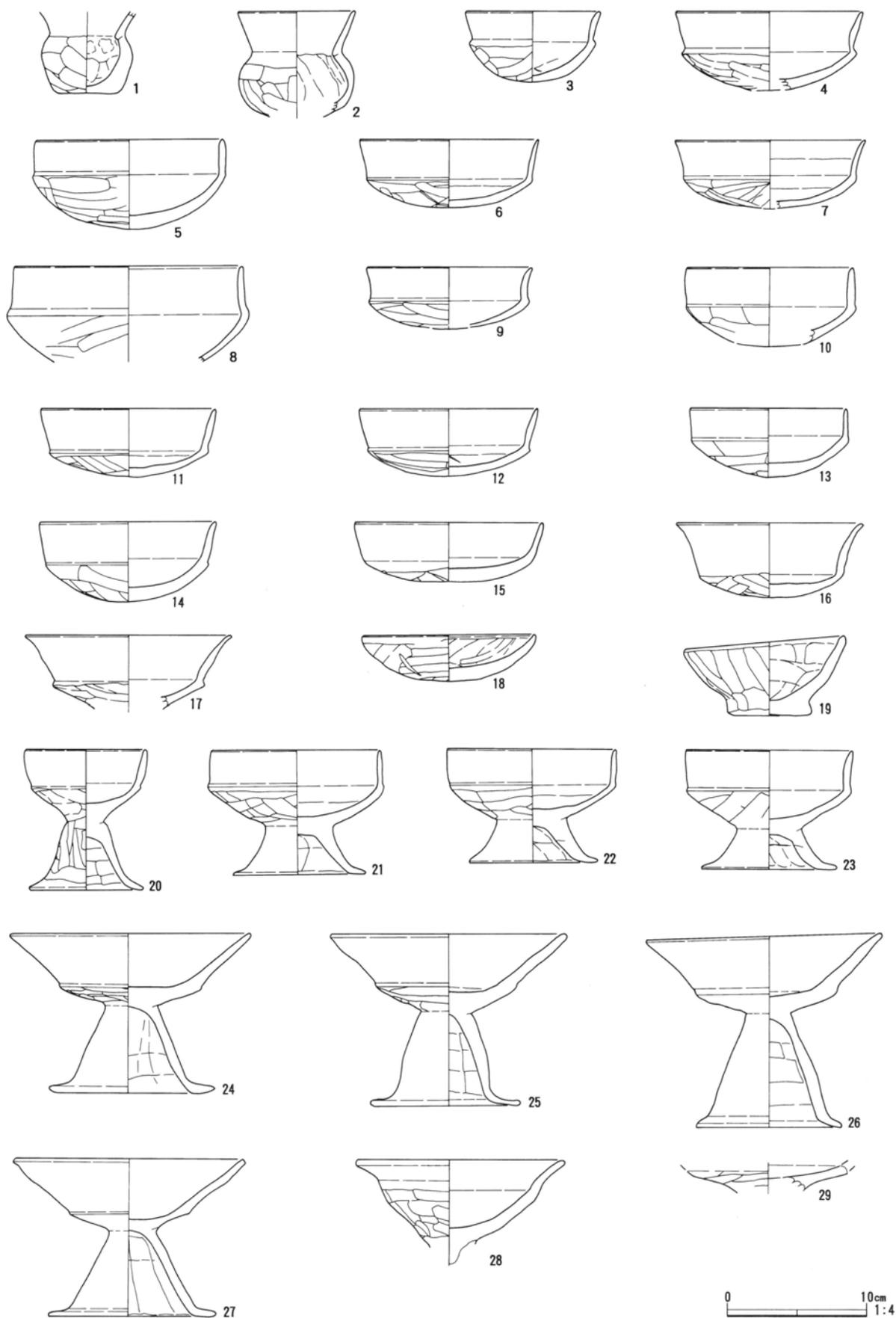


图40 15号住居跡出土遺物実測図(1)

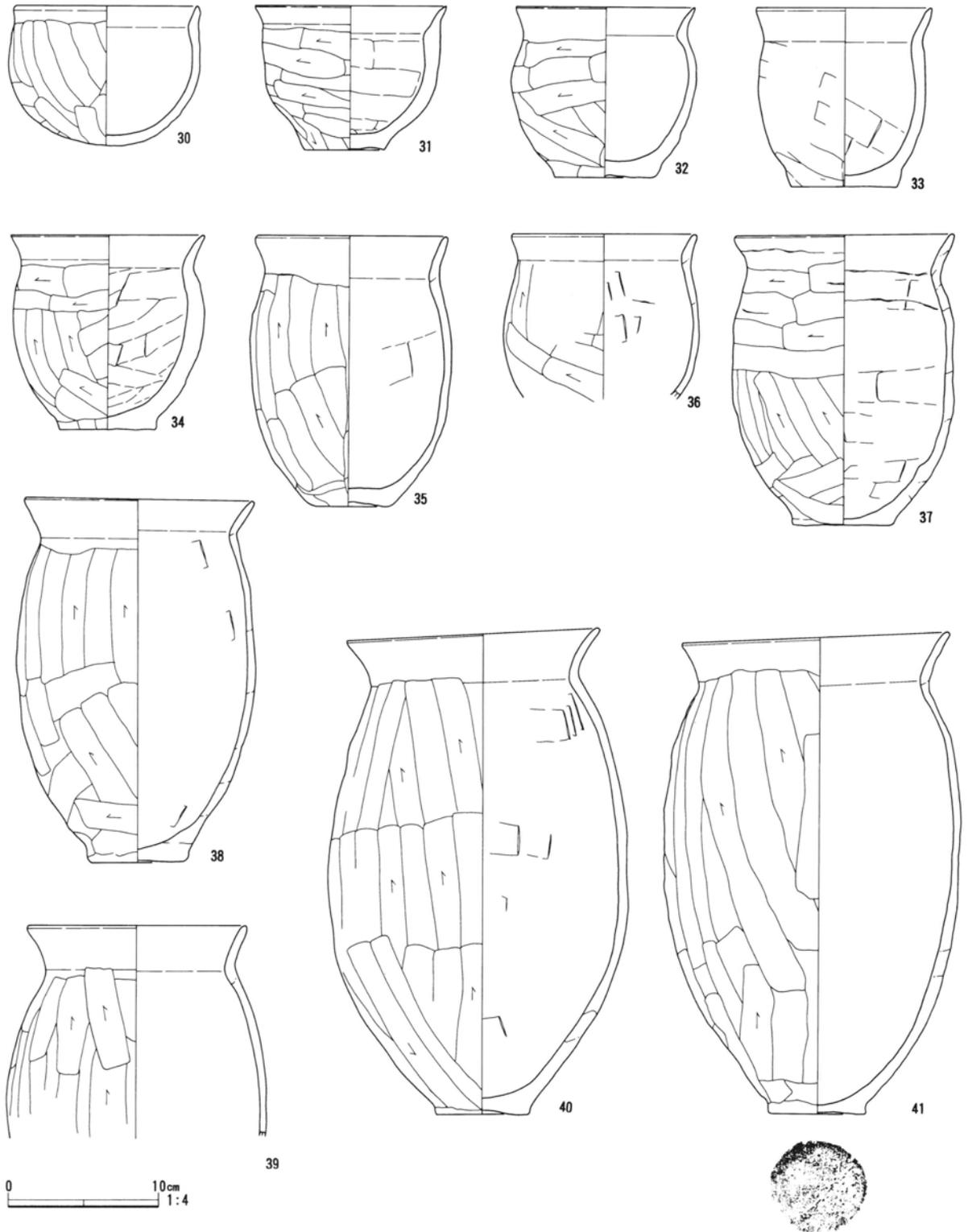


図41 15号住居跡出土遺物実測図(2)

上・下層問わず多量に含むことから、土器もろともに短期的に流入、あるいは埋め戻された土と見てよいであろう。土器の出土状況から見て、全体にカマドのある北東壁側や東隅の方から流入した模様である。15層は、それに先立ちまとまって流入したロームを主とする土で、この土も一括して流入、あるいは埋め戻された土と考えられる。この層は、土器破片しか含まず、しかも他層に比べ少ない。

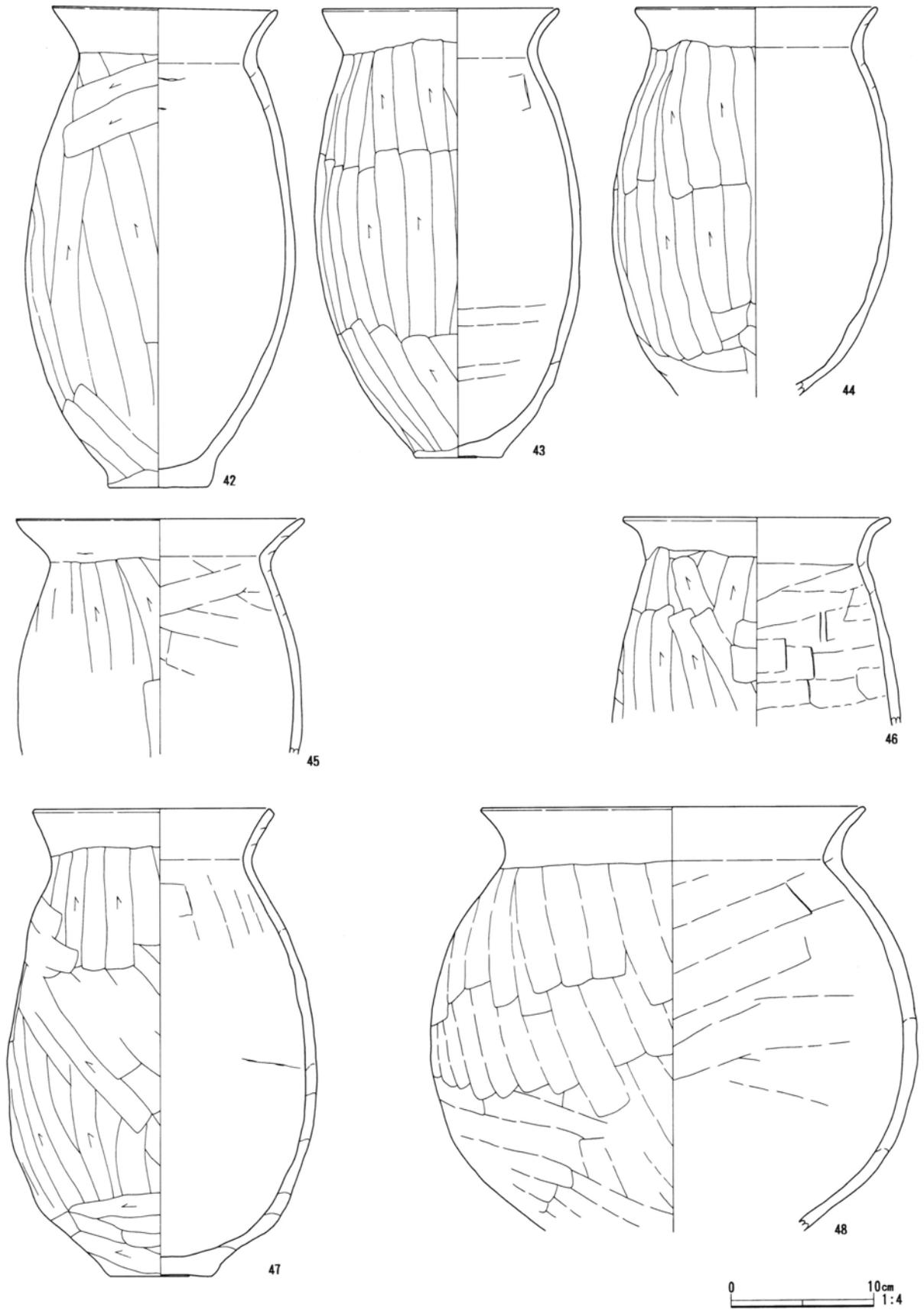


图42 15号住居跡出土遺物実測図(3)

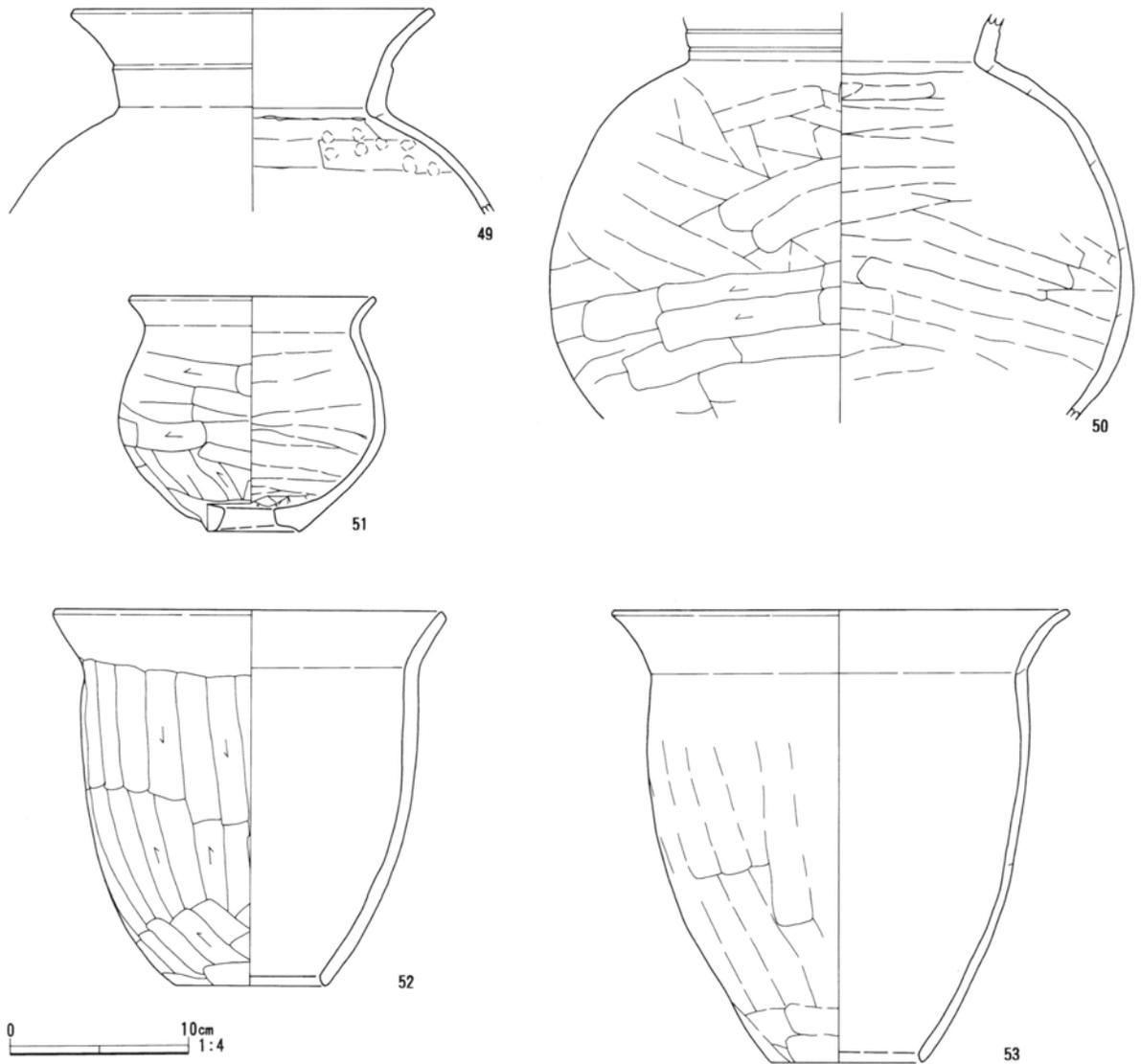


図43 15号住居跡出土遺物実測図(4)

つまり、ロームを主とし、遺物包含量の少ない15層が、まず南西～西側から埋め戻され、北東側にてきたくぼみに土器と土が北東～東側から投棄されたのであろう。

カマド脇のピットは、貯蔵穴であろう。上端での平面形は円形、底面は楕円形である。搦鉢状に掘り込まれており、深さは35cmである。覆土は、暗褐色土とロームが不均質に混じるやや黒みの強い土である。

カマドは、北東壁のほぼ中央にある。全長133cm、袖の両端を含めた横幅104cm、燃烧部、袖いずれも残りがよい。床面を掘りくぼめ楕円形の燃烧面を設け、両側に白みの強いロームを突き固めた袖を作出している。燃烧部の奥の傾斜変換点より先を煙道とすれば、煙道の現存長は49cm前後になる。手前側はゆるやかに上り、曲折して上方に開口する形態の煙道であろうか。側壁や底面の赤化は、軽微かつ部分的なため平面図では省略した。袖の表面には、所々シルト質土の薄層が見られた。

カマドの覆土は、13層に分けられる。1層はカマドを被覆する堆積土、4・8層が天井・側壁の崩落土である。

遺物（図40～43、表17～20、図版17～20） 遺構の東半部分を中心に、完形品を含む多量の土器が出土しているが、その大半は覆土中出土である。土器は総じて北東壁や東隅に近いものが高い位置で出土しており、中央に近付くにつれ、分布範囲が裾野のように広がり、出土位置が低くなる傾向が見られた。出土層準は、覆土最上層から床面直上までであるが、床面上で出土した土器は少数である。

34・49・51は、カマド脇の床面直上出土であり、据え置かれた状態の肩部以上の大型壺49の上に、34が、51の甑を上にして重なった状態で出土している。土器や土が投棄される際に、床面上に遺棄されていたものであろう。14の坏、27の高坏などは、カマド内出土である。

坏・高坏や甕などは、形態的に見て、6世紀前半に属すると考えられる。出土土器全体としては、時期的にやや幅が見られるようである。

表17 15号住居跡出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 埴	口径 — 底径 4.4 器高 —	体部上位に丸みを持ち、口縁部は外反気味に開く。底部は平底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部・底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部～底部ナデ・指頭圧痕。	片岩・チャート 内—明赤褐色 外—橙色	口縁部欠損。
2	土師器 埴	口径 8.2 底径 — 器高 —	膨らみを持つ体部から口縁部は直線的に開く。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後上位をナデ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	片岩・チャート 内外—明赤褐色	1/3。
3	土師器 坏	口径 9.6 底径 — 器高 5.0	体部と口縁部との境に稜を持ち、口縁部は直線的に開く。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外—明赤褐色	1/3。
4	土師器 坏	口径 14.8 底径 — 器高 (5.6)	体部と口縁部との境に稜を持ち、口縁部は直線的に開く。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	微砂粒・白色粒 内外—橙色	2/3。
5	土師器 坏	口径 13.4 底径 — 器高 6.4	体部と口縁部との境に稜を持ち、口縁部は内彎気味に立ち上がる。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	微砂粒・白色粒 内外—明赤褐色	4/5。
6	土師器 坏	口径 (13.0) 底径 — 器高 4.9	体部と口縁部との境に稜を持ち、口縁部は直線的にやや外傾。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	片岩・チャート 内外—明赤褐色	1/2。
7	土師器 坏	口径 (13.6) 底径 — 器高 (4.9)	体部と口縁部との境に稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外—明赤褐色	1/4。
8	土師器 坏	口径 (16.4) 底径 — 器高 —	体部と口縁部との境に弱い稜を持ち、口縁部はわずかに内傾する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	白色粒・黒色粒 内—橙色 外— にぶい黄褐色	1/5。
9	土師器 坏	口径 (12.0) 底径 — 器高 (4.4)	体部と口縁部との境に稜を持ち、口縁部は外反して立ち上がる。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	微砂粒・白色粒 内外—橙色	1/5。
10	土師器 坏	口径 12.0 底径 — 器高 —	体部と口縁部との境に弱い稜を持ち、口縁部は直立気味に立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外—明赤褐色	2/3。
11	土師器 坏	口径 12.4 底径 — 器高 4.9	体部と口縁部との境に稜を持ち、口縁部は直線的に開く。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内—明赤褐色 外—にぶい黄褐色	3/4。
12	土師器 坏	口径 (13.0) 底径 — 器高 4.8	体部と口縁部との境に稜を持ち、口縁部は直線的に開く。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部～体部ヨコナデ、底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外—明赤褐色	1/2。
13	土師器 坏	口径 11.2 底径 — 器高 4.9	体部と口縁部との境に弱い稜を持ち、口縁部は直立気味に立ち上がる。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・チャート 内外—にぶい赤褐色	ほぼ完形。
14	土師器 坏	口径 12.5 底径 — 器高 5.6	体部と口縁部との境に弱い稜を持ち、口縁部端部わずかに外反。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・白色粒 内外—にぶい赤褐色	ほぼ完形。 外面に煤付着。

表18 15号住居跡出土遺物観察表(2)

№	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
15	土師器 坏	口径 13.8 底径 — 器高 4.2	体部と口縁部との境にわずかな稜を持ち、口縁部は直線的に開く。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・チャート 内—橙色 外—明赤褐色	完形。
16	土師器 坏	口径 13.5 底径 — 器高 5.4	浅い体部と口縁部との境にわずかな稜を持ち、口縁部は外反して開く。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	微砂粒・白色粒 内—橙色 外—明赤褐色	4/5。
17	土師器 高坏	口径 15.6 底径 — 器高 —	坏部下位に稜を持ち、口縁部は外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、坏体部ヘラケズリ。内面、口縁部ヨコナデ、坏体部～底部ナデ。	微砂粒・白色粒 内外—橙色	坏部4/5。
18	土師器 皿	口径 12.8 底径 — 器高 3.3	体部緩やかに立ち上がり、口縁部内彎する。底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	石英・チャート 内—赤褐色 外—明赤褐色	一部欠損。
19	土師器 塊	口径 11.4 底径 6.1 器高 6.1	平底の底部から括れた後、体部丸みを持って立ち上がる。口縁部わずかに内彎する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、底部ヘラケズリ後ナデ。内面—ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内—明赤褐色 外—橙色	一部欠損。
20	土師器 高坏	口径 8.8 底径 8.2 器高 9.9	坏部下位に稜を持ち、口縁部は内彎気味に立ち上がる。脚部外反して開き、裾部広がる。	外面—口縁部ヨコナデ、坏部下位～脚部ヘラケズリ、裾部ヨコナデ。内面—口縁部ヨコナデ、坏体部～底部ナデ、脚部ヘラケズリ、裾部ナデ。	片岩・チャート 内—橙色 外—明黄褐色	一部欠損。
21	土師器 高坏	口径 12.2 底径 9.5 器高 9.9	坏部中位に稜を持ち、口縁部は内傾気味に立ち上がる。脚部は短脚で外反し、裾部広がる。	外面—口縁部ヨコナデ、坏部下半ヘラケズリ、脚部～裾部ヨコナデ。内面—口縁～坏体部ヨコナデ、坏底部ナデ、脚部ヘラナデ、裾部ヘラケズリ後ナデ。	石英・チャート 内外—橙色	一部欠損。
22	土師器 高坏	口径 12.2 底径 9.3 器高 8.2	坏部中位に稜を持ち、口縁部は直立気味に立ち上がる。脚部は短脚で外反し、裾部広がる。	外面—口縁部ヨコナデ、坏部下半ヘラケズリ、脚部ナデ、裾部ヨコナデ。内面—口縁～坏体部ヨコナデ、坏底部ナデ、脚部ナデ、裾部ヘラケズリ後ナデ。	石英・チャート 内—明赤褐色 外—橙色	4/5。
23	土師器 高坏	口径 (11.9) 底径 9.6 器高 8.4	坏部中位に稜を持ち、口縁部は直立気味に立ち上がる。脚部は短脚で外反し、裾部広がる。	外面—口縁部ヨコナデ、坏部下半ヘラケズリ、脚部ナデ、裾部ヨコナデ、内面—口縁部ヨコナデ、坏体部～底部ナデ、脚部ナデ、裾部ヘラケズリ後ナデ。	石英・チャート 内—にぶい橙色 外—にぶい黄褐色	2/3。
24	土師器 高坏	口径 17.3 底径 (12.0) 器高 11.3	坏部下位に稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。口唇部は面をなす。脚部膨らみを持ち、裾部は外方に広がる。	外面—口縁部ヨコナデ、坏部下位～脚部ナデ、裾部ヨコナデ。内面—口縁部～坏体部ヨコナデ、坏底部ナデ、脚部ナデ。	石英・白色粒 内—にぶい黄褐色 外—にぶい赤褐色	裾部1/2を欠損。
25	土師器 高坏	口径 17.2 底径 10.9 器高 12.2	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。口唇部は面をなす。脚部膨らみを持ち、裾部は外方に広がる。	外面—口縁部ヨコナデ、坏部下位～脚部ナデ、裾部ヨコナデ。内面—口縁部ヨコナデ、坏体部～底部ナデ、脚部ヘラナデ。	石英・チャート 内外—橙色	裾部1/3を欠損。
26	土師器 高坏	口径 (17.0) 底径 (10.5) 器高 13.4	坏部下位に稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。口唇部は面をなす。脚部膨らみを持ち、裾部は外方に広がる。	外面—口縁部ヨコナデ、坏部下位～脚部ナデ、裾部ヨコナデ。内面—口縁部ヨコナデ、坏底部ナデ、脚部ヘラナデ。	片岩・砂礫・チャート 内—にぶい褐色 外—明褐色	4/5。
27	土師器 高坏	口径 (16.2) 底径 (12.0) 器高 11.2	坏部下位に稜を持ち、口縁部はやや彎曲して開く。口唇部は面をなす。脚部は直線的に開き、裾部は外方に折れる。	外面—口縁部ヨコナデ、坏部下位～脚部ナデ、裾部ヨコナデ。内面—口縁部ヨコナデ、坏底部ナデ、脚部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外—橙色	3/4。
28	土師器 高坏	口径 14.8 底径 — 器高 —	坏体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部は外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、坏体部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、坏体部～底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外—橙色	坏部4/5残存。
29	土師器 高坏	口径 — 底径 — 器高 —	緩やかに立ち上がる坏部下位。	外面—坏部下位ヘラケズリ。内面—坏底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外—橙色	坏部下位。

表19 15号住居跡出土遺物観察表(3)

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
30	土師器 埴	口径 12.1 底径 — 器高 9.2	体部は膨らみを持ち、口縁部は短く外傾。底部は丸底。	外面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	石英・角閃石 内一赤色 外一橙色	一部欠損。
31	土師器 小型甕	口径 12.7 底径 5.3 器高 9.5	胴部は外反気味に立ち上がり下位から膨らみ、口縁部は短く外傾する。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部・底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内一オリーブ黒色 外一灰黄褐色	一部欠損。
32	土師器 小型甕	口径 11.9 底径 6.6 器高 11.2	胴部膨らみを持ち、口縁部は短く外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部・底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ナデ。	チャート 内外一明赤褐色	ほぼ完形。
33	土師器 小型甕	口径 11.5 底径 7.0 器高 11.8	胴部弱く膨らみ、口縁部は短く外傾する。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリあるが器面荒れており不鮮明。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	チャート 内外一橙色	一部欠損。
34	土師器 小型甕	口径 13.8 底径 6.4 器高 12.8	胴部膨らみを持ち、口縁部は短く外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部・底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内一橙色 外一明赤褐色	一部欠損。
35	土師器 小型甕	口径 12.6 底径 5.4 器高 17.7	胴部は弱く膨らみ、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部・底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、底部ナデ。	石英・角閃石 内一にぶい黄橙色 外一橙色	4/5。
36	土師器 小型甕	口径 12.4 底径 — 器高 —	胴部は弱く膨らみ、口縁部は短く外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	片岩・チャート 内一明褐色 外一橙色	1/2。 下半部欠損。
37	土師器 小型甕	口径 14.8 底径 6.4 器高 19.2	粘土紐積み上げ成形。胴部は弱く膨らみ、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部・底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外一橙色	ほぼ完形。
38	土師器 甕	口径 15.2 底径 6.3 器高 24.0	粘土紐積み上げ成形。胴部は中位が弱く膨らむ長胴。口縁部は外反気味に開き端部やや内彎。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部・底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外一橙色	一部欠損。
39	土師器 甕	口径 14.6 底径 — 器高 —	胴部弱く膨らみ、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	片岩・チャート 内外一橙色	1/3。 下半部欠損。
40	土師器 甕	口径 17.0 底径 6.2 器高 31.9	胴部は中位が弱く膨らむ長胴で、口縁部は外反気味に開く。底部は中央部が窪む。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、底部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	チャート 内外一橙色	一部欠損。
41	土師器 甕	口径 17.7 底径 6.4 器高 31.5	胴部は弱い膨らみを持つ長胴で、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ナデ。	片岩・チャート 内外一橙色	4/5。 底部に木葉痕。
42	土師器 甕	口径 15.8 底径 7.0 器高 33.3	胴部は中位が弱く膨らむ長胴で、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部・底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ナデ。	片岩・チャート 内外一にぶい橙色	一部欠損。
43	土師器 甕	口径 16.8 底径 6.2 器高 31.0	胴部は中位が弱く膨らむ長胴で、口縁部は外反気味に開く。底部は中央部がわずかに窪む。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部・底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外一にぶい橙色	4/5。
44	土師器 甕	口径 16.6 底径 — 器高 —	胴部は中位が弱く膨らむ長胴で、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	片岩・チャート 内外一橙色	3/4。 底部欠損。
45	土師器 甕	口径 20.2 底径 — 器高 —	粘土紐積み上げ成形。胴部は弱い膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ナデ、胴部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外一にぶい橙色	1/4。
46	土師器 甕	口径 (18.5) 底径 — 器高 —	胴部は弱い膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外一にぶい黄褐色	1/3。 下半部欠損。
47	土師器 甕	口径 17.0 底径 7.2 器高 32.3	粘土紐積み上げ成形。胴部は下位に膨らみを持つ長胴、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、底部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、底部ナデ。	片岩・チャート 内外一橙色	4/5。

表20 15号住居跡出土遺物観察表(4)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
48	土師器 甕	口径 27.0 底径 — 器高 —	胴部は大きく膨らむ球胴で、口縁部は外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外一明赤褐色	1/2。
49	土師器 甕	口径 19.9 底径 — 器高 —	口縁部は中位に弱い段を持ち、外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ・指頭圧痕。	白色粒・黒色粒 内一明赤褐色 外一黄橙色	胴部上位～口縁部残存。
50	土師器 壺	口径 — 底径 — 器高 —	胴部は大きく膨らむ球胴。口縁部下位に凹線2条巡る。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後上位をナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内一橙色 外一明赤褐色	胴部1/4残存。
51	土師器 甕	口径 (13.6) 底径 5.2 器高 13.0	胴部中位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外一にぶい赤褐色	1/2。 孔径：2.8cm。
52	土師器 甕	口径 21.7 底径 8.4 器高 20.7	胴部はわずかに膨らみを持ち、口縁部は直線的に外傾する。口唇部は面をなす。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	石英・白色粒 内外一橙色	一部欠損。
53	土師器 甕	口径 25.4 底径 8.6 器高 24.9	胴部は上位に膨らみを持ち、口縁部は外反気味に開く。口唇部は面をなす。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリあるが器面荒れており不鮮明。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	石英・白色粒 内一明赤褐色 外一橙色	一部欠損。

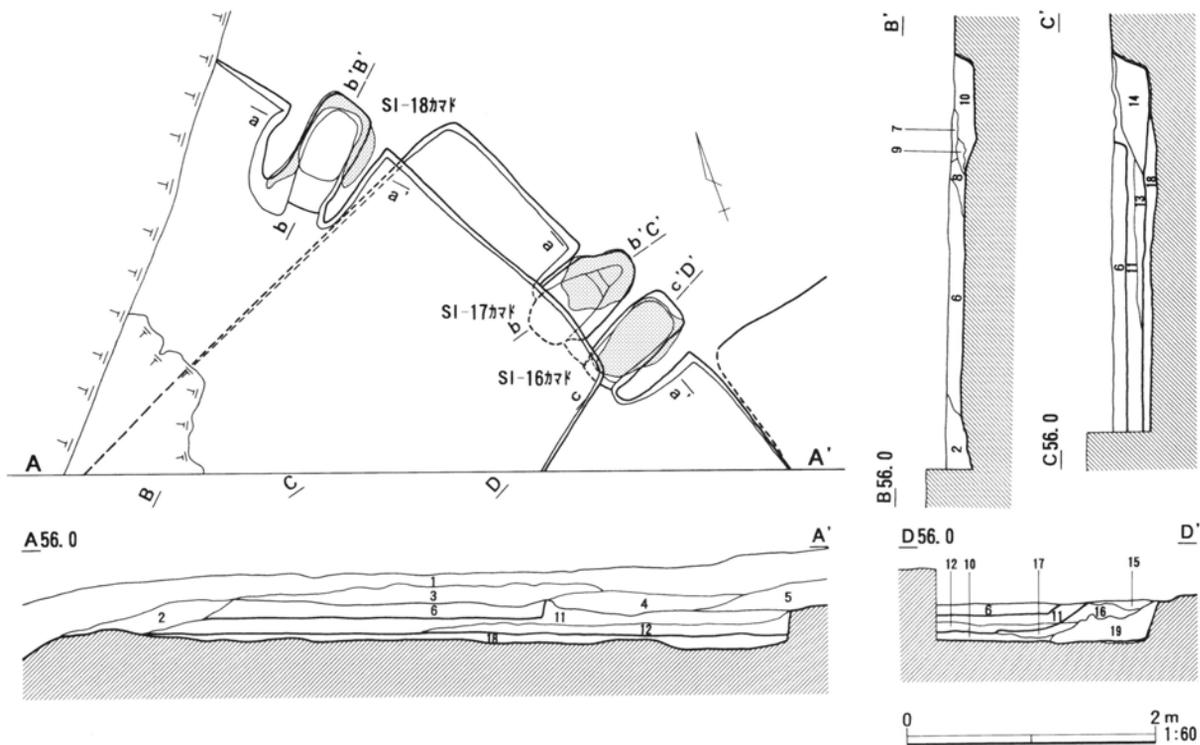
16号住居跡

遺構（図44・46、図版8） II区西半の南西縁沿い、A1—25・35グリッドを中心に位置する遺構である。確認面は、III層上面、あるいはIIa層中である。17号住居跡は、本遺構の床とカマドを埋めて構築されており、18号住居跡は、本遺構を切って造られている。19・20号住居跡との関係は、両遺構の残存状態が悪く直接判定できないが、床面の高さから見て、本遺構に後続する可能性が考えられる。南西半は、調査区外である。17号住居跡を、ひとまず本遺構のカマドを再設置した住居跡と見て、以下に記載する。カマド以外の記載については、重複を避け、最終的な形状として残された17号住居跡の項で行なうこととしたい。

カマドの中軸線より推定すれば、主軸方位は、N-64°-E前後になる。17号住居跡と規模や平面形が全く同じで、カマドが奥壁中央にあったとすれば、横幅が5m前後の住居跡となる。床面は直床で凹凸がかなりあり、硬化も顕著ではない。

カマドは、17号住居跡のカマド精査時によりやく検出することができた。つまり、17号住居跡の確認面の高さでは、本遺構のカマドは完全に埋もれており、確認することさえできなかった。全長88cm、袖の両端を含めた横幅83cmである。床面を掘りくぼめ焼面を設け、両側にロームを主とする土を固めた袖を作出している。焼部の両側面は直線的で、また立ち上がりも垂直に近い。向かって左側の袖は、17号住居跡のカマドに壊されているが、右袖は幅広で、外縁も直線的である。底面および右側壁は、被熱により明瞭に赤化している。

カマドの覆土は、19～26層の8層に分けられる。15～18層は、17号住居構築時に、本遺構の床面をある程度埋め、続いてカマドも埋めた埋土であり、むしろ17号住居跡の構築土に含まれる。19～26層がカマドの一次的な埋没過程に伴う覆土である。19～22層の上面は大きく波打つように乱れており、カマドが潰れた直後に埋め戻されたようにも見えるが、土層断面には、カマドが一挙に崩落したような痕跡は明瞭ではない。あるいは、「一次的な埋没過程」にも、埋め戻しなどの何らかの人的営力が加わっている可能性があるように思われる。



16~18号住居跡覆土

- | | |
|--|---|
| <p>1：暗褐色土層。乾くと灰色みがる粒子の粗い耕作土。表土。</p> <p>2：暗褐色土層。攪乱、あるいは斜面堆積の土の乱れた部分。</p> <p>3：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。</p> <p>4：暗褐色土層。3層に近いが、ローム粒多く、斑状を成す。</p> <p>5：暗褐色土層。1層に近いが、焼土を少量含み、ややしまっている。</p> <p>6：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。3層に比し、黒み強く、しまっている。土器粒を多く含む。18号住居跡覆土。</p> <p>7：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒、炭化物を含む。焼土粒、径5mm大の焼土小ブロックを点々と含む。</p> <p>8：暗褐色土層。7層に近いが、焼土若干少ない。</p> <p>9：暗褐色土層。7層に近いが、焼土粒・焼土小ブロックが多い。</p> <p>10：18号住居跡カマド覆土。</p> <p>11：暗褐色土層。4層に近いが、さらに黒みが強い。焼土、炭化物</p> | <p>を少量含む。7~9層は、17号住居跡覆土。</p> <p>12：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土を含む。部分的にロームの薄層を含む。</p> <p>13：褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。焼土を少量、土器粒をかなり含む。炭化物をかなり含む。</p> <p>14：17号住居跡カマド覆土。</p> <p>15：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒、焼土を含む。15~17層は、16号住居跡のカマドを意図的に埋めた土か。</p> <p>16：褐色土層。暗褐色土とロームの混合土を主に、径10mm大の白みの強いローム小ブロックを含む。焼土を含む。</p> <p>17：褐色土層。16層に近いが、焼土が多い。</p> <p>18：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。所々斑状にローム小ブロックを含む。16号住居跡覆土。</p> <p>19：16号住居跡カマド覆土。</p> |
|--|---|

図44 16~18号住居跡平面図および断面図

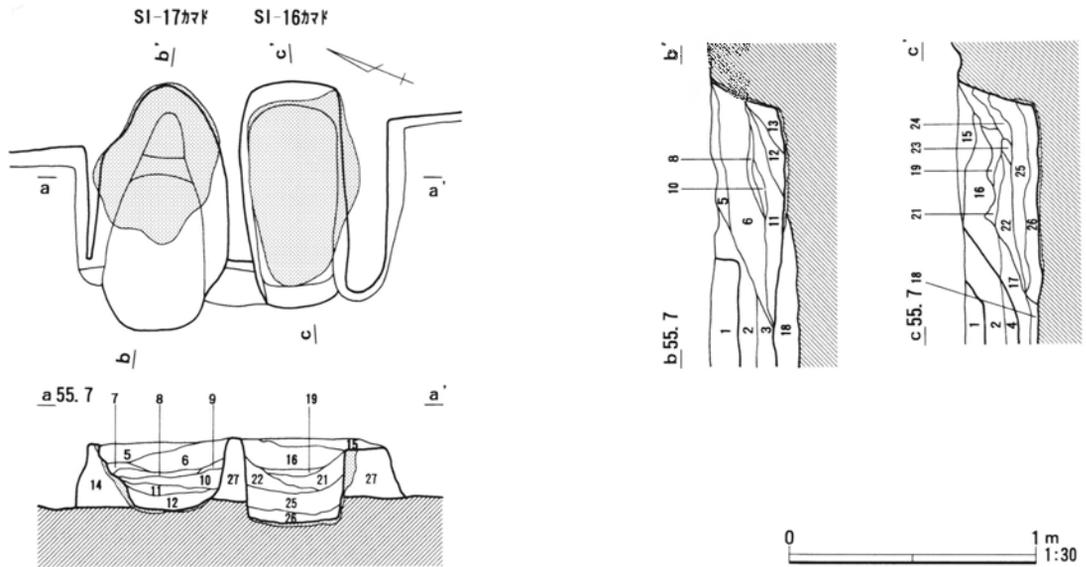


図45 16号住居跡出土遺物実測図

遺物（図45、表21、図版20） 図化した手捏土器は、わずかに残る覆土から出土した遺物で、他にはほとんど遺物は出土していないが、出土した破片資料の多くは、古墳時代後期に属するものである。

表21 16号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	手捏土器	口径 4.9 底径 3.3 器高 3.0	体部丸みを持って立ち上がり、口縁部やや内彎する。	外面一口縁~体部ナデ・指頭圧痕、底部ヘラケズリ後ナデ。内面一口縁~底部ナデ・指頭圧痕。	白色粒・黒色粒 内外一にふい黄 橙色	ほぼ完形。



16・17号住居跡カマド覆土

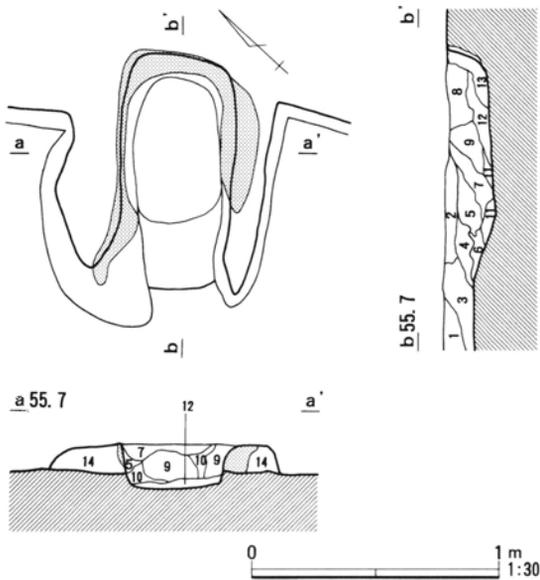
- | | |
|---|--|
| <p>1：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。焼土はほとんど含まない。</p> <p>2：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒、炭化物を含む。焼土粒、径5mm大の焼土小ブロックを点々と含む。</p> <p>3：暗褐色土層。2層に近いが、焼土粒・焼土小ブロックが多い。</p> <p>4：暗褐色土層。2層に近いが、焼土若干少ない。</p> <p>5：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。焼土を少量含む。5～13層が17号住居跡カマド覆土。</p> <p>6：暗褐色土層。5層に近いが、焼土ブロックを含む。</p> <p>7：明赤褐色土層。焼土と暗褐色土の混合土。</p> <p>8：暗褐色土層。5層に近いが、焼土粒が多い。</p> <p>9：暗褐色土層。5層に近いが、焼土粒が極少ない。</p> <p>10：明赤褐色土層。天井・壁崩落土の焼土粒・焼土ブロックを主に、暗褐色土を所々含む。</p> <p>11：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土粒、径5～20mm大の焼土ブロックを多く含む。炭化物もかなり含む。</p> <p>12：褐色土層。暗褐色土とロームの不均質な混合土。</p> <p>13：褐色土層。12層に近いが、ロームが多い。</p> <p>14：褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を含む。17号住居跡カマド袖構築土。</p> | <p>15：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒、焼土を含む。15～17層は、17号住居構築時に16号住居跡のカマドを意図的に埋めた土か。</p> <p>16：褐色土層。暗褐色土とロームの混合土を主に、径10mm大の白みの強いローム小ブロックを含む。焼土を含む。</p> <p>17：褐色土層。16層に近いが、焼土が多い。</p> <p>18：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。所々斑状にロームブロックを含む。</p> <p>19：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土を少量含む。</p> <p>20：暗褐色土層。19層に近いが、焼土が少ない。</p> <p>21：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土、径10～20mm大の焼土ブロックが点在する。</p> <p>22：褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を含み、焼土を微量含む。</p> <p>23：褐色土層。ロームブロック。</p> <p>24：赤褐色土層。暗褐色土と焼土・焼土ブロックが同量混合。天井・壁崩落土。</p> <p>25：褐色土層。暗褐色土とロームの混合土。焼土を含む。</p> <p>26：暗褐色土層。25層に近いが、炭化物を多く含む。</p> <p>27：褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を含む。14層より白みがかかるか。16号住居跡カマド袖構築土。</p> |
|---|--|

図46 16・17号住居跡カマド平面図および断面図

17号住居跡

遺構 (図44・46、図版8) II区西半の南西縁沿い、A1-25・35グリッドを中心に位置し、確認面は、III層上面、あるいはII a層中である。16号住居跡の片側の袖を利用してカマドを設け、床面を埋めて造り換えている。18～20号住居跡に先行する住居跡であり、南西半は、調査区外である。平面形は方形あるいは長方形と見てよいであろう。カマドを除いた現存長は、4m前後で、主軸方位は、N-66°-E前後と推定される。床面にはやや凹凸があり、かなり軟弱である。

覆土は、11～17層の7層である。11～13層が本来の覆土になるが、上位の層との区分自体むつかしく、また分層もかなり微妙である。15～17層は、16号住居跡カマドの埋土、18層は、16号住居跡の埋土であり、本住居跡の掘り方埋土である。



18号住居跡カマド覆土

- 1：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。焼土を微量含み、土器粒を多く含む。やや黒みがかる。
- 2：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒、炭化物を含む。焼土粒、径5mm大の焼土小ブロックを点々と含む。
- 3：暗褐色土層。2層に近いが、焼土若干少ない。
- 4：暗褐色土層。2層に近いが、焼土粒・焼土小ブロックが多い。
- 5：暗赤褐色土層。天井崩落土の焼土ブロック。本層以下がカマド覆土。
- 6：明赤褐色土層。天井崩落土の大小焼土ブロックと暗褐色土の混合土。
- 7：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土粒、径5～10mm大の焼土小ブロックを多く含む。
- 8：暗褐色土層。2層に近いが、焼土、炭化物が多い。
- 9：明赤褐色土層。6層に近いが、焼土の密集度が低い。
- 10：暗褐色土層。暗褐色土を主に、炭化物、径5mm大の焼土を含む。
- 11：暗褐色土層。暗褐色土を主に、炭化物を含む。
- 12：暗褐色土層。8層に近いが、焼土が細かく点在する。
- 13：褐色土層。ロームと暗褐色土の混合土を主に、径10～20mm大の焼土小ブロックを含み、炭化物を微量含む。
- 14：褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を含む。カマド袖構築土。

図47 18号住居跡カマド平面図および断面図

カマドは、北東壁で検出した。北東壁の中央にカマドを造り直すのであれば、住居の横幅を狭め南東壁を内側に造り換える必要があるが、その痕跡は見られない。この点からすれば、平面形は16号住居跡のそれをそのまま利用していると見てよいであろう。床面を茄子形に浅く掘りくぼめ燃焼面とし、右袖は、16号住居跡のカマドの袖を掘りくぼめ造り直し、左袖はローム質の土で新たに構築している。全長は97cm、袖を含めた横幅は72cmである。奥壁から底面にかけてよく赤化している。

カマドの覆土は、9層に分けられる。7・10層は、天井・側壁の崩落土あるいはそれを多くふくむ層である。

土器片が覆土中より散漫に出土するのみで、図化可能な遺物は検出できなかった。時期判定可能な出土土器は、古墳時代後期に属するものである。

18号住居跡

遺構 (図44・47、図版9) II区西半の南西縁沿い、A 1-24グリッドを中心に位置する遺構である。確認面は、III層上面、あるいはII a層中である。16・17号住居跡を切って構築されており、西側は旧河道により削られている。20号住居跡との関係は確定できない。南西半は、調査区外である。

平面形は方形あるいは長方形であろう。カマドを除いた現存長は、3.5m前後、北東壁での横幅は現存で4.0m、主軸方位は、N-54°-E前後である。床面はほぼ平坦であるが、硬化しているのはカマド周辺に限られる。通常他遺構との重複部分には貼床がなされる例が多いが、本遺構では重複部分にも貼床は全くなされていない。

覆土は6層とした暗褐色土層のみである。直上の層に比べ黒みが強く、その点で識別は容易であるが、土質や遺物の混入量など大きく異なるものではない。

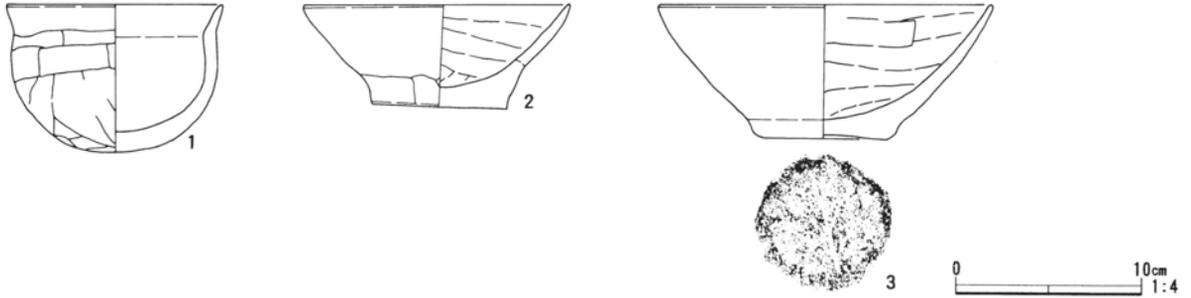


図48 18号住居跡出土遺物実測図

表22 18号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 壺	口径 11.6 底径 4.3 器高 7.8	体部膨らみを持ち、口縁部は短く外反気味に開く。底部は丸底気味。	外面一口縁部ヨコナデ、体部・底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ナデ。	片岩・チャート 内外一明赤褐色	2/3。
2	土師器 鉢	口径 14.3 底径 7.2 器高 5.7	体部緩やかに立ち上がり、口縁部やや内彎する。	外面一体部ヘラケズリあるが器面荒れており不鮮明、底部ヘラケズリ後ナデ。内面一口縁～底部ナデ。	片岩・チャート 内外一にぶい赤褐色	ほぼ完形。
3	土師器 鉢	口径 17.9 底径 6.8 器高 7.2	体部緩やかに立ち上がり、口縁部やや内彎する。	外面一口縁～体部器面荒れており不鮮明。内面一口縁～底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内外一にぶい橙色	ほぼ完形。 底部に木葉痕。

カマドは、北東壁で検出した。全長107cm、袖の両端を含めた横幅93cmである。床面を掘りくぼめ燃焼面を設け、両側にロームを主とする土を固めた袖を作出している。燃焼部の両側面はわずかに膨らむもののおおむね直線的で、また立ち上がりもかなり急である。奥壁から両袖にかけて明瞭に赤化している。

カマドの覆土は、13層に分けられる。5・6・9層は、天井・側壁の崩落土である。11～13層が煙道や焚口からある程度流入した段階に、押し潰されたように天井などが崩壊したのであろう。

遺物(図48、表22、図版20) 図化した土器は、カマド覆土の上部から出土したものである。2・3は、あるいは甕底部を転用したものかもしれない。

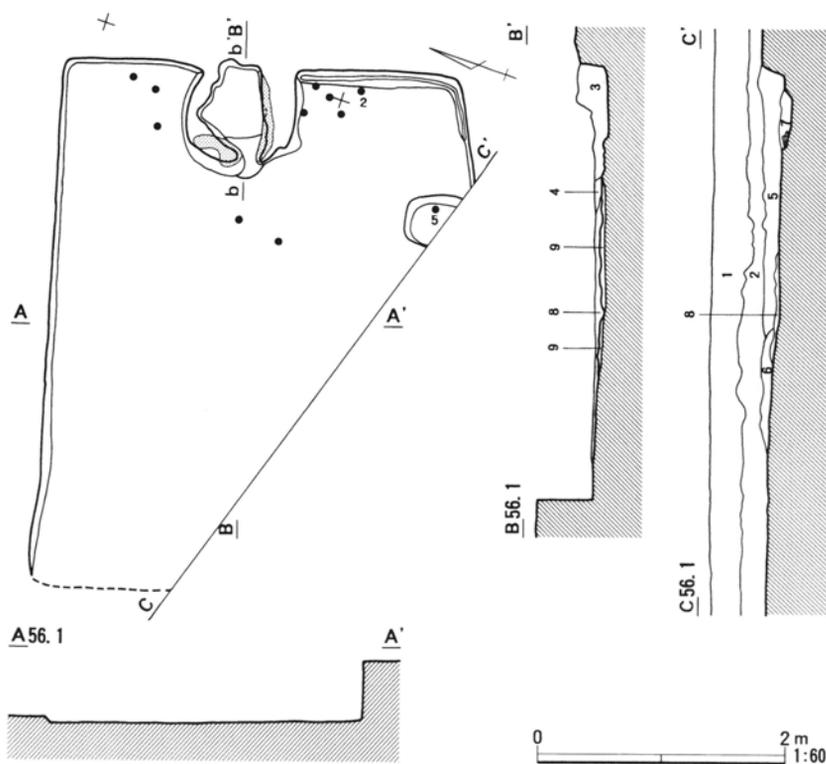
19号住居跡

遺構(図49・50、図版9) II区西半の南西縁沿い、A1-55・56グリッドを中心に位置する。確認面は、III層上面、あるいはIIa層中である。南西側は削平により床面が途切れ、カマドを含む北東半のみ残存する住居跡である。15号住居跡と重複しその上に床面を設けており、17号住居跡より後出する可能性がある。南西半は、調査区外である。

平面形は、入口側がやや広い台形に近い形態になりそうである。北西壁の現存長は、4.1m、北東壁での横幅は3.15m、主軸方位は、N-73°-E前後である。床面はほぼ平坦であるが、硬化しているのは住居中央にほぼ限られる。貼床層の可能性もある白みの強いロームの層が見られたが、部分的であり、確言できない。15号住居跡との重複部分にも貼床はなされず、やや硬い床面と思しき面が15号住居跡の上ののびることが確認できたまでである。

覆土は3～8層の6層で、黒みが強い点を除けば、すぐ上の2層との違いは大きくない。9層は、掘り方の埋土である。

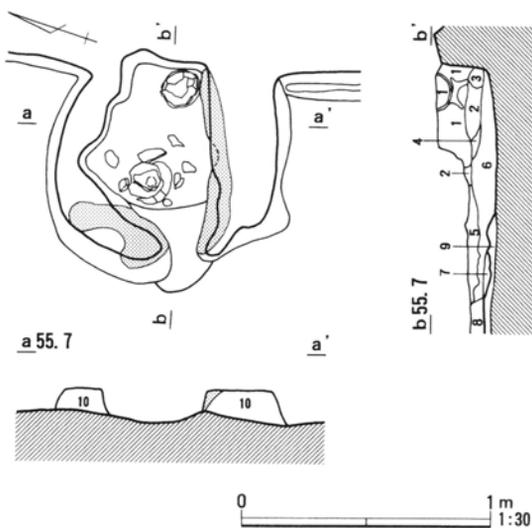
南西縁で、形態的には貯蔵穴に類似するピットを1個検出した。平面形は楕円形に近いが、微妙に



19号住居跡覆土

- 1：暗褐色土層。やや灰色みがかかった暗褐色土を主に、ローム粒を含む。現耕作土。
- 2：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含み、焼土粒を少量含む。1層に比し、しまっている。旧表土。
- 3：カマド覆土。
- 4：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。焼土はほとんど含まない。
- 5：暗褐色土層。2層に近いが、やや黒みがかっており（マンガンかと思われる黒色粒を含み）、粘性が強い。5・8層下に、局所的に貼床かと思われる薄層が認められる。
- 6：暗褐色土層。5層に近いが、黒み、粘性さらに増す。
- 7：暗褐色土層。5層土を主に、ローム粒・ローム小ブロックを微量含む。P1覆土。
- 8：褐色土層。白み、黄色みの強いロームと暗褐色土が斑状に混じる混合土。
- 9：褐色土層。暗褐色土と白みがかかったロームの混合土。マンガンかと思われる黒色粒をかなり含む。掘り方覆土。

図49 19号住居跡平面図および断面図



19号住居跡カマド覆土

- 1：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土、炭化物を含む。
- 2：赤褐色土層。焼土ブロックを主に、ブロック間に暗褐色土が入る。天井・壁崩落土。
- 3：赤褐色土層。2層に近いが、焼土が少ない。
- 4：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土を極微量含む。
- 5：暗褐色土層。暗褐色土と焼土の混合土。ローム粒を含む。
- 6：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。焼土はほとんど含まない。
- 7：暗褐色土層。5層に近いが、焼土小ブロックが少ない。
- 8：暗褐色土層。2層に近いが、やや黒みがかっており（マンガンかと思われる黒色粒を含み）、粘性が強い。
- 9：褐色土層。暗褐色土と白みがかかったロームの混合土。マンガンかと思われる黒色粒をかなり含む。住居跡掘り方覆土。
- 10：褐色土層。白みの強いロームを主に、暗褐色土を含む。カマド袖構築土。

図50 19号住居跡カマド平面図および断面図

角張っている。深さは10cm前後である。底面に張り付くようにして、壺の大型片(5)が出土している。

カマドは、北東壁で検出した。全長95cm、袖の両端を含めた横幅は97cmである。床面をやや角張った不定形に掘りくぼめ燃焼面を設け、両側に白みの強いロームを主とする土で馬蹄形に近く彎曲した袖を作出している。左側壁は、本来もっと真っ直ぐで、燃焼部は方形に近い形態であったのかもしれない。焚口周辺、右側壁は明瞭に赤化している。

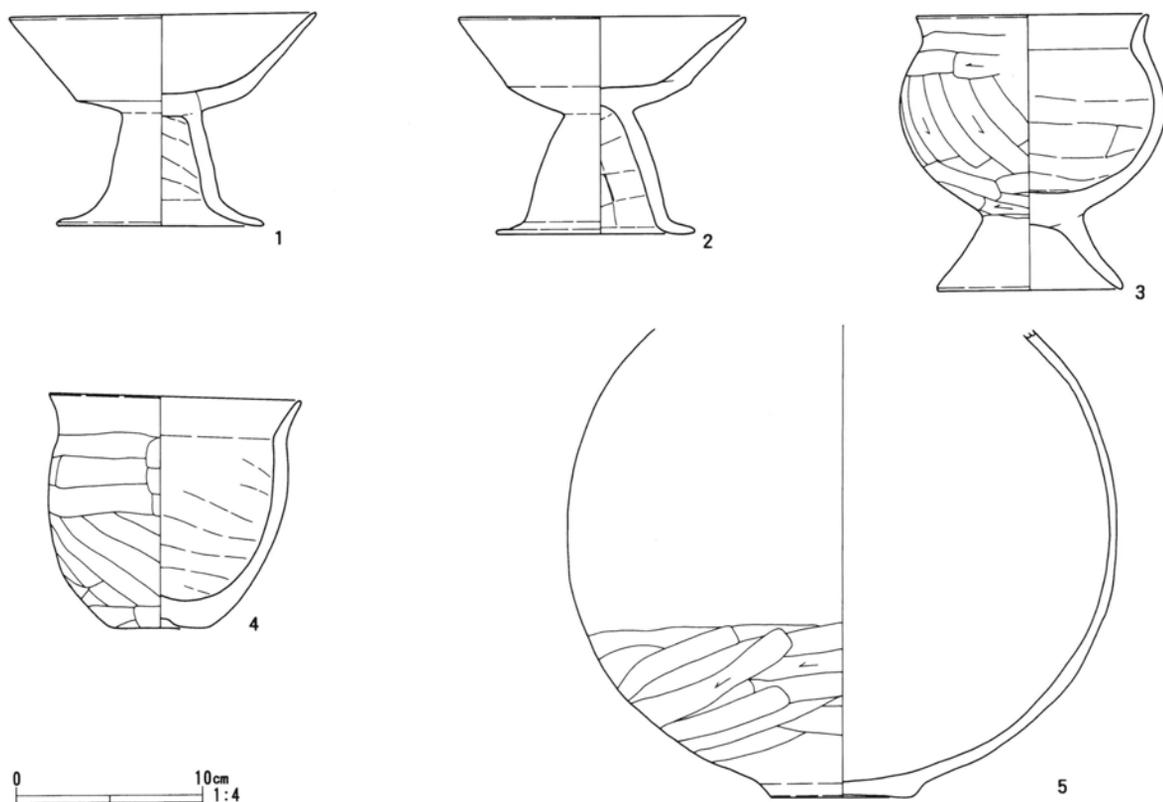


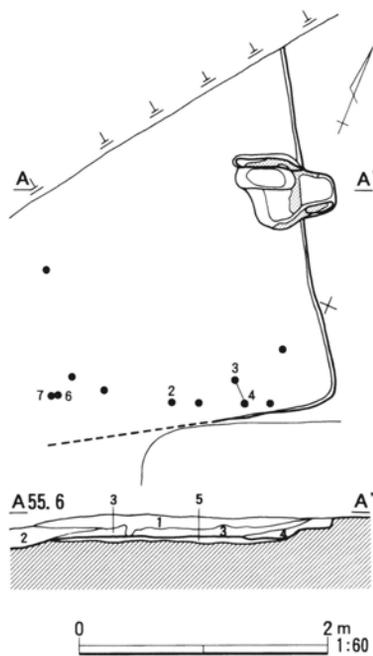
図51 19号住居跡出土遺物実測図

表23 19号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 高坏	口径 16.5 底径 11.1 器高 11.3	坏部下端に弱い稜を持ち、口縁部は直線的に開く。脚部わずかに膨らみ、裾部外反して開く。	外面一坏部器面荒れており不鮮明、脚部ナデ、裾部ヨコナデ。内面一坏部器面荒れており不鮮明、脚部ヘラナデ。	片岩・チャート 内一明赤褐色 外一橙色	一部欠損。
2	土師器 高坏	口径 15.4 底径 (10.7) 器高 11.6	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は直線的に開く。脚部は膨らみを持って開き、裾部は外方に折れる。	外面一坏部器面荒れており不鮮明、脚部ナデ、裾部ヨコナデ。内面一坏部器面荒れており不鮮明、脚部ヘラナデ。	石英・チャート 内外一橙色	裾部の2/3を欠損。
3	土師器 小型台付甕	口径 (12.5) 底径 10.0 器高 14.6	胴部丸く膨らみ、口縁部短く外反。台部は「ハ」の字状にやや外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、台部ヨコナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ、台部ナデ。	片岩・チャート 内一灰黄色 外一にぶい橙色	4/5。
4	土師器 小型甕	口径 13.5 底径 5.2 器高 12.5	胴部弱く膨らみ、口縁部は外反気味に開く。底部中央が窪む。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部・底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	片岩・チャート 内一にぶい黄橙色 外一橙色	4/5。
5	土師器 壺	口径 — 底径 7.8 器高 —	胴部は丸く膨らむ球胴。	外面一胴部上半ヘラケズリ後ナデ、胴部下半ヘラケズリ。内面一胴部ナデ。	片岩・チャート 内一にぶい橙色 外一にぶい黄橙色	胴部1/3。

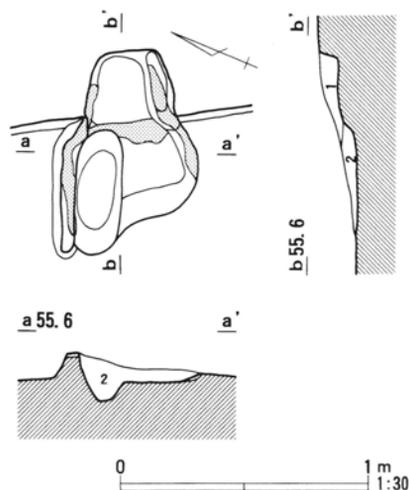
カマドの覆土は、9層に分けられる。2層は、天井・側壁の崩落土、5層も焼土を多量に含む層である。天井などの崩落に先立ち、焼土をほとんど含まない6層が流入した模様である。

遺物(図51、表23、図版21) 1・3は、カマド内の天井崩落土の上から出土している。2は、カマド周辺の床面直上、5は、南壁側のピット出土である。



20号住居跡覆土

- 1：暗褐色土層。暗褐色土、灰黄褐色土を主に、ローム粒を含む。表土。
- 2：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒、焼土を含む。ロームブロックを斑状に含む。斜面堆積の表土の一種。
- 3：暗褐色土層。2層に近いが、はるかにしまっている。
- 4：カマド覆土。
- 5：褐色土層。暗褐色土、ロームの不均質な混合土。掘り方埋土。



20号住居跡カマド覆土

- 1：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土を少量含む。
- 2：暗褐色土層。1層に近いが、焼土粒、径5mm大の焼土小ブロックをかなり含む。

図52 20号住居跡・カマド平面図および断面図

20号住居跡

遺構 (図52、図版9) II区西半の南西縁寄り、A 1—33グリッドを中心に位置する。確認面は、III層上面、あるいはII a層中である。やはり表土剥ぎの時点では、輪郭のみならず、カマドの一端すら見えず、土器の集中する範囲に入れたサブ・トレンチにより遺構があることが判明した住居跡である。南西側は土壤流失や削平により床面が途切れ、カマドのある北東壁一带のみ残存する住居跡である。土層断面では、はっきり判らなかつたが、出土遺物から見て、15・17号住居跡などに先行することは間違いない。北西半は、旧河道により大きく削られている。

平面形は、方形あるいは長方形になろうか。北東壁での横幅の現存値は2.8m、主軸方位は、N—59°—E前後である。最も残りのよい主軸線付近でも床面は、北東壁から2～2.5mくらいまでしか遺存しない。床面はほぼ平坦であるが、硬化しているのはカマド周辺にほぼ限られる。

覆土は2層に分けられる。崖線沿いのためか堆積土が不安定であり、覆土とした土層もかなり乱れ、また、表土である1層と覆土との界面も乱高下するようであった。3層はカマド覆土、5層は掘り方の埋土である。

カマドは北東壁で検出したが、燃焼部および袖の一部が痕跡的に残るのみである。全長79cm、袖の両端を含めた横幅は58cmである。燃焼部はかなり不整な形で、左袖に接して楕円形の掘り込みが見られる。奥壁寄りの段から奥が煙道になるようである。側壁から煙道口にかけて、煙道側壁は明瞭に赤化している。

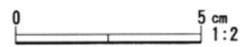
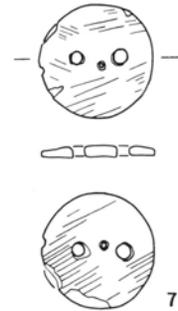
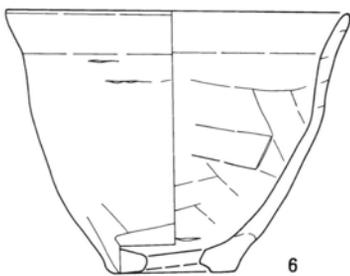
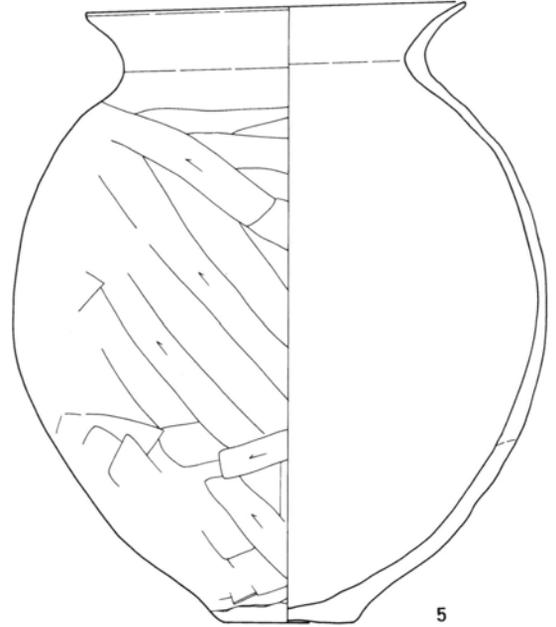
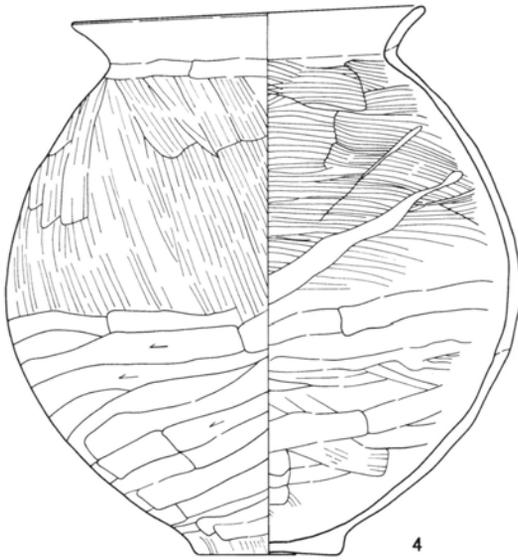
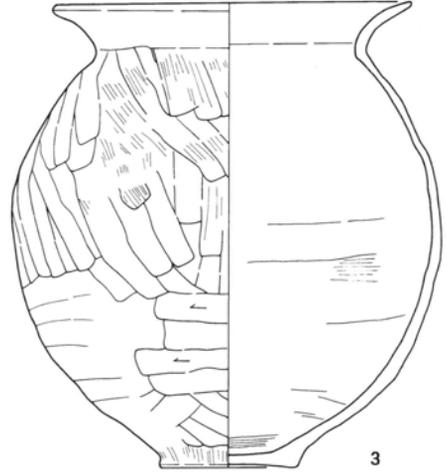
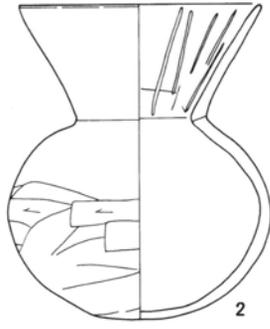


图53 20号住居跡出土遺物実測図

表24 20号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考	
1	土師器 ミニチュア 高坏	口径 6.6 底径 4.8 器高 6.0	坏体部は丸みを持って立ち上がる。脚部はやや外反して開く。	外面一坏部～脚部上位ヘラケズリ後ナデ、脚部下位ヨコナデ。内面一坏部ヘラナデ・ナデ、脚部ナデ、指頭圧痕。	片岩・チャート 内外一橙色	4/5。	
2	土師器 罎	口径 13.0 底径 3.3 器高 16.7	体部は膨らみを持つ。口縁部は直線的に開き端部わずかに内彎。底部は小さい平底。	外面一口縁部器面荒れており不鮮明、体部ヘラケズリ後上位をナデ、底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ・縦位ヘラミガキ、体部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内一橙色 外にぶい橙色	一部欠損。	
3	土師器 甕	口径 18.8 底径 7.4 器高 28.6	膨らみを持つ胴部から、口縁部は外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部上位ハケ目、胴部下位・底部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	白色粒・角閃石 内外一明赤褐色	一部欠損。	
4	土師器 甕	口径 18.8 底径 6.8 器高 28.8	膨らみを持つ胴部から、口縁部は外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部器面荒れるがハケ目後下位をヘラケズリ、底部ヘラケズリ後ナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ハケ目後一部ヘラケズリ。	石英・角閃石 内一にぶい黄橙 ～黒褐色 外一明黄褐色	3/5。	
5	土師器 甕	口径 20.3 底径 7.0 器高 32.7	胴部中位に膨らみを持ち、口縁部は外反して開く。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ナデ。	白色粒・黒色粒 内外一にぶい橙色	2/3。	
6	土師器 甕	口径 18.4 底径 6.8 器高 14.1	粘土紐積み上げ成形。胴部上方に向かって膨らみを持ち、口縁部はわずかに外傾する。	外面一器面荒れており不鮮明。内面一口縁部ヨコナデ、胴部～底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内一明赤褐色 外一橙色	一部欠損。	
No	種類	器種	法 量 (cm・g)			備考	
7	石製品	有孔円板	直径：3.1	厚さ：0.3	孔径：0.4・0.3・0.15	重さ：4.97	3孔の他、縁辺に穿孔痕あり。

カマドの覆土は2層に分けられる。2層は、天井・側壁の崩落土に由来する層であろう。

遺物(図53、表24、図版21・22) 覆土中より散漫に土器片などが出土している。平面図に図示した遺物は、おおむね床面直上出土である。7の石製有孔円盤は、住居跡中央の床面残存範囲の端の床面上で検出した遺物である。3つの孔が穿孔されているが、中央の孔は、小さな孔が辛うじて貫通しているに過ぎない。

坏・甕など時期比定可能な出土土器は、いずれも5世紀代に属するものと考えられる。

21号住居跡

遺構(図54、図版9) II区中央の南西縁寄り、A1-66・76グリッドに位置する。浅い掘り込みを有する焼土跡であるが、住居跡の密集域の真中にあり、14・19号住居跡のように壁が辛うじて残存する住居跡が周辺にあることから見て、カマドの残欠の可能性が高いと考え、住居跡に加えた。カマドの残欠とすれば、南西～西側に住居本体があったと考えてよいであろう。確認面は、III層上面、あるいはIIa層中である。平面形は不整形で、地山を浅く皿状に掘りくぼめている。最大長は、87cmである。被熱赤化した範囲は3箇所、その上面が燃焼面であるとすれば、掘り込みと見たのは、大部分燃焼面の下部の被熱赤化した範囲にあたるのかもしれない。覆土は5層に分けたが、4層以外は、いずれの層も焼土をかなり含む。直接伴う遺物は、土器の微細片のみであるが、周辺では、古墳時代後期の土器片のみ出土している。

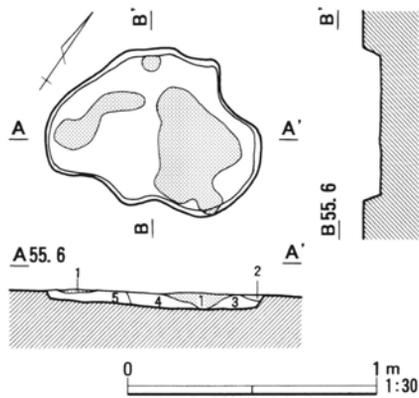


図54 21号住居跡カマド平面図および断面図

21号住居跡カマド覆土

- 1：赤褐色土層。焼土ブロック。焼土粒を主に、暗褐色土を含む。
- 2：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土粒、径5mm前後の焼土小ブロックを含む。上面が最終的な燃焼面。
- 3：暗褐色土層。暗褐色土を主に、焼土粒をかなり含む。
- 4：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒を含む。2層に似るが焼土をほとんど含まない。
- 5：暗褐色土層。2層に近いが、若干焼土粒が多い。

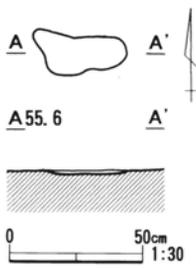


図55 1号焼土跡
平面図および断面図

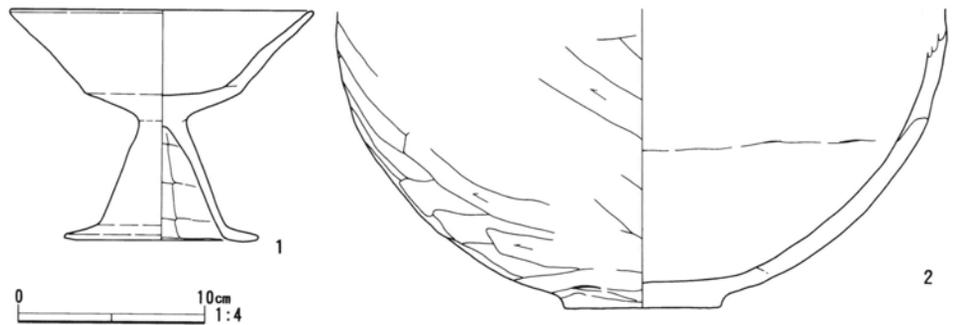


図56 1号焼土跡出土遺物実測図

表25 1号焼土跡出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 高坏	口径 16.2 底径 10.4 器高 12.2	坏部下位に弱い稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。脚部は直線的に開き、裾部は外方に広がる。	外面一坏部器面荒れており不鮮明、脚部ナデ、裾部ヨコナデ。内面一口縁～坏体部ヨコナデ、坏底部ナデ、脚部ヘラナデ。	石英・赤褐色粒 内外一橙色	4/5。
2	土師器 甕	口径 — 底径 8.4 器高 —	大きく膨らむ胴部。	外面一胴部ヘラケズリ。内面一胴部ヘラナデ、底部器面荒れており不明瞭。	白色粒・黒色粒 内一橙色 外一にぶい黄褐色	胴部下位～底部残存。 底部に木葉痕。

(2) 焼土跡

焼土跡とした遺構は、II区で検出した2基である。どちらの焼土跡も、住居跡の密集域からやや離れ、また表土層直下にIII層が露出する一帯に位置し、時期限定に不確定要素を多少残すこともあり、カマドの残欠である可能性が高いものの一応焼土跡として記載することにした。

1号焼土跡

遺構(図55) II区の北東端近く、B5-49グリッドに位置する。周辺一帯に土器片が散乱しており、サブ・トレンチを入れ、精査したところ、極わずかな範囲ではあるが燃焼面を検出した。サブ・トレンチによる断面観察でも本遺構に伴う掘り込みなどは一切見られず、また、土器片は本遺構の周辺に散乱していた。燃焼面は、楕円形に近い不整形形で、最大長は40cmである。本遺構の燃焼面に密接した遺物は見られなかったが、周辺では、古墳時代後期の土器片のみ出土している。

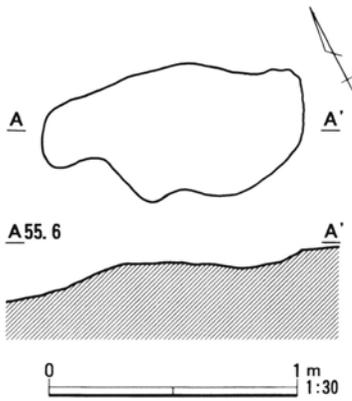


図57 2号焼土跡平面図および断面図

遺物 (図56、表25、図版22)

高坏や甕が出土している。

出土土器、とくに坏や甕などは、6世紀代に属するものと考えられる。

2号焼土跡

遺構 (図57) II区の西半中央、旧河道の河岸斜面、A1—50グリッドに位置する遺構である。表土剥ぎの時点で、周辺に焼土が散乱していたため精査した遺構である。旧河道の河岸の落ち際やや平らな部分に、不整形にまとまる形で焼土が集中していた。確認面はIII層以下の

斜面である。斜面ゆえ堆積土が不安定なこともあり、燃烧面か、単なる焼土の密集か判断に迷うが、焼土の密集度から見て、本来は燃烧面があったと考える。最大長は104cmである。本遺構に伴う遺物はないが、周辺では、古墳時代後期の土器片のみ出土している。

(3) 土 坑

1号土坑

遺構 (図58、図版10) I区の北端、B-1グリッドに位置する遺構である。平面形は楕円形に近く、長軸長は94cm、短軸長は59cm、深さは28cmである。底面にはやや凸凹が見られる。

遺物 (図59、表26、図版22) 完形に近い高坏が遺構の底面から出土した。高坏は形態的に見て、5世紀に属すると考えられる。

2号土坑

遺構 (図58、図版10) I区の北端、B-1・B-2グリッドに位置する遺構である。平面形は楕円形に近く、長軸長は216cm、短軸長は106cm、深さは28cmである。底面は東側より西側のほうがやや深く掘りこまれている。覆土から見て、古代の遺構と思われる。

3号土坑

遺構 (図58、図版10) I区の南寄り、F-3グリッドに位置し、ピットと重複している。平面形は円形に近く、最大径は40cm、深さは26cmである。

遺物 (図59、表26、図版22) 底部を欠いた土師器甕が出土している。口縁部を下にして、やや傾いた状態で一部土坑底面に着いた状態であった。甕は、形態的に見て、9世紀後半に属すると考えられる。

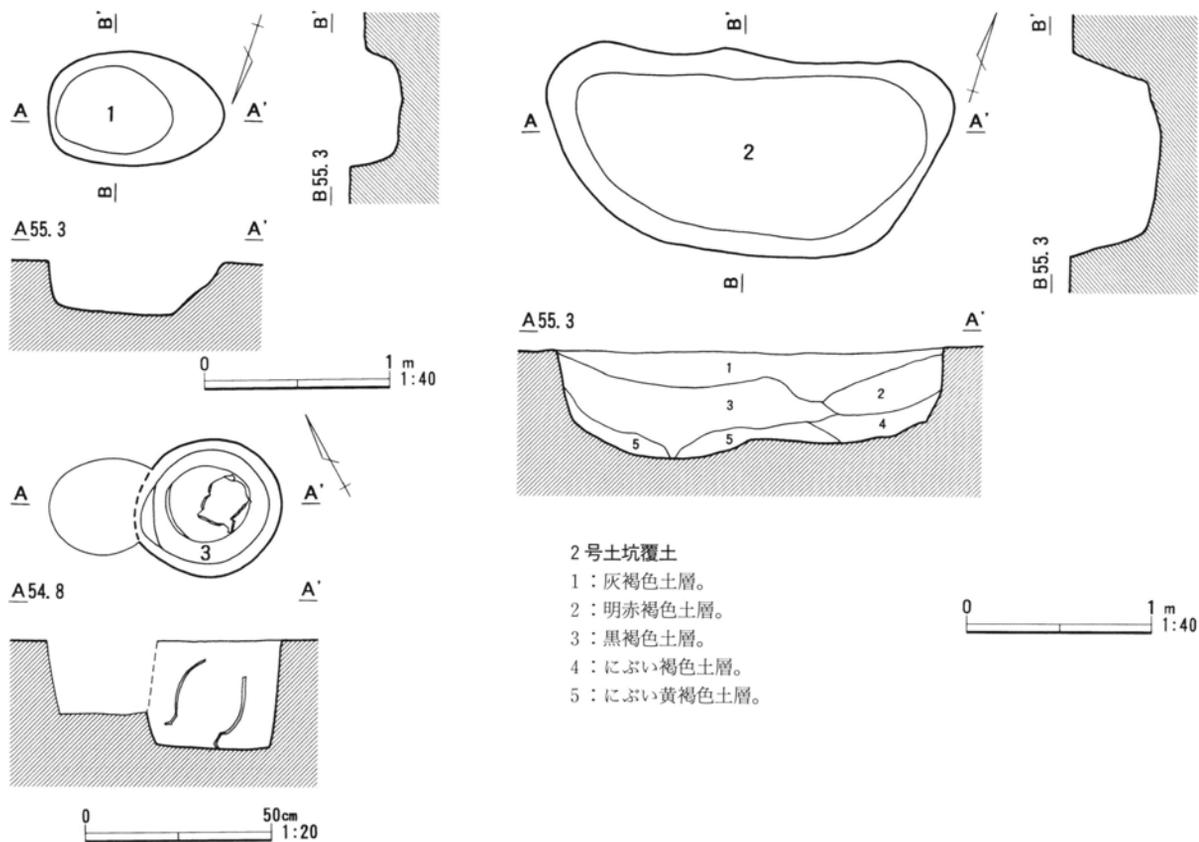


図58 1～3号土坑平面図および断面図

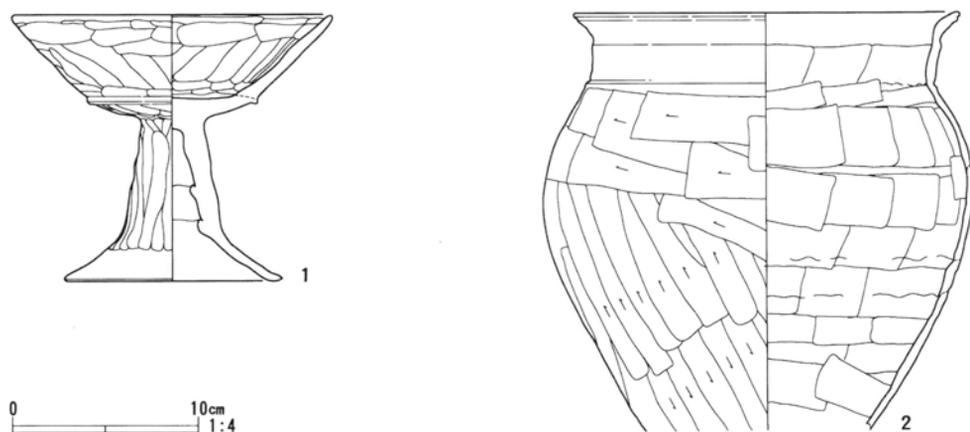
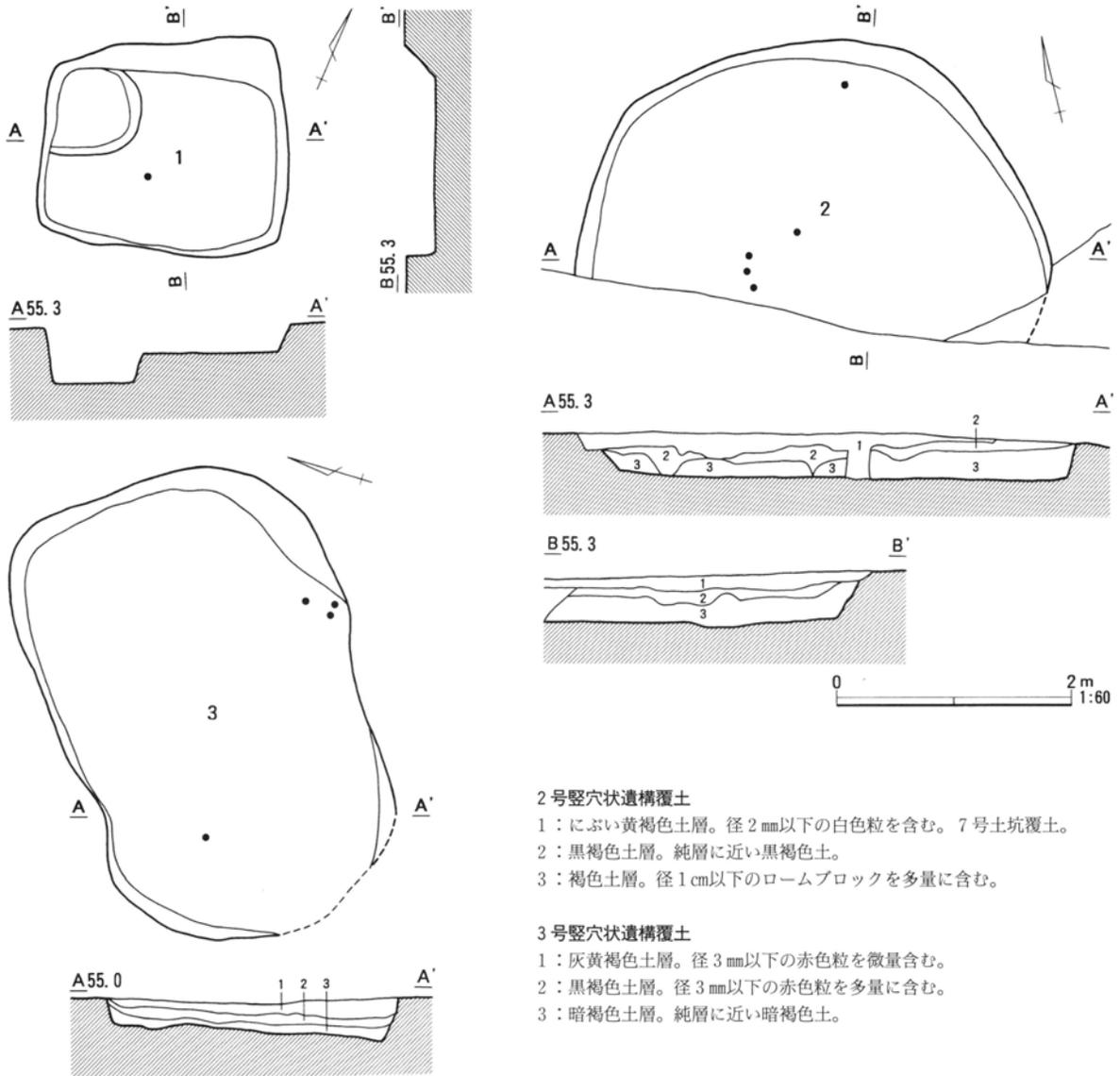


図59 1・3号土坑出土遺物実測図

表26 1・3号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 高坏	口径 17.3 底径 11.8 器高 14.0	裾部はゆるやかに開き、脚部は直線的に立ち上がり、口縁部は直線的に外反する。	底部・内部へラケズリ。口縁部ヨコナデ。	石英・赤褐色粒・鈍い橙色。	口縁部・底部の一部残存。 SK-01
2	土師器 甕	口径 20.7 胴部径 23.1 器高 (22.0)	粘土紐積み上げ成形。胴部上位に膨らみをもち、口頸部は弱い「コ」字状を呈す。	外面一口縁部ヨコナデ、胴部上位横位へラケズリ、中位斜縦位へラケズリ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部上位横位へラナデ。	石英・褐色粒・礫。外面一暗橙色。内面一黄橙色。	底部欠損。 SK-03



2号竪穴状遺構覆土

- 1：にぶい黄褐色土層。径2mm以下の白色粒を含む。7号土坑覆土。
- 2：黒褐色土層。純層に近い黒褐色土。
- 3：褐色土層。径1cm以下のロームブロックを多量に含む。

3号竪穴状遺構覆土

- 1：灰黄褐色土層。径3mm以下の赤色粒を微量含む。
- 2：黒褐色土層。径3mm以下の赤色粒を多量に含む。
- 3：暗褐色土層。純層に近い暗褐色土。

図60 1～3号竪穴状遺構平面図および断面図

2 中世の遺構と遺物

(1) 竪穴状遺構

1号竪穴状遺構

遺構 (図60、図版10) I区の南寄り、C1グリッドに位置する。2基のピットに切られている。平面形は隅丸長方形で、長軸長208cm、短軸長122cm、壁高24cm、床面はほぼ平坦である。北西隅にやや角張った不整形の径70cm前後の掘り込みがみとめられる。

遺物 (図61、表27) ピット上層から土師器片が出土しているが混入品の可能性が高いため、遺構外出土として扱った。遺構覆土中からかわらけが出土している。かわらけの年代は、15世紀後半と考えられる。

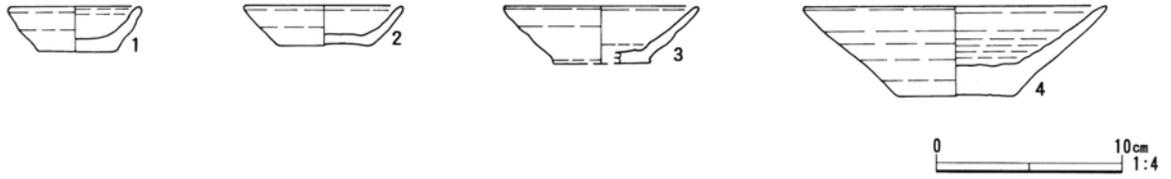


図61 1号竪穴状遺構出土遺物実測図

表27 1号竪穴状遺構出土遺物観察表

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	中世土器 かわらけ	口径 7.2 底径 4.2 器高 2.4	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	ほぼ完形。
2	中世土器 かわらけ	口径 (8.6) 底径 (5.0) 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	1/2。
3	中世土器 かわらけ	口径 (10.5) 底径 (5.2) 器高 3.0	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	1/4。
4	中世土器 かわらけ	口径 (16.3) 底径 6.4 器高 4.7	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい黄橙色。	口縁部4/5欠損。

2号竪穴状遺構

遺構 (図60、図版10) I区の南寄り、C2グリッドに位置する。南半は1号溝に切られ確認不能であるが、7号土坑、2号溝と重複する北半のみ、残存していた。平面形は円形で残存する形状から推定して、径は4m前後である。深さは最も残りのよい部分で、32cmである。覆土は2層に分けられ、黒褐色土と褐色土で構成されている。1層は、重複する12号土坑の覆土である。

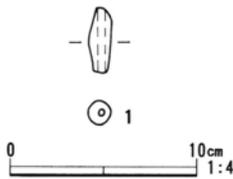


図62 3号竪穴状遺構出土遺物実測図

3号竪穴状遺構

遺構 (図60) I区中央、D2グリッドに位置する。重複する1号溝を切っている。南の壁面は確認できない箇所もあるため、復元した。長軸長は3.95m、短軸長は2.65m、深さは最深部で36cmである。底面には凹凸があり、南側がやや深い。覆土は3層に分けられ、2層以上は赤色粒を含む。

表28 3号竪穴状遺構出土遺物観察表

No	種類	器種	法		量 (cm・g)		備考
1	土製品	土 錘	長さ: 3.5	厚さ: 1.2	孔径: 0.4	にぶい黄橙色	完形。

遺物 (図62、表28) 覆土中から土錘1点が出土している。他に遺物はほとんど出土していない。

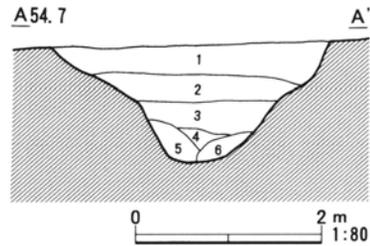
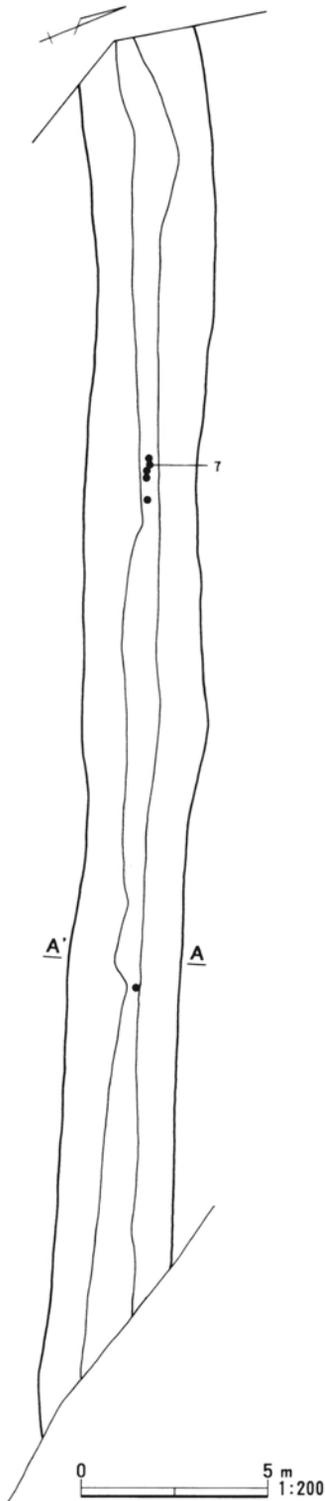
(2) 溝

1号溝

遺構（図63、図版10） I区の北半を斜めに横切る遺構で、C-1～E-4グリッドにかけて位置する。C-2グリッドで2号竪穴状遺構、2号溝を切り、7号土坑に切られている。D-2グリッドでは3号竪穴状遺構に切られ、E-4グリッドで5号溝と重複する。調査範囲内の全長は37m前後、上端での幅は2.7～3.0mである。溝底幅は35～150cmと広狭が著しい。中央東寄りでの深さは、122cmである。

III層下部のシルト化したロームを深く掘り抜いており、西半では、溝壁に砂利層が露出している箇所もある。走向は東西方向、東側を先端と見て20°ほど南に振れている。上端はおおむね直線をなすが、西端部分は微妙に彎曲している。

薬研堀に類する形態であるが、部分的に溝底幅がやや



1号溝覆土

- 1：褐色土層。径3mm以下の小礫を少量含む。
- 2：暗褐色土層。径1mm以下の白色粒を多量に含む（2～5層の白色粒は、軽石粒か？）。
- 3：灰褐色土層。径1mm以下の白色粒を多量に含む。この層以下は粘性が強い。
- 4：褐色土層。径1mm以下の白色粒を多量に含む。
- 5：暗褐色土層。径1mm以下の白色粒を多量に含む、径3mm以下のローム粒子を少量含む。
- 6：黒褐色土層。純層に近い黒褐色土。

図63 1号溝平面図および断面図

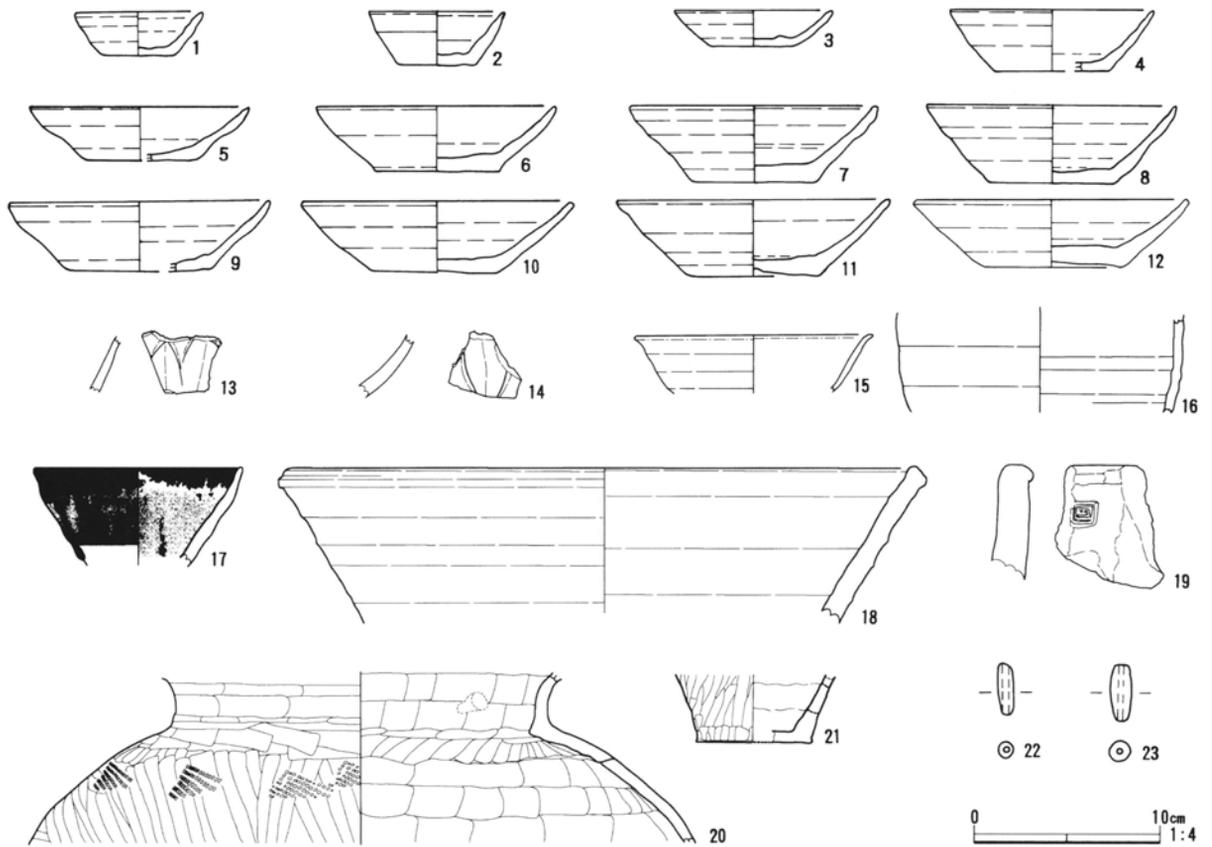


図64 1号溝出土遺物実測図

表29 1号溝出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	中世土器 かわらけ	口径 6.9 底径 3.9 器高 2.3	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	完形。煤付着。
2	中世土器 かわらけ	口径 (7.3) 底径 (4.2) 器高 2.8	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	1/4。
3	中世土器 かわらけ	口径 (8.6) 底径 (4.4) 器高 (1.9)	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	橙色。	1/3。
4	中世土器 かわらけ	口径 (11.0) 底径 (6.1) 器高 (3.2)	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	1/4。
5	中世土器 かわらけ	口径 (11.8) 底径 (6.0) 器高 2.8	口縁部は直線的に立ち上がり、中位で内彎する。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	1/4。底部外面木目圧痕。
6	中世土器 かわらけ	口径 (12.9) 底径 (6.6) 器高 3.4	口縁部は外反しつつ立ち上がり、中位で内彎する。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	橙色。	1/2。底部外面木目圧痕。
7	中世土器 かわらけ	口径 (13.5) 底径 6.6 器高 4.0	口縁部は直線的に立ち上がり、中位で内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部2/3欠損。

表30 1号溝出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
8	中世土器 かわらけ	口径 (13.5) 底径 6.6 器高 4.1	口縁部は直線的に立ち上がり、中位で内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい黄橙色。	口縁部1/2欠損。
9	中世土器 かわらけ	口径 14.1 底径 (7.9) 器高 3.7	口縁部は直線的に立ち上がり、中位で内彎する。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	1/2。
10	中世土器 かわらけ	口径 14.6 底径 7.0 器高 3.7	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	橙色。	口縁部1/3欠損。
11	中世土器 かわらけ	口径 (14.8) 底径 7.0 器高 4.0	口縁部は直線的に立ち上がり、中位で内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部3/4欠損。 底部外面木目圧痕。
12	中世土器 かわらけ	口径 (15.0) 底径 7.6 器高 3.5	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部3/4欠損。
13	中国青磁 碗	口径 — 底径 — 器高 (3.0)	体部の一部。	内・外面一施釉・貫入。外面一鎬蓮弁文。	胎土は密で硬く灰白色、黒色粒。釉は淡緑灰色。	龍泉窯系。
14	中国青磁 碗	口径 — 底径 — 器高 (1.5)	体部の一部。	内・外面一施釉・貫入。外面一鎬蓮弁文。	胎土は密で硬く明灰褐色、釉は明緑褐色。	龍泉窯系。
15	中国白磁 碗	口径 (13.0) 底径 7.6 器高 (3.1)	体部は緩やかに立ち上がり口縁部は外反。	内・外面に施釉。	胎土は密で硬く白色、釉は灰白色。	
16	中国白磁 碗	口径 — 底径 — 器高 (5.0)	体部は緩やかに立ち上がる。	内・外面に施釉・貫入。	胎土は硬く灰白色、暗灰色粒。釉はやや緑味の白。	体部のみ残存。
17	天目 碗	口径 (11.2) 底径 — 器高 (5.2)	本体は直線的に立ち上がり口縁部は内反する。	回転ナデ。底部回転ヘラケズリ。内面・外面一施釉。底部一露胎・釉垂。	胎土はやや密で硬く灰色。釉は茶褐色～薄茶白。	
18	中世土器 鉢	口径 (34.7) 底径 — 器高 (8.1)	口縁部は垂直に立ち上がり、わずかに外反。	回転ナデ。	石英・褐色粒。明灰色。	口縁部の一部のみ残存。
19	中世土器 火鉢	口径 — 底径 — 器高 (6.5)	口縁部は垂直に立ち上がり、やや外反してわずかに折り重ねられる。	ヘラケズリの後、ナデ。外面にスタンプ文。	褐色粒。灰褐色。	口縁部の一部のみ残存。
20	常滑 甕	口径 — 底径 — 器高 (17.5)	口縁部はほぼ垂直に立ち上がりしだいに外反していく。	外面一頸部～肩部横位ヘラケズリ、胴部上位一斜位ヘラケズリ、タタキ。内面一横方向ヘラケズリ、一部斜め方向ヘラケズリが残る。	褐色粒。灰褐色。	口縁部～胴部上位の一部のみ残存。
21	常滑 甕	口径 — 底径 — 器高 (6.5)	粘土紐積み上げ成形。体部は底部から鋭角のかつ直線的に立ち上がる。	外面一タテ方向ヘラケズリ。	褐色粒。灰褐色。	底部の一部のみ残存。
No.	種類	器種	法 量 (cm・g)			備考
22	土製品	土 錘	長さ：2.7 厚さ：0.9 孔径：0.3	にぶい黄橙色		完形。
23	土製品	土 錘	長さ：2.9 厚さ：1.1 孔径：0.3	灰白色		ほぼ完形。

広がり、いわゆる箱葉研、逆台形の断面形となる。全体的に上部はゆるやかに傾斜し、中段以下は急峻に掘り込まれている。溝底は、西から東に向って一様に傾斜している。

覆土は6層に分けられる。3～6層は、極めて粘性の強い黒み、あるいは灰色みを帯びた土で、堆積過程に水がかかわっていることを物語る。また、下層では、加工の有無を確認できなかったが樹木片なども出土している。

なお、II区では、溝自体を確認することはできなかったが、調査範囲の南東隅、丁度角の部分に小礫がかなり密に分布していた。この小礫の密集部分は、南西壁で180cm、東壁で260cmの三角形をなし角をかすめ、断面では古墳時代の確認面より上位の層にも散漫ながらも小礫が含まれることが確認できた。

I区では、1号溝の確認面で、溝の本体よりやや広く小礫が不規則な帯状をなし分布することを確認している。溝がかなり埋まった時点でも浅いくぼみとして残り、小礫がそのくぼみに溜まったと推定された。II区で確認した小礫の密集部分も、1号溝の上部に溜まった小礫の一部と考えられる。

以上の観察より溝の形態を推定するなら、I区を斜めに横切り、I・II区間で直角に近く南西に折れると見て間違いない。何らかの区画施設であるとすれば、南側が区画された範囲、すなわち内側と考えてよいであろう。

遺物 (図64、表29・30、図版24) 溝底部付近から、かわらけ、天目茶碗(17)が出土しており、覆土中から中国青磁碗(13・14)、白磁碗(15・16)、中世土器鉢、火鉢、常滑の甕が出土している。天目茶碗・かわらけの年代は、15世紀後半、青磁・白磁は時期的に遡る可能性がある。

2号溝

遺構 (図65) I区の北寄り、C2グリッドに位置する。溝の西側は2号竪穴状遺構を切っており、1号溝と重複関係にある。走向はほぼ東西方向であるが、溝の東寄りで微妙に南に折れ、溝幅も太くなる。現存長5.5m、幅56～86cm、深さは20cm前後である。底面も東半のほうが幅が太くなり、低くなっている。時期を特定できる遺物は出土していないが、1号溝、2号竪穴状遺構との重複関係から、中世遺構と考えられる。

3号溝

遺構 (図66) I区中央、D3グリッドに位置する。走向は東西方向である。全長5.46m、幅80～90cm、深さは32～40cmである。底面はおおむね平坦で広く、断面形は方形に近い。

遺物 (図67：1、表31、図版24) 覆土中から石製紡錘車が出土している。遺構の時期は不明である。

4号溝

遺構 (図66) I区中央、E3グリッドに位置する。溝の東側で5号溝に切られている。走行は東西方向で、現存長は3.8m、幅は80～110cm、深さは52～65cmで、東側は幅が広がっている。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、西寄りはやや凸凹している。底面はほぼ平坦で、覆土は3層に分けられ、ロームを主とする。

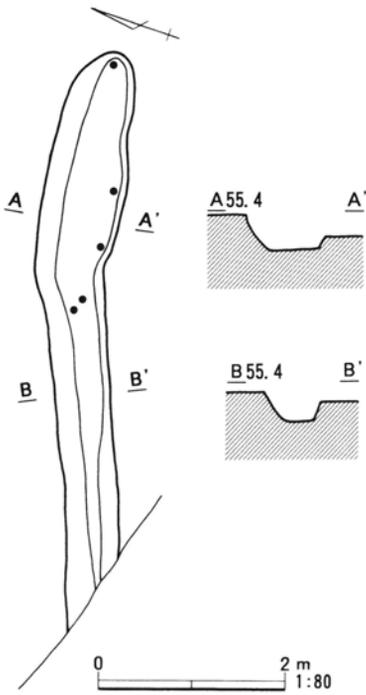
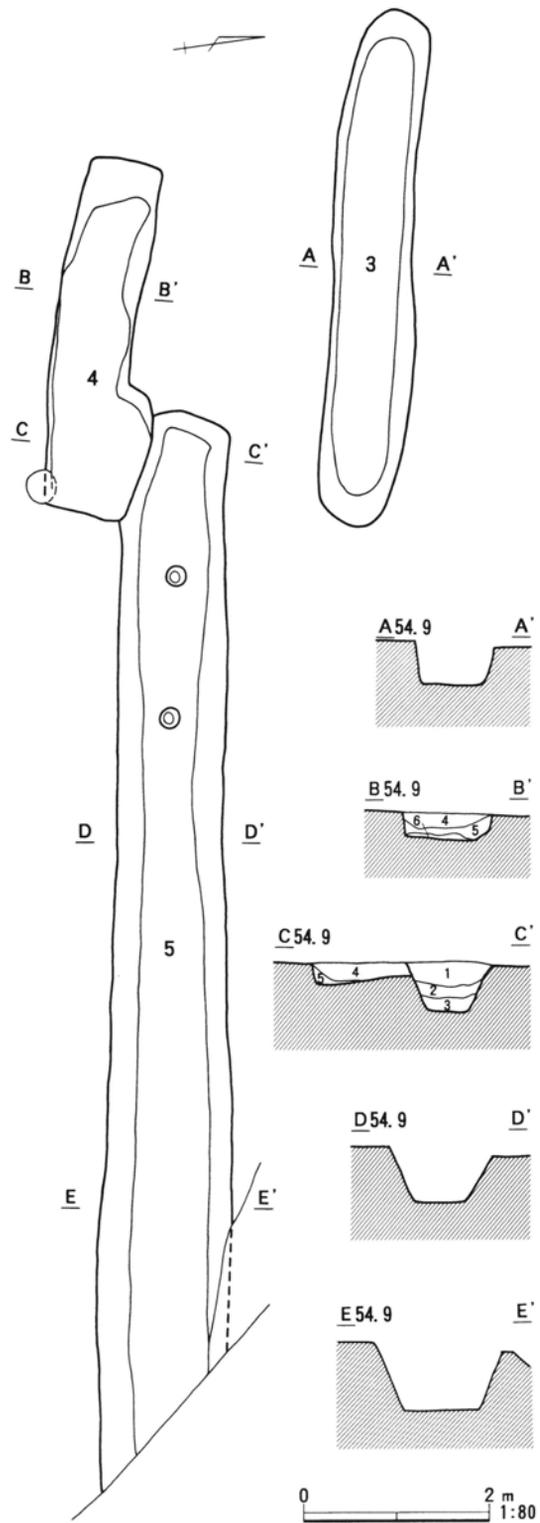


図65 2号溝平面図および断面図

遺物(図67: 2~12、表31、図版24) 覆土中からかわらけが出土している。また、いずれも破片資料ではあるが、中国青磁碗(6・7)、白磁碗・四耳壺(8・9)、中世土器火鉢、釜が出土している。かわらけの年代は、15世紀後半である。

5号溝

遺構(図66) 調査範囲の中央、E3・E4グリッドに位置する。西端で4号溝を切り、東端では1号溝に切られている。東西方向にほぼ直線的に抜ける溝である。調査範囲内での全長は11.30m、幅は110~140cmである。深さは52~65cmで、壁は直線的に掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。断面形は逆台形である。底面でピットを2個確認した。



4・5号溝覆土

- 1: 灰褐色土層。径3mm以下の赤色粒を含む。
- 2: 黒褐色土層。径1mm以下の白色粒を含む。
- 3: 黄褐色土層。径5mm以下のローム小ブロックを多量に含む。
- 4: にぶい黄褐色土層。径1mm以下の白色粒を含む。
- 5: にぶい黄褐色土層。純層に近いにぶい黄褐色土層。
- 6: 暗褐色土層。純層に近い暗褐色土。

図66 3~5号溝平面図および断面図

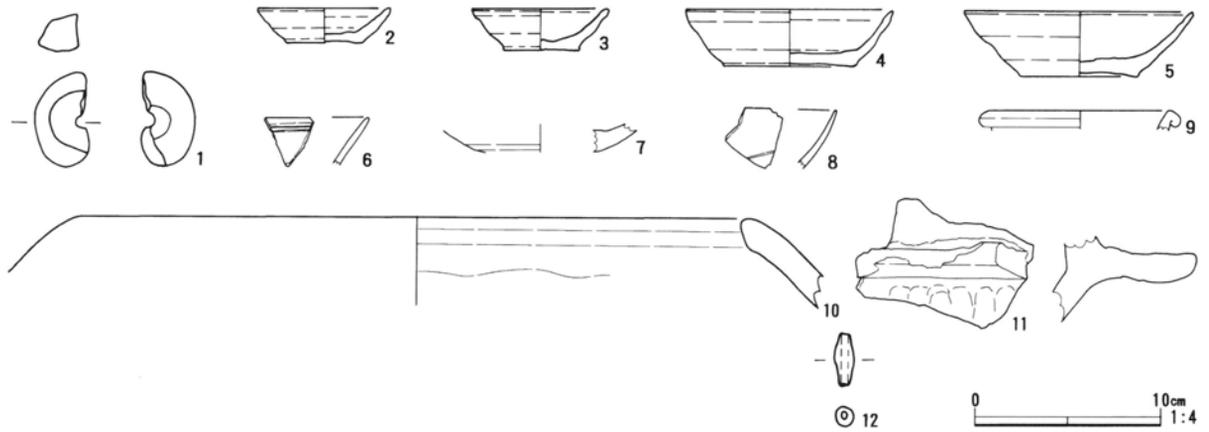


図67 3・4号溝出土遺物実測図

表31 3・4号溝出土遺物観察表

No	種類	器種	法 量 (cm・g)			備考
1	石製品	紡錘車	直径：(5.1) 厚さ：1.8			絹雲母片岩。
No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
2	中世土器 かわらけ	口径 (7.2) 底径 4.1 器高 1.8	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	橙色。	口縁部1/2欠損。
3	中世土器 かわらけ	口径 (7.4) 底径 4.1 器高 2.2	口縁部は内彎しつつ立ち上がり、口唇部で外反する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部3/4欠損。 底部外面木目圧痕。
4	中世土器 かわらけ	口径 (11.1) 底径 7.1 器高 2.9	口縁部は内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部4/5欠損。
5	中世土器 かわらけ	口径 (12.4) 底径 6.4 器高 3.4	口縁部は内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい黄橙色。	口縁部3/4欠損。
6	中国青磁碗	口径 — 底径 — 器高 (2.6)	口唇部は直線的に立ち上がる。	口唇部に青磁釉。	胎土は密で硬く灰色、釉は緑灰白色。	龍泉窯系。
7	中国青磁碗	口径 — 底径 — 器高 (1.5)	体部の一部で器厚が大きく変化する部分で屈曲。	内・外面に青磁釉。	胎土は密で硬く灰色、釉は緑灰白色。	
8	中国白磁碗	口径 — 底径 — 器高 (3.1)	口唇部はやや内彎して立ち上がる。	上絵あり。	胎土は密で白色。	上絵の色調は不明。
9	中国白磁四耳壺	口径 (9.5) 底径 — 器高 (1.1)	口唇部は大きく折れ込んで二重に作る。	内・外面に白磁釉。	胎土は密で硬く白色、釉はやや灰味の白色。	
10	中世土器 火鉢	口径 (35.0) 底径 — 器高 (4.6)	口縁は大きく内反し内側に彎曲。	外面一回転ナデ。内面一ヘラケズリ後回転ナデ。	胎土はやや軟らかく白色粒・黒色粒、灰色。外面一暗灰色、内面一灰褐色。	口縁の一部のみ残存。
11	中世土器 羽釜型土器	口径 — 底径 — 器高 (4.8)	鐔は一旦やや膨らみわずかに上部に向かって彎曲。	内・外面一ヘラケズリ後回転ナデ。	胎土はやや密で白色粒・褐色粒・暗赤色粒。くすんだ赤褐色。	口縁～鐔の一部。
No	種類	器種	法 量 (cm・g)			備考
12	土製品	土 錘	長さ：2.3 厚さ：1.0 孔径：0.3	明赤褐色		完形。

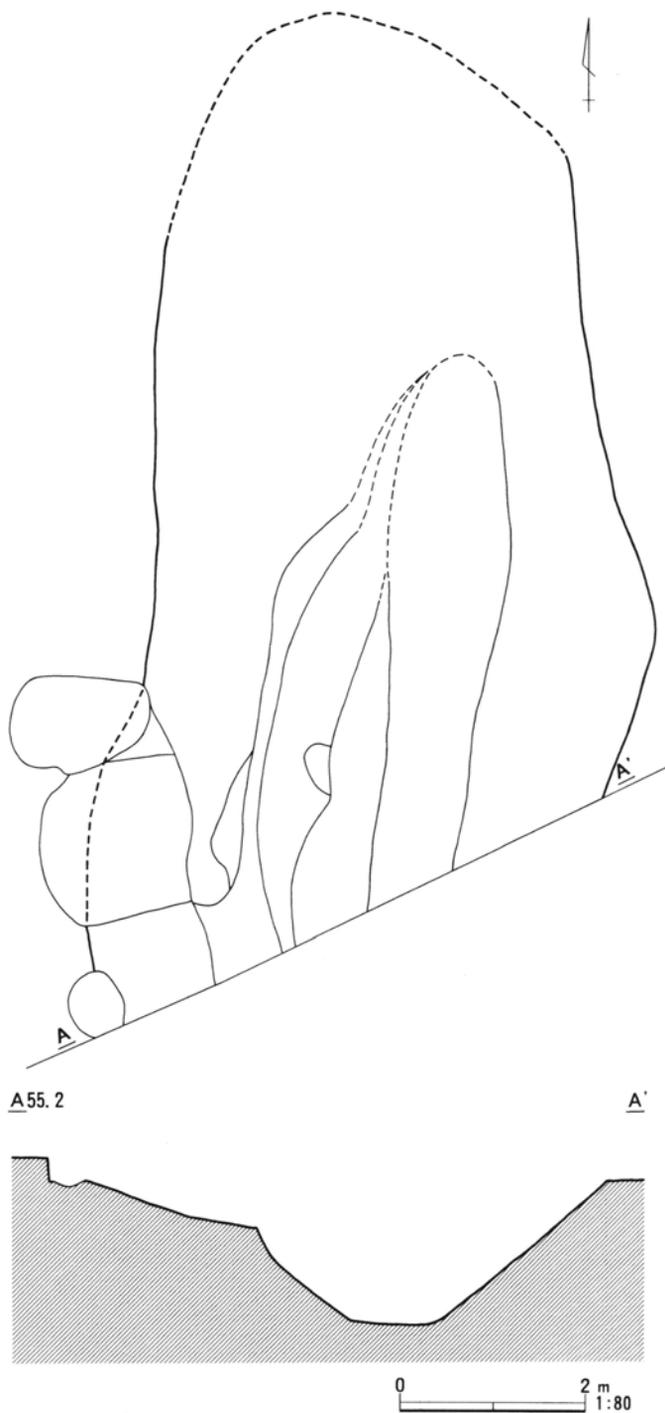


図68 6号溝平面図および断面図

6号溝

遺構 (図68) I区の南東縁、G-4グリッドに位置する。当初、確認面では、巨大な落ち込みとして検出し、輪郭を明確にとらえることができなかった。一部手掘りで調査したが、予想外に深く、水が溜まったこともあり、崩落する危険性が生じた。そのため、重機により底面および壁を確認し、略図を作成し調査を終えた。

溝は西南隅の21号土坑を切っており、重複する18・19号土坑に切られ、西に接する20号土坑にもわずかに切られている。上端北側は確認面が不明瞭なため、復元した。走向は南北方向で、調査範囲内での全長は10.10m、幅4.50~5.40m、深さは1.60mである。V字状の断面形を呈し、西壁は数段に分けて掘り込まれている。底面はやや丸みをもっている。本遺構は、仮に溝と呼称したが、あるいは池状、小谷状の落ち込みや小埋没谷などの一部である可能性もあり、遺構の性格等確定できない。

遺物 (図69、表32~34、図版24) 覆土中からかわらけ、中国白磁、中世土器播鉢、火鉢が出土している。かわらけの年代は、15世紀後半と考えられる。

表32 6号溝出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	中世土器 かわらけ	口径 7.2 底径 4.3 器高 2.3	口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部で内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	ほぼ完形。煤付着。
2	中世土器 かわらけ	口径 7.2 底径 4.8 器高 2.4	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	橙色。	ほぼ完形。底部中央に穿孔。

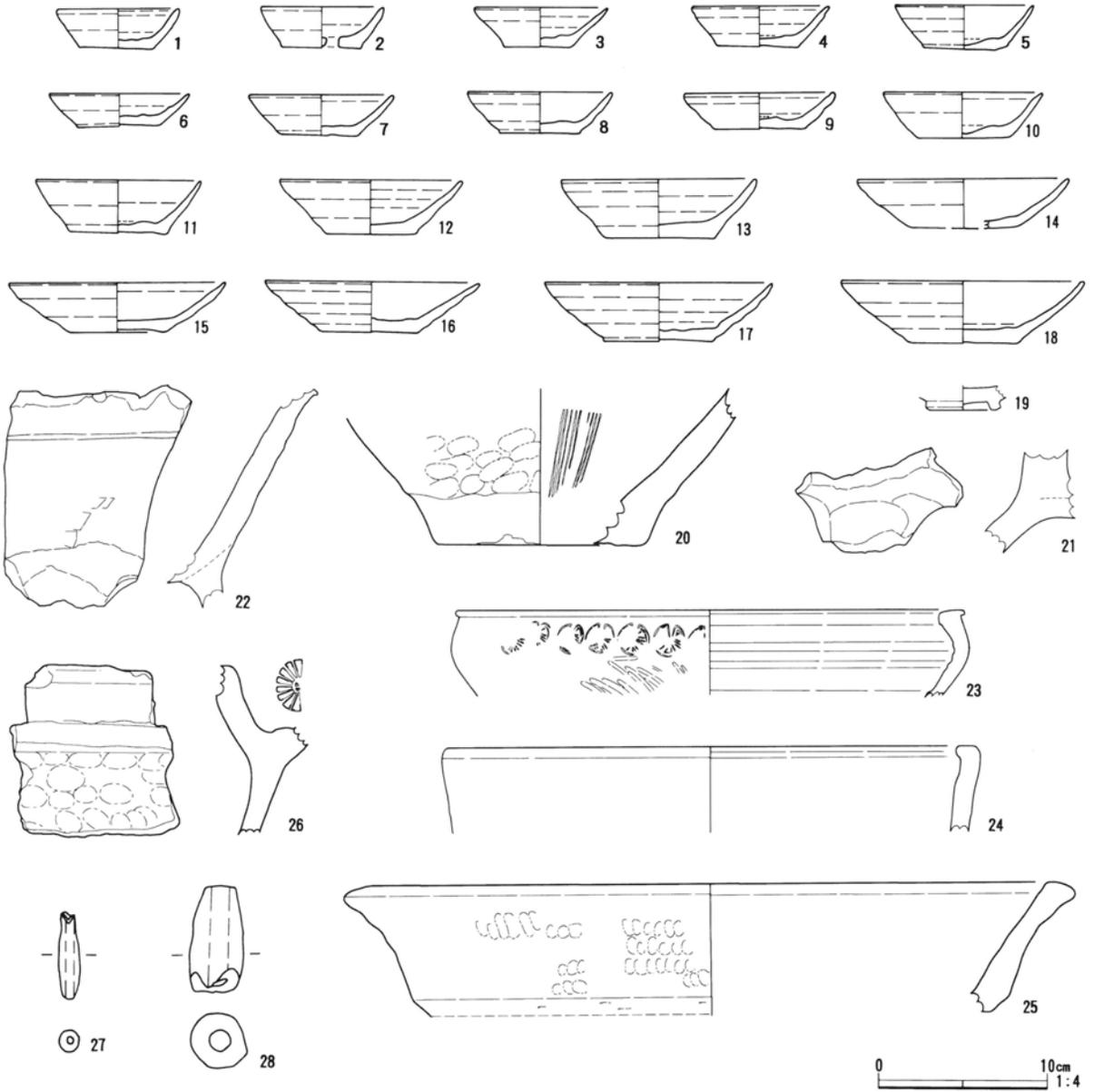


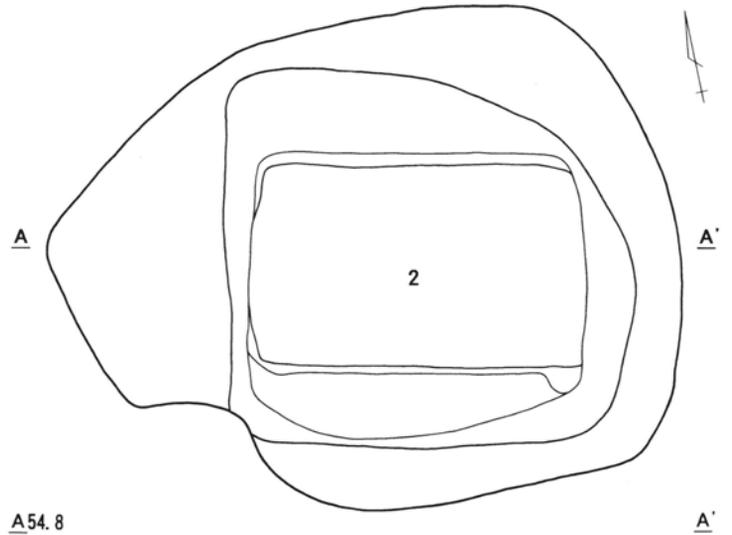
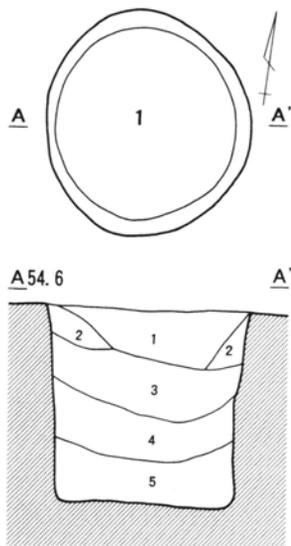
図69 6号溝出土遺物実測図

表33 6号溝出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	中世土器 かわらけ	口径 7.9 底径 4.0 器高 2.3	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	橙色。	口縁部1/3欠損。
4	中世土器 かわらけ	口径 8.1 底径 4.8 器高 2.4	口縁部は直線的に立ち上がり、外面口唇部直下に稜をもつ。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	3/4。
5	中世土器 かわらけ	口径 (8.2) 底径 5.1 器高 2.6	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	橙色。	3/5。
6	中世土器 かわらけ	口径 8.3 底径 4.9 器高 2.0	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	橙色。	3/5。
7	中世土器 かわらけ	口径 8.5 底径 4.5 器高 2.4	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	橙色。	口縁部一部欠損。

表34 6号溝出土遺物観察表(3)

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考	
8	中世土器 かわらけ	口径 (8.6) 底径 4.8 器高 2.4	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	橙色。	口縁部4/5欠損。	
9	中世土器 かわらけ	口径 (9.0) 底径 5.3 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がり、中で内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	橙色。	口縁部3/4欠損。	
10	中世土器 かわらけ	口径 (9.4) 底径 5.4 器高 2.7	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	橙色。	1/3。	
11	中世土器 かわらけ	口径 9.8 底径 5.8 器高 3.1	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/4欠損。 煤付着。	
12	中世土器 かわらけ	口径 (10.8) 底径 5.4 器高 3.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	橙色。	口縁部3/4欠損。	
13	中世土器 かわらけ	口径 (11.6) 底径 6.5 器高 3.4	口縁部は直線的に立ち上がり、中でゆるやかに内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	2/5。	
14	中世土器 かわらけ	口径 (12.6) 底径 (6.8) 器高 (2.9)	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	橙色。	2/5。	
15	中世土器 かわらけ	口径 (12.8) 底径 5.7 器高 2.9	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	橙色。	口縁部7/8欠損。	
16	中世土器 かわらけ	口径 12.8 底径 5.9 器高 2.9	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	浅黄橙色。	口縁部1/2欠損。	
17	中世土器 かわらけ	口径 (13.5) 底径 6.6 器高 3.4	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	浅黄橙色。	口縁部4/5欠損。	
18	中世土器 かわらけ	口径 (14.5) 底径 6.4 器高 3.6	口縁部は直線的に立ち上がり、中でゆるやかに内彎する。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	2/3。	
19	中国白磁器種不明	口径 — 底径 — 器高 (2.6)	高台はやや開く。	回転ヘラケズリ。高台部は露胎。	胎土はやや密でやや軟。2mm大までの砂粒含む。胎・釉ともに黄白色。	高台のみ残存。	
20	中世土器 播鉢	口径 — 底径 (12.3) 器高 (19.1)	播鉢の底部。体部は緩やかに立ち上がる。	内・外面に白磁釉。内面体部にオロシ目、楯10本単位か。使用により摩滅。	砂粒。灰色～淡橙色。	底部の一部のみ残存。	
21	中世土器 火鉢	口径 — 底径 — 器高 (6.5)	体部はゆるやかに立ち上がる。脚はやや直線的に伸びる。	外面—ナデ、内面—摩滅のため不明。	粗い褐色粒・白色粒。内・外面—暗灰色。断面—灰褐色。	口縁—鐙の一部。	
22	中世土器 火鉢	口径 — 底径 — 器高 (12.4)	口縁部は内側に強く彎曲して立ち上がり、先端が外側に折れる。	外面—板ナデのちナデ。内面—ヨコナデ。	褐色粒。淡橙色。	体部の一部のみ残存。	
23	中世土器 火鉢	口径 (30.2) 底径 — 器高 (5.0)	口縁部は内側に強く彎曲して立ち上がり、先端が外側に折れる。	外面—ナメ方向ヘラミガキ・スタンブ文。内面—口縁—回転ナデ。	褐色粒・角閃石。灰色。	口縁部の1/4のみ残存。	
24	中世土器 火鉢	口径 (31.2) 底径 — 器高 (6.5)	口縁部は直線的に立ち上がり、先端で内側に折れる。	外面—ユビオサエ・ナデ。内面—オロシ目・ヨコナデ。	褐色粒・角閃石。灰色。	口縁部の一部のみ残存。	
25	中世土器 火鉢	口径 (43.0) 底径 (33.0) 器高 (7.3)	体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや肥大して外反気味に開く。	外面—ユビオサエのちナデ。底部外面—横方向ケズリ。内面—ヨコナデ。	褐色粒・石英。黒灰色。	全体の1/8残存。	
26	中世土器 釜	口径 — 底径 — 器高 (9.8)	体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	外面(羽の下部)—ユビオサエのちナデ。外面(口縁)—ヨコナデ。内面—強いヨコナデ。羽上面にスタンブ文。	粗い褐色粒・白色粒。内・外面—灰褐色。断面—淡褐色。	口縁部の一部のみ残存。	
No	種類	器種	法 量 (cm・g)			備考	
27	土製品	土 錘	長さ：5.0	厚さ：1.2	孔径：0.4	にぶい橙色	ほぼ完形。
28	土製品	土 錘	長さ：(6.1)	厚さ：3.2	孔径：1.2	にぶい橙色	2/3残存。



1号井戸覆土

- 1：黒褐色土層。径3mm以下の赤色粒を多く含む。
 - 2：灰褐色土層。径3mm以下の赤色粒を少量含む。
 - 3：褐色土層。径3mm以下の赤色粒を多く含む。
- 本層以下は粘性が強い。

- 4：灰褐色土層。径3mm以下の赤色粒を多く含む。
- 5：黒褐色土層。径3mm以下の赤色粒を多く含む。

2号井戸覆土

- 1：黒褐色土層。赤色粒と径5cm以下の小礫を含む。
- 2：黒褐色土層。黒褐色土を主に、黄褐色土と径5cm以下のロームブロックが混在する。
- 3：黒褐色土層。径1cm以下のローム小ブロックを含む。
- 4：黒褐色土層。2層に近いが、ロームブロックが多い。

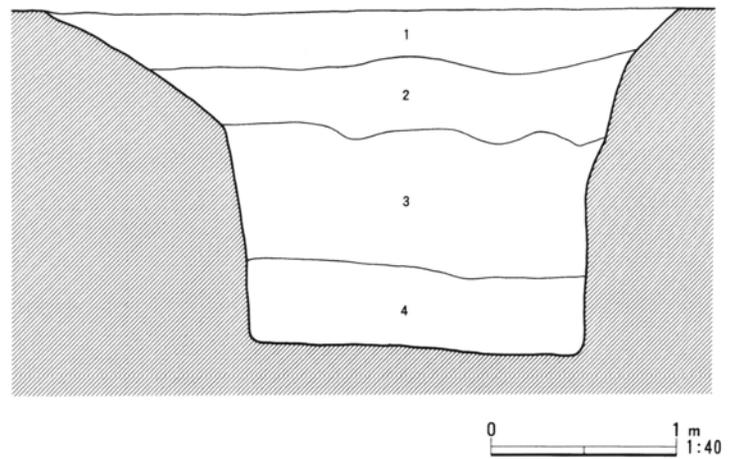


図70 1・2号井戸平面図および断面図

(3) 井戸

1号井戸

遺構 (図70) I区中央、D-2グリッドに位置する。平面形は円形で、ほぼ垂直に掘り込まれた素掘りの井戸である。上端での径110cm、底面の径95cm、深さは104cmである。覆土は5層に分けられる。黒褐色土・灰褐色土を主とし、赤色粒が全層に混入していた。

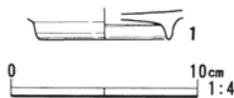


図71 1号井戸出土遺物実測図

遺物 (図71、表35) 覆土中より灰釉陶器皿の高台部破片が1点出土している。

表35 1号井戸出土遺物観察表

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	灰釉陶器皿	口径 — 底径 (6.2) 器高 (1.5)	平らな底部にシャープな高台がつく。	内・外面一回転ヘラケズリ・露胎。	胎土は密で硬。 胎—灰色。	底部の一部残存。

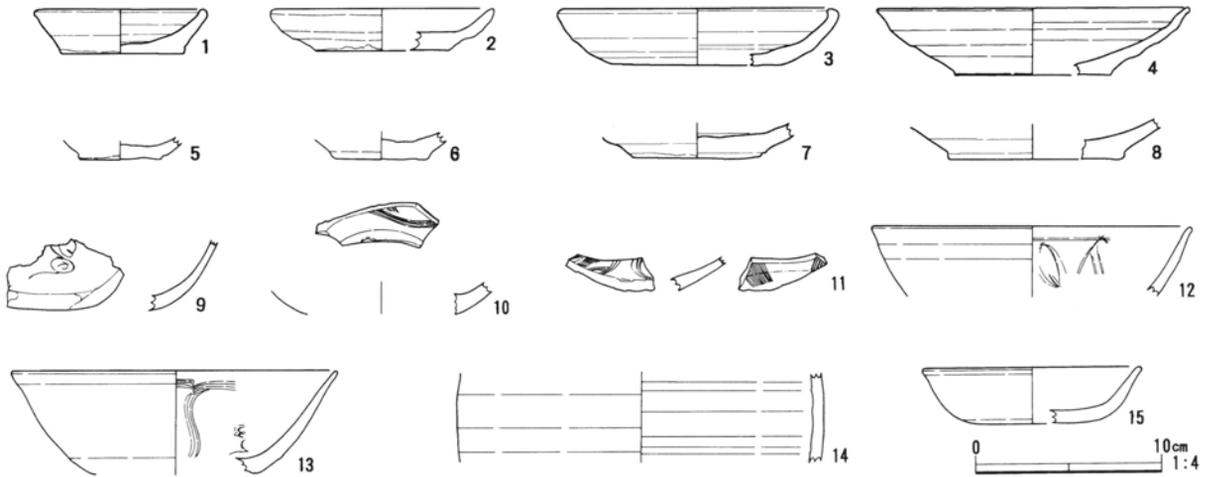


図72 2号井戸出土遺物実測図

表36 2号井戸出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	中世土器 かわらけ	口径 9.2 底径 6.8 器高 2.3	口縁部はゆるやかに立ち上がり、口唇部はわずかに外反する。	回転ヘラケズリ。底部右回転糸切り。	暗灰色粒・石英・礫。明灰褐色。	全体の1/4残存。
2	中世土器 かわらけ	口径 (11.8) 底径 (7.0) 器高 2.2	口縁部は緩やかに内彎する。	内・外面一回転ナデ。底部右回転糸切り。	やや粗で4mmまでの砂粒含む・雲母。淡灰褐色。	口縁部～底部の1/8残存。
3	中世土器 かわらけ	口径 (15.1) 底径 (9.0) 器高 (2.8)	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部は強く内彎する。	回転ナデ。底部右回転糸切り。	白色粒・褐色粒。灰褐色。	口縁部～底部の一部残存。
4	中世土器 かわらけ	口径 (16.6) 底径 (8.5) 器高 (3.5)	体部は強く直線的に立ち上がり、一旦内彎し、口縁部はやや外反気味に広がる。	内・外面一回転ナデ。底部右回転糸切り。	石英・角閃石。明橙～淡褐灰色。	口縁部～底部の一部残存。
5	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 (4.3) 器高 (1.2)	体部は直線的に立ち上がる。	内・外面一回転ナデ。底部右回転糸切り。	雲母。淡褐色。	底部の一部残存。

2号井戸

遺構(図70、図版11) I区の南寄り、F-4グリッドに位置する。上端での平面形は、不整形であるが、底面では方形であることから、上端の平面形も本来は方形であったと推定される。上半は大きく開き、下半はほぼ垂直に掘り込まれている。南側の壁は、段を持って掘り込まれ、垂直に20cm落ち込む。底面の形態は、方形である。上端の長軸長3.61m、短軸長2.62m、底面の長軸長1.80m、短軸長1.05m、深さは1.76mである。

覆土は4層に分けられ、黒褐色土を主とするが、地山の崩落によると思われる黄褐色のロームブロックが所々混入していた。

井戸枠は確認できなかったが、明瞭な方形の掘り込みが確認できることからすれば、内部には木組みなどの構造物があったと推定される。

遺物(図72、表36・37) 覆土中からかわらけ、中国青磁碗(9～13)、中国白磁壺(14)、土師器坏が出土している。土師器坏は前代の混入品と推定される。かわらけは、底部が厚くみこみが広い造りで、周辺の遺構で出土したかわらけより時期が下る。

表37 2号井戸出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
6	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 (4.8) 器高 (1.5)	体部は直線的に立ち上がる。	内・外面一回転ナデ。底部右回転糸切り。	雲母。淡褐色。	底部の一部残存。
7	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 7.0 器高 (1.9)	体部は直線的に立ち上がる。	内・外面一回転ヘラケズリ。底部右回転糸切り。	白色粒・褐色粒・雲母。灰褐色。	底部の一部残存。
8	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 10.0 器高 (2.3)	体部は直線的に立ち上がる。	内・外面一回転ヘラケズリ。底部右回転糸切り。	石英・褐色粒。灰褐色。	底部の一部残存。
9	中国青磁 碗	口径 — 底径 — 器高 (3.7)	体部の彎曲部。	内面一施釉・施文、外面一施釉。	胎土は密で硬い。釉一緑灰色、胎一灰色。	体部の一部残存。
10	中国青磁 碗	口径 — 底径 — 器高 (1.7)	体部の彎曲部。	内面一施釉・施文、外面一施釉。	胎土は密で硬い。釉一緑灰色、胎一灰色。	体部の一部残存。
11	中国青磁 碗	口径 — 底径 — 器高 (1.7)	体部でわずかに彎曲。	内・外面一施釉・櫛描文。	胎土は密で硬い。釉一淡青色、胎一灰色。	体部の一部残存。
12	中国青磁 碗	口径 (17.2) 底径 — 器高 (3.7)	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	内面一施釉・蓮華文、外面一施釉。	胎土は密で硬い。釉一緑灰色、胎一灰色。	口縁部の一部残存。
13	中国青磁 碗	口径 (17.4) 底径 — 器高 (5.4)	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	内面一施釉・蓮華文、外面一施釉。	胎土は密で硬い。釉一緑灰色、胎一灰色。	口縁部・体部の一部残存。
14	中国白磁 壺	口径 — 底径 — 器高 (4.7)	体部の中ほど部分か。	内・外面に施釉。	胎土は密で硬い。白色。	体部の一部。
15	土師器 坏	口径 (11.5) 底径 (5.4) 器高 (2.9)	体部は緩やかに立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	底部一不定方向ナデ。体部一ヨコナデ。	褐色粒・雲母。淡灰褐色。	口縁部～底部の1/3残存。

3号井戸

遺構 (図73、図版11) I区の南寄り、F-4・G-4グリッドに位置する。平面形は角張った円形で、ほぼ垂直に掘り込まれている。上端での最大径266cm、底面の最大径198cm、深さは200cmである。上端から175cm前後の深さのところで方形の木組みが確認できた。覆土は11層に分けられ、黒褐色土・暗褐色土を主にロームブロックが混在している。北壁沿いの覆土はロームを主としており、地山の崩落土と推定できる。

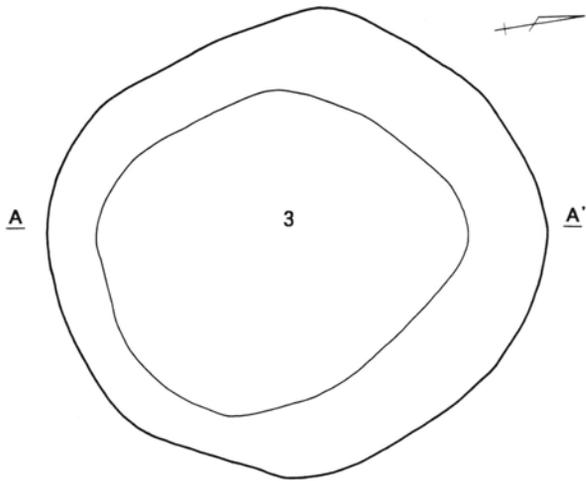
4号井戸

遺構 (図73、図版11) I区の南端、F-5・G-5グリッドに位置する。平面形は楕円形で、ほぼ垂直に掘り込まれた素掘りの井戸である。上端での長軸長122cm、短軸長95cm、底面の長軸長78cm、短軸長110cm、深さは135cmである。覆土は4層に分けられ、下半は黄褐色土を主とする。

遺物 (図74、表38) 中世土器甕の底部破片が出土している。

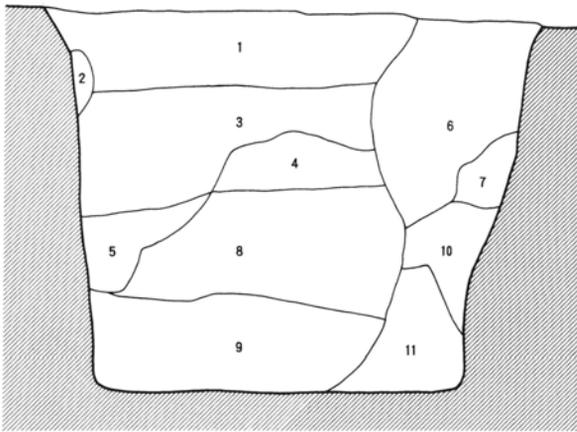
5号井戸

遺構 (図73、図版12) I区南端、F-5グリッドに位置する。上端は径が28cmの2基のピットに切られているが、本井戸に伴うものかは不明である。平面形は円形で、ほぼ垂直に掘り込まれた素掘りの井戸である。上端での径100cm、底面の径75cm、深さは164cmである。



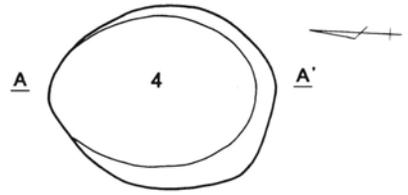
A54.9

A'



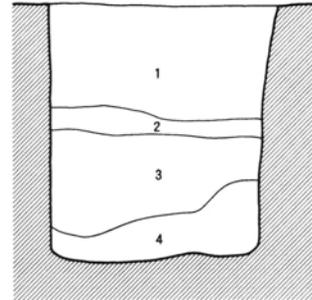
3号井戸覆土

- 1：黒褐色土層。径5 cm以下のロームブロック、小礫を少量含む。
- 2：黄褐色土層。粘性の強いローム大ブロック。
- 3：黒褐色土層。1層に近いが、ロームブロックが多い。
- 4：黒褐色土層。1層に近いが、小礫やローム粒を含まない。6層を除く、本層以下は粘性が強い。
- 5：黒褐色土層。3層に近いが、と小礫を含まず、ロームブロックが多い。
- 6：黒褐色土層～黄褐色土層。黒褐色土とロームの混合土。
- 7：暗褐色土層。径5 cm以下のロームブロックを含む。7・10・11は、井戸側壁の一連の崩落土。
- 8：暗褐色土層。7層に近く、径3 cm以下のロームブロックを多く含む。
- 9：暗褐色土層。8層より明るく、ロームブロックを含まない。
- 10：黄褐色土層～褐色土層。ロームブロックを主とし褐色土を含む。
- 11：にぶい黄褐色土層。純層に近いにぶい黄褐色土。



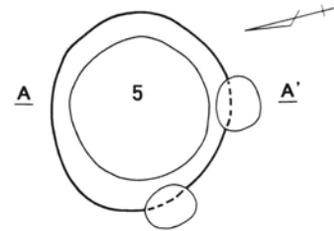
A54.7

A'



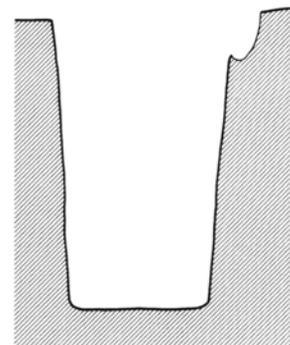
4号井戸覆土

- 1：暗褐色土層。径5 cm以下の小礫を多量に含む。
- 2：黄褐色土層。純層に近い黄褐色土。本層以下は、粘性が強い。
- 3：黒褐色土層～黄褐色土層。黒褐色土と黄褐色土の混合土。径1 cm以下の小礫を含む。
- 4：黄褐色土層。純層に近いローム質土。



A54.7

A'



0 1 m 1:40

図73 3～5号井戸平面図および断面図

表38 4号井戸出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	中世土器 甕	口径 — 底径 (7.5) 器高 (7.2)	粘土紐積み上げ成形。体部は直線的に立ち上がる。	外面—縦位ヘラケズリ。	石英。外部—暗灰色、内部—濃灰色。	底部のみ残存。

(4) 土 坑

4号土坑

遺構(図75) I区の北寄り、C-1グリッドに位置し、1号堅穴状遺構に近接する遺構である。平面形は不整形で、南北方向での最大長102cm、東西方向での最大長60cm、深さは16cmである。底面はほぼ平坦である。

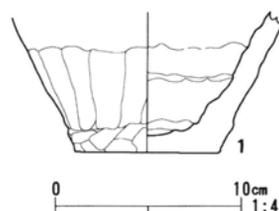


図74 4号井戸出土遺物
実測図

5～7号土坑

遺構(図75) I区の北寄り、C-2グリッドに位置する遺構で、3基は近接および重複している。

5号土坑の平面形は楕円形に近く、長軸長155cm、短軸長102cm、深さは28cmで、底面は平坦である。6号土坑の平面形は円形に近く、最大径は88cmで、底面は平坦である。

7号土坑は、5号土坑に切られており、南北方向の最大径188cm、東西方向の最大径334cm、深さは16cmである。3基の土坑が重複した遺構と思われるが、前後関係及び形状は不明である。東隅近くの底面に、焼土が集中していた。

8号土坑

遺構(図76) I区の北寄り、C-2グリッドに位置する。平面形は楕円形に近く、長軸長102cm、短軸長75cm、深さは24cmで、底面は平坦である。東側の壁沿いに、ピットが1基掘り込まれている。

9号土坑

遺構(図76) I区の北寄り、C-2グリッドに位置する。平面形は円形で、径76cm、深さは25cmで、底面は平坦である。

10号土坑

遺構(図76) I区の北寄り、C-3グリッドに位置する。平面形は方形で、長軸長165cm、短軸長160cm、深さは8cmで、底面は平坦である。

11号土坑

遺構(図76) I区の北寄り、D-3グリッドに位置する。平面形は楕円形に近く、長軸長125cm、短軸長80cm、深さは82cmである。

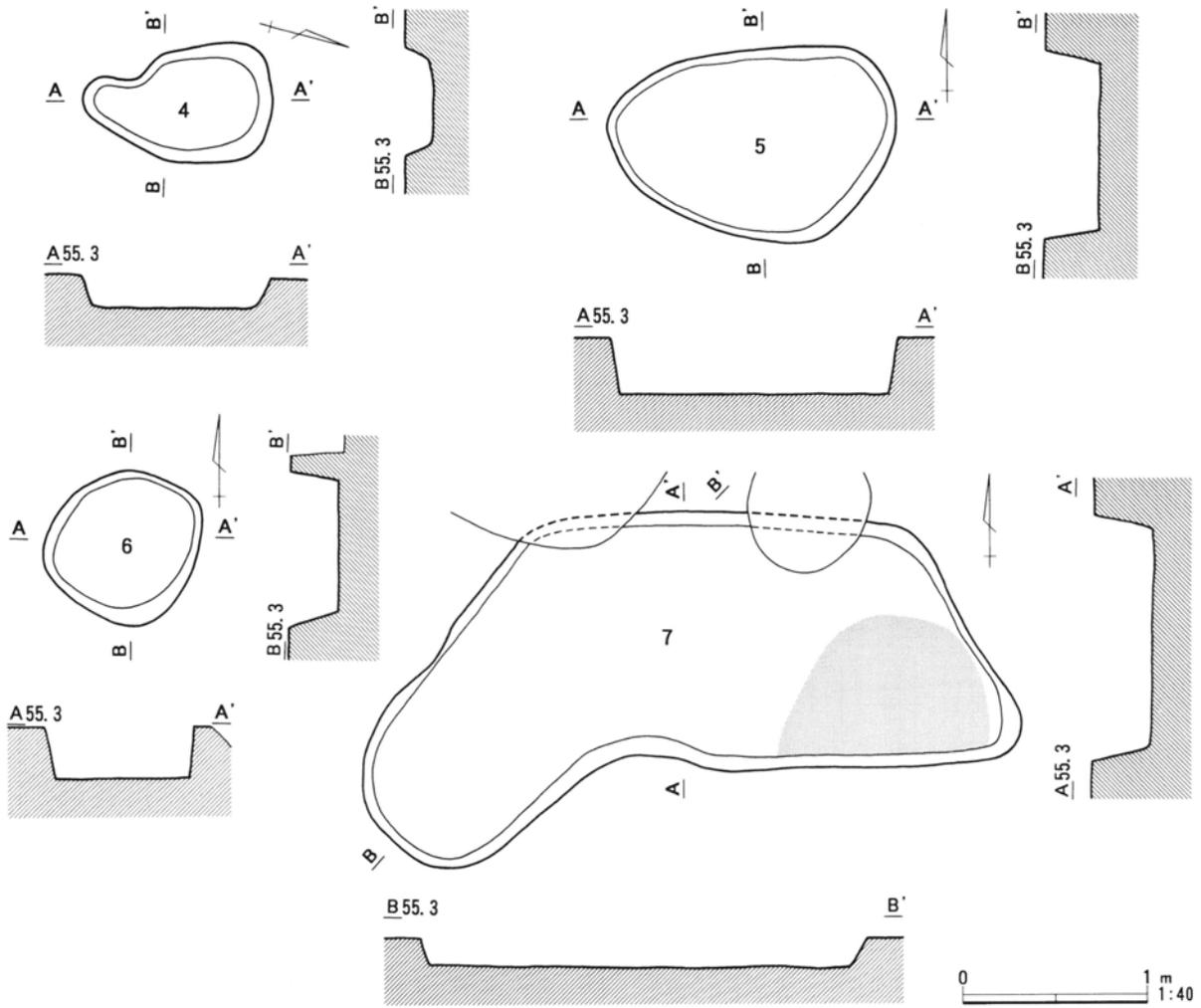


図75 4～7号土坑平面図および断面図

12号土坑

遺構 (図77) I区の北寄り、C-1、C-2グリッドに位置する。少なくとも3基の方形の土坑が重複した遺構と推定できる。1号溝および2号竪穴状遺構を切っている。東西方向での最大長4.75m、南北方向での最大長3.10m、深さは16～20cmである。西半分の範囲は一部しか確認できず、南東寄りの一角は復元した。底面は3基とも平坦で、ほぼ同じ高さである。重複関係から中世以降の土坑である。

遺物 (図79：1・2、表39、図版26) 青磁皿(1)、青磁碗(2)は、覆土中出土である。

13号土坑

遺構 (図77) I区中央、D-2グリッドに位置する。平面形は円形に近く、長軸長114cm、短軸長98cm、深さは25cmである。

14号土坑

遺構 (図77) I区中央、E-3グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸長124cm、短軸方向

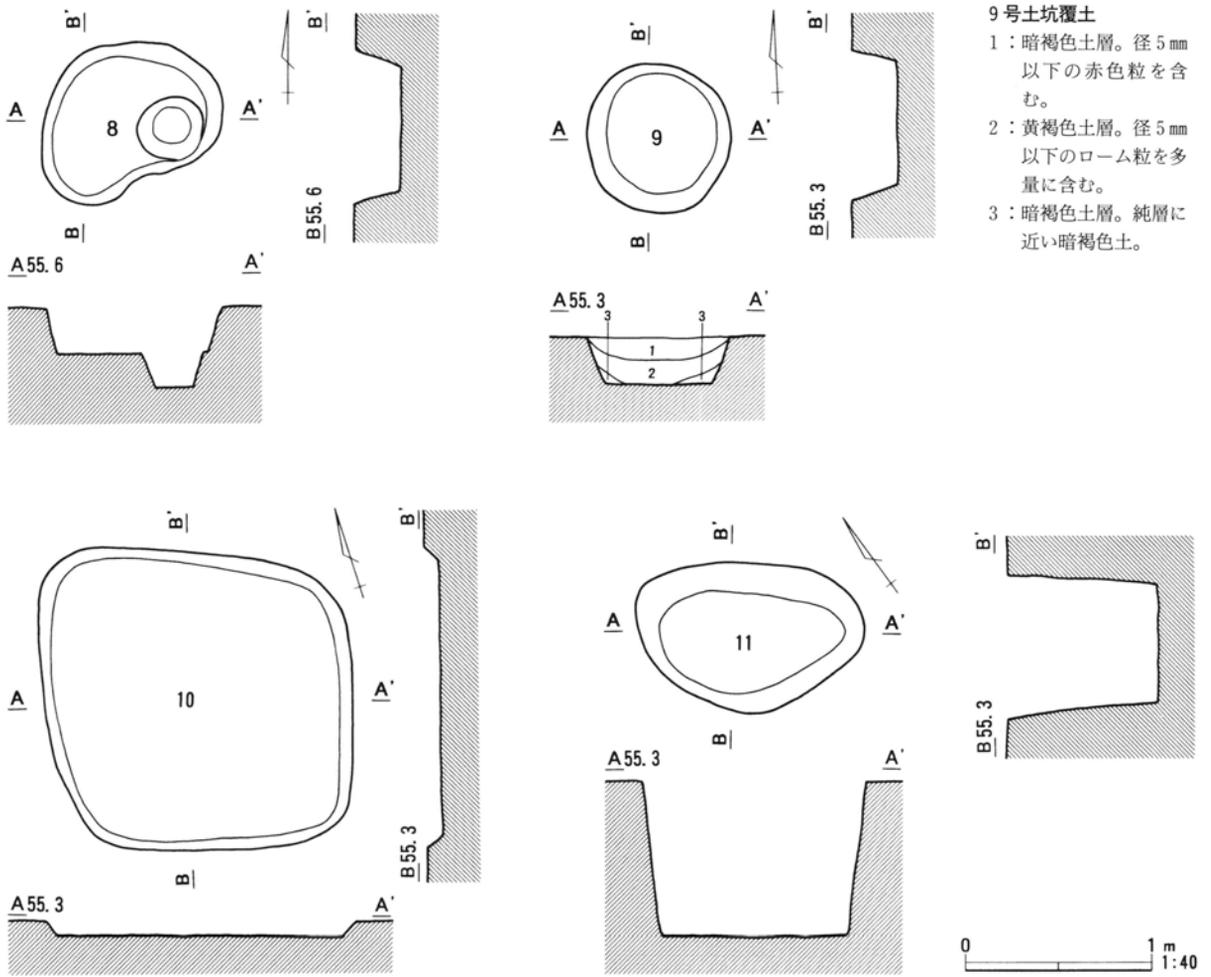


図76 8～11号土坑平面図および断面図

での最大長82cm、深さは30cmである。覆土は主に褐色土で、底面は平坦である。

15号土坑

遺構(図78) I区中央、E-3グリッドに位置する。平面形は円形に近く、径75～83cm、深さは10cmである。

16号土坑

遺構(図78) I区中央、E-3グリッドに位置し、重複する1号住居跡を切っている。平面形は楕円形で、長軸長135cm、短軸長103cm、深さは36cmである。底面は平坦である。

17号土坑

遺構(図78) I区の南寄り、F-3グリッドに位置する。平面形は楕円形に近く、長軸長95cm、短軸長66cm、深さは26cmである。

遺物(図79：3、表39) 灰釉陶器が覆土中から出土しているが、わずかな破片のため、混入とも考えられる。

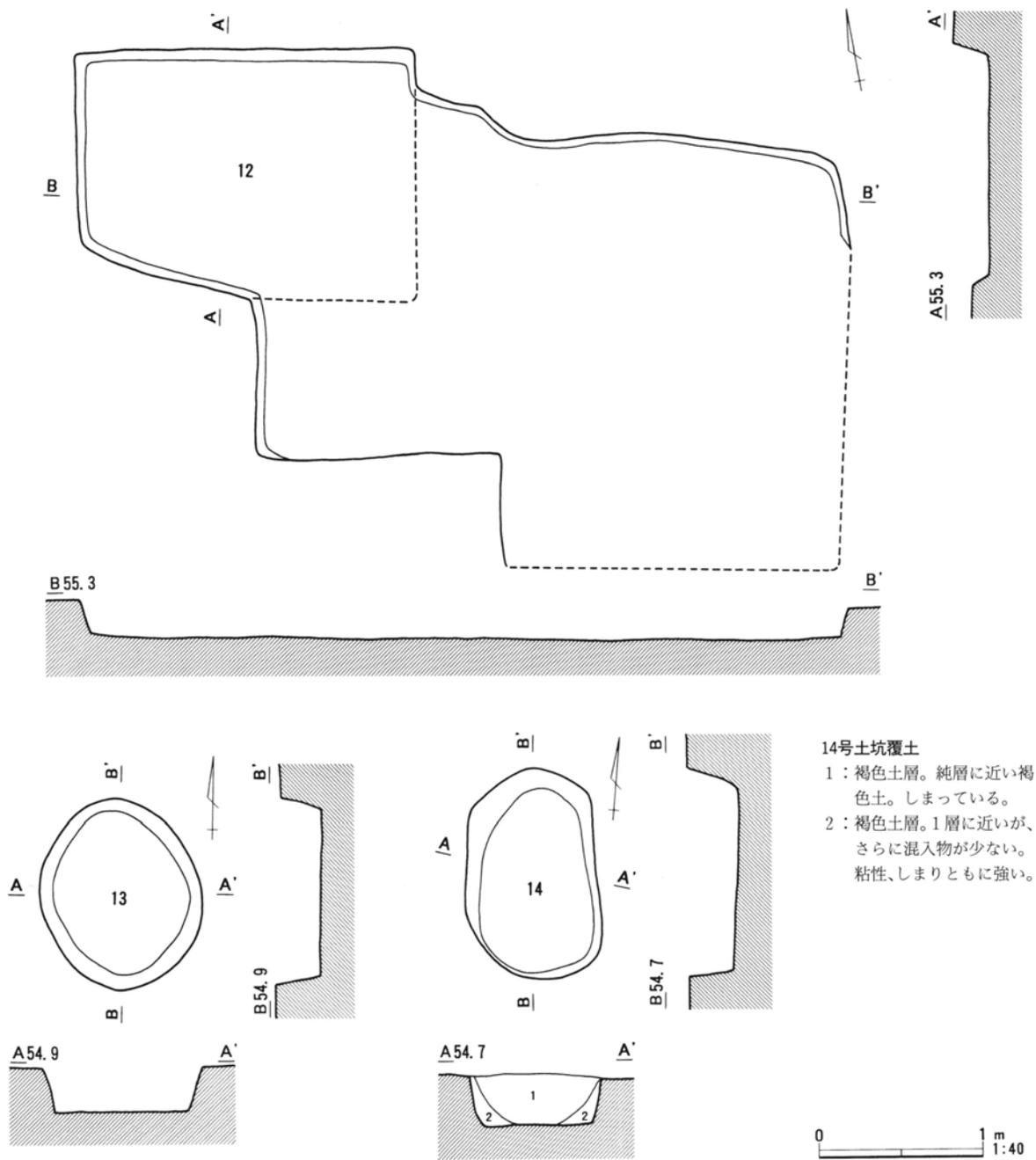


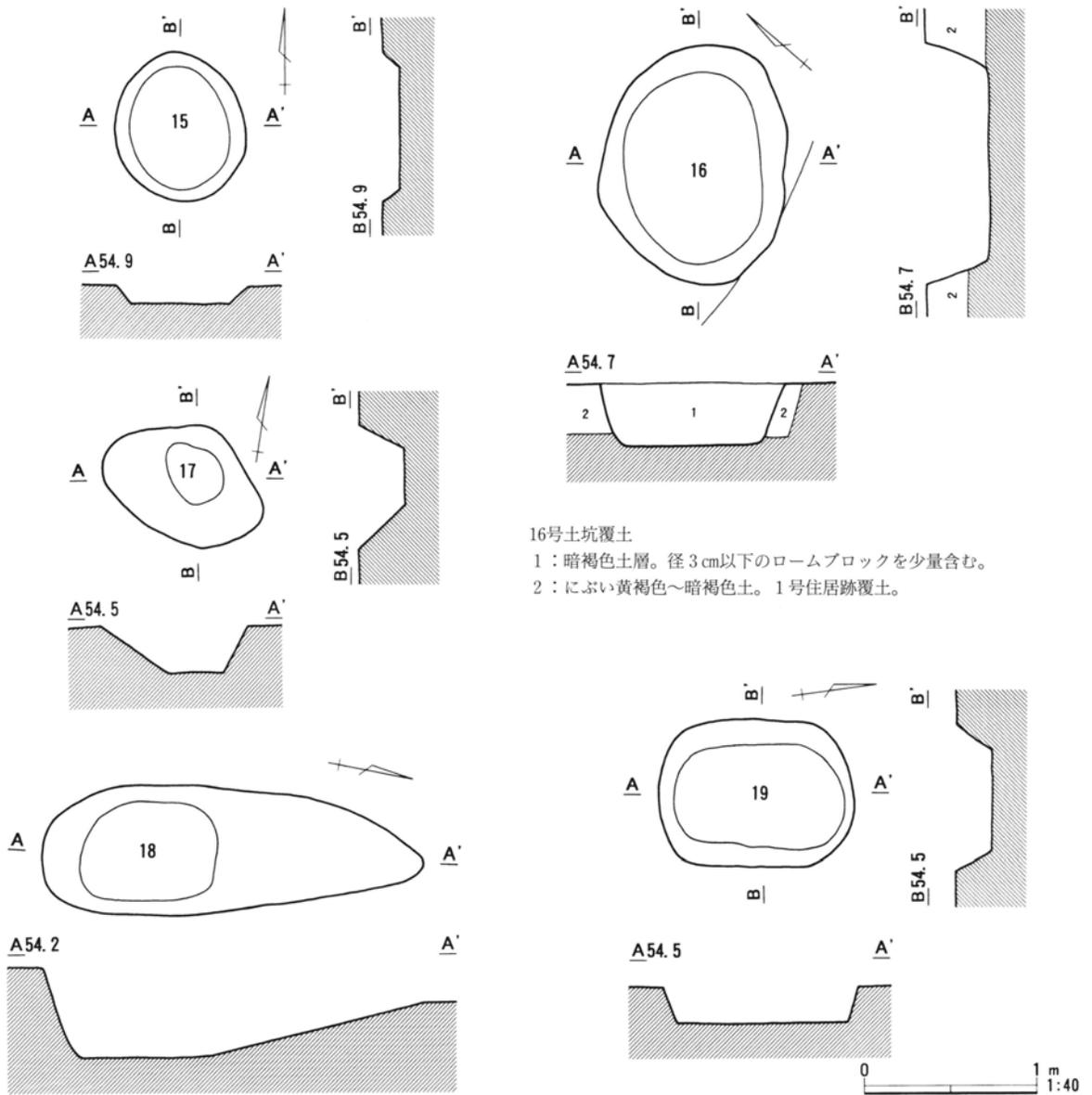
図77 12～14号土坑平面図および断面図

18号土坑

遺構 (図78) I区の南端、F-4・G-4グリッドに位置する。重複する6号溝を切っている。平面形は細長い楕円形で、長軸長220cm、短軸長74cm、深さは20cmである。重複関係から、中世以降の土坑である。

19号土坑

遺構 (図78) I区の南端、G-4グリッドに位置する。重複する6号溝を切っている。平面形は楕円をしており、長軸長112cm、短軸長82cm、深さは20cmである。重複関係から、中世以降の土坑である。



16号土坑覆土

- 1：暗褐色土層。径3cm以下のロームブロックを少量含む。
- 2：にぶい黄褐色～暗褐色土。1号住居跡覆土。

図78 15～19号土坑平面図および断面図

20・21号土坑

遺構 (図80) I区の南端、G-4グリッドに位置し、2基は隣接している。20号土坑は6号溝を僅かに切っている。平面形は不整形で、長軸長145cm、短軸方向での最大長102cm、深さは52cmである。21号土坑は、6号溝に切られている。平面形は、やや胴の張る隅丸方形に近い。長軸長は160cm、深さは24cmである。底面は平坦である。

22号土坑

遺構 (図80) I区の南端、G-4グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸長78cm、短軸長62cm、深さは35cmである。

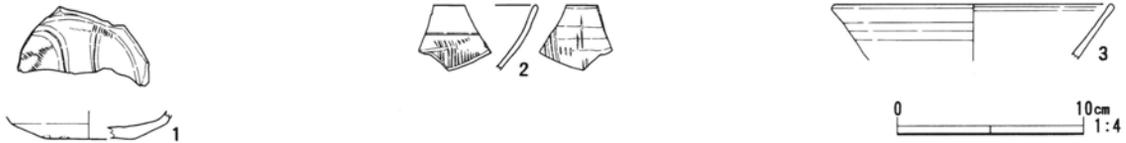


図79 12・17号土坑出土遺物実測図

表39 12・17号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	中国青磁皿	口径 — 底径 (4.6) 器高 (1.6)	内面に線刻文。底部中央胎土中に気泡あり。	内・外面一施釉。底部、左回転ケズリ、露胎。	胎土は密で硬い。釉一灰緑色、胎土一明灰色。	同安窯系。底部の一部残存。SK-12
2	中国青磁碗	口径 — 底径 — 器高 (3.5)	口縁部でゆるやかに内彎する。	施釉。	白色粒。緑灰色。	同安窯系。SK-12
3	灰釉陶器塊	口径 (14.9) 底径 — 器高 (3.0)	体部は直線的に立ち上がる。	内面一施釉。外面一回転ナデ・露胎。	胎土は密で硬く淡灰褐色。釉は緑灰色。	体部から口縁部の一部。SK-17

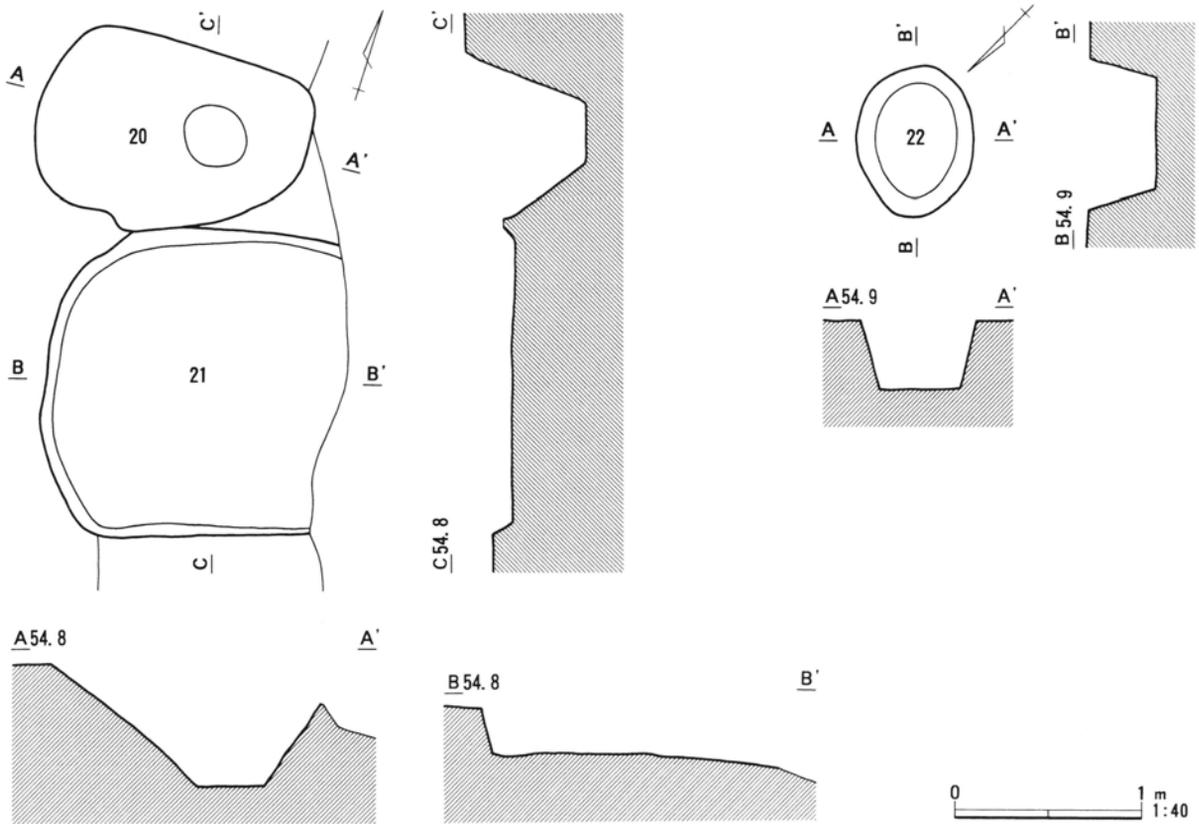


図80 20～22号土坑平面図および断面図

23号土坑

遺構 (図81) I区の南西縁、F3～G3グリッドに位置する。西側の一部は調査区外にある。一応土坑に含めて記載するが、後述するようにかわらけが集中して多量に出土しており、かわらけやその他の遺物が廃棄された遺構である。

平面形は、不整形である。平面形から見て、複数の落ち込みが重複している可能性が考えられるが、調査時点では細かな重複関係をとらえることはできなかった。東側のほぼ中央で4号住居跡のカマドを切っており、数箇所ピットと重複している。最大長は南北方向で7m、東西方向で8m、確認面からの深さは6～35cmである。北側の壁はゆるやかに立ち上がり、南側および東側の壁は、垂直に近い傾斜で立ち上がる。底面にはかなり凹凸がみとめられる。

底面の中央やや東寄りで、ほぼ楕円形に広がる焼土面を確認した。焼土面は、長径82cm、短径68cmである。焼土の残存状態から見て、カマドの燃焼部の残骸である可能性が高いと考えられた。本遺構は、この焼土面をカマドとする住居跡を壊して造られたのであろう。北側の壁が、近接する3b号住居跡南壁とほぼ平行するのは、本遺構が壊した遺構と関連するのかもしれないが、断定する根拠はえられていない。底面でピットを17個確認しているが、本遺構に伴うものかは確定できない。

かわらけがとくに集中する部分の覆土は、黒みがかった土であった。

遺物 (図82～85、表40～48、図版23) かわらけを主とする多量の遺物が出土している。遺物は、本遺構の南西壁寄りで、80×220cmの範囲に集中して出土しており、調査区外に続いている。また、遺物が集中する範囲は、確認面から底面にかけて、26cm前後の幅に収まるようであった。

本遺構の上層で出土したかわらけ及び、遺構覆土中のかわらけ以外の遺物はG-3グリッドとして取り上げたものである(図83:1～47、図84:48～59)。中世土器甕(60)と硯(61)は、底面直上から出土している。図85:62～118のかわらけは、遺構覆土中出土として取り上げた遺物である。かわらけの年代は、15世紀後半と考えられる。

表40 23号土坑出土遺物観察表(1)

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	中世土器 かわらけ	口径 6.4 底径 3.0 器高 2.0	口縁部は内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	2/3。煤付着。
2	中世土器 かわらけ	口径 6.5 底径 3.8 器高 2.0	口縁部は内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	1/2。底部外面木目圧痕。
3	中世土器 かわらけ	口径 7.1 底径 4.0 器高 2.4	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	ほぼ完形。底部外面木目圧痕。
4	中世土器 かわらけ	口径 7.1 底径 4.1 器高 1.8	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/2欠損。
5	中世土器 かわらけ	口径 7.1 底径 4.5 器高 1.9	口縁部は直線的に立ち上がり、中位で内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部一部欠損。
6	中世土器 かわらけ	口径 (7.3) 底径 3.7 器高 2.3	口縁部は直線的に立ち上がり、中位でゆるやかに内彎する。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部2/3欠損。



図81 23号土坑平面図および断面図

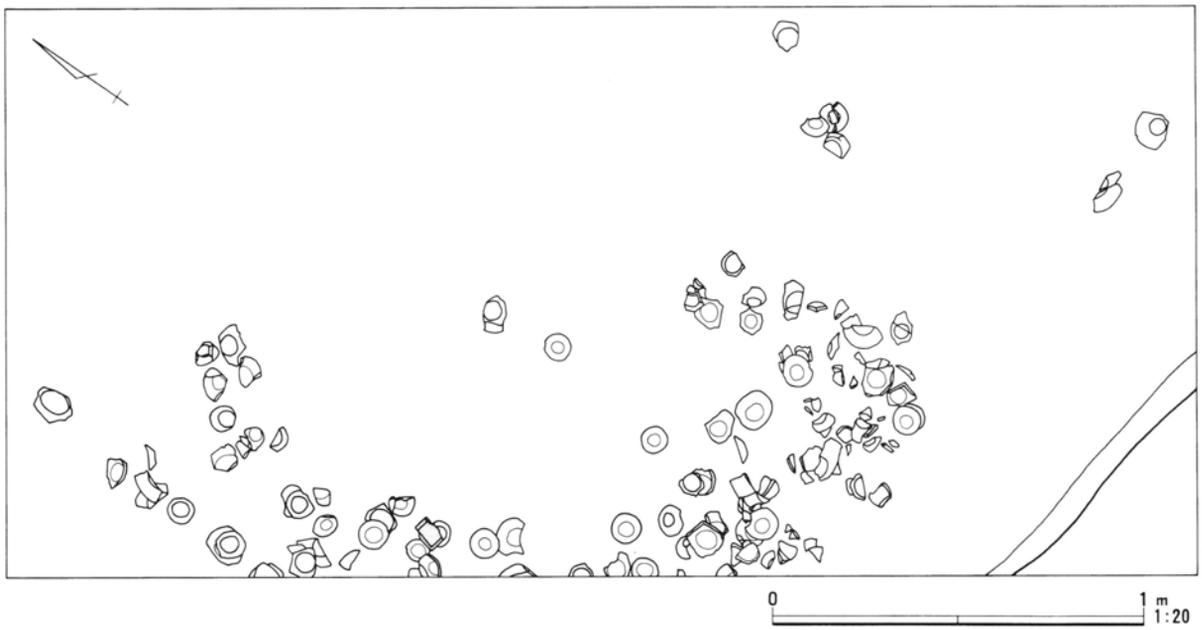


図82 23号土坑遺物出土状況

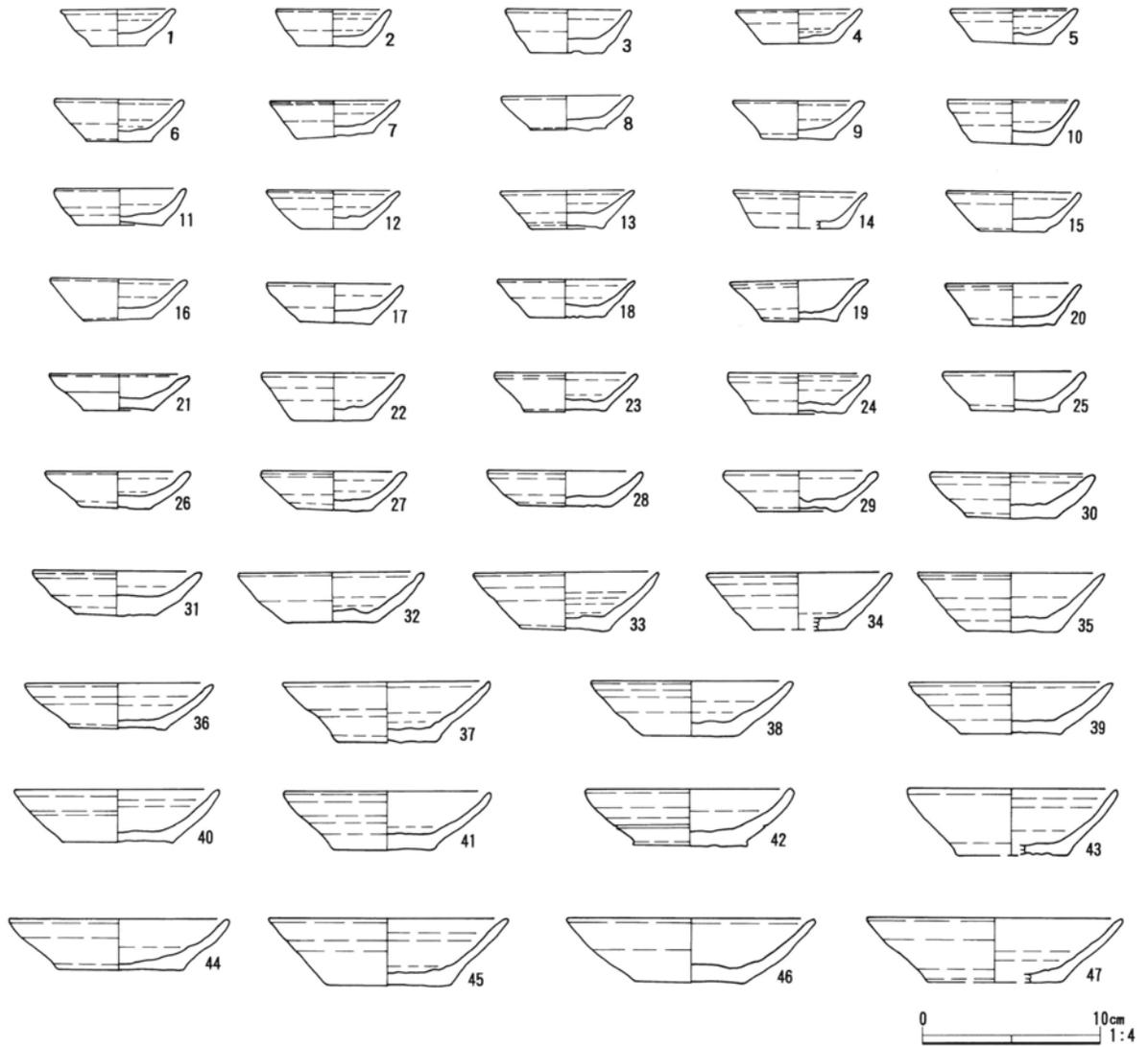


図83 23号土坑出土遺物実測図(1)

表41 23号土坑出土遺物観察表(2)

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
7	中世土器 かわらけ	口径 7.3 底径 4.3 器高 1.9	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい黄橙色。	2/3。底部外面木目圧痕。
8	中世土器 かわらけ	口径 7.4 底径 4.1 器高 1.8	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口唇部一部欠損。
9	中世土器 かわらけ	口径 (7.4) 底径 4.2 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	1/2。
10	中世土器 かわらけ	口径 7.4 底径 4.3 器高 2.4	口縁部は直線的に立ち上がり、中位でゆるやかに内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部一部欠損。
11	中世土器 かわらけ	口径 7.4 底径 4.7 器高 2.0	口縁部は内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/2欠損。底部外面木目圧痕。

表42 23号土坑出土遺物観察表(3)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
12	中世土器 かわらけ	口径 7.5 底径 3.7 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部一部欠損。
13	中世土器 かわらけ	口径 (7.5) 底径 4.1 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部3/4欠損。
14	中世土器 かわらけ	口径 (7.5) 底径 (5.0) 器高 2.0	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	2/5。
15	中世土器 かわらけ	口径 7.6 底径 3.8 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	完形。
16	中世土器 かわらけ	口径 7.7 底径 3.9 器高 2.2	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	完形。
17	中世土器 かわらけ	口径 7.8 底径 4.0 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	3/5。
18	中世土器 かわらけ	口径 7.8 底径 4.2 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/4欠損。 底部外面木目圧痕。
19	中世土器 かわらけ	口径 7.8 底径 4.2 器高 2.2	口縁部はゆるやかに外反しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部一部欠損。
20	中世土器 かわらけ	口径 7.8 底径 4.6 器高 2.2	口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部は外反する。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	1/2。
21	中世土器 かわらけ	口径 (7.9) 底径 4.0 器高 2.0	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/2欠損。
22	中世土器 かわらけ	口径 (8.0) 底径 4.2 器高 2.5	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部2/3欠損。
23	中世土器 かわらけ	口径 8.0 底径 4.6 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	1/2。
24	中世土器 かわらけ	口径 (8.0) 底径 5.0 器高 2.2	口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部で内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	橙色。	口縁部1/2欠損。
25	中世土器 かわらけ	口径 (8.1) 底径 5.0 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部2/3欠損。
26	中世土器 かわらけ	口径 8.2 底径 3.9 器高 2.0	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/3欠損。
27	中世土器 かわらけ	口径 8.2 底径 4.1 器高 2.1	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/4欠損。 煤付着。底部外面木目圧痕。
28	中世土器 かわらけ	口径 (8.6) 底径 5.0 器高 1.9	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	1/3。
29	中世土器 かわらけ	口径 (8.7) 底径 4.7 器高 2.2	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	1/4。
30	中世土器 かわらけ	口径 9.3 底径 5.0 器高 2.4	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい褐色。	口縁部1/2欠損。
31	中世土器 かわらけ	口径 (9.4) 底径 4.4 器高 2.4	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	灰褐色。	口縁部1/4欠損。

表43 23号土坑出土遺物観察表(4)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
32	中世土器 かわらけ	口径 (10.4) 底径 5.0 器高 2.7	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	1/4。
33	中世土器 かわらけ	口径 10.4 底径 5.0 器高 3.2	口縁部は直線的に立ち上がり、中位で内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/2欠損。
34	中世土器 かわらけ	口径 (10.5) 底径 5.0 器高 3.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	1/4。
35	中世土器 かわらけ	口径 (10.6) 底径 5.2 器高 3.2	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。底部内面横ナデ。	にぶい橙色。	2/3。
36	中世土器 かわらけ	口径 (10.7) 底径 5.5 器高 2.5	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	2/3。底部外面木目圧痕。
37	中世土器 かわらけ	口径 (10.7) 底径 5.6 器高 3.3	口縁部は直線的に立ち上がり、中位でゆるやかに内彎する。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい黄橙色。	口縁部3/5欠損。
38	中世土器 かわらけ	口径 (11.4) 底径 5.4 器高 3.0	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	1/4。
39	中世土器 かわらけ	口径 (11.5) 底径 5.5 器高 2.7	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/2欠損。
40	中世土器 かわらけ	口径 (11.5) 底径 6.2 器高 2.9	口縁部は直線的に立ち上がり、中位でゆるやかに内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	1/4。
41	中世土器 かわらけ	口径 11.8 底径 5.6 器高 3.1	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/3欠損。
42	中世土器 かわらけ	口径 (11.8) 底径 6.4 器高 3.1	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	橙色。	2/3。
43	中世土器 かわらけ	口径 (11.9) 底径 6.2 器高 3.6	口縁部は直線的に立ち上がり、中位で内彎する。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	橙色。	1/4。
44	中世土器 かわらけ	口径 (12.3) 底径 7.1 器高 2.7	口縁部は外反しつつ立ち上がり、中位で内彎する。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	1/6。
45	中世土器 かわらけ	口径 (13.4) 底径 6.9 器高 3.6	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部5/6欠損。
46	中世土器 かわらけ	口径 (14.0) 底径 6.2 器高 3.4	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部4/5欠損。
47	中世土器 かわらけ	口径 (14.4) 底径 (7.5) 器高 3.5	口縁部は直線的に立ち上がり、中位でゆるやかに内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	1/5。
48	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 (5.2) 器高 (1.5)	体部は直線的に立ち上がる。	回転ナデ。底部左回転糸切り。	胎土は密で硬く灰褐色。	内面にスラグ付着。
49	中国青磁 碗	口径 — 底径 — 器高 (4.4)	口縁部は直線的に立ち上がる。	内面一施釉・刻花文、外面一施釉。	胎土は密で硬く灰白色。釉は明灰緑色。	口縁部の一部残存。龍泉窯系。
50	中国青磁 碗	口径 (14.4) 底径 — 器高 (3.1)	口縁部はわずかに内彎して立ち上がる。	内・外面一施釉・貫入。	胎土は密で硬く灰白色。釉は灰色。	口縁部の一部残存。無文か。龍泉窯系。
51	中国青磁 碗	口径 (16.1) 底径 — 器高 (1.7)	口縁部は直線的に立ち上がる。	内面一施釉・刻花文、外面一施釉。	胎土は密で硬く灰色。釉は灰緑色。	口縁部の一部残存。龍泉窯系。

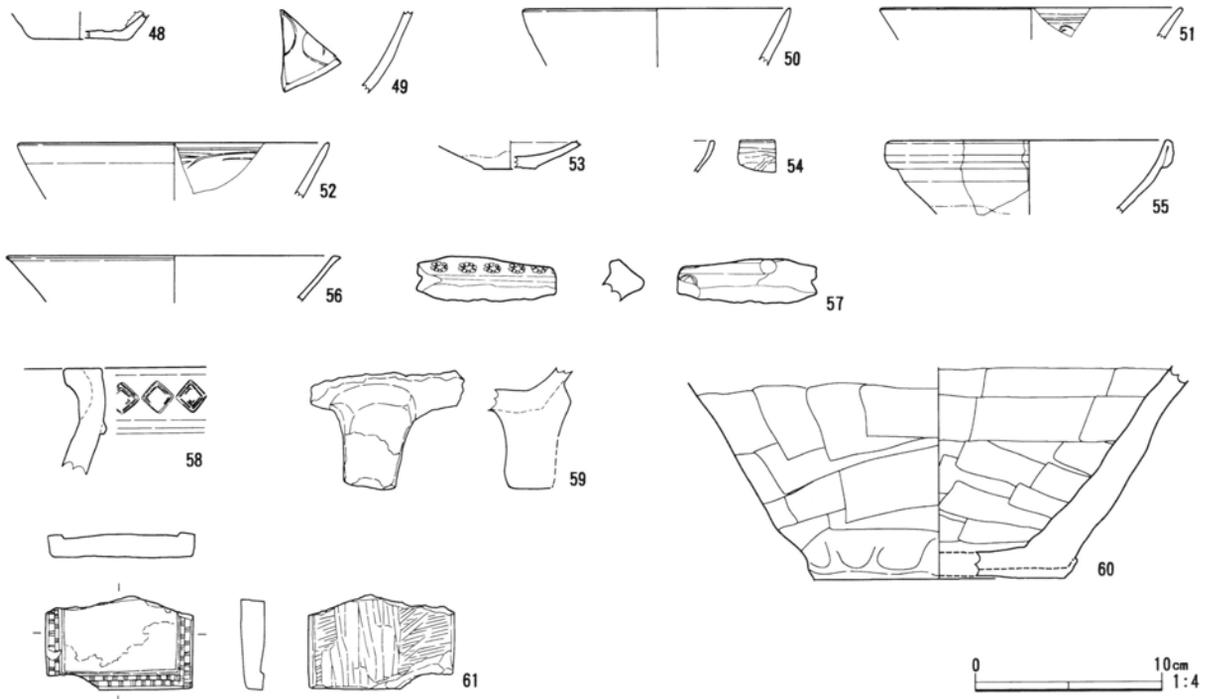


図84 23号土坑出土遺物実測図(2)

表44 23号土坑出土遺物観察表(5)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
52	中国青磁碗	口径 (16.6) 底径 — 器高 (3.0)	口縁部は直線的に立ち上がる。	内面一施釉 c 刻花文、外面一施釉。	胎土は密で硬く淡灰褐色。釉は、灰緑色。	口縁部の一部残存。 龍泉窯系。
53	中国白磁皿	口径 — 底径 (2.9) 器高 (1.5)	体部は直線的に立ち上がる。	底部を除く内・外面一施釉・貫入、底部外面一回転ナデ。底部一回転ケズリ蛇の目高台。	胎土は密で硬く灰白色。釉は緑白色。	底部の一部が残存。釉下に化粧土を施すか。
54	中国白磁碗	口径 — 底径 — 器高 (1.7)	口縁部は口唇部に向けて膨らみやや内彎する。	口縁から外部にかけて面取り。外面に陽刻文。内・外面一施釉・貫入。	胎土は密で軟く白色。	口縁部の一部残存。外面は型成形か。
55	中国白磁碗	口径 (15.0) 底径 — 器高 (3.9)	口縁部は内彎し、口唇部で外側に折り返して二重につくる。	底部を除く内・外面一施釉。体部下半部外面一回転ケズリ。露胎。	胎土は密で硬く白色。釉も白色。	わずかに釉垂。
56	中国白磁碗	口径 (18.0) 底径 — 器高 (2.5)	口縁部の一部で軽く外反する。	施釉。	胎土は密で硬く白色。釉は透明色。	
57	中世土器火鉢	口径 — 底径 — 器高 (2.2)	口縁部を末広がりを作る。	ヘラケズリの後、ナデ。口縁部にスタンプ文。	やや粗な褐色粒。淡褐色。	口縁部の一部のみ残存。
58	中世土器火鉢	口径 — 底径 — 器高 (5.7)	口縁部内側は強くない彎曲。外面は直線的に立ち上がり、直角の稜がつく。	口縁部一ナデ。内部、ヘラケズリ。口縁部外縁にスタンプ文。スタンプ文下部に突帯添付。	石英。暗灰色。断面一灰色。	口縁部の一部のみ残存。
59	中世土器火鉢	口径 — 器高 (6.4) 脚高 4.2	鉢は底部から直線的に立ち上がり、脚は直線的に伸びる。	ヘラケズリの後、ナデ。	石英。暗灰色。	鉢の一部と脚のみ残存。

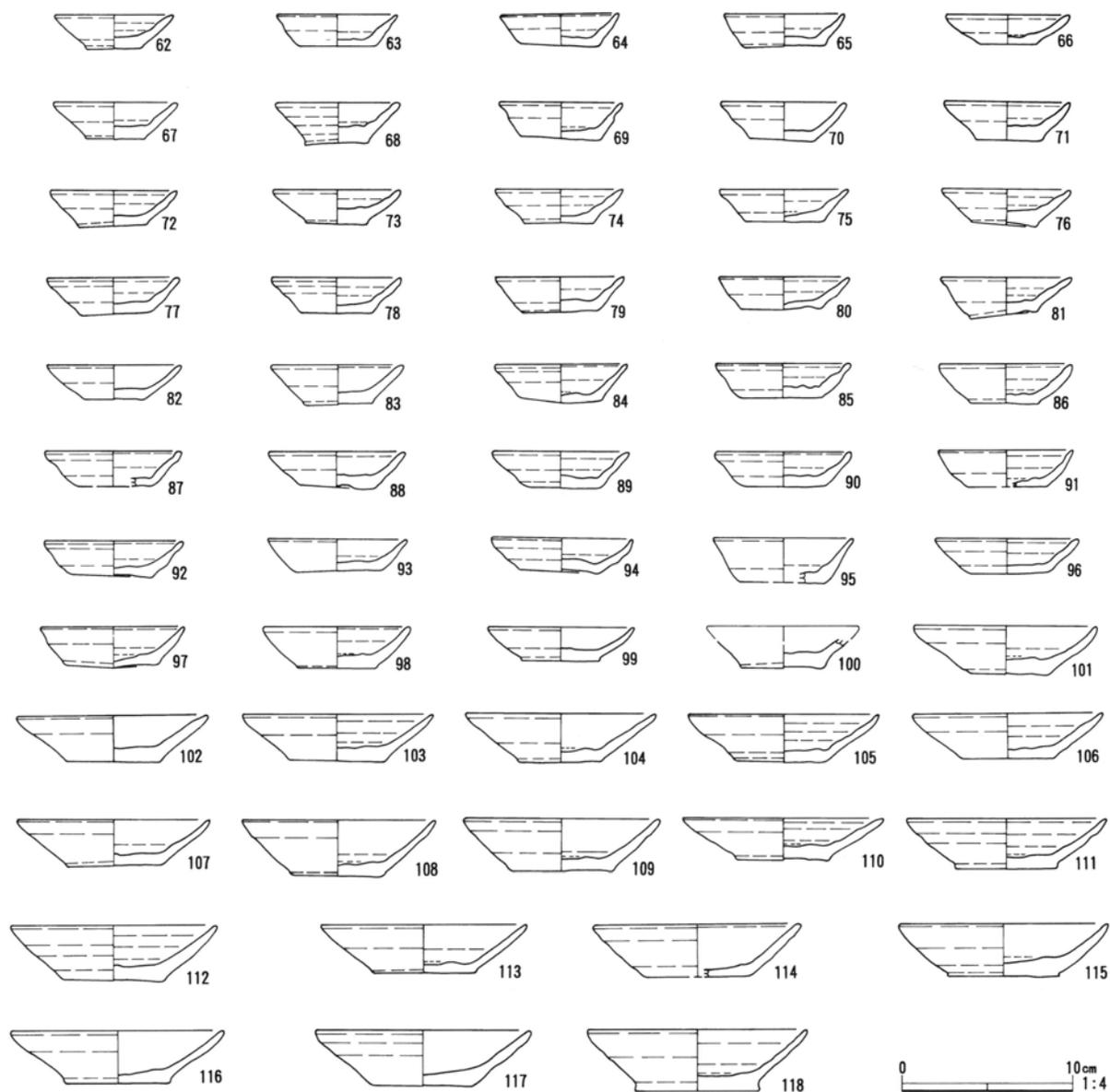


図85 23号土坑出土遺物実測図(3)

表45 23号土坑出土遺物観察表(6)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
60	中世土器 甕	口径 — 底径 (13.0) 器高 (11.0)	粘土紐積み上げ成形。体部は直線的に立ち上がる。	内・外面—タテ方向ヘラケズリ・横方向ヘラケズリ・ヨコナデ。	白色粒・赤褐色粒・礫。外面—暗赤褐色～暗灰褐色、内面—茶褐色。	底部が残存。底部に穿孔。内面に焦げ、外面に煤付着。
61	石製品 硯	長さ (4.8) 幅 7.9 厚さ 1.4	全体を長方形に作り、硯面は凸状に彎曲させる。	裏側一縦方向ノミ。周囲に線刻文。		1/2程度残存か。
62	中世土器 かわらけ	口径 6.9 底径 3.2 器高 2.0	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/4欠損。底部外面木目圧痕。
63	中世土器 かわらけ	口径 (7.0) 底径 (4.5) 器高 1.8	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	1/3。

表46 23号土坑出土遺物観察表(7)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
64	中世土器 かわらけ	口径 7.0 底径 4.6 器高 1.9	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	橙色。	口唇部一部欠損。
65	中世土器 かわらけ	口径 7.0 底径 4.7 器高 1.9	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	完形。
66	中世土器 かわらけ	口径 (7.2) 底径 (3.3) 器高 1.7	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	2/5。
67	中世土器 かわらけ	口径 7.2 底径 3.5 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	完形。
68	中世土器 かわらけ	口径 7.2 底径 3.7 器高 2.0	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	橙色。	口縁部1/3欠損。
69	中世土器 かわらけ	口径 7.2 底径 4.6 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部下に凹面を形成。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/3欠損。
70	中世土器 かわらけ	口径 7.3 底径 3.8 器高 2.2	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/3欠損。
71	中世土器 かわらけ	口径 7.4 底径 3.8 器高 2.2	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/3欠損。
72	中世土器 かわらけ	口径 7.4 底径 4.0 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がり、中位でゆるやかに内彎する。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	完形。
73	中世土器 かわらけ	口径 7.5 底径 3.5 器高 2.0	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	口唇部一部欠損。
74	中世土器 かわらけ	口径 7.5 底径 4.0 器高 1.9	口縁部は外反しつつ立ち上がり、中位でゆるやかに内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい黄橙色。	口唇部一部欠損。
75	中世土器 かわらけ	口径 7.5 底径 4.7 器高 1.9	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	橙色。	口唇部一部欠損。
76	中世土器 かわらけ	口径 7.6 底径 3.9 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口唇部一部欠損。
77	中世土器 かわらけ	口径 7.6 底径 4.1 器高 2.2	口縁部は内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/3欠損。
78	中世土器 かわらけ	口径 (7.6) 底径 (4.3) 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部2/3欠損。底部外面木目圧痕。
79	中世土器 かわらけ	口径 7.6 底径 4.5 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	ほぼ完形。底部外面木目圧痕。
80	中世土器 かわらけ	口径 7.6 底径 4.7 器高 1.9	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	ほぼ完形。
81	中世土器 かわらけ	口径 7.7 底径 3.9 器高 2.4	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/2欠損。煤付着底部外面木目圧痕。
82	中世土器 かわらけ	口径 (7.8) 底径 (3.4) 器高 2.9	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/2欠損。
83	中世土器 かわらけ	口径 7.8 底径 4.0 器高 2.3	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい褐色。	ほぼ完形。煤付着。
84	中世土器 かわらけ	口径 7.8 底径 4.8 器高 2.2	口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部で内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/4欠損。

表47 23号土坑出土遺物観察表(8)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
85	中世土器 かわらけ	口径 7.8 底径 4.9 器高 2.0	口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部で内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部一部欠損。
86	中世土器 かわらけ	口径 7.9 底径 4.1 器高 2.3	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/3欠損。
87	中世土器 かわらけ	口径 7.9 底径 4.3 器高 2.0	口縁部は直線的に立ち上がり、中位で内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	1/2。
88	中世土器 かわらけ	口径 7.9 底径 4.4 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/4欠損。 底部外面木目圧痕。
89	中世土器 かわらけ	口径 8.0 底径 3.9 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/2欠損。
90	中世土器 かわらけ	口径 8.0 底径 4.7 器高 2.0	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/2欠損。
91	中世土器 かわらけ	口径 (8.0) 底径 (4.7) 器高 (2.1)	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	1/3。
92	中世土器 かわらけ	口径 8.0 底径 5.4 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がり、中位で内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/4欠損。
93	中世土器 かわらけ	口径 8.1 底径 4.9 器高 1.9	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	橙色。	ほぼ完形。
94	中世土器 かわらけ	口径 8.2 底径 4.5 器高 2.0	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/4欠損。
95	中世土器 かわらけ	口径 (8.2) 底径 (5.0) 器高 2.5	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	1/4。
96	中世土器 かわらけ	口径 8.4 底径 4.6 器高 2.0	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	ほぼ完形。
97	中世土器 かわらけ	口径 8.4 底径 5.5 器高 2.4	口縁部は内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/4欠損。
98	中世土器 かわらけ	口径 (8.6) 底径 (4.5) 器高 2.4	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	橙色。	1/2。
99	中世土器 かわらけ	口径 (8.6) 底径 4.6 器高 1.9	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	橙色。	1/2。
100	中世土器 かわらけ	口径 (9.0) 底径 4.9 器高 (2.4)	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい黄橙色。	口縁部欠損。
101	中世土器 かわらけ	口径 10.8 底径 4.4 器高 2.8	口縁部は直線的に立ち上がり、中位でゆるやかに内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/3欠損。
102	中世土器 かわらけ	口径 11.1 底径 5.5 器高 2.7	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/4欠損。
103	中世土器 かわらけ	口径 11.1 底径 5.6 器高 2.8	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	完形。
104	中世土器 かわらけ	口径 (11.2) 底径 4.8 器高 2.9	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/2欠損。
105	中世土器 かわらけ	口径 11.2 底径 5.4 器高 2.8	口縁部は外反しつつ立ち上がり、中位でゆるやかに内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/2欠損。

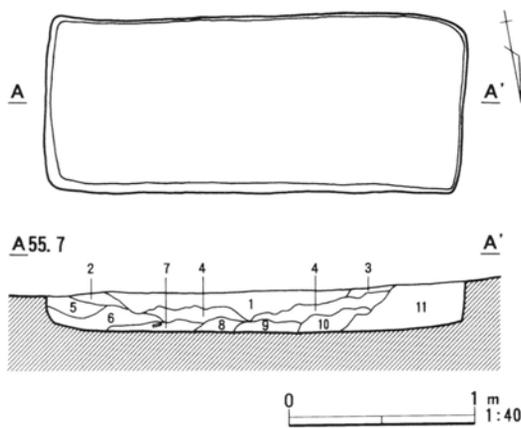
表48 23号土坑出土遺物観察表(9)

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
106	中世土器 かわらけ	口径 (11.2) 底径 5.3 器高 2.6	口縁部は直線的に立ち上がり、中位でゆるやかに内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/2欠損。
107	中世土器 かわらけ	口径 11.2 底径 5.5 器高 2.7	口縁部は直線的に立ち上がり、中位でゆるやかに内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	完形。
108	中世土器 かわらけ	口径 (11.3) 底径 5.3 器高 2.2	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部3/4欠損。
109	中世土器 かわらけ	口径 (11.6) 底径 6.0 器高 3.0	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	1/2。
110	中世土器 かわらけ	口径 (11.7) 底径 5.4 器高 2.4	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部5/6欠損。
111	中世土器 かわらけ	口径 (11.7) 底径 6.0 器高 2.9	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	1/4。
112	中世土器 かわらけ	口径 12.0 底径 5.8 器高 3.2	口縁部は直線的に立ち上がり、中位でゆるやかに内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口唇部一部欠損。
113	中世土器 かわらけ	口径 (12.0) 底径 (6.0) 器高 2.8	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	1/4。
114	中世土器 かわらけ	口径 (12.2) 底径 (6.2) 器高 3.0	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	1/4。
115	中世土器 かわらけ	口径 (12.3) 底径 6.6 器高 3.1	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	橙色。	口縁部3/4欠損。
116	中世土器 かわらけ	口径 (12.4) 底径 6.2 器高 3.0	口縁部は外反しつつ立ち上がり、中位でゆるやかに内彎する。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部2/3欠損。
117	中世土器 かわらけ	口径 (12.6) 底径 (5.7) 器高 3.2	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	1/4。
118	中世土器 かわらけ	口径 (12.8) 底径 (7.2) 器高 3.5	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	橙色。	口縁部3/4欠損。

24号土坑

遺構 (図86、図版12) II区で検出した土坑は、2基である。次の25号土坑も含め形態的にはいわゆる「芋穴」に類するものであるが、覆土がそれほど新しいようには見えず、確認面も住居跡とあまり変わらないため、ひとまず土坑に含め記載することとした。

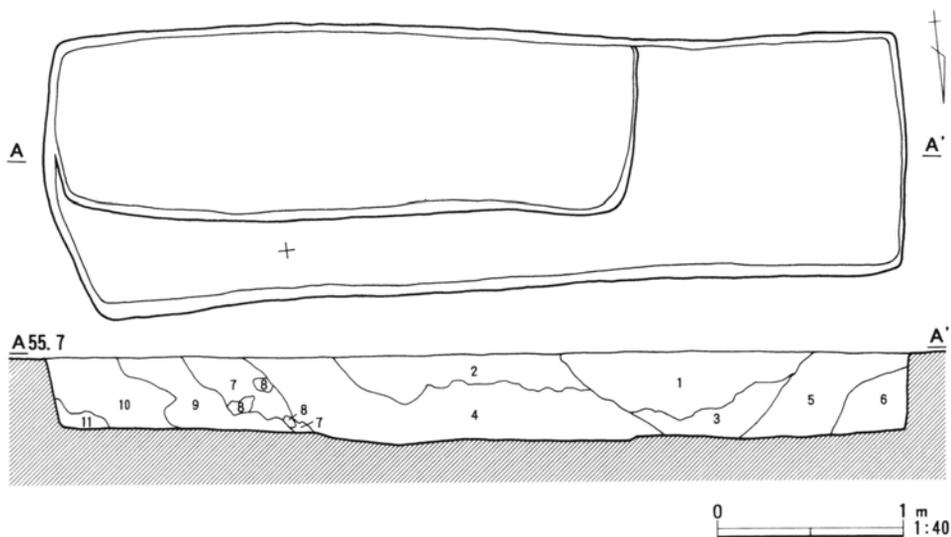
II区の東半ほぼ中央、B1-34グリッドを中心に位置し、確認面は、II a層中である。11・12号住居跡を切って造られている。面的に確認した時点では、住居跡の覆土中に本遺構の輪郭がくっきり浮かび上がるということはなく、住居跡の覆土との違いはそれほど大きくはないかに見えた。平面形は、ほぼ長方形で、長軸長224cm、短軸長93cm、長軸方位はN-80°-Wである。四壁は垂直に近く掘り込まれ、底面は中央が微妙に深い船底状である。覆土は11層で、全体にロームブロックが斑状に混じる、いわゆる埋め土である。古墳時代の土器細片が出土しているのみである。



24号土坑覆土

- 1：褐色土層。ほぼ同量の暗褐色土とロームの混合土。ロームは、径4～20mm大のブロック。ややしまっており、粘性もある。
- 2：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒、ローム小ブロックを局部的に含む。
- 3：暗褐色土層。2層に近いが、ローム小ブロックがやや少ない。
- 4：暗褐色土層。暗褐色土を主に、ロームブロックを斑状に含む。
- 5：暗褐色土層。1・2層に近いが、ローム粒・ロームブロックが2層より多く、1層より明らかに少ない。
- 6：暗褐色土層。5層に近いが、ロームブロックの輪郭がはっきりしている。
- 7：暗褐色土層。4層に近いが、やや暗褐色土が多い。
- 8：褐色土層。1層に近いが、暗褐色土が若干多い。
- 9：暗褐色土層。4層に近いが、ロームブロックの輪郭がはっきりしている。
- 10：褐色土層。1層に近いが、暗褐色土が若干多い。ブロックは、径50mm大以上のものが多い。
- 11：暗褐色土層。3層に近いが、ロームが多い。ロームは均質に含むが、輪郭が不明瞭。

図86 24号土坑平面図および断面図



25号土坑覆土

- 1：褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒、径5～10mm大のローム小ブロックを含む。土器粒、焼土粒を少量含む。
- 2：褐色土層。1層に近いが、径30～40mm大のロームブロックを含む。
- 3：暗褐色土層。2層に近いが、やや黒み強く、粘性あり。
- 4：暗褐色土層。1層に近いが、径10～30mm大のロームブロックがかなり多い。
- 5：暗褐色土層。3層に近いが、ロームブロックがやや少ない。
- 6：暗褐色土層。5層に近いが、ロームブロックが大きく、多い。
- 7：褐色土層。暗褐色土を主に、ローム粒・ロームブロックを含む。ローム小ブロックは微量で、径70～80mm大のロームブロックが点在する。
- 8：褐色土層。ロームの大ブロック。
- 9：褐色土層。暗褐色土とロームの混合土。よく混合しており、ローム小ブロックはよく見えない。
- 10：褐色土層。4層に近いが、径5～20mm大のロームブロックを多く含む。ロームブロックは、水玉様に見える。
- 11：褐色土層。ロームを主に、暗褐色土を不均質に含む。

図87 25号土坑平面図および断面図

25号土坑

遺構 (図87、図版12) II区のほぼ中央、B1-03・13グリッドを中心に位置する遺構である。確認面は、II a層中である。12・14号住居跡を切って造られているが、やはり住居跡との覆土の違いは一目瞭然というわけにはいかなかった。2基の土坑の重複例であり、小さな古い方の土坑を25 a号土坑、大きな方を25 b号土坑と呼称し記載する。

25 a号土坑は、25 b号土坑の底面に痕跡のみ残る古い段階の土坑である。25 a号土坑へと造り直される前の土坑の痕跡であろう。平面形は長方形に近いが、四辺はかなり丸みをもっている。長軸長316cm、短軸長105cm、長軸方位はN-83°-Wである。底面は西側がやや深い船底状である。

25 b号土坑の平面形は、短辺がやや出っ張った長方形に近い形態である。長軸長は465cm、短軸長は140cm、長軸方位はN-85°-Wである。四壁は垂直に近く掘り込まれ、底面は中央が微妙に深い船底状になるようである。覆土は11層で、全体にロームブロック混じりの土が大きなまとまりをなし流入しており、いわゆる埋め土と見てよい。古墳時代の土器細片が出土しているのみである。

(5) ピット群

検出した中世以降のピットは、遺跡全体、とくにI区でかなりの数にのぼるが、直接伴う遺物が皆無に等しく、また覆土の特徴による判別が困難だったこともあり、時期を限定できるものは極わずかであった。I区の多数のピットに関しては、整理作業の段階で、深さなどによる類別を行ない、配列を再検討したが、結論から述べれば、建物跡と考えられる配置をとらえることはできなかった。

検討結果を列記すれば、以下のようになる。なお並びのとらえられたピット列については、北からA～I列の呼称を用いる(図4)。

まず重複関係から見て、ピットのほとんどは住居跡や溝、かわらけが多量に出土した23号土坑などの遺構よりも新しいことが指摘できる。また、掘り込みがしっかりしたピットの集中する範囲は、ほぼ1号溝の南側、E-2～E-4グリッドを北限とし、E-4、F-4、G-4グリッドの西半以西の、全体に方形に近い範囲に限られること、配列がとらえられたピットの多くは真東-真西の方向の長い列状をなすことが特徴になるようである。

個々の例をあげないが、さらにピットの大きさ、深さ、個々のピットの間隔がかなりまちまちであることも特徴的である。一方ピット列間の間隔は、A-B列間、G-H-I列間などは同じような間隔で並んでいる。B-C列間は開き、D-E-F列間は間隔がかなり密であるが、これはB-C列間に拾い切れていないピットが多数あることと関連しよう。直線上に乗らないピットが含まれるため除いたが、真東-真西方向で部分的に列をなすかに見えるピットは、他にもあげることができる。

以上より、今回検出したピットは、やや不規則な間隔で一方向に並ぶ複数のピット列をなすものが多いとすることができる。確証を欠くが、何らかの耕作痕や植栽の跡が多数含まれると考えるのが最も無難であろう。配列のとらえ切れないピットの中には、掘り込みのしっかりしたものもかなりあり問題が多々残るが、現時点での結論としたい。ただし、I区の縁辺、とくに南隅一帯のピットに関しては、掘り込みがしっかりした大きいものが多く、あるいは上記ピット列とは性格の異なる遺構が含まれる可能性がある。

3 遺構外出土遺物

(1) 縄文時代の遺物

a. 縄文土器 (図88：1～11)

I・II次調査を通じて検出した縄文土器は、破片資料ばかりではあるが、かなりの量にのぼる。総じて摩耗が著しく、細かな文様が見えない破片が大半であるが、胎土・文様の特征から見て、そのほとんどは加曾利E式後半代の土器である。以下、中でも遺存状態のよい破片に限って、記載する。

1は、刺突文の施された口縁部～胴部片である。口縁部が内彎気味に立ち上がる、口径20cm前後の砲弾形の器形になろうか。端部には、部分的に刻みが施され、口縁部の外面には、細い竹管状、あるいは丸棒状工具による刺突列が3列施されている。破片右端では、刺突列間の間隔が変わるらしく、何らかの文様が描かれる可能性もあるが、剥落しており、断定できない。外面には、所々擦痕状の調整痕がみとめられる。にぶい褐色を呈し、大粒の片岩片を含む。焼成は良好である。内外面の一部に黒褐色の付着物がみとめられる。北関東系の前期中葉の土器とも考えたが、確定できない。

2は、無節縄文の施された口縁部片である。端部は内削ぎ状で、直線的に立ち上がる。外面には、輪積痕を明瞭にとどめ、横回転のLの無節縄文が施されている。輪積痕の段には、指頭あるいは角張った工具による押擦が加えられているようにも見えるが、摩耗しており、断定できない。細かな砂粒、酸化鉄粒を含み、にぶい橙色を呈する。焼成良好で、精良な胎土の土器である。前期後半の粗製の土器と考えたが、あるいは時期的にやや下る可能性もある。

3～6は、沈線区画された縦位帯状の縄文帯と無文帯が交互に繰り返される胴部片、7は、条線の施された底部片である。8～11は、隆帯あるいは隆線の施された口縁部片、胴部片である。10には、併走する2本の隆線により文様が描出されている。3～11は、いずれも橙色、あるいはにぶい橙色で、大小砂粒、酸化鉄粒などを多く含む。加曾利E式後半代に属するものと考えられる。

b. 縄文時代の石器 (図88：12)

12は、石製の垂飾である。長さ3.9cm、幅2.8cm、厚さ0.9cmで、灰色の淡い縞の入った乳白色硬質の石材を用いている。左図の左側面にかすかに研磨痕かと思われる痕跡が見られる他は、現礫面をそのまま残している。両側面から穿孔しており、紐擦れなどの痕跡は見られない。

(2) 古墳時代～中世の遺物

a. 古墳～奈良・平安時代の土器・土製品 (図89：1～5・14、図90：1～5、表49)

遺構外出土の古墳～奈良・平安時代の土器に関しては、図89：1～5、図90：1に、I区出土資料を掲載した。大半が時期の異なるピットなどから出土している。

図89：1は、内外面に横方向のミガキが加えられた高坏である。前期に遡る資料と考えるが、他に同時期の土器が見られず、また横ミガキという特異な調整もあり、即断できない。あるいは異なった地域の土器の可能性もあるかと思われる。2は、5世紀代の埴、3は6世紀代の高坏脚部、4・5はさらに下った時期の所産である。1・2は、1号土坑とともに、II区に展開した古い段階の集落が、何らかの形でI区の北半にも及ぶことを物語る資料と言えよう。

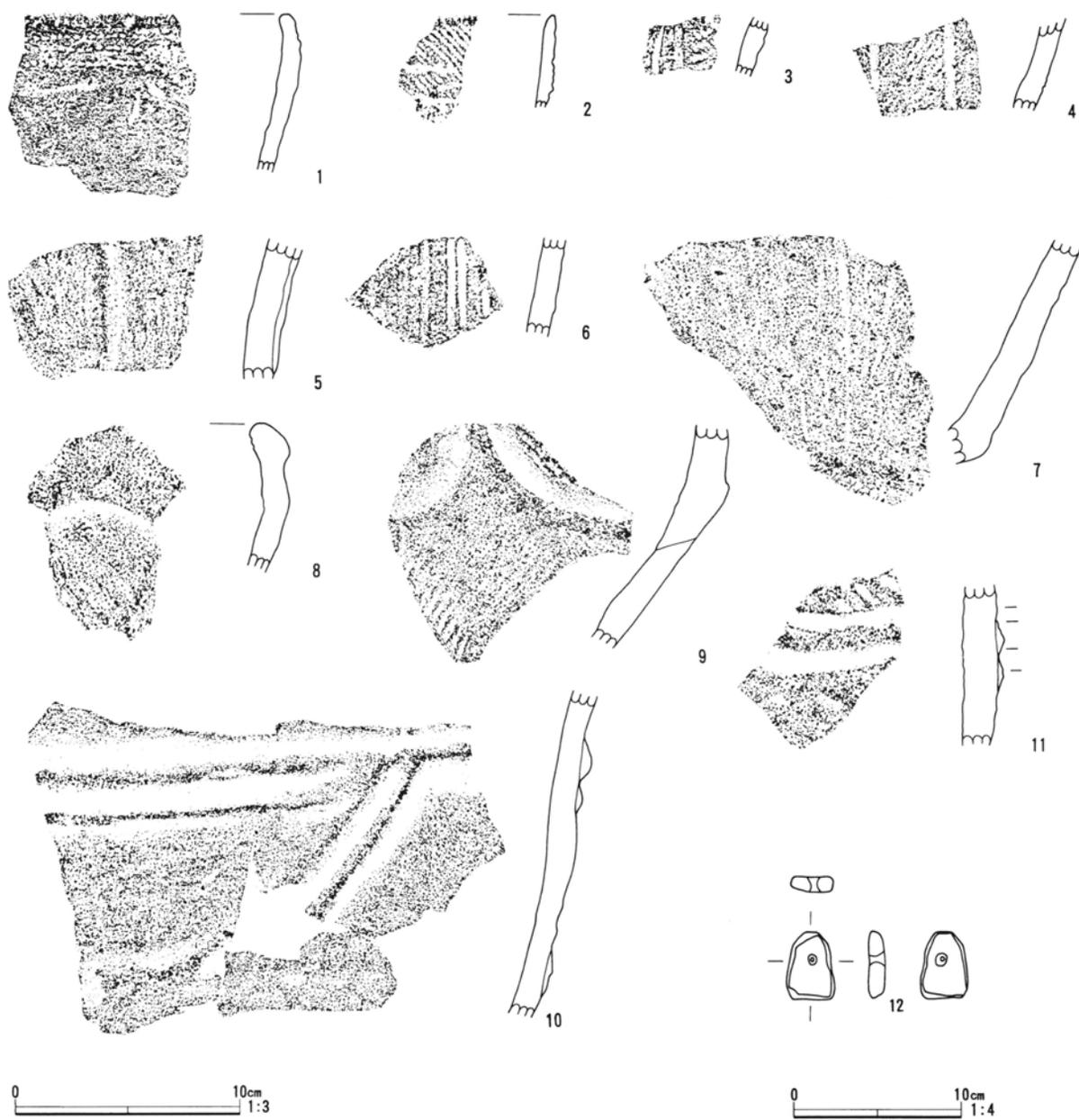


图88 遺構外出土繩文土器拓影圖・繩文石製品実測図

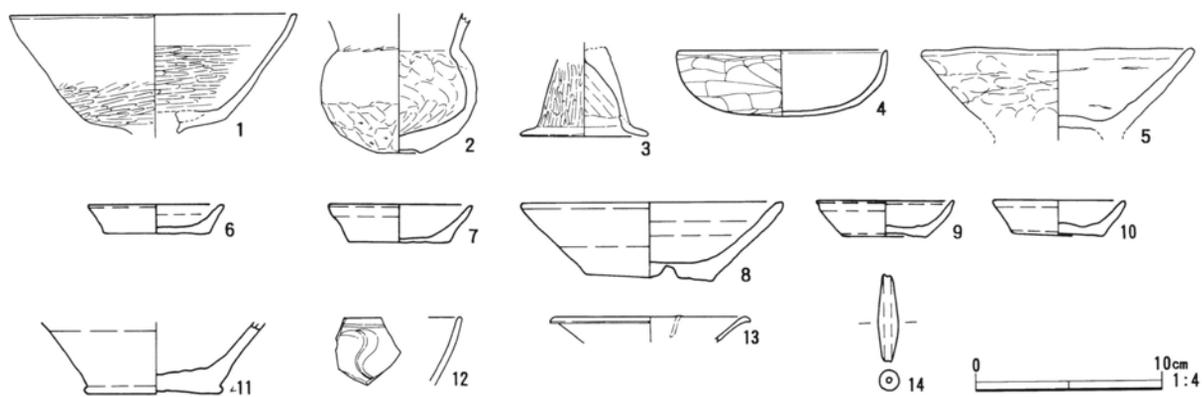


图89 遺構外出土土器・陶磁器・土製品実測図

表49 遺構外出土土器・陶磁器・土製品観察表

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考	
1	土師器 高坏	口径 (15.4) 脚底径 — 器高 (6.3)	体部はゆるやかに立ち上がる。	内・外面—横方向ヘラミガキ。口縁部内面—ヨコナデ。	白色粒。角閃石。明褐色。	脚部を欠損。	
2	土師器 埴	口径 — 底径 2.2 器高 (7.3)	底部はくぼみ底。体部は球状をなし、口縁部は直線的に立ち上がる。	内部—ヘラケズリ・ナデ・指頭圧痕。外部—ヘラケズリ。口縁部—ヨコナデ。	褐色粒・角閃石・白色粒。橙色。	体部の1/2残存。	
3	土師器 高坏脚	口径 — 脚底径 (7.0) 器高 (4.7)	裾部は大きく開き、脚部はゆるやかに膨らんで立ち上がる。	内面—ナデ。外面—タテ方向ヘラミガキ。	褐色粒・角閃石・白色粒。橙色。	脚部のみ残存。	
4	土師器 坏	口径 (11.3) 底径 — 器高 (3.4)	体部は彎曲して立ち上がり、口唇部はゆるやかに内彎する。	内面—タテ方向ヘラケズリ。外面—ヨコ方向ヘラケズリ。口縁部—ヨコナデ。	褐色粒・白色粒。内面—鈍い橙色。外面—黒褐色。	全体の1/4残存。	
5	土師器 高台埴	口径 14.4 脚底径 (7.0) 器高 (4.4)	体部は直線的に立ち上がる。	内面—ヘラケズリ。口縁部—ヨコナデ。外面に指頭圧痕。	やや粗い砂粒。鈍い橙色。	口縁部～体部の一部残存。	
6	中世土器 かわらけ	口径 7.3 底径 5.6 器高 1.5	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	1/2。	
7	中世土器 かわらけ	口径 7.7 底径 5.4 器高 2.0	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	灰褐色。	1/2。	
8	中世土器 かわらけ	口径 14.2 底径 6.9 器高 4.1	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部3/4欠損。底部外面未貫通穿孔	
9	中世土器 かわらけ	口径 (7.4) 底径 4.5 器高 1.9	口縁部はゆるやかに内彎しつつ立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部3/4欠損。	
10	中世土器 かわらけ	口径 7.2 底径 5.1 器高 1.9	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部1/4欠損。	
11	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 7.2 器高 —	口縁部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形、底部左回転糸切り。	にぶい橙色。	口縁部欠損。	
12	中国青磁 碗	口径 — 底径 — 器高 (3.6)	口縁部はゆるやかに内彎する。	内・外面—施釉。内面に刻花纹。	胎土は密で硬い。	小片。	
13	中国白磁 皿	口径 (11.0) 底径 — 器高 (1.4)	口唇部は大きく外反する。	施釉。	胎土は密で硬い。釉—透明。胎土—白色。		
No	種類	器種	法 量 (cm・g)			備考	
14	土製品	土 錘	長さ：4.6	厚さ：1.1	孔径：0.3	褐灰色	一部欠損。

図版の都合から図90：1に掲載した坏は、I区の1号竪穴状遺構から出土したものである。1号竪穴状遺構自体は、中世の遺構であり、混入したものと考えられる。

同図2～5は、II区から出土した古墳時代の土器である。II区では、調査の経過の項で述べたように、遺構確認の時点で、多数の住居跡が主にカマドの焼土が露出することで確認することができたが、また遺構の輪郭が見えない状態で、土器だけが集中する箇所が複数見られた。遺構確認の段階では、それら土器の集中する範囲を、土器集中部として番号を付し、土器を取り上げた。ほとんどの土器集中部は、最終的に住居跡であることが判明し、また燃焼面が伴う場合には、焼土跡としたが、結局土器集中部の一部はいずれの遺構にも帰属させることができなかった。図示した土器は、そうした残余の土器集中部から出土した資料である。

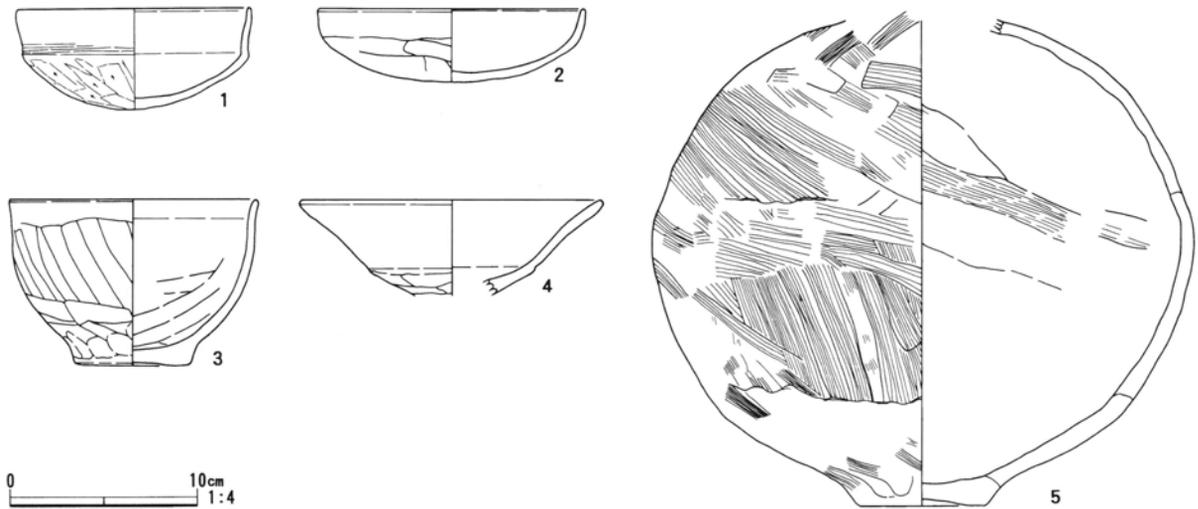


図90 遺構外出土土器実測図

表50 遺構外出土土器観察表

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 12.4 底径 — 器高 5.3	底部は丸底。体部は内彎しつつ立ち上がり、口縁部との境に稜線をもち、口縁部は直立する。	底部・内部—ヘラケズリ。口縁部—ヨコナデ。	褐色粒。鈍い橙色。	口縁部の一部残存。
2	土師器 坏	口径 14.2 底径 — 器高 3.9	丸底の底部から体部緩やかに立ち上がり、口縁部は内彎気味に立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ。	白色粒・角閃石 内外—橙色	4/5。
3	土師器 碗	口径 (13.2) 底径 6.2 器高 8.8	平底の底部から括れた後、体部丸みを持って立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、底部ナデ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	砂礫・チャート 内外—ぶい橙色	1/2。
4	土師器 高坏	口径 (16.4) 底径 — 器高 —	坏部下位に稜を持ち、口縁部は外反して開く。	外面—口縁部ヨコナデ、坏部下位ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、坏底部ヘラナデ。	白色粒・黒色粒 内外—明赤褐色	坏部1/2残存。
5	土師器 壺	口径 — 底径 6.6 器高 —	中位が大きく膨らむ胴部。	外面—胴部ハケ目後一部をナデ、底部ナデ。内面—胴部～底部ハケ目後ナデ。	チャート 内外—橙色	胴部2/3。口縁部欠損。

4は、丈高の脚部が付く高坏坏部、5は、外面にハケ調整がなされた壺である。II区では、20号住居跡のみではあるが、5世紀代の住居跡を検出しており、4の高坏も同じ時期の所産である。5は、一応胎土の特徴から5世紀代の所産と考えるが、強くくびれた頸部、球形に近く膨らんだ胴部、突出し上底となる底部などの形態的特徴、外面に明瞭に残る斜めのハケなどから見て、前期に遡る可能性も捨て切れない。先にあげた図89：1の高坏とともに、本遺跡における集落跡の上限を示唆する資料である。

図89：14は、中世以降と考えられるピットから出土した土錘である。

b. 中世の土器・陶磁器 (図89：6～13、表49)

図89：6～13は、主にI区のピットから出土した資料である。ピットについては、前節で記したが、並びや深さなどから確実に中世に帰属するピットを選り分けることができなかつたため、ここに出土遺物をまとめて掲載した。12は、不定形の浅いピットから出土した青磁碗、13は、特に並びをとらえることができなかつたピットから出土した白磁皿である。

c. 埴輪 (図91～93)

埴輪は1～28をI区で、29をII区で検出している。すべてが古代の住居跡、中世の溝、土坑など後代の遺構の覆土や表土からの出土で、古墳その他本来の遺構に伴う資料は皆無である。大型の破片が多く、表面に煤の付着する個体も存在することから、何らかの施設において2次的に利用したものを含むと推測する。確認できる器種は円筒埴輪、朝顔形埴輪、靱形埴輪である。その他にも形象埴輪の破片が存在するが、多くは器種の不明な資料である。

円筒埴輪 (図91、図92：11～13)

1～9は突帯を含む中位の破片である。外面調整は1次調整がタテハケ(6～12本/2cm)で、3は突帯より上段に2次調整としてヨコハケを施している。ヨコハケは目の粗いハケメ工具(5本/2cm)を用い、残存の範囲には静止痕を観察できない。内面調整はタテハケ、ナナメハケ、ナナメナデを認める。1の内面にはヘラ状工具の先端による沈線状の直線的な線刻が存在する。

突帯の形状は多様で、1は崩れた「M」字形を、2・5・7は断面台形を、4・8は三角形を呈するほか、3はとくに幅が狭く、突出度が高い。

透孔は1～8に認める。形態はすべて円形である。配置を確認できる資料は存在しないが、5は透孔の下端が突帯に接している。線刻をもつ個体は認めない。

10～13は基底部を含む最下段の破片である。いずれも、基部成形を行っている。外面調整はタテハケ(6～10本/2cm)で、底部調整を施す個体は存在しない。内面調整は10～12がタテナデ、13がナナメハケ(10本/2cm)である、

胎土は全体に砂粒を含有する。とくに、1・3・4・9は多量の粗砂を含む。これに対し、7は細砂粒をわずかに含む程度である。

焼成は個体に関係なく総じて良好である。5はとくに硬質に焼き上がり、還元焼成に近い。

色調は全体に橙褐色あるいはにぶい橙褐色を示すが、5はにぶい灰褐色を呈する。3・15には表面に煤の付着を認める。

朝顔形埴輪 (図92：14～20)

14は口縁部中位の破片で、断面が幅の広い三角形を呈する突帯がめぐる。外面調整はタテハケ(10本/2cm)、内面調整は不定方向のハケ(10本/2cm)である。胎土に雲母、細砂粒を多量に含む。焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。

15も口縁部中位の破片で、断面が低平な台形を呈する突帯がめぐる。外面調整はタテハケ(10本/2cm)、内面調整は不定方向のハケ(10本/2cm)およびナデである。胎土には微量のチャート、雲母のほか細砂粒を多量に含む。焼成はやや不良で、焼き上がりは軟質である。色調はにぶい褐色を呈する。表面に煤の付着を認める。

16～18も同じく口縁部の破片で調整にきわめて目の粗いハケメ工具を用いる一群である。16には突出度の高い断面台形の突帯がめぐる。突帯を貼付する箇所は、口縁部下半の上端をいったん受け口状の疑口縁に成形し、受口状擬口の外面から口縁部上半の粘土を積みあげた部分にあたり、突帯はその接合部分を覆い隠すように貼付している。外面調整はきわめて目の粗いタテハケ(3～4本/2cm)、内面調整は同様に目の粗い不定方向のハケ(3～4本/2cm)である。胎土に大粒のチャートのほか粗砂を少量含む。焼成は非常に良好で、硬質に焼き上がっている。色調はにぶい橙灰色を呈する。

19は形態的には朝顔形埴輪とする積極的な根拠はないが、16・17・19と胎土、調整工具が同一であることから朝顔形埴輪の胴部と認定した。外面はきわめて目の粗いタテハケ(3～4本/2cm)を施した後、2次調整と推定されるヨコハケ(3～4本/2cm)を加えている。焼成、色調とも16以下と同様である。

20は肩部から胴部最上段にかけての破片である。外面は1次調整のタテハケ(10本/2cm)を施した後、肩部上半にのみ2次調整と推定されるやや傾きをもったヨコハケ(10本/2cm)を加えている。内面調整はタテナデを丁寧に施している。肩部と胴部の境界に断面が貧弱な三角形を呈する突帯がめぐる。胎土に雲母、細砂粒を多量に含む。焼成はやや軟質で、色調はにぶい橙褐色を呈する。

形象埴輪 (図92:21～25、図93)

靱 (図92:21)

21は靱の本体から背負板にかけての一部である。円筒形の本体に板状の粘土を接合し、接合部位には表裏から粘土を貼付して補強を加えている。外面調整は表裏ともタテナデおよびナナメナデ、内面調整はナナメナデである。胎土に雲母、細砂粒を多量に含む。焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。

22は背負板の一部と推定される。板状のつくりで端部は薄く、本体の側に移行するにつれ厚みを増している。調整は表面がナナメハケ(10本/2cm)およびナナメナデ、裏面がナナメナデで、端部にはナデを加えている。胎土は精良で、白色粒、黒色粒をわずかに含む。焼成は良好である。色調は表面がにぶい黄灰色を示すが、断面は黒灰色を呈し、いわゆるサンドイッチ状の焼成となっている。

器種不明 (図92:23～25、図93)

いずれも器種を完全には特定できない破片である。

23は径の小さな円筒の破片で、下方へ移行するに従い径を増している。外面には粘土紐の貼付、線刻、彩色などの装飾は存在しない。外面調整にはきわめて目の細かいタテハケ(20本/2cm)を加え、内面調整は不定方向のナデを施している。器財埴輪の本体の一部と推測され、末広がりになる形状から、大刀形埴輪の鞘の一部などの可能性が考えられる。胎土に雲母のほか細砂粒を多量に含む。焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。

24は厚い板状のつくりの本体の上面に、横方向に突帯状の粘土紐を貼付し、さらに突帯状粘土紐の上面に縦方向に薄く幅広の粘土紐を貼付している。上下左右の区別も判然としないが、粘土紐を上位にして置いた状態で観察すると、外面調整はタテハケ(7本/2cm)およびタテナデとなる。内面調整は不定方向のハケ(7本/2cm)を認める。胎土に雲母、粗砂を多量に含む。焼成は良好で、色調は明橙色を呈する。

25は径の小さな円筒状の破片で、器財埴輪の台部と本体との境界部と推測される。中央に台部と本体を画する突帯がめぐる。突帯は細身で、断面が三角形を呈する。外面調整はタテハケ(10本/2cm)、内面調整はナナメナデで突帯より上の部分に上下方向の緩やかな湾曲を認めることから靱の可能性がある。胎土に雲母、細砂粒を多量に含む。焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。

26は直径13cm前後を測る径の小さな円筒で、器財の台部である。外面調整はタテハケ(8本/2cm)、内面調整はナナメナデで、上端に小型の円形透孔一対を配する。胎土にチャート、雲母のほか粗砂を多量に含む。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。表面、内面ともに縦方向に細長く煤の付着を認める。

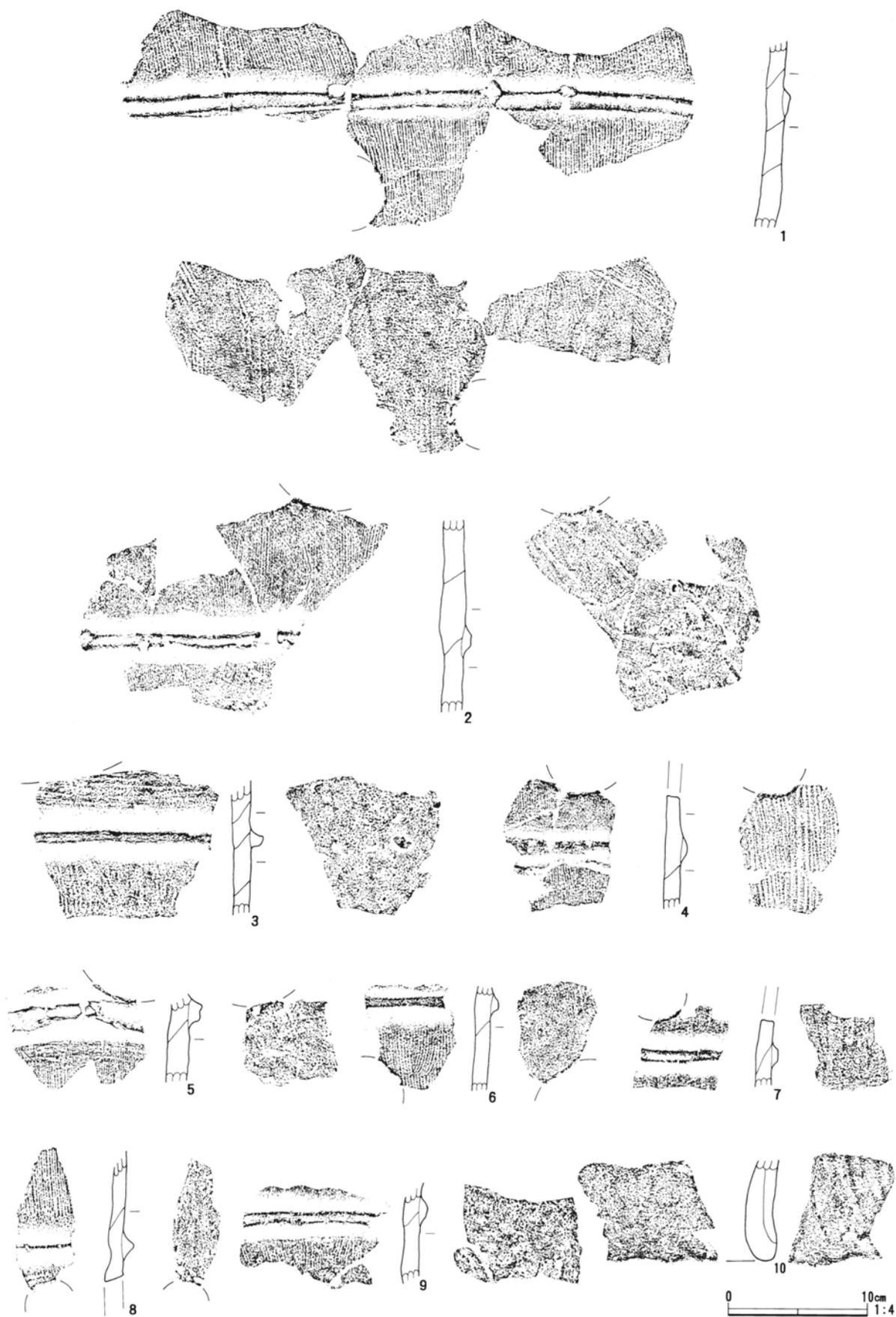


图91 遺構外出土埴輪実測図・拓影図(1)



图92 遺構外出土埴輪実測図・拓影図(2)

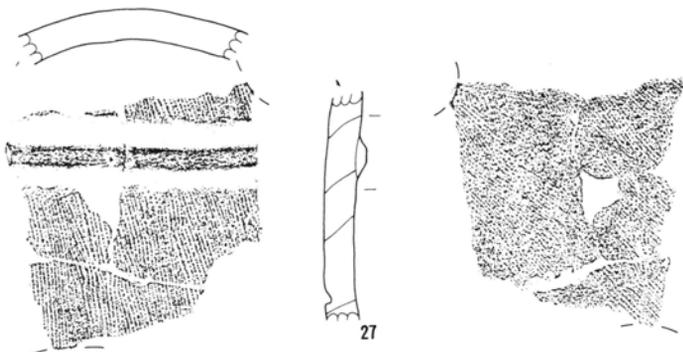
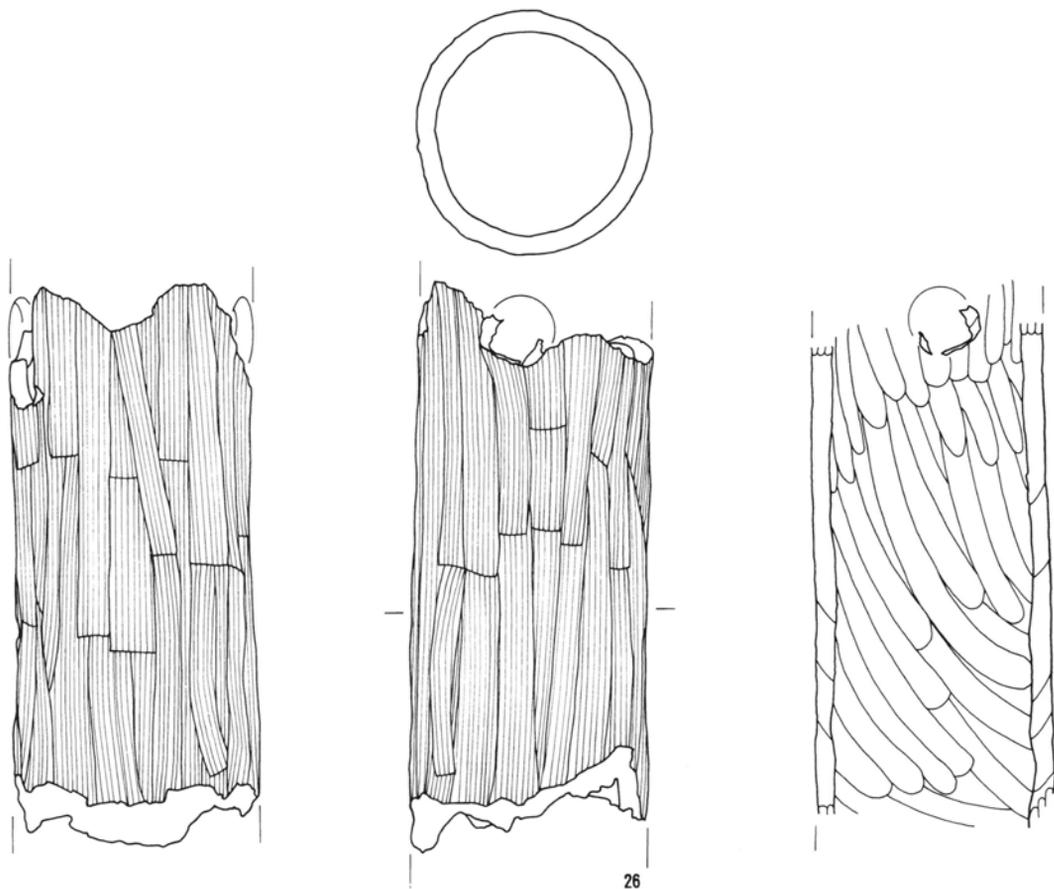


图93 遺構外出土埴輪実測図・拓影図(3)

27は厚みのある大径の破片である。外面調整はタテハケ(10本/2cm)、内面調整はナナメハケで、断面台形の突帯がめぐる。突帯を挟んで、右上と左下隅に透孔の一部を認める。大きく角度を違えることなく透孔を配置していることから通常の円筒埴輪とは認定しにくい。胎土に雲母のほか粗砂を多量に含む。焼成は良好で、色調は明橙色を呈する。

28は厚みのある基部の破片で、ほぼ垂直に立ち上がる。調整は内外面とも細かいタテハケ(12本/2cm)である。基部成形が丁寧で、内面には最下端までタテハケによる調整が及んでいることから、形象埴輪の台部の破片である可能性が高い。胎土は精良で雲母のほか細砂粒を少量含む。焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。表面に煤の付着を認める。

29はII区で検出した唯一の資料である。板状に成形した粘土がほぼ直下をなして横方向に屈曲していることから家の壁の角部分と推測する。外面には幅4cm前後の広い帯状の粘土を横方向に貼付している。内面からは角部に粘土を補強して成形している。外面調整はタテハケおよびナナメハケ、内面調整はナナメナデで、外面の帯状粘土とその周辺部にはナデを加えている。突帯と胎土は雲母のほか細砂粒を少量含む。焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。

d. 瓦 (図94、図版25)

瓦はすべてI区で検出している。平瓦・丸瓦のみで軒平・軒丸瓦を含まない。検出遺構は1号溝(1)、4号溝(14)、6号溝(5・7・13)、4号井戸(2・3・11・12)で、ほかにG-3グリッド(6・8・10)、表土(4・9)からも出土している。

1～9・11～14は平瓦である。いずれも小片で、全長、全幅の判明する資料は存在しない。成形は摩耗により確認できない14以外、すべて縄目タタキによるもので、凸面に明瞭なタタキ目を観察する。凹面には3・6・13の一部にナデ残しの布目圧痕を認める。1・3・9には砂が付着している。7は全面的にナデとなっている。

側端面はヘラ切りののち丁寧なナデが加えられている。凸面側の角がヘラ切り後の鋭利な状態を残しているのに対し、凹面側は角を丸く仕上げている。

胎土はいずれも精良で、きわめて微細な砂粒を混合している。

焼成は多くが還元焼成によるが、1～3・7が良質な須恵器と同様にきわめて硬質で重厚に焼き上がっているのに対し、6・8・11・14は瓦質で軽く軟らかめに焼け、9・12・13は前二者の中間的な焼き上がりとなっている。また、5は端面の周辺が一部酸化炎焼成となっているほか、4は完全な酸化炎焼成によっている。

色調は1～3・7が青灰色、6・8・11・14が灰白色、9・12・13が暗黄灰色、5が灰褐色から橙色、4は明赤褐色を呈する。

10は丸瓦である。凹面に布目圧痕を観察する。凸面は縦方向にケズリを加えたのち、縦方向の丁寧なナデを加えている。側端面および凹面外縁部にも縦方向のナデを施している。側端面の角は凸面側胎土は精良で、雲母のほか、きわめて微細な砂粒を混合している。

焼成は酸化炎焼成で、やや軟質に焼き上がっている。断面中央部が灰色を示し、いわゆるサンドイッチ状の焼成となっている。

色調はにぶい褐色を呈する。

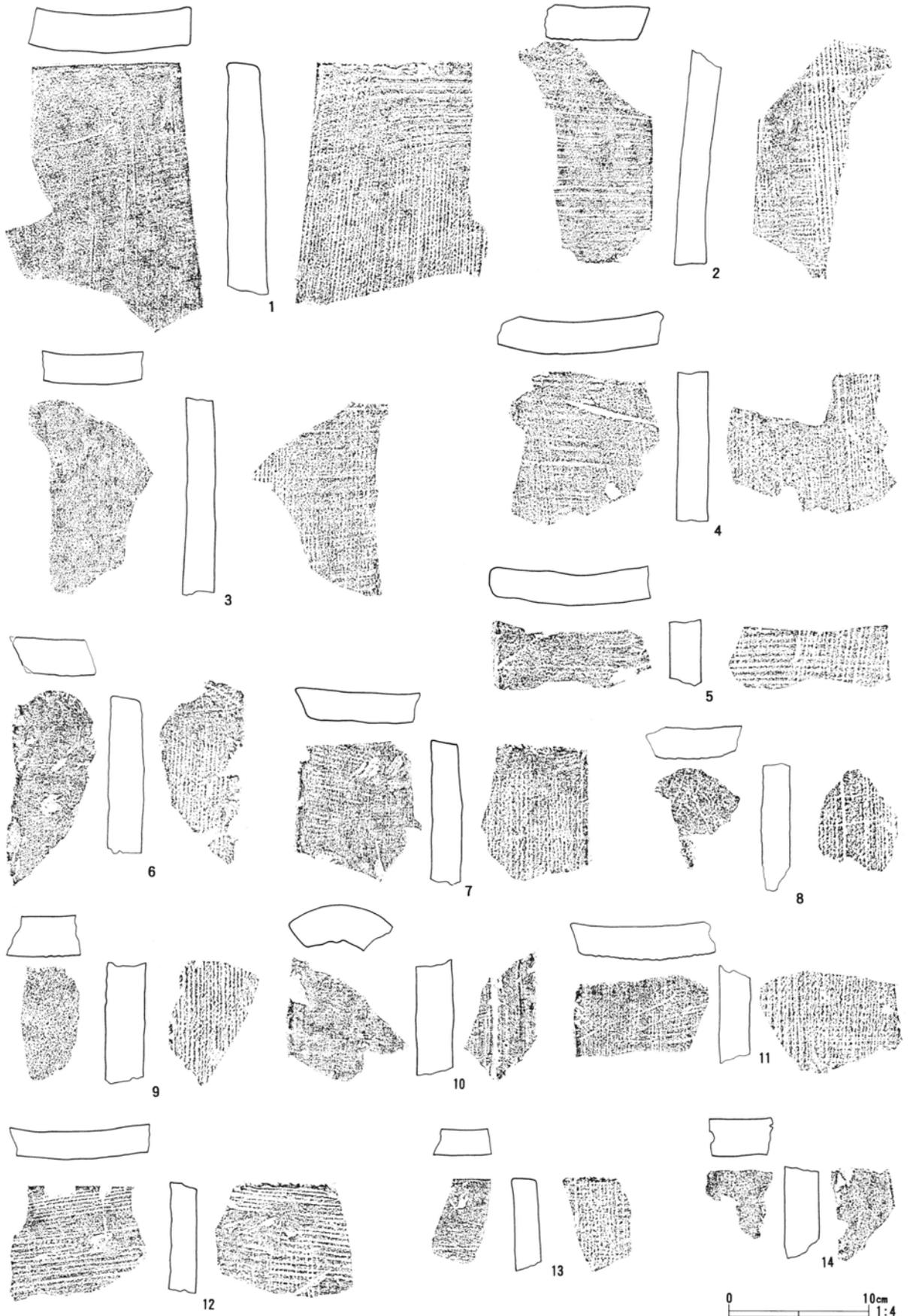


图94 遺構外出土瓦拓影図

V ま と め

東本庄遺跡の調査によって検出した遺構、遺物は、縄文土器をはじめとして、古墳～奈良・平安時代の住居跡や中世の溝や井戸などとそれらから出土した土器、陶磁器、土製品、埴輪、瓦と多岐にわたる。ここでは、古墳時代～中世の遺構と遺物について、簡単なまとめを行なっておきたい。

まず、古墳～奈良・平安時代の住居跡については、I・II次調査で、遺構の分布だけでなく時代的にも大きく分けられる。I区（I次調査区）とII区（II次調査区）では、II区の方が遺構の時期が明らかに古い。よって、順番が前後するが、II区から記すことにする。

II区とした北西側の調査区は、遺構の残存状態が良好ではないが、5世紀代の20号住居跡をはじめとして、6、7世紀代、あるいは8世紀代にかかる6～19・21号住居跡からなる集落跡である。その反面、中世の遺物が皆無に近いなど、I区との違いは著しい。集落跡を構成する住居跡は、重複例が多いが、必ずしも継続的に集落が営まれたとは言い切れないようである。この集落跡の広がり、I区の北半にも及ぶらしく、I区北半の1号土坑からは、5世紀代の高坏が出土しており、また遺構外出土遺物の中には、II区の集落跡に対応する時代の遺物がかなり含まれている。

I区と呼称した南東側の調査区には、9世紀後半から11世紀代にわたる1～5号住居跡が分布しており、I区の南半、中世の溝ではあるが1号溝の南側にまとまるようである。また、出土遺物から見て、それらの住居跡は断続的であり、連綿と集落を形成した痕跡には乏しいようである。出土遺物としては、1号住居跡出土の白磁碗、緑釉皿などが特筆すべきである。通常集落跡では、類例に乏しい資料であり、この一帯の中世段階における拠点的性格を念頭におくなら、いわばその前史を物語る資料としてよいであろう。

中世の遺構・遺物は、I区に集中する。時期限定がむつかしい遺構がほとんどであるが、溝・井戸などある程度遺物が出土した遺構の大半から、15世紀代のかわりけが出土している。遺構の時期は、ひとつこの段階に集中すると見てよいであろう。15世紀後半は、五十子陣との関係が考えられる時期である。但し、遺物面では、青・白磁や常滑の甕など、12世紀末葉から13世紀代にかけて位置付けられるものが多く、この段階、遺物が時代的にまとまるという意味で、今ひとつの盛期と考えられる。

遺構面で問題となるのは、1号溝と呼称した溝である。1号溝は、調査所見によれば、I区を直線的に抜けた後、恐らく直角に近く折れ、西側にのびるものと推定される。1号溝が、いわゆる中世居館の堀に類する施設であるとすれば、I区の2・3号井戸などがある一帯は、居館内の一角ということになる。溝という遺構の性格から、1号溝の時期を確定するにはなお検討を要すべきと思うが、出土遺物の下限は、15世紀代にあると見られる。13世紀代を中心とする段階に関しては、確実な遺構を指摘できないが、まさしく庄（荘）氏、あるいは本庄氏との強い結び付きが考えられる時期でもあり、今後さらに周辺遺跡の資料をも含め十分な資料の検討が必要であろう。

いずれにせよ東本庄遺跡の立地する一帯は、中世児玉地域の中心地のひとつであり、本報告書が、地域の歴史を解き明かすためのひとつの手掛かりとなることを期し、ひとまずまとめとしたい。

末筆ながら、発掘調査にあられた方々に、また報告書の作成にあたり多大なご協力を頂いた方々に、心から御礼申し上げる次第である。

引用文献および主要参考文献

- 荒川正夫 1988 「中世居館研究序説」『史観』第118冊、早稲田大学史学会
- 2002 『大久保山X』早稲田大学本庄校地文化財調査報告10、早稲田大学本庄考古資料館
- 磯崎 一 1995 『今井川越田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第177集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 梅沢太久夫・石岡憲雄・浅野晴樹ほか 1981 『六反田』大里郡岡部町六反田遺跡調査会
- 太田博之・佐藤好司 1991 『本庄遺跡群発掘調査報告書V—公卿塚古墳—』、本庄市埋蔵文化財調査報告第19集、本庄市教育委員会
- ほか 2002 『東五十子・川原町』東五十子遺跡調査会
- ほか 2003 『有勝寺埴輪窯跡・有勝寺北裏』本庄市埋蔵文化財調査報告第26集、本庄市教育委員会
- 小川貴司・橋本博文ほか 1980 「土器の分類と編年」『大久保山I』早稲田大学本庄校地文化財調査報告1、早稲田大学本庄校地文化財調査室
- 小澤正人 1996 「古墳時代後期から平安時代の集落の変遷」『大久保山IV』早稲田大学本庄校地文化財調査報告4、早稲田大学本庄校地文化財調査室
- 恋河内昭彦 1987 『真鏡寺後遺跡I』児玉町文化財調査報告書第14集、児玉町教育委員会
- 1990 a 『塩谷下大塚遺跡』児玉町文化財調査報告書第11集、児玉町教育委員会
- 1990 b 『根田遺跡』児玉町文化財調査報告書第12集、児玉町教育委員会
- 1990 c 『雷電下遺跡—B・C地点—』児玉町文化財調査報告書第13集、児玉町教育委員会
- 1991 『真鏡寺後遺跡III』児玉町文化財調査報告書第14集、児玉町教育委員会
- 1993 『川越田II』児玉町遺跡調査会報告書第5集、児玉町遺跡調査会
- 1996 a 『辻堂I』児玉町文化財調査報告書第19集、児玉町教育委員会
- 1993 b 『辻堂II・南街道・宮田遺跡』児玉町文化財調査報告書第20集、児玉町教育委員会
- 小久保 徹・柿沼幹夫ほか 1978 『東谷・前山・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集、埼玉県教育委員会
- 昆 彭生 2001 『大久保山IX』早稲田大学本庄校地文化財調査報告9、早稲田大学本庄考古資料館
- 埼玉県 1984 『新編埼玉県史 資料編3 古代1 奈良・平安』
- 佐藤好司・増田一裕 1989 『諏訪遺跡(B地点)、久城前遺跡(B地点)発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第15集、本庄市教育委員会
- 菅谷浩之・駒宮史朗ほか 1973 『枇杷橋遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第20集、埼玉県遺跡調査会
- 鈴木徳雄 1984 「いわゆる北武蔵系土師器坏の動態」『土曜考古』第9号、土曜考古学研究会
- 1988 『真鏡寺後遺跡II』児玉町文化財調査報告書第8集、児玉町教育委員会
- 1991 『辻ノ内・中下田・塚島・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第15集、児玉町教育委員会
- 立石盛詞ほか 1982・1983 『後張一本文編・図版編I・II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15・26集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中広明・末木啓介ほか 1997 『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 徳山寿樹他 1995 『堀向・藤塚A・柿島・内出B・C・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第18集、児玉町教育委員会

- 富田和夫・赤熊浩一 1985 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 橋本博文・金子正之ほか 1980 『宍勝寺北裏遺跡』宍勝寺北裏遺跡調査会
- 長谷川 勇・石橋桂一ほか 1985 『夏目遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第5集2分冊、本庄市教育委員会
- ・————— 1987 『社具路遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第5集3分冊、本庄市教育委員会
- 細田 勝・富田和夫ほか 1984 『向田・権現塚・村後』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 伴瀬宗一 1996 『今井川越田遺跡II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第178集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 本庄市史編集室編 1976 『本庄市史 資料編』本庄市
- 1986 『本庄市史 通史編I』本庄市
- 1989 『本庄市史 通史編II』本庄市
- 増田逸朗・小久保 徹・柿沼幹夫ほか 1979 『下田・諏訪』、埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書第21集、埼玉県教育委員会
- ・駒宮史朗ほか 1979 『雷電下・飯玉東』埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集、埼玉県教育委員会
- ・坂本和俊ほか 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県民部県史編さん室
- 増田一裕 1985 『本庄遺跡群発掘調査報告書一久下東遺跡・遺構編一』本庄市埋蔵文化財調査報告第7集、本庄市教育委員会
- 1987 a 『本庄住宅団地内遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第11集 第1分冊、本庄市教育委員会
- 1987 b 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第9集、本庄市教育委員会
- 1987 c 『東富田遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第10集、本庄市教育委員会
- 1989 a 『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第14集、本庄市教育委員会
- 1989 b 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書II』本庄市埋蔵文化財調査報告第9集 第2分冊、本庄市教育委員会
- 1990 a 『諏訪・久城前・久城往来北遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第17集、本庄市教育委員会
- 1990 b 『山根遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第18集、本庄市教育委員会
- 1992 『今井諏訪遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第21集、本庄市教育委員会

圖 版

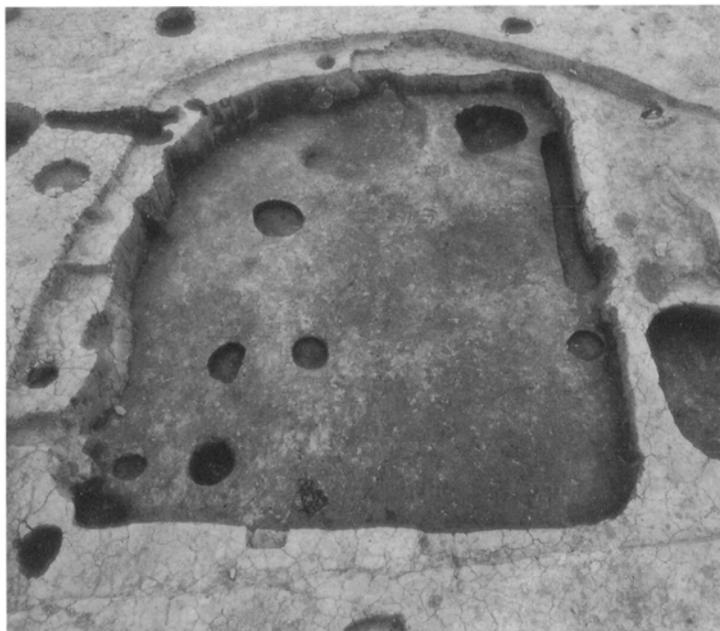


I次調査区全景（上空より）

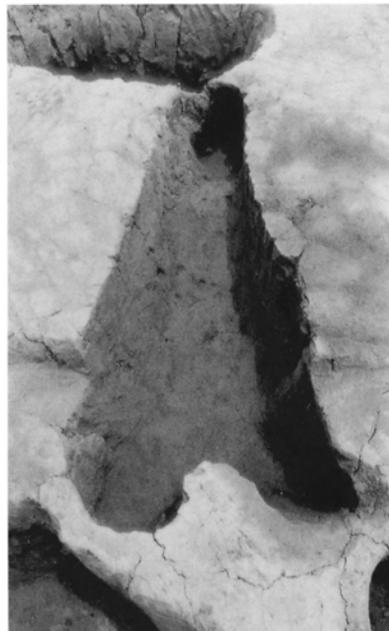


II次調査区全景（東より）

図版2



1号住居跡全景（北より）



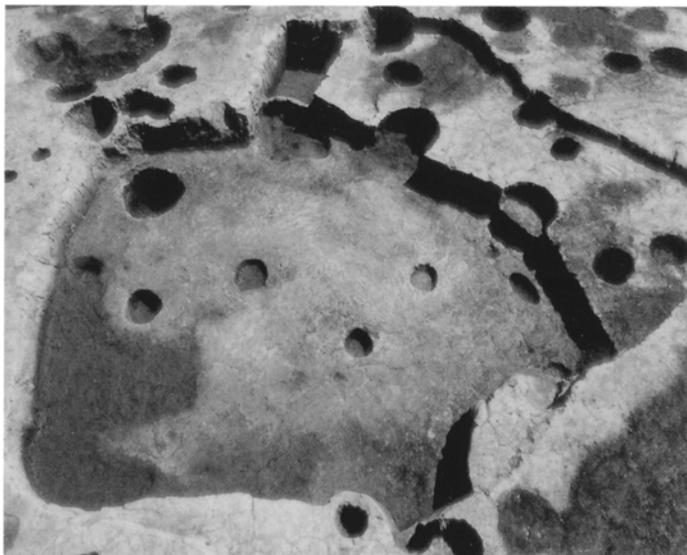
同カマド完掘状況（西より）



同遺物出土状態（西より）



2号住居跡全景（西より）



3号住居跡全景（北より）



同カマド2 遺物出土状態（北より）



同カマド1 完掘状況（南より）



同カマド3 遺物出土状態（北東より）

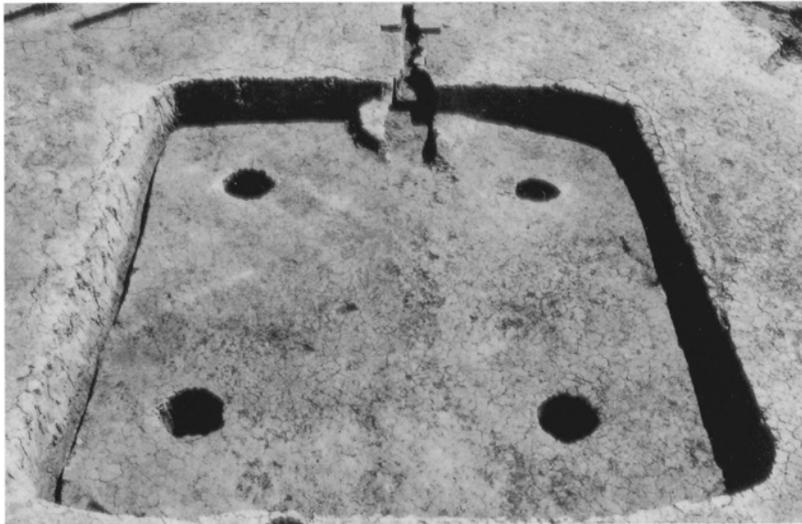
図版4



5号住居跡全景（北より）



同カマド完掘状況（南より）



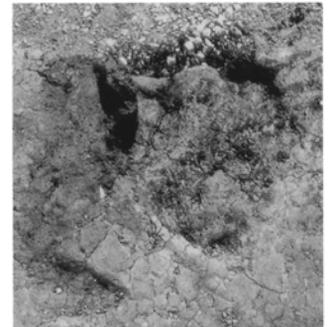
6号住居跡全景（南西より）



同カマド完掘状況（南西より）



7号住居跡全景（南西より）

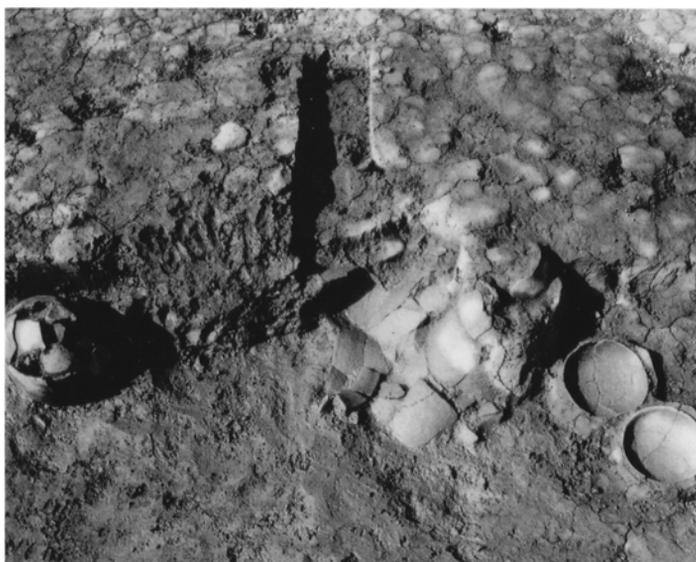


同カマド完掘状況（南西より）

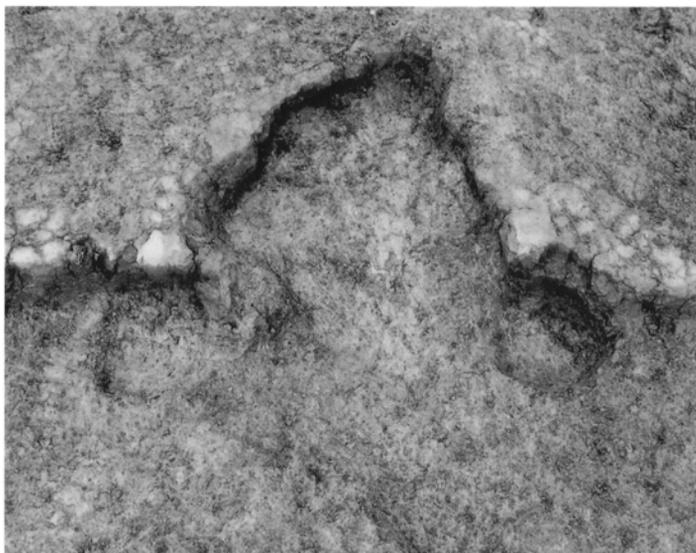
8号住居跡全景（南より）



同カマド遺物出土状態（南より）



同カマド完掘状況（南より）



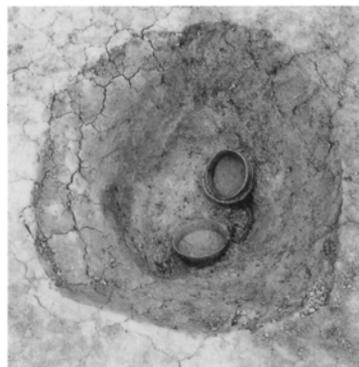
図版6



10号住居跡全景（北西より）



11号住居跡全景（南西より）



同貯蔵穴完掘状況（東より）



12号住居跡カマド完掘状況（西より）



13号住居跡カマド完掘状況（北より）



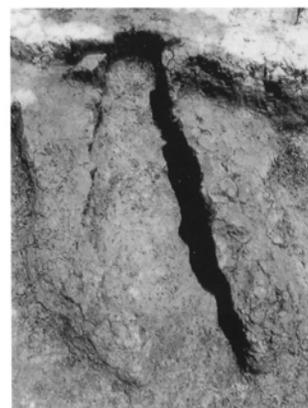
14号住居跡全景（西より）



同カマド完掘状況（西より）



15号住居跡全景（南西より）



同カマド完掘状況（南西より）



同遺物出土状態(1)（北西より）



同遺物出土状態(2)（南西より）

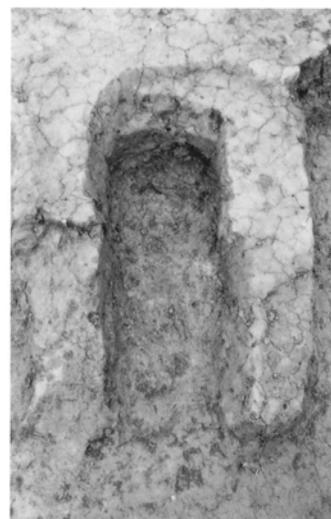
図版8



15・16・17・19号住居跡近景
(南西より)



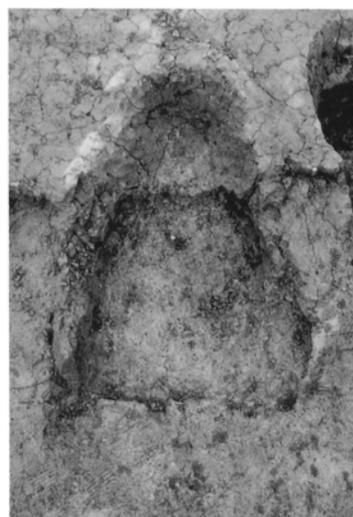
16号住居跡全景 (南西より)



同カマド完掘状況 (南西より)



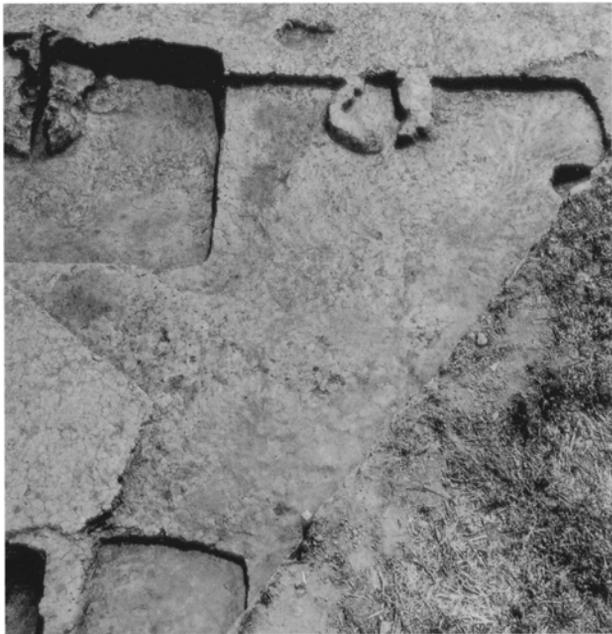
17号住居跡全景 (南西より)



同カマド完掘状況 (南西より)



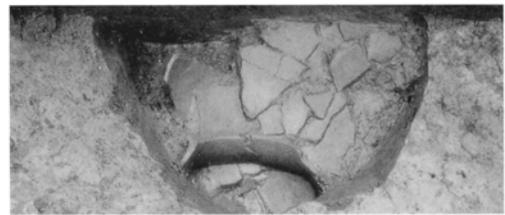
18号住居跡全景（南西より）



19号住居跡全景（西より）



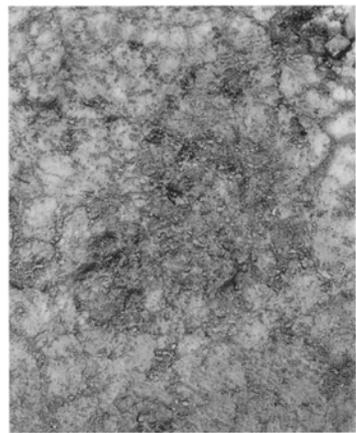
同カマド完掘状況（南西より）



同貯蔵穴遺物出土状態（北より）



20号住居跡全景（南西より）

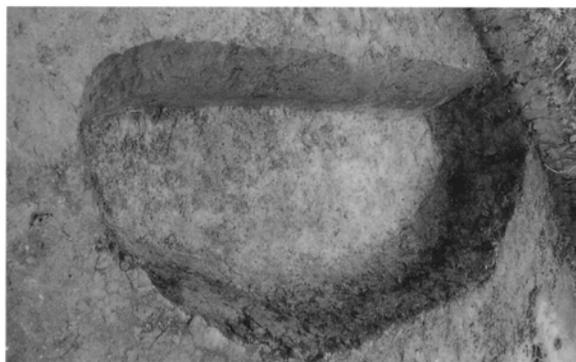


21号住居跡カマド完掘状況（北より）

図版10



1号土坑完掘状況（南より）



2号土坑完掘状況（南東より）



3号土坑遺物出土状態（西より）



1号竪穴状遺構全景（東より）



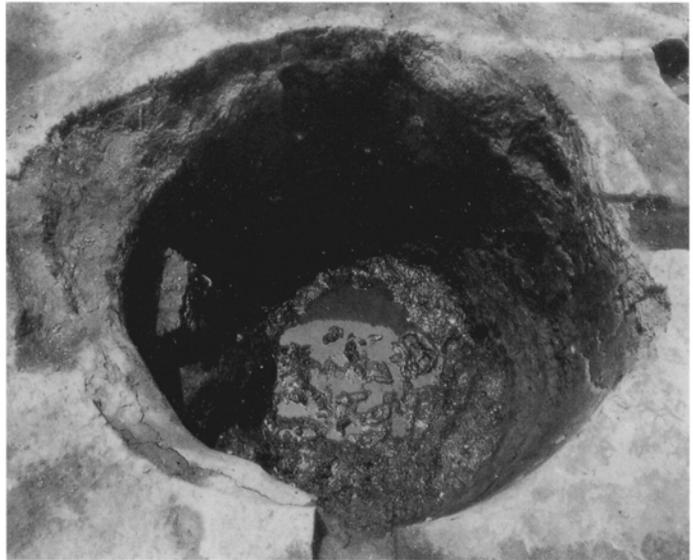
2号竪穴状遺構全景（北より）



1号溝土層断面（西より）



2号井戸完掘状況（南より）

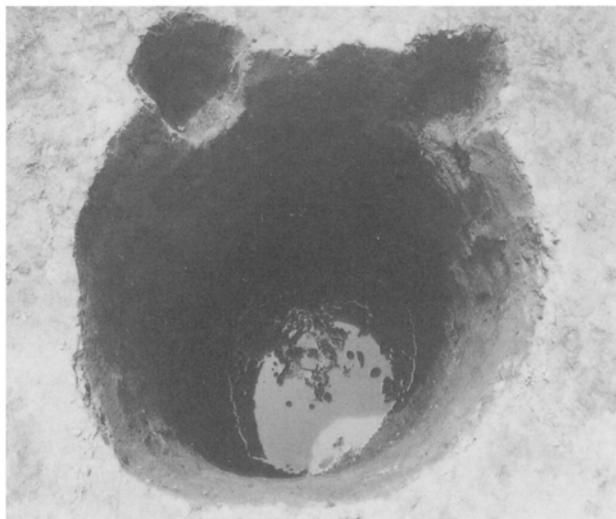


3号井戸完掘状況（南より）



4号井戸完掘状況（東より）

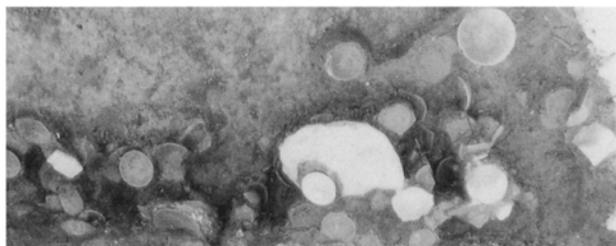
図版12



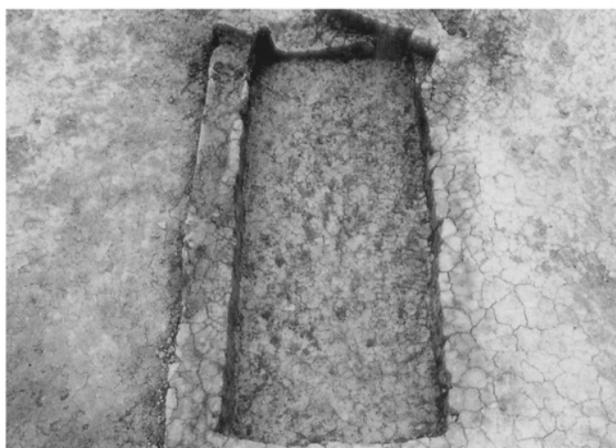
5号井戸完掘状況（北東より）



23号土坑遺物出土状態（1）（北東より）



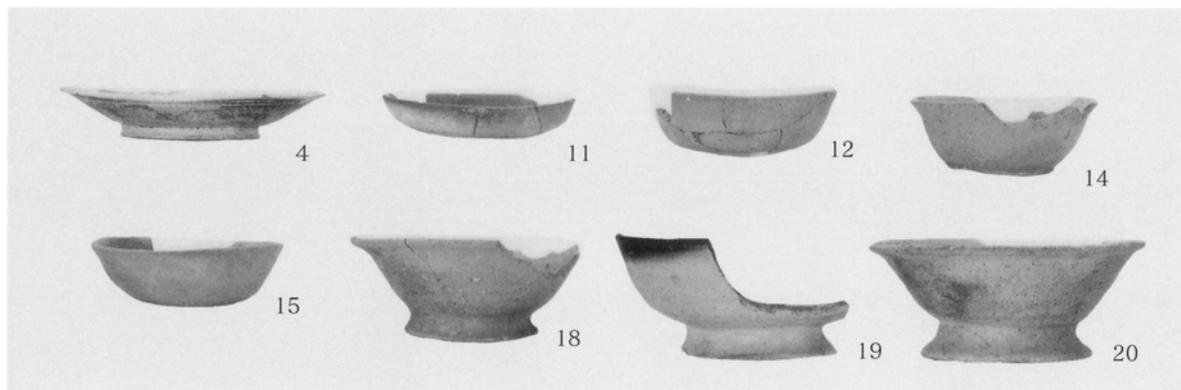
23号土坑遺物出土状態（2）（北東より）



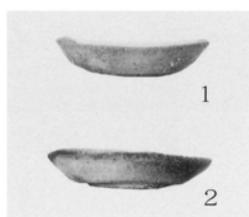
24号土坑完掘状況（東より）



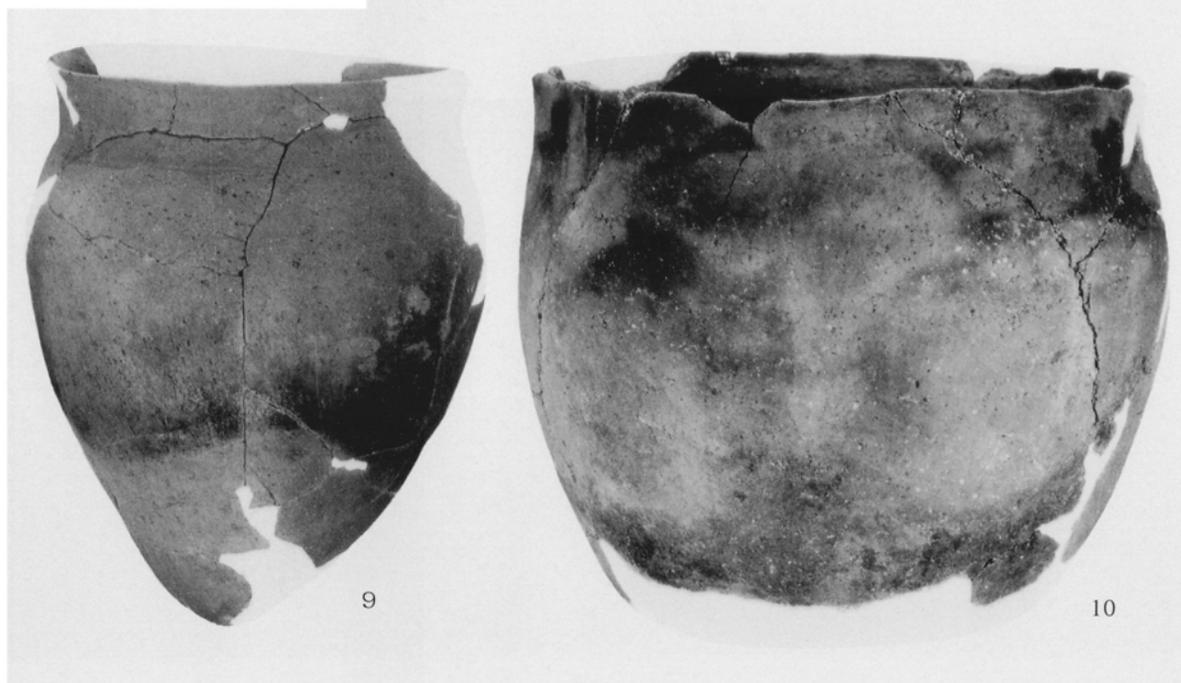
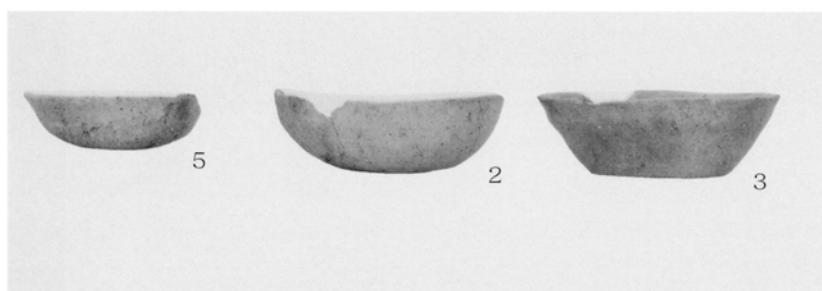
25号土坑完掘状況（東より）



1号住居跡出土遺物



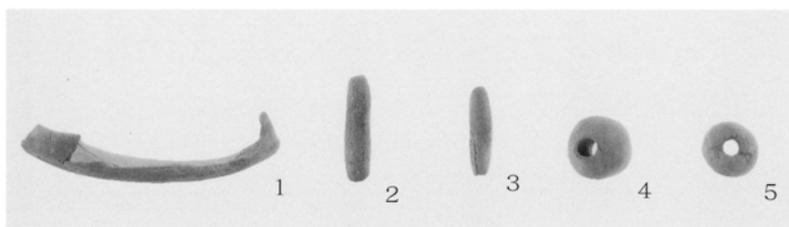
2号住居跡出土遺物



3号住居跡出土遺物

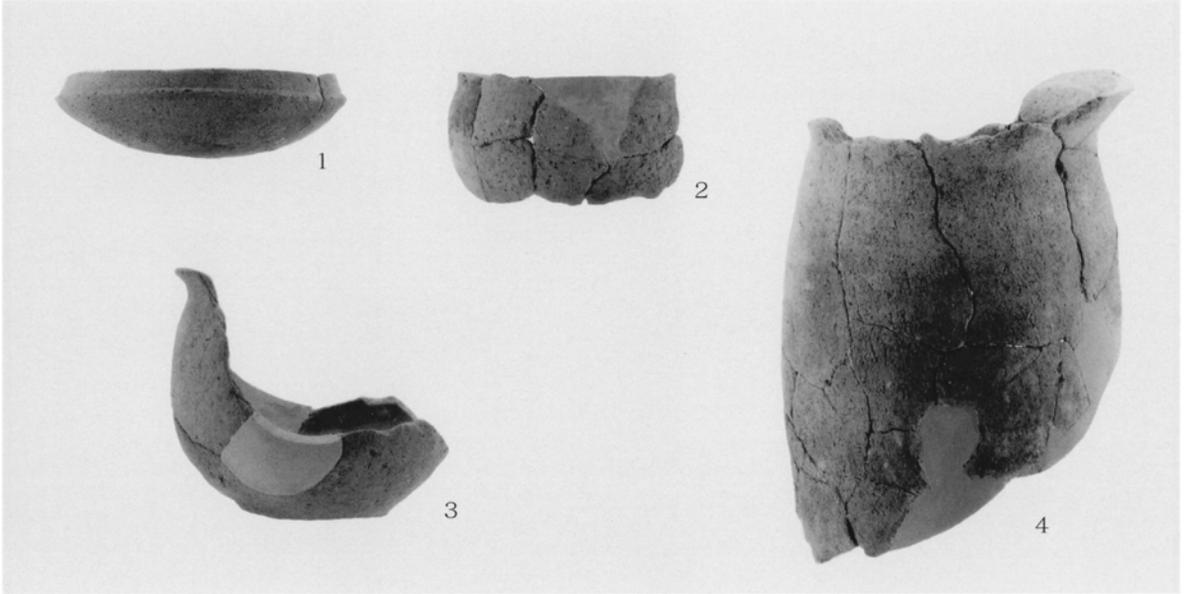


5号住居跡出土遺物

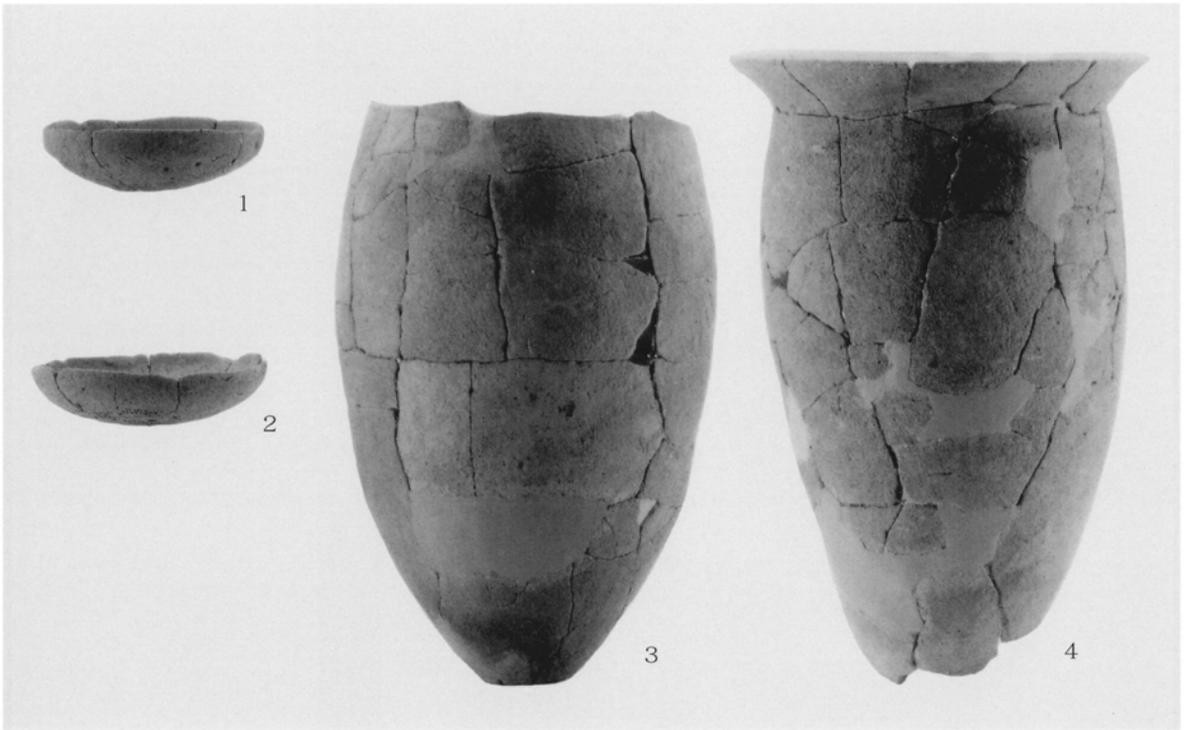


6号住居跡出土遺物

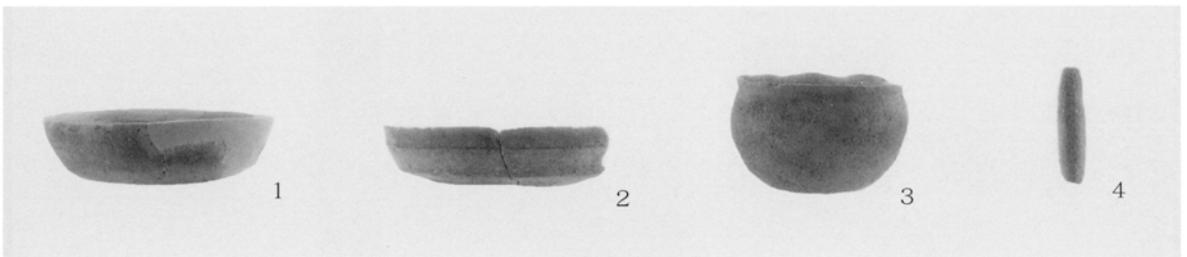
图版14



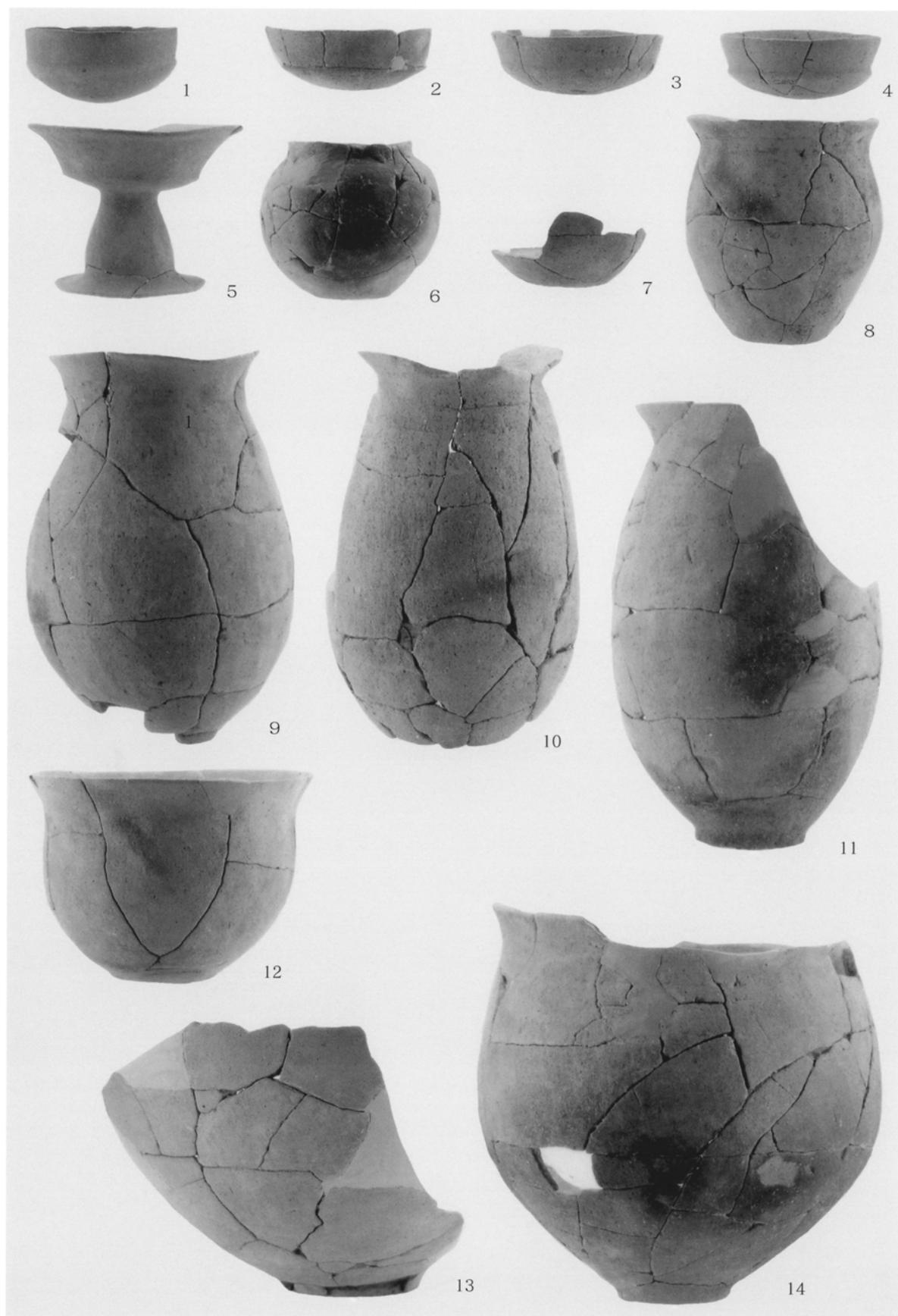
7号住居跡出土遺物



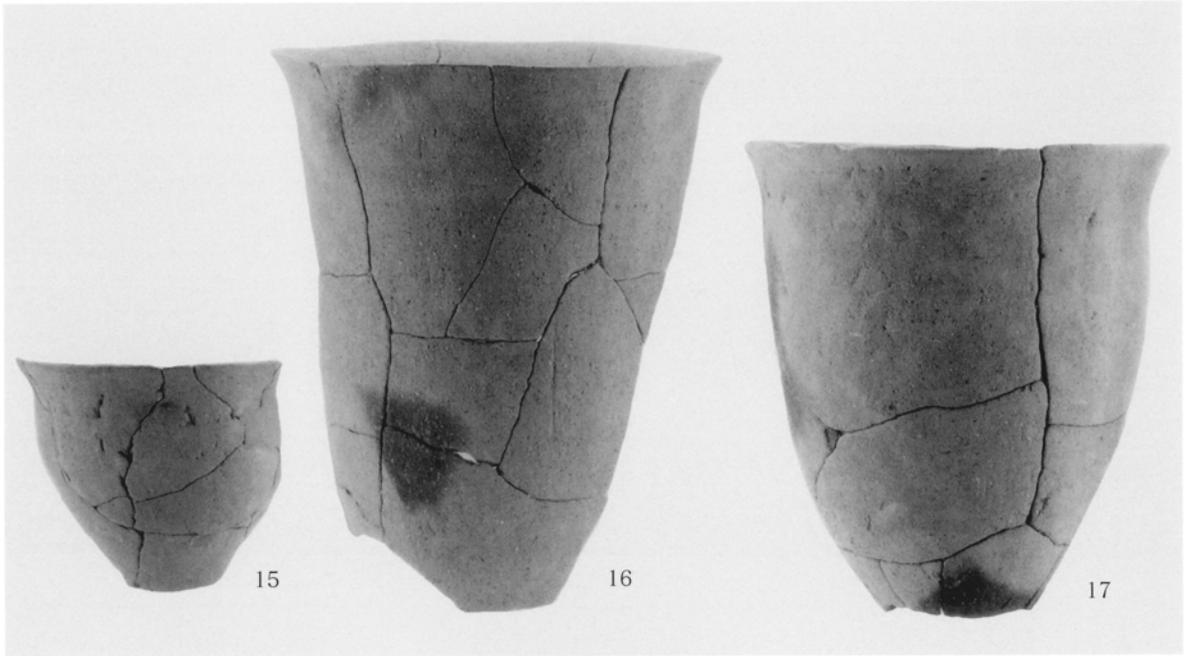
8号住居跡出土遺物



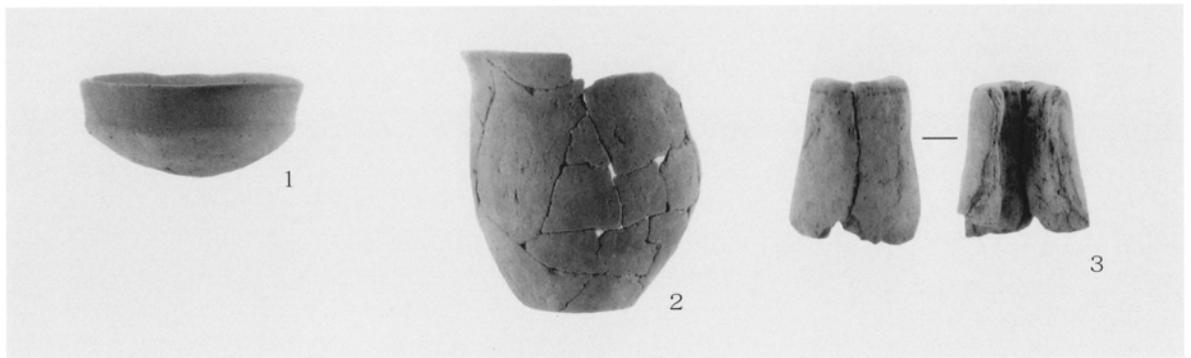
10号住居跡出土遺物



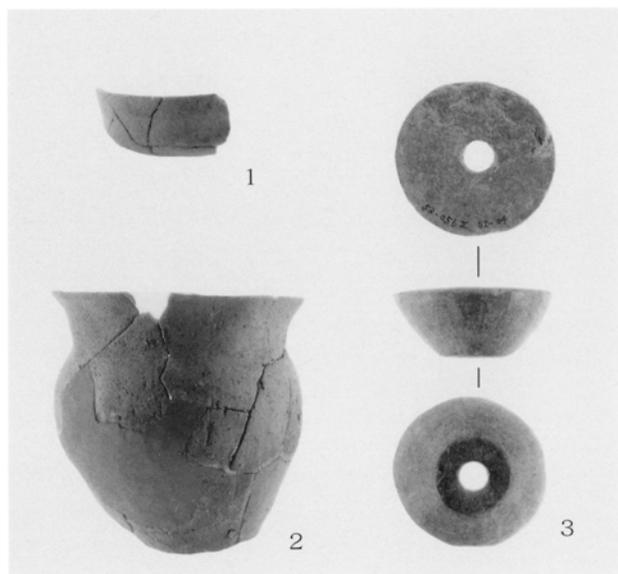
11号住居跡出土遺物 (1)



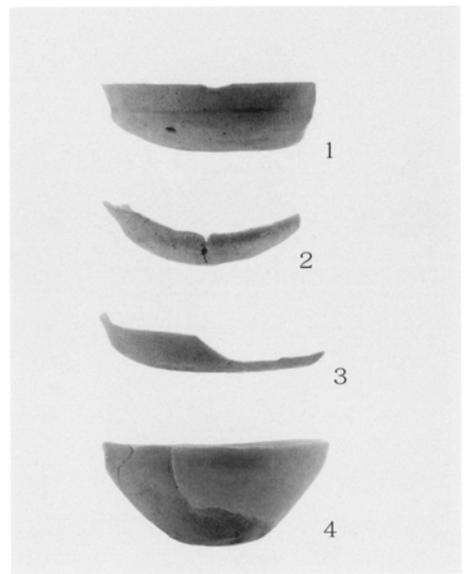
11号住居跡出土遺物 (2)



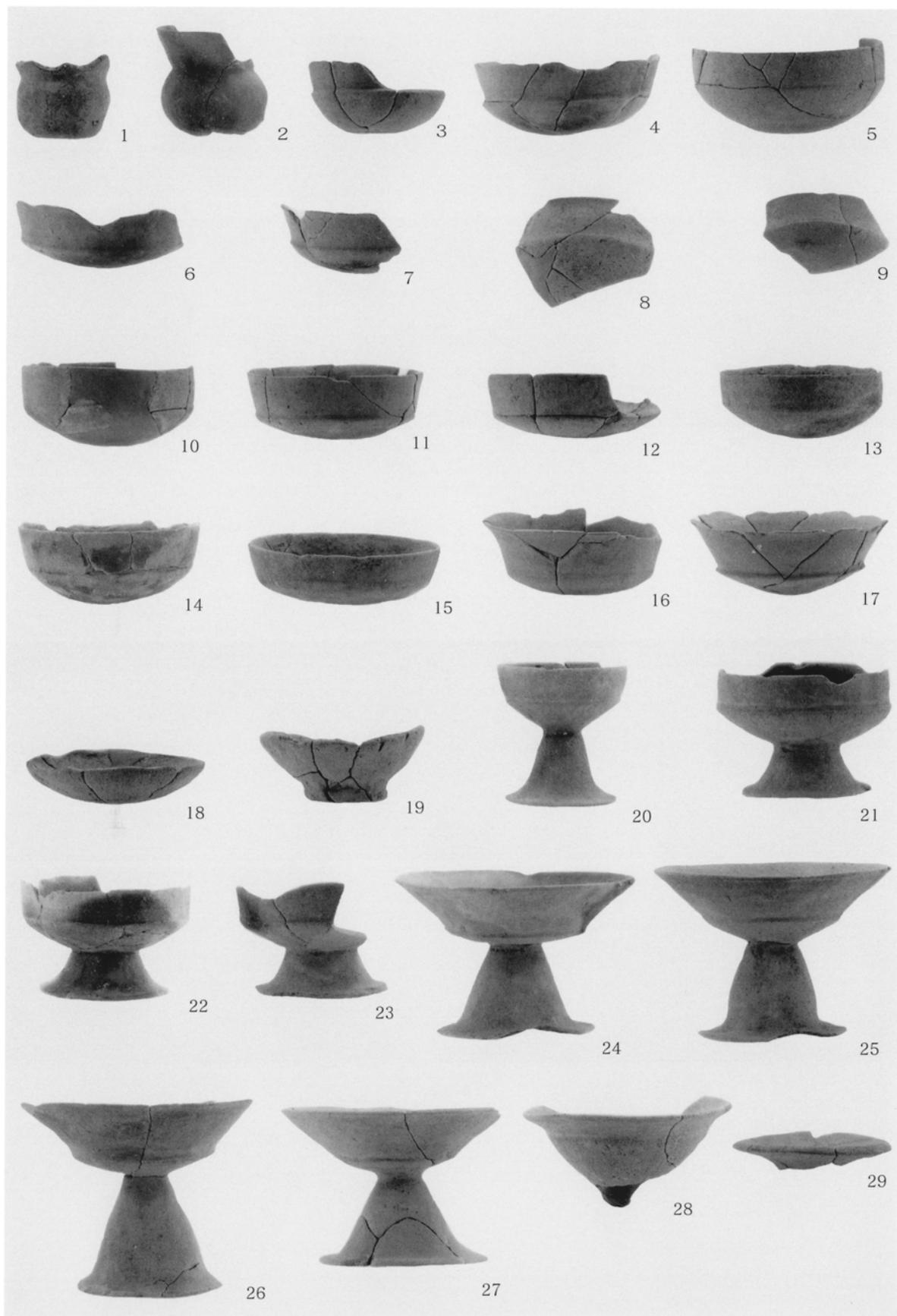
12号住居跡出土遺物



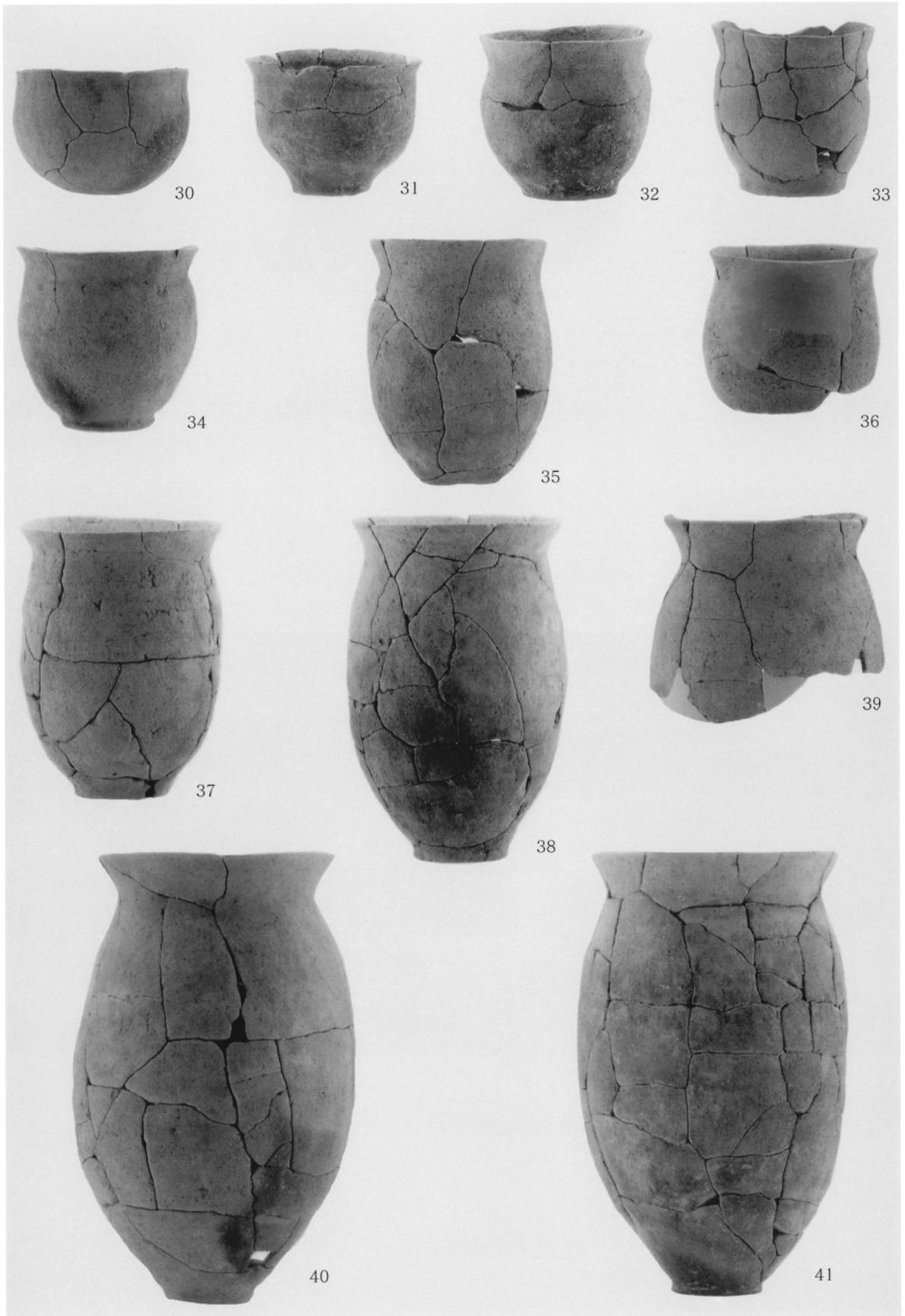
13号住居跡出土遺物



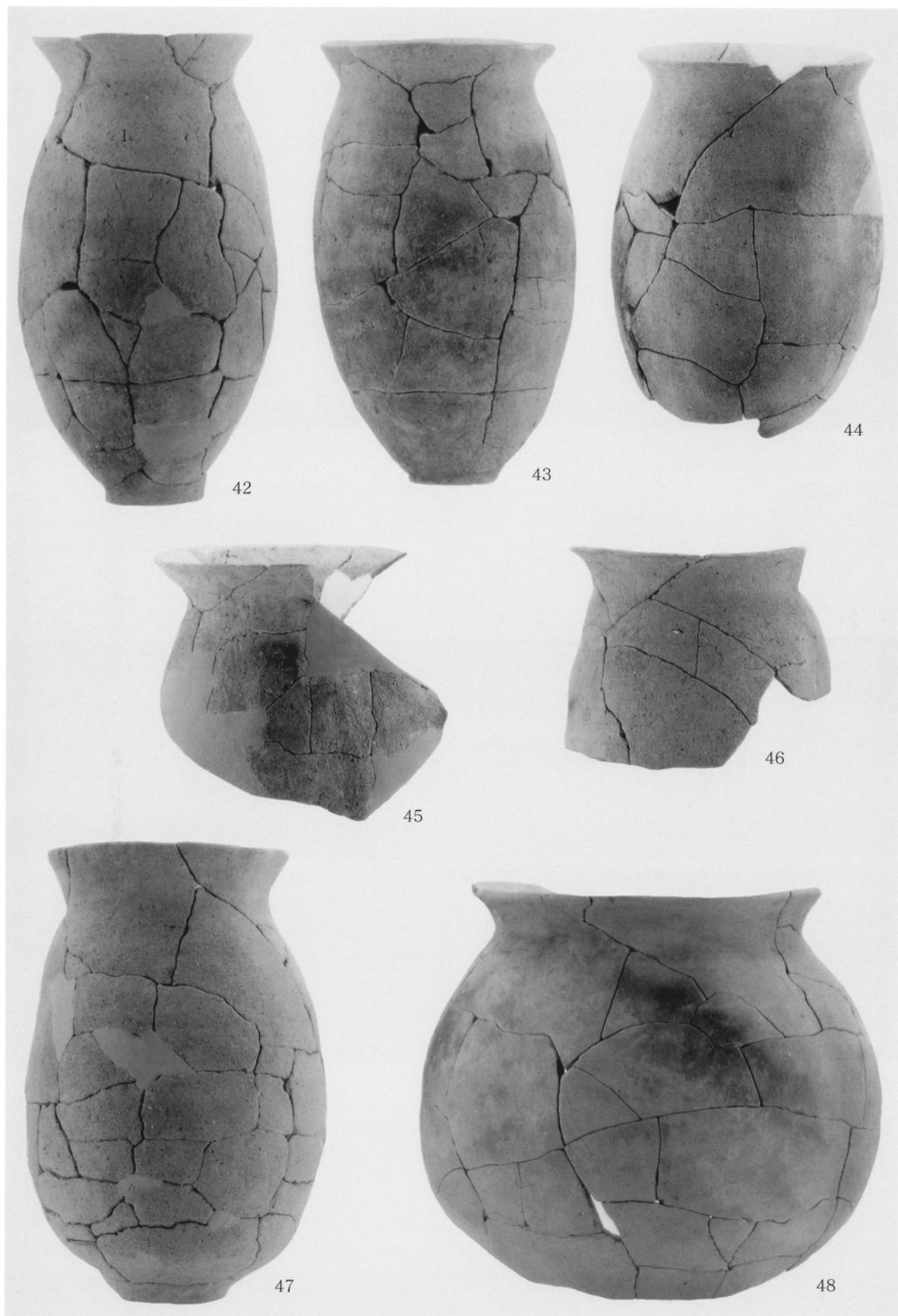
14号住居跡出土遺物



15号住居跡出土遺物 (1)

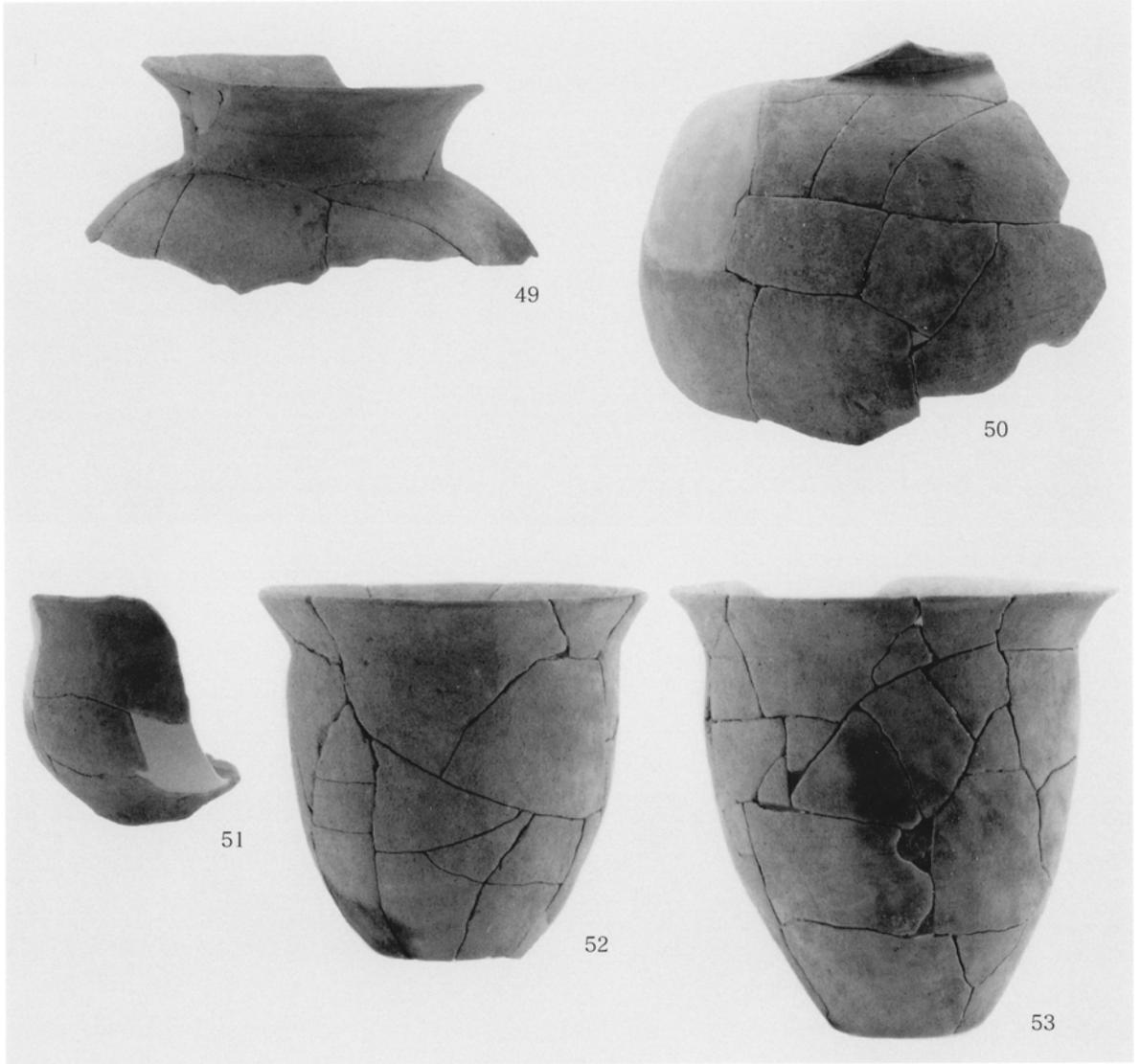


15号住居跡出土遺物 (2)

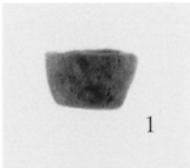


15号住居跡出土遺物 (3)

图版20



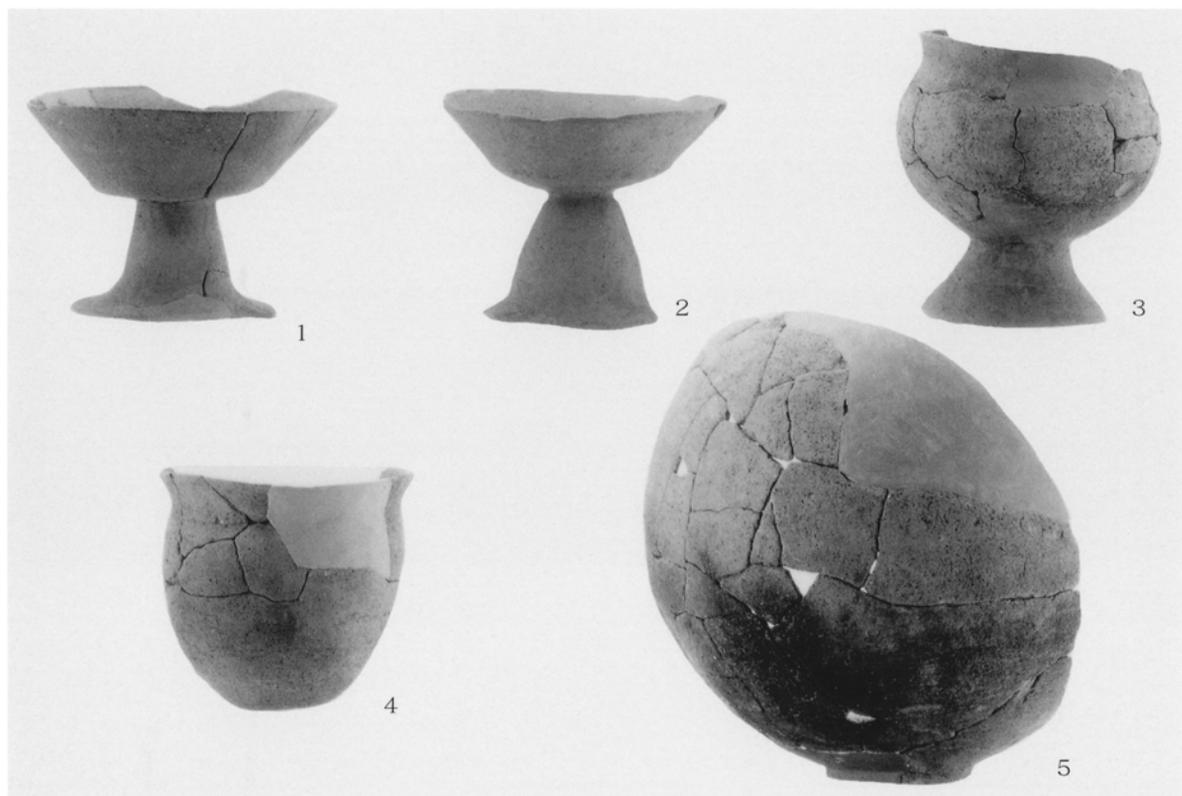
15号住居跡出土遺物 (4)



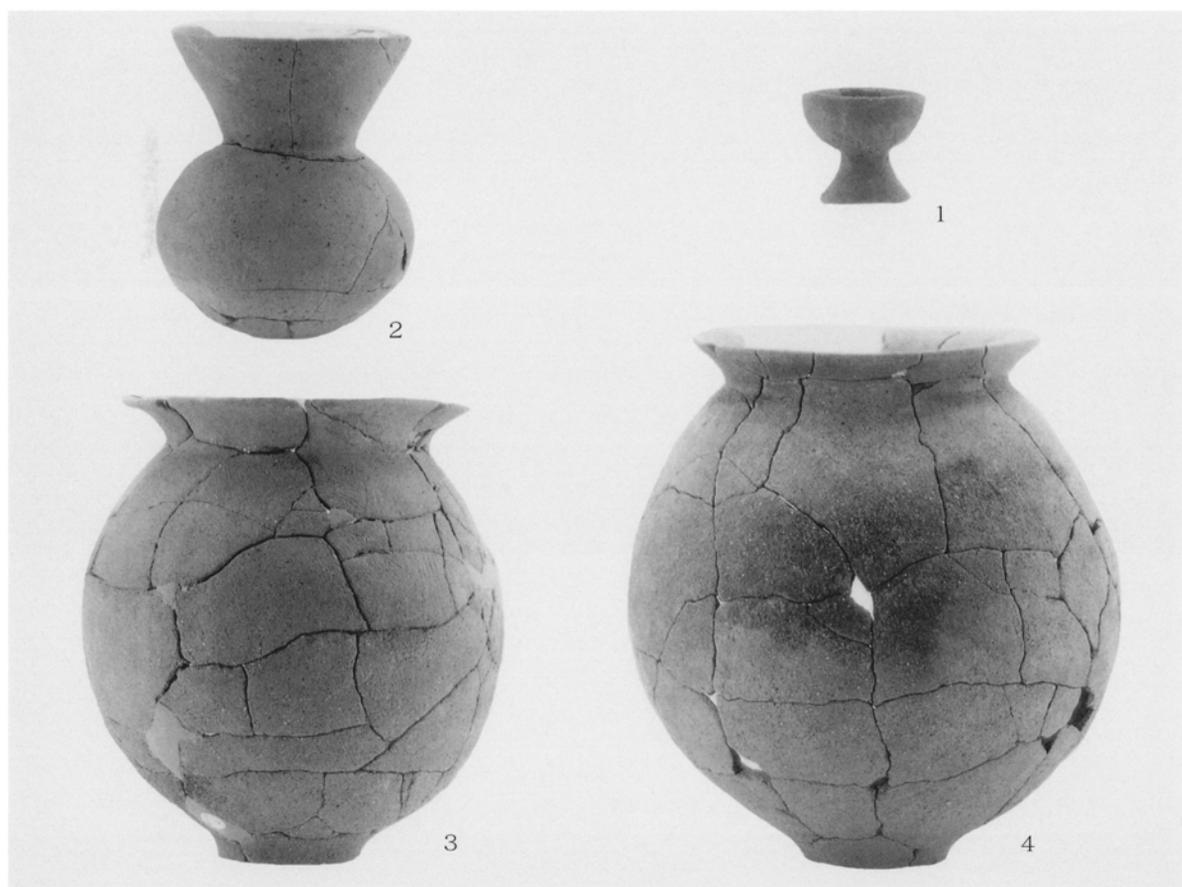
16号住居跡出土遺物



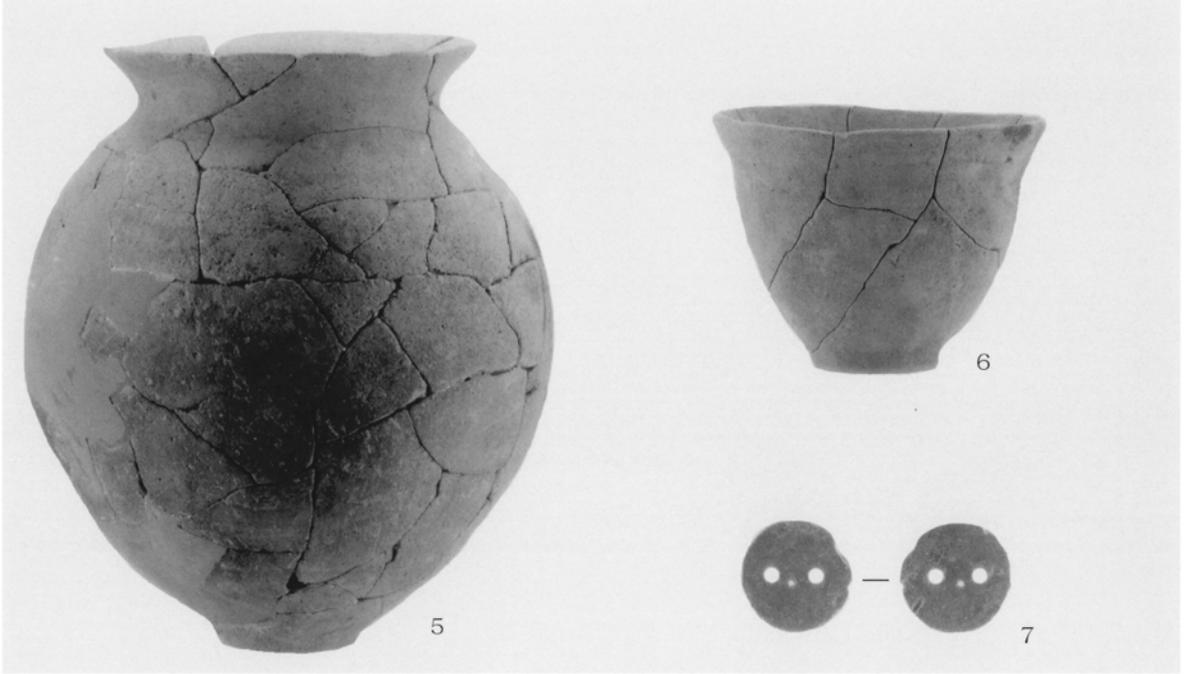
18号住居跡出土遺物



19号住居跡出土遺物



20号住居跡出土遺物 (1)



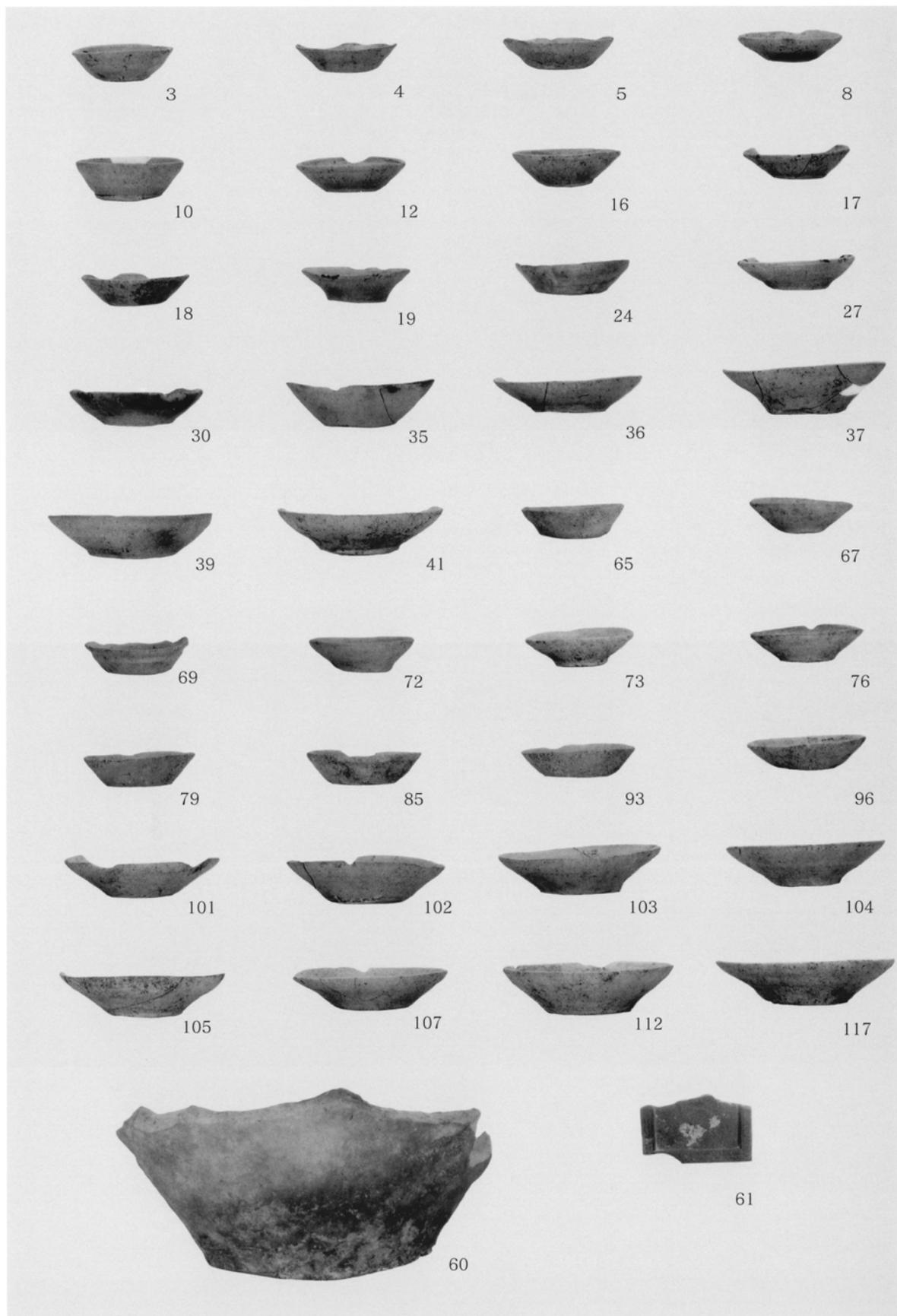
20号住居跡出土遺物 (2)



1号焼土跡出土遺物

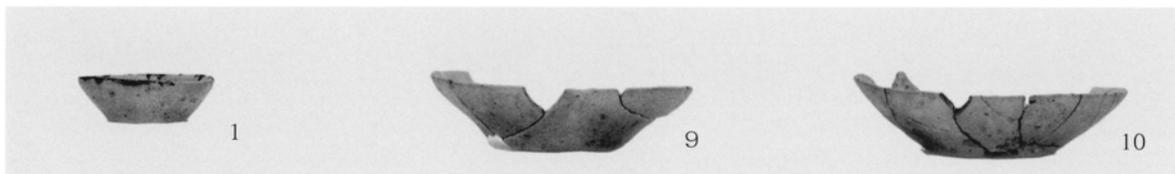


1・3号土坑出土遺物

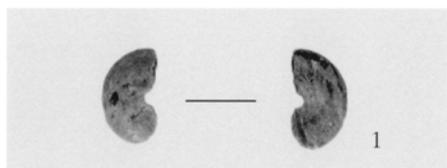


23号土坑出土遗物

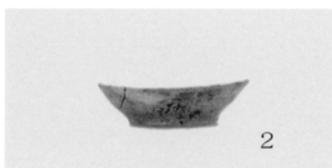
图版24



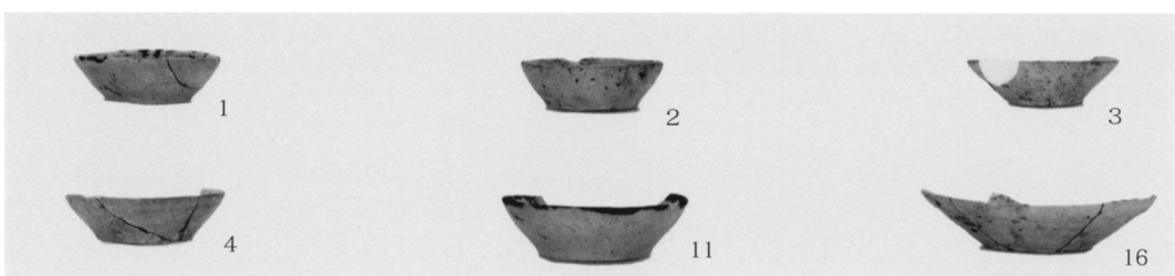
1号沟出土遗物



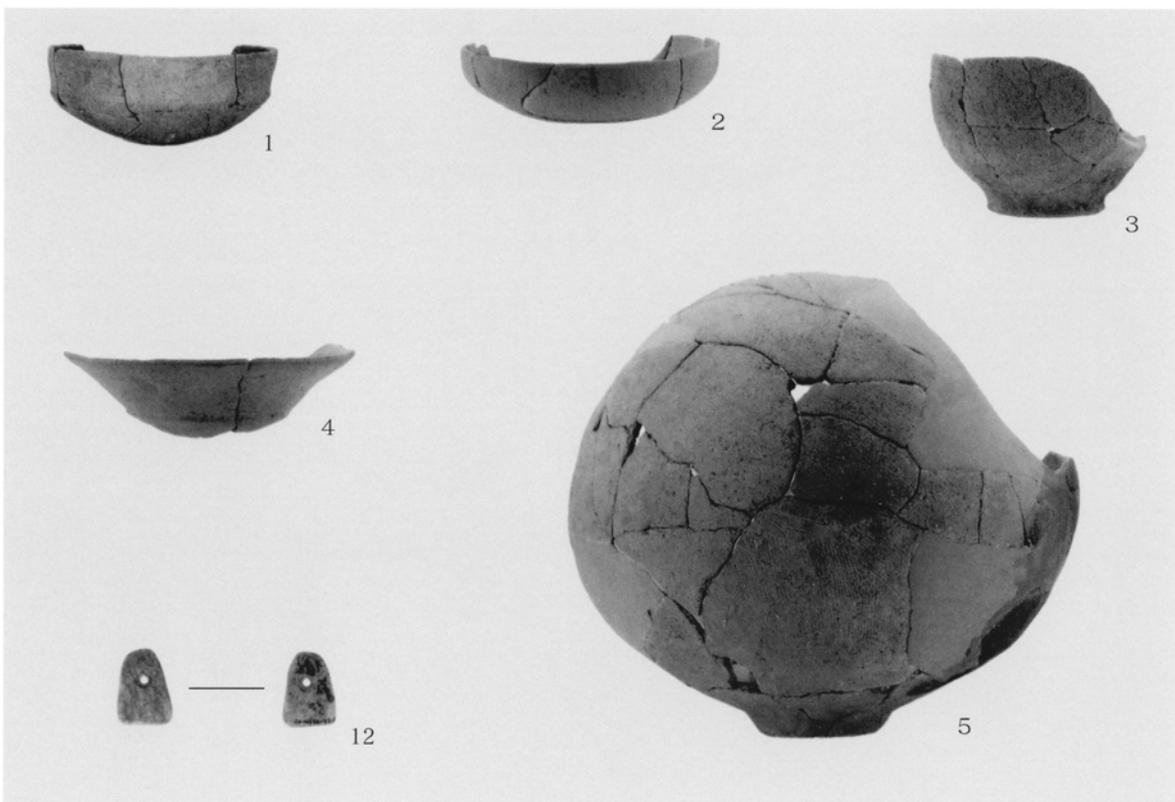
3号沟出土遗物



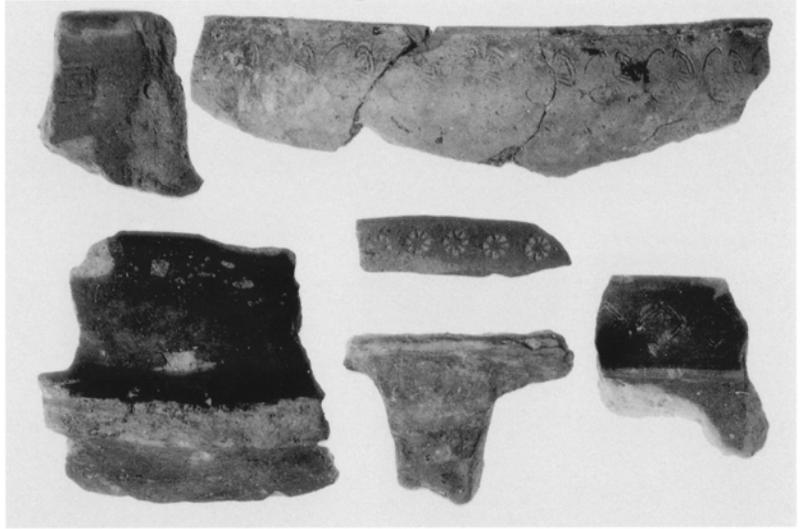
4号沟出土遗物



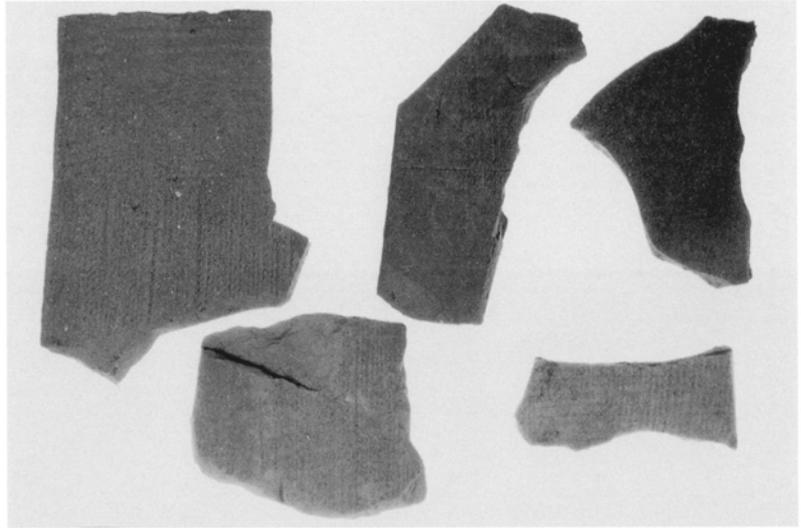
6号沟出土遗物



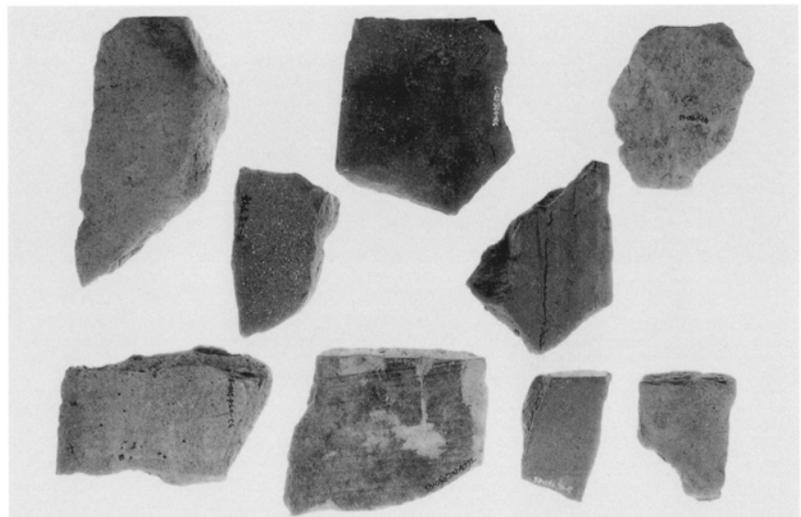
遺構外出土遺物



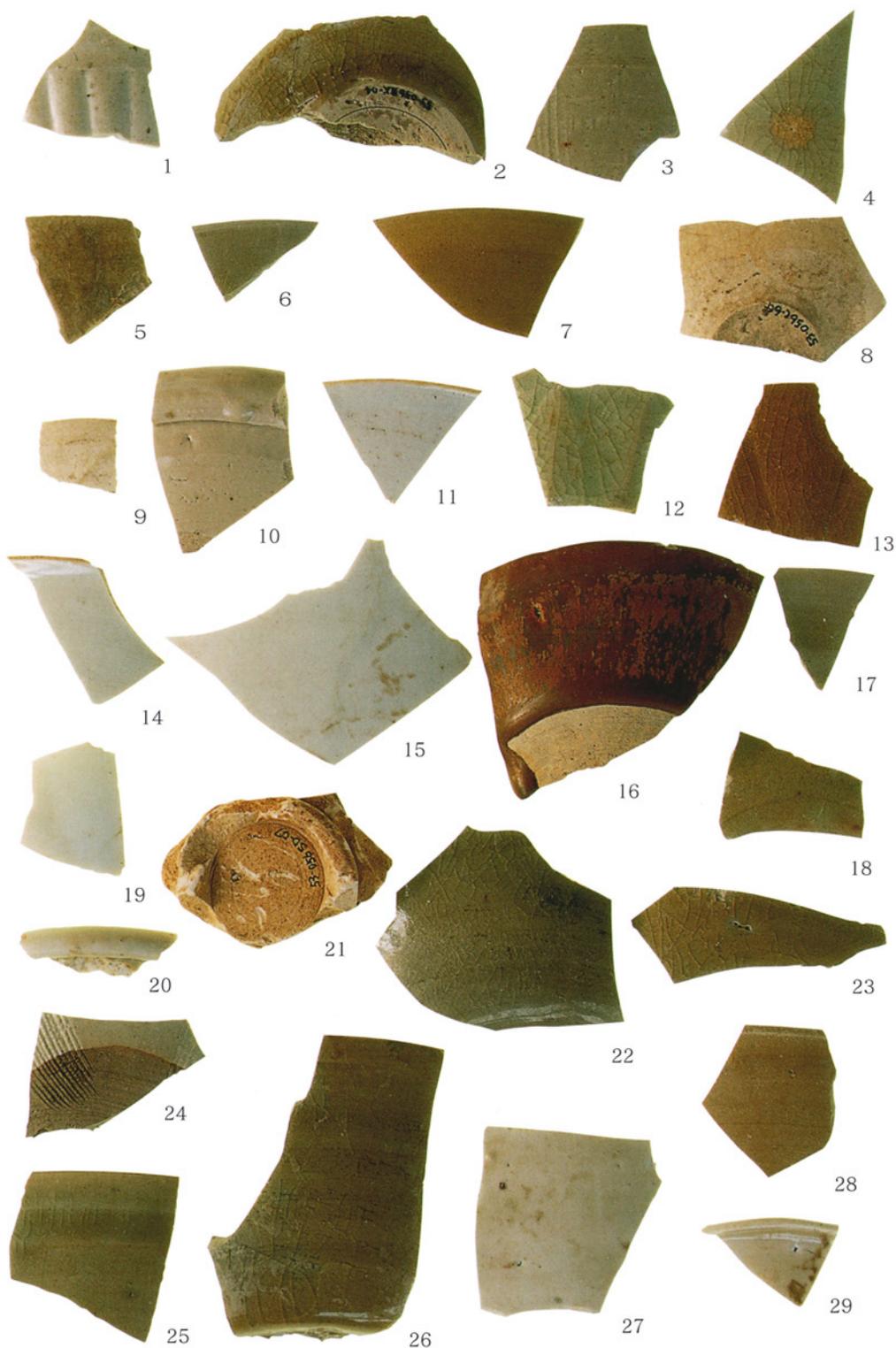
中世土器



瓦(1)



瓦(2)



1. 1号住居跡-1 2. 12号土坑-1 3. 12号土坑-2 4. 23号土坑-49 5. 23号土坑-50
 6. 23号土坑-51 7. 23号土坑-52 8. 23号土坑-53 9. 23号土坑-54 10. 23号土坑-55
 11. 23号土坑-56 12. 1号溝-13 13. 1号溝-14 14. 1号溝-15 15. 1号溝-16 16. 1号溝-17
 17. 4号溝-6 18. 4号溝-7 19. 4号溝-8 20. 4号溝-9 21. 6号溝-19 22. 2号井戸-9
 23. 2号井戸-10 24. 2号井戸-11 25. 2号井戸-12 26. 2号井戸-13 27. 2号井戸-14
 28. 遺構外-12 29. 遺構外-13

報告書抄録

ふりがな	ひがしほんじょう							
書名	東本庄							
副書名	本庄総合公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I							
巻次								
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第29集							
編著者名	松本 完・太田博之・町田奈緒子							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会 電話 0495-25-1186							
発行年月日	西暦 2004 (平成16) 年 3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東本庄遺跡	埼玉県本庄市大字北堀字東本庄 107・108・103・ 115～117	112119	056	36°12'36"	139°11'47"	I次： 2001.04.04～ 2001.07.04	1,080	公園建設
						II次： 2003.03.24～ 2003.06.03		
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
東本庄遺跡	集落	縄文時代 古墳時代中期・後 期奈良・平安時代 中・近世	竪穴住居21、土坑3、焼 土跡2 竪穴状遺構3、溝6、井 戸5、土坑22、ピット群		縄文土器、石製垂飾 土師器、陶磁器、土 製品、埴輪、石製品 かわらけ、陶磁器、 瓦、硯			

本庄市埋蔵文化財調査報告 第29集

東 本 庄

—本庄総合公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I—

平成16年 3月25日 印刷

平成16年 3月31日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

電話 0495-25-1186

印刷／朝日印刷工業株式会社

